「離して……もう話す事はない」
悲しげに瞳を伏せて、こちらの手を振り払おうとする柚希に、
「悪い。でも、次にお前に会ったら絶対に渡そうと思っていたものがあるんだ」
そう言って、刃更はポケットから用意していたものを取り出して柚希の手に握らせた。
「……鍵？」「合鍵だ――俺達の家の」
やっと渡せたと笑う刃更に、柚希は驚いたように瞳を大きくした。
「どうして……」
「俺や親父が里に居た頃……お前、うちの合鍵を持ってただろ？」
「それはもう昔の話。今は私も刃更も変わった。それに、今夜にはもう――」
「――ああ、解ってる」
刃更は頷いた。
「でもさ柚希……それでも俺は諦めたくないんだ。昔みたいに、当たり前のようにお前が俺ん家に入ってきたりするのをさ」
だって、
「確かに俺達は変わってしまったかもしれないけれど――それでも、まだ終わった訳じゃない。終わりにしたくないんだ、絶対に……だから良かったら持っててくれ」

今日という日が終わって、そして明日が来ても。
柚希がその鍵を使う事ができる未来の可能性を、東城刃更は諦めたくない。
諦めない。
「――――」
対する柚希は、それ以上はもう何も言わなかった。或いは受け取るのを拒否されるかとも思ったが、鍵を握ったまま無言で備品室を出て行った。
振り返ってはくれなかったが、刃更はそれで構わない。
難しい事は解っている。それでも自分が望む未来の可能性を繋ぐ事ができた。
後は――その未来を手繰り寄せるだけだ。

8

夜の九時――戦いの開始時刻まで、あと十分に迫った頃。
東城刃更は、澪や万理亜と共に駅前を訪れた。
それが早瀬高志から指定された、待ち合わせの場所だったからだ。
多くの人で賑わう中、刃更が周囲を見回すと、

「――やあ、来たね」

ふと人の波の向こうから、斯波恭一が姿を現した。背後に高志や胡桃、それに柚希の三人を伴った恭一は、刃更達から数mの距離をおいてこちらと対峙すると、

「それじゃあ揃ったみたいだし――早速始めるとしようか」

「ちょっ、ちょっと待ってよ！　まさか、こんな人の多い所でっ？」

澪が困惑の声を上げる。刃更も驚きは同じだった。週末の夜という事もあり、行き交う人の数は平日の夜よりもかなり多い。よって、てっきりここから人気のない、戦いの舞台として相応しい場所へと移動するとばかり思っていたのだが、

「驚くのは解るよ。でもこっちとしてもこの一週間、色々とこの街を見て回ったんだ。確かに人の眼を避けるだけなら、良い場所はそれなりにあったさ。君達が特訓していた街の西側の公園や森なんかは、それこそうってつけかもしれない」

でも、と言った斯波の言葉を、その背後にいる高志が継いだ。

「あの森や公園の林などは、いずれもこの街を霊的に構築する上で重要な地脈が走っていた。お前達を倒すためとはいえ、あそこを破壊するような事になっては本末転倒になる」

「成る程な……」

高志の言葉に、刃更は得心した。

――勇者の一族は、世界を守るための存在として特殊な力を振るう事ができる存在だ。中には精霊や神々の使いの神獣などと契約して得ている力もあり、あくまで「正しい事に使う」という約束で力を借りている。そのため、たとえ魔族を倒すという免罪符があっても、無闇に自然を破壊しすぎたり、罪のない生き物を殺すなどすれば、その行ないによって『穢れ』が生じ、精霊達から力を借りられなくなってしまう。何より地脈の安定を乱すような真似をすれば、将来的に大規模な自然災害などが発生してしまいかねない。

「それに周囲に何もない場所だと、遮蔽物がないから結界に直接ダメージが当たりやすい。それでもし下手に結界が壊れでもしたら、目も当てられないからね」

と斯波。

「でも、ここならその心配はいらない。展開する結界も、空間をずらした上で状況を複製するタイプのものにするからね。駅前でこれだけビルとかがあると、壊れるのはあくまで結界内の複製体としての建造物だし、結界の中に入るのは一般人を除いた僕達だけだ」

「ですが……それでも結界が壊れるリスクは残りますよ」

と万理亜。

「戦闘を行なうなら、せめて人の眼が少なくなる深夜などにするべきだと思いますが？」

その言葉に、

「参ったな……まさか魔族の君に周囲の心配をされるなんてね」

と苦笑しながら斯波。

「――確かにそのリスクも考えたけどね、この辺りは構造物が複雑なんだ。結界はウチの高志と、そっちの先代魔王の力を受け継いでるお嬢さんの共同で展開する訳だけど、ある程度の広さを持った結界を展開するとなると、二人の意識だけでは全てをコピーする事は残念ながら不可能だよ。だから、この辺りに居る人達の力を借りるのさ」

「周囲の人間の意識を、結界内の空間構築に反映するって訳ですか」

その結界の展開方法を知っていた刃更が仕組みを告げると、斯波は笑みを見せて、

「その通り。今この周辺には多くの人が居て、その一人一人がこの街を見たり、流れる音を聞いたりしてこの街を感じている。要はカメラみたいなものだね――僕達が見えない場所も、彼らには見えているんだ。そうやってより明確なイメージを利用して作った結界の方が精細だし、何よりも強固だ。あと、こういう空間再現が大変な結界の方が、構築に集中しなくちゃいけなくなるから、互いに余計な仕掛けとかやりにくいしね」

それに、と斯波。

「いつどこでやるにしても、結界が壊れたら戦闘は一時中断しなくちゃいけないんだ。だったら今この場所でやるのは、君達にとってはそう悪い選択肢ではないと思うよ」

「……どういう意味よ、それ？」

眉根を寄せて問う澪に、斯波は肩を竦めて、

「もし君達が劣勢になった時――わざと結界を解いたり破壊したりでもされたら、手が出しにくくなるって事さ。周囲の人間を危険に晒す事になるからね」

両手を広げて笑う。

「良かったね――この世界に対して、何の使命も責任も持っていなくて。人も動物も、街も自然も、君達なら犠牲にし放題でしょ。不公平だよね全く」

「っ――そんな事！」「――澪」

斯波の皮肉に思わずカッとなりかけた澪の肩に、刃更は手を置いて落ち着かせる。

「俺達にそんなつもりがない事は、これからの戦いで見せれば良い。あんな人の挑発に乗って、お前が集中力を乱す必要はないんだ」

「……っ」

悔しそうにしながら、それでも澪は頷いてくれた。

そして刃更は、ふと斯波の背後にいる柚希を見た。だが柚希は、こちらと眼を合わせようとはしなかった。そっと瞳を伏せ、哀しげな表情で佇んでいる。

――だが今の刃更はこれ以上、柚希を気遣う術はない。あくまで今は、だが。

だから再び斯波を見据え、東城刃更は告げた。
「話は解った。そっちがそういうつもりなら、こっちも構わない――ここで始めよう」

そして結界の構築が始まった。
まずは高志が地面に『白虎』を突き刺し、それを媒介にして澪が結界魔法を使用する。
力を持たない一般人には、澪の魔法は勿論、霊槍である『白虎』も見る事はできない。
そのため澪は、落ち着いて結界を展開する事ができた。
「――――」
成瀬澪は己の意識を集中させてゆく。展開する結界の範囲は、『白虎』を中心とした半径数km圏内。たとえ敵の武器であっても、自らが在る場所を守護する『白虎』の力は、周囲を巻き込まないための結界の展開ならば力を貸してくれる。
そして澪が詠唱を終えると同時――『白虎』によって増幅された結界魔法が発動した。
周囲に存在する建造物など、あらゆる「物質」が「状況」として再現され、結界内の空間を形作ってゆく。だが、その過程で消えていくものがある。
この戦いに決して巻き込む事のできない、無関係な一般人だ。

そして結界の構築が終わろうとした時、
「えっ――？」
澪はふと驚きの声を上げた。数mの距離をもって対峙していた四人の相手――その中に居た斯波恭一の姿が掻き消えたのだ。突然の事態に困惑するこちらに、
「――気にする必要はない。あの人を締め出すように俺が『白虎』に念じておいた」
早瀬高志は淡々と告げながら、地面に刺さっていた『白虎』を引き抜いた。
「どういう事だ、高志……？」
怪訝そうに問う刃更に、
「あの人は今回、お目付け役でしかない。それこそ、この戦いにおいては部外者だ」
と高志。
「だから万が一にも、何かの気まぐれを起こしたりして、俺達の戦いの邪魔をして貰いたくない――それだけだ」
「……そうか」
高志の言葉に、呟くように刃更が言った。そんな彼らの表情に、澪は思う。
恐らく澪や万理亜には理解できない、斯波への感情が二人にはあるのだろうと。
……きっと。

刃更にはまだ、澪の知らない部分が沢山ある。柚希や高志とでは、共に過ごした時間の長さが余りにも違うのだ。

それでも澪も自分なりに刃更との信頼関係を深め、この場に臨んでいる。

出来る事は全てやった筈だ。そして、

「――時間だ。始めるぞ」

そう言った高志が、虚空へ向かって斜めに『白虎』を一閃すると、くるりとこちらへ背を向けて柚希や胡桃の方へと戻っていった。

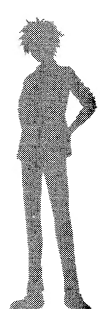
「……」

その意図を理解した澪達もまた、距離を取るように歩き始めた。と同時、近くにあった街灯の一番上――ライトのあるヘッド部分が首から切断され、ゆっくりと落下を始める。

そして、地面への激突を告げる破砕音が鳴り響いた瞬間、全ての状況が動き出した。

戦いが始まったのだ。

第4章　消せない過去を見つめて



1

戦闘が始まると同時。

刃更がブリュンヒルドを具現化しながら、こちらへ向かって駆け出したのを高志は見た。

スピードタイプの特性を活かした急発進と急加速だ。

――しかし、高志に焦りはなかった。隣の胡桃や柚希もだ。開始と同時の奇襲は、戦闘の常套手段。それも、強さで劣る側が行なう不意打ちに近い作戦である。

よって早瀬高志は、自らもまた前へ出る事を選択した。

同じスピードタイプの加速は、互いの間にあった距離を一瞬で失わせ、

「はあああああああああああああっ！」「おおおおおおおおおおおおおっ！」

『白虎』とブリュンヒルド――互いに繰り出した斬撃が交差した。しかし、想定していたものとは異なる手応えに、

……そうきたか。

高志は眼の前の刃更の思惑をとっさに理解し、心の中で納得を得た。

互いに放ったのは振り下ろしの一撃。しかし刃更は、それを攻撃のためではなく、こちらの斬撃を捌くために使っていた。そのままこちらの懐へ入って来ようとし、

「フン……」

しかし高志は地面を蹴って横へ飛びながら、宙で身体を捻るようにして横薙ぎの軌道で『白虎』を振るった。ブリュンヒルドの間合いの外――長槍の『白虎』だからこそ届く距離からの斬撃。しかし、鳴ったのはヴォンという風切り音。高志が断ったのは虚空だけで、

「――何？」

刃更は速度を緩める事なく、高志の横を抜けていた。向かう先には柚希と胡桃が居る。

――三対三の戦いだ。誰が誰の相手をするかも戦闘における重要なポイントとなる。

お目付け役の斯波を除いた高志・柚希・胡桃の三人なら、現在の戦闘力は間違いなく高志がトップだ。何せ澪を消滅させるために、長老達から『白虎』の持ち出しを許可されている。よって刃更の性格なら、てっきり彼が高志の相手をするとばかり思っていたのだが、

「だとしたら――」

高志が視線を刃更の背中から前方へ戻すと、

「――正解です」「そういう事よ」

十mを置いて、こちらと相対するサキュバスの少女と成瀬澪が同時に動きを見せた。

サキュバスの少女――万理亜が地面へと右の拳を振り下ろすと、破壊の衝撃がアスファルトの上を駆け抜け高志へと迫る。さらに、

「こっちも喰らいなさい！」

宙を埋め尽くすような無数の炎球が、同時に高志へと放たれて――直後。

衝撃と爆音が高志を包み込んだ。

連続する衝撃と爆音を背中で聞きながら、刃更は前へと駆けていた。

視線の先にいるのは二人の少女。柚希と胡桃だ。既に詠唱に入っている胡桃に対し、柚希は霊刀『咲耶』の具現化すらしていない。恐らくまだ、こちらと戦う事に迷いがあるのだろう。よって刃更は、戦闘が始まる前から決めていた相手へと視線を定めた。

「行くぞ――柚希！」

戦う意志を抱く事すらままならぬ柚希へ向かって、刃更はブリュンヒルドを振り上げる。
「っ――させると思ってんのっ！」
しかし横からの激しい突風が、こちらが斬撃を放つより先に刃更を吹き飛ばした。
「くっ……」
複雑に絡み合った突風は暴風となり、刃更は一気に宙へ――上空へと舞い上げられる。
美しい東京の夜景を見下ろせる位置まで強制的に飛ばされた。高度数百ｍ。落ちれば即死を免れない高さに思わずゴクリと息を呑んだ刃更は、ふと冷たい声を聞いた。
「――まさか、よりにもよってお姉を狙うなんてね」
反射的な動きで刃更が背後――上を仰ぎ見ると、恐らくこちらを飛ばしたものよりも速い風に乗って回りこんだのだろう。そこには既に魔法陣の展開を終えた胡桃がいて、
「どこまでお姉を苦しめれば気が済むのよ……アンタはっ！」
そう叫ぶと同時、至近距離で豪風の奔流が放たれた。
とっさにブリュンヒルドの斬撃をカウンターで放つが、胡桃の風はまるで意思を持っているかのようにこちらの斬撃を受け流し、そのまま刃更へと直撃。
「っっ――あああああああぁぁぁぁぁっ！」
踏みしめる大地がなければ体勢を保つ事はできない。

豪風に呑み込まれた刃更の、死への急降下が始まった。
……クソっ、せめて散らすだけでも……っ！
身体の自由を奪う暴風に対し、消去ではなく弾くだけの《無次元の執行（バニシングシフト）》を試みるが、
「っ……くそっ！」
ブリュンヒルドの巨大な剣身が豪風を受けてしまい、柄を握りしめて飛ばされないようにするのが精一杯だ。たとえ斬撃を放てても、とてもじゃないが《無次元の執行》の発動は不可能。そうこうしている間にも、どんどん地面が近付いてきて、
……だったら！
荒れ狂う風の流れを見極めた刃更は、己の肉体の制動に全精力を注ぎ込み、
「――こ、こだっ！」
自分へと吹き荒れる風を、垂直に蹴った。狙うは複雑に絡み合う流れの中に時折生じる風の合流地点――一瞬だけ生じる空気の塊に蹴撃を放ち、それを宙の足場に利用する。
辛うじて風の奔流から脱出した刃更は、宙で身体を捻るとビルの屋上に着地。
と同時、とっさに背後へ向かって、横薙ぎの斬撃を繰り出した。それは刃更に迫っていた風の刃を弾き散らす。そして、
「――――」

刃更が立っている屋上の離れた場所に、流れる風に乗って胡桃が降りてきた。

野中胡桃は、こちらに対して静かな表情を向けて佇む刃更を見た。だから、

「……ふーん。あたしが狙いだった訳か」

刃更の作戦を理解した胡桃は、呟くように言った。

成る程。最初の柚希を狙った動きは、こうして自分と一対一で戦う状況を作り出すために、そう見せかけたという訳だ。わざと柚希の名を叫び、彼女を狙われた事にカッとなったこちらが、それを阻止しようと動く事まで見越して。

「随分と舐めてくれるよね……」

今回の戦いで、柚希が戦力にならない事は胡桃も承知していた。まだ刃更と戦う決心が付いていないからだ。よって斯波もいない以上、実質的にこちらは自分と高志の二人。

とはいえ、澪や万理亜だけで『白虎』を持つ高志に勝てるなどとは思っていないだろう。

……要は。

胡桃ならば刃更一人で倒せると踏んだのだ。刃更は、現在の状況下では胡桃の能力が制限される事も見抜いているのだろう。刃更が胡桃を出来るだけ速く倒し、澪と万理亜の下へ向かって三人で高志を倒すつもりに違いない。きっと刃更の中では、今も胡桃は五年前と同じ——刃更や姉である柚希の後を付いて回る小さい妹分のままなのだ。ならば、

「それが勘違いだって事を思い知るといいよ——あたしに負けて後悔しながらね」

そう言うなり、緑のオーラを迸らせた胡桃は己の魔力を解放した。

2

「おや。やっぱりそう来たか……まあ、それしかないよね」

結界の外へ追い出され、離れた場所にある建物の屋上で内部の状況を窺っていた斯波恭一は、想像通りの戦闘展開に薄い笑みを見せた。この戦いに色々な想いを募らせている高志が、こちらを結界の外へ締め出してくる事は、予め考えられた状況の一つだ。

よって斯波に動揺はなかった。結界の中を見通す事はできないが、恭一は己の持つ能力から結界内の様子を感じ取る事ができている。

——刃更が胡桃に狙いを定める事は、幾つか想定していた展開の中にあった。

刃更がまだ《里》にいた頃、大人しい柚希と同様に、活発な胡桃は刃更にとって妹のような存在だった。そんな胡桃と戦わなくてはいけないのなら、せめて澪や万理亜とぶつけ

ず、自分が気絶させるなどして戦闘不能にしたいと考えたのだろう。また刃更と胡桃がぶつかれば、柚希の注意をそちらに向けさせる事もできる。たとえ刃更達と戦う事には消極的ではあっても、想いを寄せる大切な幼馴染と妹が戦うのを放って置く事はできない。現に斯波は、刃更達の下へ駆けつけようとしている柚希の動きを感じ取っていた。

……それにしても。

この展開は刃更達にとって理想的ではあるが、最善ではない。二対一とはいえ、高志の『白虎』は先代魔王の娘を倒すために《里》が持ち出しを許可した特別な霊槍である。この作戦では、高志の相手を任せられた澪と万理亜の負担がやはり大きい。

とはいえ、その事は刃更達も承知しているのだろう。現に澪と万理亜は先制攻撃を放った後、高志との戦闘を避けるように距離を取っていた。その行動からは、明らかに刃更が到着するまでの時間稼ぎの狙いが見て取れるし、高志もその事には気付いている。

「まあ、気持ちは解るけど……」

刃更達の目指す結末は、単純にこの戦いに勝利する事ではない。《里》が成瀬澪を消滅対象に指定し、彼女を守るためには戦うしかないとはいえ、成瀬澪は魔族の敵対勢力に狙われているのだ。この状況下で、勇者の一族まで本格的に敵に回す事のリスクの大きさがどれ程のものか、他ならぬ刃更が最も理解している筈。しかも相手は、よりにもよって仲の良かった幼馴染達ばかりときている。可能な限り被害を抑えたいのだろうが、

「この期に及んで優しいのは結構だけどさ、それにしたって懲りないよね刃更は」

そう言って、斯波恭一は冷たく笑った。

「あんまり欲張り過ぎると、また何もかも失うよ？　五年前のあの時みたいに――」

3

薄暗い空間に、静かに響く音があった。

リノリウムの床を踏みしめる事で鳴らされるそれは、早瀬高志の足音だ。

澪と万理亜が放ってきた先制攻撃を防いだ後、それ以上の戦闘を避けた二人の後を追って、高志は駅前に建てられた高層ショッピングセンター内へと足を踏み入れていた。

結界内に無関係な人間はいないとはいえ、連絡通路で三つの館が結ばれているため、フロアは多く床面積も膨大だ。姿を潜ませ、時間を稼ぐにはもってこいの場所といえる。

――だが、それは高志が『白虎』を持っていなかったらの話だ。西方を守護する役目を担う白虎は、守るべき領域内に脅威となる敵がいれば大まかにその位置を察知できる。

「……こっちか」

『白虎』の反応に従い、高志が足を踏み入れたのはB館の四階。婦人服をメインに扱うフロアッションフロアだった。フロア内は主電源が落ち、非常灯しか点いていない。

……分電盤内のブレーカーを破壊したか。

結界内に再現されているのは物質ではなく状況だが、それでもブレーカーを破壊すれば、それに則した状況を作り出す事はできる。暗い闇の中は、商品の陰に紛れる事も可能なため、待ち伏せする側が有利。しかし、高志はゆっくりとフロアの中心へと歩を進め、

「いるのは解っている――出て来い」

静かな口調で二人に告げるが、隠れおおせるとでも思っているのか応えはなかった。だから高志は、無言でフロアの端へ――西へと向かって歩き出した。その瞬間、

『――――』

周囲の空気が僅かに張り詰めた。刃更から、『白虎』を持つ高志に西側を取られる事がどれだけ危険かを教わっていたのだろう。不意に――高志へ向かって、うなりを上げながらマネキンが宙を飛んで来た。高志はそれを『白虎』で一刀両断。そして、

「――そこか」

呟くと同時に床を蹴った。マネキンが飛んで来た方向へ駆けると、続けざまに何体ものマネキンが飛んで来る。高志は細かなサイドステップを入れながら、紙一重でそれらを避けてゆくと、薄暗い通路の先に小さな人影を発見した――**万理亜だ。高志は一気に加速して**彼我の距離を詰め、あと少しで長槍の『白虎』の間合いに入る、その直前で、

「何――？」

僅かに驚きを得て眉を顰める。てっきりまた逃げを打ってくるとばかり思っていた万理亜が、予想に反した動きを見せた。笑ったのだ。

「――行きます」

そう言って万理亜は床を蹴り、自ら前へ――高志へと向かって跳躍した。小さな身体をしならせるようにして放ってきたのは、腰を横に回す動きで生まれる飛び蹴りだ。

「――――」

とっさに高志は防御を選択。敵は万理亜だけではない。下手に回避で距離を取れば、着地際を滞の魔法で狙い撃ちにされかねない。そのため『白虎』の柄で万理亜の蹴りを防ぎ、

「ぐっ――……なっ!?」

想像を遥かに上回る衝撃を受け止めきれず、高志は宙を横へと吹っ飛んだ。近くにあった少女向けファッションの店舗のディスプレイを突き破るように飛ばされながら、それでも高志は宙で体勢を整え、滑るようにして床に着地。そこへ、

「さあ、どんどん行っちゃいますよー」

るべく互いの位置を調べないようにする事に決めたのである。

「ゴメンそうだった……でも刃更、だったら先刻あたしが居たのに気付いた後、何で脱衣所を出て行かずに、いきなりあたしの口を塞いだりしてきたの？　それもかなり強引に」

……ですよね。やっぱり気付きますよね、その問題に。

「しかも――何で今日に限って上に何も着てないの？」

さらに上目遣いで問われ、刃更は返答に窮した。

澪の口を強引に塞いでしまったのは、反射的に取った無意識の行動によるものだ。

上半身が裸な理由を説明するには、万理亜の件について話さなくてはいけない。

だが、どちらも説明すればするほど言い訳にしかならないような気がして、

「えーと……すみませんでした」

刃更は頭を下げた。自分にも、澪に恥ずかしい想いをさせた責任の一端はある。すると、

「そっか――でもいいよ刃更、謝らなくて」

その穏やかな声に、刃更はホッと胸を撫で下ろしながら顔を上げ――そして見た。

バスタオルを巻き直した澪が、身体から青白い閃光を迸らせながらニッコリと笑い、

「――五十万ボルトで許したげる」

そう言った瞬間、放たれた小さな雷が高電圧の奔流となって刃更の全身を駆け抜けた。

3

「あークソ……酷ってぇ目に遭った」

こちらに電撃を食らわせた澪が脱衣所から出て行った後。刃更は浴室に入り、シャワーを浴びていた。上半身裸でいたのに、うっかり床に転倒してしまった身体を洗いたかったし、夏の終わりとはいえ気付かない内に寝汗を掻いてしまう程度の暑さもある。だからこそ澪も、今の刃更と同じくシャワーを浴びていたのだろう。

――東城刃更が、こうした状況を受け入れられている事には訳がある。

それは何も風呂上がりの澪と遭遇した事や、万理亜による壮絶な朝ドッキリといった異性との同居ハプニングだけではない。万理亜は、彼女自身が言ったように夢魔のサキュバスだし、澪に至っては人間として育てられはしたものの、先代魔王の遺児であり強力な魔法を使う事もできる。そんな二人との共同生活は本来、普通の人間であればとてもじゃないが受け入れ難いものだ。それでも――東城刃更が、澪や万理亜と一緒に居て、家族として共に暮らしていられるのは、通常の世界の外にある理について耐性があるから。

その耐性は、刃更の生まれや過去に関係するもので、

楽しそうな声と共に一気にこちらと距離を詰め、『白虎』の間合いのさらに内側――至近距離から拳撃と蹴撃を連続で繰り出してくる。一転、高志は回避を余儀なくされた。下手に受ければ却って危険だ。それ程の威力の連撃が、容赦なく高志へと襲い掛かってくる。

……どういう事だ？

このサキュバスの力は、一週間前に見て既に知っている。確かに油断して良い相手ではなかったが、それでも自分なら問題なく倒せるレベルだった筈だ。無論この一週間、何もせずに過ごしていたとは思わない。刃更と共に修行や鍛錬を積んでいたのだろう。

……だが。

今の彼女の力は、一週間前と比べて格段に上がっている。否、力だけではない。あらゆる身体能力が飛躍的に向上していた。そんなこちらの驚きを見透かしたように、

「残念でしたね。刃更さんと澪さまのお陰で、今の私は色々と満タンなのです！」

そう言って、さらに攻撃の勢いを増してきた。しかも至近距離で戦いながら、常にこちらに西側を取らせないように立ち回ってくる。しかし、

「いつまでも……好きにさせると思うな！」

万理亜が放つ連撃の間にあった一瞬の隙を見逃さず、高志は反撃に出た。『白虎』の能力の発動こそさせられないが、刺突と斬撃――直線と曲線の軌道の攻撃を織り交ぜながら、

万理亜を追い詰めてゆく。そして、とうとう下からの斬り上げが入った。

だが――高志が得たのは、断ち斬る事で生じる手応えではなかった。

「……何だと」

早瀬高志は見る。『白虎』の刃を、交差した万理亜の細腕が受け止めていた。

――確かにパワータイプの身体能力は高い。先日の巨漢の魔族が、刃更や万理亜の攻撃を避けもしなかったのが良い例だ。しかしサキュバスとはいえ、まさかこんな小さい身体の少女に攻撃を受け切られるとは。

……どうやら考えを改めた方が良いようだな。

高志はB級と判断していた万理亜の実力を、A級クラスへと認識を変更。そして、

「――唸れ『白虎』」

途端に『白虎』の周囲に旋風が発生。万理亜を後方斜め上へと吹き飛ばした。

「っっあああああぁぁぁ――っ!?」

万理亜の小さな身体は、あっと言う間に天井へと激突。そのまま天井を突き破り、衝撃と共に上のフロアまで吹っ飛び、次いでさらに重い衝突音が生じた。恐らく、飛ばされた万理亜が上のフロアの天井に激突したのだろう。

「生憎だったな……」

破壊された天井の欠片がパラパラと落ちてくるのを見上げながら、高志は言った。

――確かに、『白虎』の全力を解き放つには、敵の西側を取る必要がある。

しかし、それは何も「西を取らなくては攻撃ができない」という訳ではない。たとえ全力は無理でも、その場での局所的な攻撃に『白虎』の力を発動させる事はできるのだ。

先日の巨漢の魔族を貫き凍らせた一撃や、たった今万理亜に対して放った旋風のように。

とはいえ――今の万理亜の身体能力はかなりのものだ。あれで倒せた訳ではないだろう。後を追い万理亜に止めを刺すか、今の内に澪を始末するべきか高志は僅かに思案して、

「――――」

ふと背後――西側に生じた気配へと振り返った。そこに一人の少女が立っていた。現魔王の黒のオーラでも、穏健派の青のオーラとも異なる、迸るような紅蓮のオーラをその身に纏った成瀬澪が。その身体の前には、既に魔法陣を展開しており、

「速さがご自慢のスピードタイプなんですってね……ならこれはどう？」

言うと同時、生み出された大量の水。

それはフロアの全てを巻き込む濁流となり、一瞬で高志を流れの中へと巻き込んだ。

4

本格的な胡桃との戦闘に突入した刃更は、高速移動の中に身を置いていた。

遠距離攻撃が可能な魔力タイプの胡桃に対し、刃更はスピードタイプだ。

まずは速度を活かして接近しないと始まらない。風を操り、自由に空を飛翔する胡桃に対し、刃更は高低差のある幾つものビルの屋上から屋上へと飛び移る。スピードタイプの高速と、その高速を生み出す脚力で屋上の端を踏み切りにして刃更は**跳躍**。

「はあああああああああああっ！」

発する気合いと共にブリュンヒルドを一閃するのだが、

「――諦めが悪いよ」

胡桃はあっさりと回避した。吹き抜ける風が胡桃の身体を上昇させたのだ。

……クソっ。

先程から何度となく攻撃を仕掛けようとするのだが、全てこうして回避されてしまう。

野中胡桃は澪と同じ魔力タイプだ。魔法を主体にした戦い方も同じ。だが澪が純粋に己の魔力で魔法を唱える上位魔法士なのに対し、胡桃は精霊の力を借りて魔法を発動さ

せる精霊魔術師（エレメント・マスター）である。よって精霊とのチャンネルを開いて魔力で使役や契約を行なう事ができれば、己の魔力を消費せずに魔法を唱えられるのだ。

厄介な相手――しかし今回、そんな胡桃の戦闘スタイルにこそ、刃更は勝機があると睨んでいた。何故なら近くには、守護神獣の力が封じられた『白虎』がある。よって今回の戦闘では、胡桃は『白虎』の持つ風の属性に縛られると踏んだ。他の属性の精霊とチャンネルを開こうとしても、『白虎』の力に邪魔されてしまうからだ。さらにこの結界も高志の『白虎』と澪の魔力を掛け合わせて展開している。この結界内で、高志の味方である胡桃に風以外の魔法を唱える事はできないだろう。現に戦闘が始まってからずっと、胡桃は風の魔法しか使っておらず、霊操術の籠手に嵌まっているメインエレメントも風のままだ。ならば恐らく、『白虎』の干渉を受けるため、西へ向かっての攻撃も難しい筈。

――だが。胡桃の操る風は、そんなハンデをものともしない。

そもそも風は変幻自在。いくら刃更が西側を取っても、風は簡単に横へ回り込み刃更へと襲い掛かってきた。そんな攻撃を辛うじて避けながら、どうにか反撃を試みるのだが、

「くっ……！」

攻撃を避けられた刃更は、飛んだ先に建つ高層ビルの壁面へ着地するなり、そのまま一気に壁を垂直に駆け上がり始めた。その一歩後ろ、ビルの白い壁面に次々と衝撃が叩き込

まれる。胡桃の生み出した疾風魔法だ。上へと逃げる刃更に、段々と衝撃の距離が縮まり、

「――――っ？」

背後に意識が向いていた刃更の正面――上から、周囲の空気を巻き込むようなうねりと共に、不可視の「何か」が迫っていた。とっさに刃更はビルの壁面を蹴り、道路を挟んだ別のビルの壁へと向かって飛んでいた。直後、刃更が避けた「何か」が地面に激突。生じた轟音を宙で聞いた刃更は、飛んだ先のビルの壁面にブリュンヒルドを横向きに突き刺すと、柄を握る右手一本でぐるんと上に身体を回転させ、幅広の剣身に着地した。

「今のは……」

地面を見下ろせば、舞い上がった砂煙の下からぽっかりと開いた直径三ｍ程の穴が姿を現した。恐らく、圧縮した空気の塊か何かを高速で撃ち出したのだろう。

「……相変わらず避けるのは上手いね」

ふと見れば、十ｍ程先――こちらと同じ高さの宙に胡桃が浮かんでいる。

――だから、刃更はとっさに動いていた。

跳んだのだ。ブリュンヒルドを足場に、胡桃へと向かって。武器を手放したこちらに、

「何それ……破れかぶれの特攻ってワケ？」

呆れたように胡桃は手をかざして、風の魔法を繰り出したのと。刃更の背後でブリュン

ヒルドが消え――刃更の手に再度具現化されたのは同時だった。
意表を突いたフェイントに表情を驚愕へと変えた胡桃の眼の前で、刃更は彼女が生み出した疾風魔法にブリュンヒルドの刃をぶつけて相殺。そのまま胡桃へと迫り、
「おおおおおおおおおおおおっ」
横薙ぎの斬撃を繰り出した。しかし、胡桃の胴に当たる直前で見えない何かに弾かれる。
それは胡桃が、とっさに防御用に展開した魔力障壁。それでもかつての――五年前の胡桃の障壁ならば、刃更も斬り裂く事はできた筈だ。防がれたという事は、それだけ胡桃が強くなったという事だろう。そして、そんな胡桃が得た強さを、刃更は身を以て味わう羽目になった。斬撃を弾かれ刹那に宙空に停止した刃更が、ふと眼の前の胡桃を中心に大気が膨れ上がったのを感じた――次の瞬間、
「っ――があああああああああああああああっ!?」
刃更は乱気流のような激しい衝撃の奔流と共に吹っ飛んでいた。そのまま背後のビルの壁面を破壊して背中から中へ突っ込み、建物に入っているオフィスの椅子やデスクを幾つも巻き込みながら、それでも刃更は止まらない。衝撃と共に幾重もの壁を突き破った挙句、巨大なスチール製のロッカーへと激突。その勢いで轟音と共に中身がぶち撒けられ、
「ガハ……っ、ぐ……ぁ……っ！」

ひしゃげたロッカーに磔のような状態でめり込んだ刃更は、肺の中にあった酸素と共に血を吐き出した。全身に受けた衝撃で呼吸がままならず、激痛に歪む視界の中で、
「――いつまでも人を子供扱いして、舐めてるからだよ」
ここまで吹っ飛んできた刃更の後――衝撃波の駆け抜けた跡を通って、胡桃がゆっくりとやってくる。そしてこちらから少し離れた場所で立ち止まり、
「アンタ……先刻から峰打ちしかしてこないよね。まさかこの期に及んで、あたし達を傷付けずに倒して力を示せば、《里》が成瀬澪に対する考えを改めるとでも思ってるの？」
辛辣さを伴うその言葉に、
「っ……悪い、かよ……っ！」
呻くようにして刃更は言うと、ゆっくりとロッカーの縁に手を掛けて立ち上がった。
「俺も親父も、澪や万理亜を守るって決めたんだ……っ。先代魔王の娘だからって、その力を受け継いでいるからって、命を狙われなきゃいけない女の子を守るって。でも」
そのためには、割り切って戦えと迅も電話で言っていた。養護教諭の長谷川は譲れぬラインを引いて、それだけを守れと忠告していた。しかし、
「でも、大切なものは一つしか選んだら駄目なのか……？　お前達と――幼馴染やかつての仲間達とはなるべく戦いたくないって、争わずに済む方法はないのかって。たとえ少

ししかなくても、その可能性に賭けるのがそんなにいけない事かよっ！」
自分が願っているのは理想なのだと解ってはいる。それでも、東城刃更は譲りたくない。
刃更が絶対に守りたい物の中に――引いたラインの内側には、澪や万理亜が入っている。
だが、絶対に失いたくないと願って引いた、東城刃更の絶対防衛ラインの中には。
澪や万理亜だけではなく、柚希や胡桃、高志達も入っているのだ。
どこまで割り切って考えても、その一線だけは諦めたくない。しかし、
「別に。好きにすれば良いよ。アンタはボロボロになりながら、最後まで理想だけ叫び続ければ良い。どうせすぐに、その甘さを嫌というほど後悔する事になるよ」
胡桃はこちらにかざした右手に風を集め始めた。そして、
「次にアンタが眼を覚ました時にはもう――成瀬澪はこの世にいないんだから」
そう告げると同時、刃更へ向かって胡桃の風が解き放たれた。

胡桃が放ったのは、限界まで圧縮した風の塊だった。
大きさは一ｍ。それは刃更の胴に命中し、今度こそ彼の意識を完全に刈り取る。
――その筈だった。だが、

「え――……」
胡桃は呆然と呟いていた。己が解き放った風の魔法が、眼の前で消滅したからだ。
跡形もなく。
……まさか。
見れば、正面の刃更はブリュンヒルドを振り抜いた体勢で。《無次元の執行》――刃更が使えなくなっている、その技の名を思い出した時にはもう眼の前に彼が迫っていた。
繰り出された斬撃に対し、胡桃はとっさに障壁を張ろうとして、しかしできない。
……そんな……っ？
風の魔法だけでなく、精霊とのチャンネルまで消滅させられた？
そう気が付いた時にはもう、ブリュンヒルドの剣身が迫っていて、
「――――っ！」
とっさに背後に跳ぶが間に合わない。
横薙ぎの斬撃を受けた胡桃は、その事実を激痛ではなく宙を吹っ飛ぶ事で思い知る。
飛ばされた先にあったのは、一面の巨大なガラス窓。それは勢いの付いている胡桃の身体を受け止めるには余りにも頼りない代物だった。甲高い破砕音と共に、胡桃の身体がビルの外へと投げ出される。精霊とのチャンネルを断たれている以上、魔法は使えない。

必然の落下が始まった。斬撃を受けたショックか身体は動いてくれず、背中から落ちた胡桃は夜空を見上げる事しかできない。放り出されたのは四階からだ。足から落ちていたならともかく、この体勢で地面に激突すればまず助からない——終わりだ。

……お姉……っ。

とっさに胡桃は、姉である柚希を思っていた。ずっと一緒に居たのだ。彼女の想いは知っている。だが自分は、柚希に辛い想いをさせた刃更を——この五年、あんなにも必死に強くなった柚希の想いを踏みにじった刃更を許す事ができなかった。そんな自分でも、死んだら柚希は悲しんでくれるだろうか。そして——仇を討ってくれるだろうか。

……でも。

ふっと胡桃は瞳を閉じた。やっぱり柚希には、刃更とは戦わないで欲しかった。だって柚希は刃更のために強くなったのに。そのためにあんなにも頑張っていたのに。それなのに、そんな刃更と柚希が殺し合うなんて、そんな事にだけはなって欲しくく——、

「——えっ？」

不意に強く抱き締められた感覚に、胡桃はハッと眼を見開いた。その相手の姿に、

「ア、アンタ……っ」「ジッとしてろっ！」「っ——！」

強い口調で言われ、動こうとしていた胡桃の身体が反射的に止まった。

そんな胡桃を抱き締めたまま、刃更は身体を縦に回転させ――そして地面に着地。

「――っ」

刃更も負傷している。しかもこちらを抱き締めた状態だ。落下の勢いなど殺せない。恐らく刃更の両足は、かなりの衝撃を受けた筈である。しかし、胡桃にその振動が伝わる事はなかった。着地の瞬間、それ以上に強く刃更に抱き締められていたからだ。そして、

「っ……どうにか、助かったみたいだな……」

胡桃の身体を抱いたまま、刃更が安堵の溜め息を吐いた。この五年で声変わりをして低くなった声が、こちらを覆うように抱き締める大きくなった身体が胡桃を包みこむ。

……あ。

そんな力強い抱擁に、彼の腕の中に居た胡桃は力ない声で、

「……は、放して」「ん？　あ、ああ……すまない」

そこでやっと刃更は胡桃を解放し、しかし慌てたようにこちらから眼を逸らした。

何事かと胡桃が己へ視線を落とすと、身に纏っている服の右の脇腹辺りが大きく破れ、素肌が露出していた。それは胸の膨らみの下側から胸の先端近くにまで及んでおり、

「や、やだっ……――っ!?」

慌てて胸を隠そうとした瞬間、全身に激痛が走り呼吸が止まった。そのまま膝を付きそ

うになる胡桃を、刃更が優しく支えるように腰を抱きながら、

「大丈夫かっ？　って、やったのは俺だな……悪い」

「……っ、馬鹿……戦ってた相手を心配とか、そういうのが舐めてるって――っ!?」

声を張り上げようとした途端に響くような激痛が来る。恐らく肋骨が二、三本折れてしまっているのだろう。峰打ちとはいえ刃更の斬撃を――それも重厚な剣身のブリュンヒルドの一撃を生身で受けたのだ。この程度で済んだのは幸運だろう。ひょっとしたら、ギリギリの所で刃更がブリュンヒルドの勢いを弱めてくれたのかもしれない。

……それに。

もし――刃更が助けてくれなければ、あのまま自分は頭から地面に激突して死んでいた。

脇腹の激痛に少しだけ涙目になりながら、胡桃は刃更を見上げた。

腰を落とし、心配そうにこちらを見る刃更の瞳は、昔一緒に過ごしたあの頃と同じで、

……そっか。

五年という月日が経って、何もかもが変わってしまっても。東城刃更にとって、やはり自分は妹のような存在なのだ。だがそれは子供扱いというよりも、純粋にこちらを大切な家族のように思っているからで――そう感じられるという事は、

……あたしも、なんだ……。

たとえどれだけ許せなくても。たとえ《里》の命令は絶対でも。
東城刃更が、自分にとってどういう存在だったのかを野中胡桃は思い知る。
――幼い頃。刃更の傍に居て、彼を見つめ続けてきたのは何も柚希だけではない。
自分もまた二人の傍に居て、そして刃更の背中を、その横顔を見つめてきたのだから。
唇を結んで無言で見上げるこちらに、
「それだけ睨めるなら、大丈夫そうだな……」
刃更はゆっくりと腰を上げる。
「……御免な。できれば、動けるようになるまで傍に居てやりたいんだけど――」
そう言って、駅の方を振り仰いだ刃更の視線が静止した。ふと見れば、
「お姉……」
道路の向こうから、ゆっくりとした足取りで柚希がこちらへやって来ていた。
てっきり――胡桃と刃更の戦いがどうなるか心配だったのだろうと思った。
だからこそ成瀬澪を放ってこちらへ来たのだろうと。だが、
……お姉？
やや俯き加減だった顔を柚希が上げ、こちらを見た。感情を読み取りにくい静かな表情。
それでも胡桃は、そんな柚希の浮かべる表情の中に一つの感情を見てハッとなる。

慌てて傍らの刃更を振り仰ぐと、
「……柚希」
既に同じものに気が付いていたのだろう。呟くように言った刃更は、それでもブリュンヒルドを具現化しなかった。何があろうと、柚希とだけは戦う事を拒むように。
「……」
だが柚希は立ち止まり、無言のまま霊刀『咲耶』をその手に呼び出して――次の瞬間、離れた位置から逆袈裟の斬り上げを繰り出した。それを見た刃更が、とっさに僅かに腰を落とす。スピードタイプの取る防御は、基本は回避。そのための予備動作だ。しかし、
「駄目……――刃更っ、防いで！」
とっさに胡桃は叫んでいた。だが、それではもう遅すぎて、
「っ――？」
右下からの衝撃が刃更を捉えた。激突の瞬間、鳴り響いたのは斬撃とは異なる重く鈍い殴打音だ。それを顎に受け、脳を揺らされた刃更が崩れ落ちるように地面へと倒れ、慌てて胡桃はその身体を抱きとめた。受け止めた拍子に身体に激痛が走るが構わない。
「っ……お姉、何で……？」
あんなに刃更と戦う事を嫌がっていたではないか。問いを放つこちらに、

「……私には、他に方法が思い付かない」

眼の前へやって来た柚希は腰を落とすと、懐から取り出した小瓶の蓋を開けて意識を失った刃更の顔の前へ。ふわりと香る甘い匂いは、対象に深い睡眠作用をもたらす一族に伝わる香だ。意識を失っている刃更は、無防備にそれを吸ってしまう。

「これでもう、半日は目覚めない……」

すっと刃更の頬に触れた柚希が、一瞬だけ穏やかな表情を浮かべた。そして、

「胡桃……刃更の事、お願い」

「お姉はどうするの……？　まさか――」

柚希は答えなかった。無言で立ち上がり、そしてそのまま歩き出す。

駅の方へと向かって――もう一つの戦いの場へと向かって。

5

意識を覚醒させた万理亜が最初に見たのは、心配そうにこちらを覗き込む澪の顔だった。

「……澪さま？」

自分が抱き起こされている体勢である事に気が付いた万理亜は、

「そうでした……私はあの男の一撃で」

戦いの最中、『白虎』が発した衝撃波を至近距離で受けた事を思い出した。

周囲を見回すと、先程までいたフロアと似たような光景があった。恐らく一フロア上の五階だ。どうやらそれほど長く気を失っていた訳ではないらしい。

「あの男は……？」

「何とか一発かましてやれたわ……アンタのお陰よ」

立てる？　と問われ、万理亜は澪と共に近くの床に開いた二m程の穴の方へ。

そこから下を見下ろすと、戦闘の舞台となっていた四階が水没していた。恐らく四階から下は全て似たような感じだろう。

――これが万理亜と澪の作戦だった。万理亜が接近戦で時間を稼ぎ、その間に澪はビル内に走る水道管や貯水槽の水を、攻撃魔法に利用できるように意識を集中。万理亜と高志との距離が開いたタイミングで、その全てを解き放ったのだ。

「これで少しは時間を――」

そこまで言った澪の身体がふらりと揺れ、そのまま床に片膝を付いてしまう。

「澪さま、魔法の解除をっ。もうこれ以上は……！」

ビルは完全に密閉された空間ではないのだ。建物内に押し留めるには、魔法でそうなる

ように保つしかない。だが大量の水を操り続ければ、当然膨大な魔力を消費する。
「でも……刃更が来るまで時間を稼がないと……っ」
苦しそうな表情で澪が言った——その時だった。
下の四階を満たしていた水が、巨大な渦を巻き始めたのは。
「これは……」
驚きに万理亜が眼を見開いた直後、四階に大気が弾けたような激しい振動が生まれた。
横方向に広がったその衝撃は、四階の壁面や窓を吹き飛ばした。小さな隙間ならともかく、こうなるともう水を押し留めておく事はできない。ビルの外へと大量の水が流れ出し、
「————っ」
万理亜と澪は息を呑んだ。
水がなくなり、それでも未だ水浸しの状態の四階の床に、平然と早瀬高志が立っていた。
その身体はおろか服さえも濡れていないのは、『白虎』の力で周囲に風の障壁を張っていたに違いない。今の衝撃は、それを周囲に解き放ったのだろう。
「そういう事ですか……このビルは結界を展開した中心点からは西。ならば自身を西方に見立てて、防御のために守護の力を使えるって訳ですか」
「……少しは頭が回るようだな」

苦々しく言ったこちらに、高志は淡々と言った。
……これは、流石に厳しくなってきましたね。
万理亜は、自分達が一気に劣勢に晒された事を理解し、
「行きましょう澪さま……この場を離れるんです。どこかに身を隠して時間を——」
「——無駄だ。たとえどこに隠れても、『白虎』は敵であるお前達を見つけ出す」
それに、と高志。
「こちらに西側を取られないよう必死に立ち回っていたようだが——甘かったな」
「どういう事……？」
怪訝に問う澪に、
「白虎を始め、四神は中国では空の星座によって構成されているが、平安京で考えられていたのはあくまで風水的地形——その土地に根ざしたものだった。そして……確かに西の大地を守護する白虎が、最も警戒するのは東方からの侵攻なのも間違ってはいない」
そう言って高志は、こちらに向かって『白虎』を構えた。その刃が、不意に輝きを放ち始めた。その光がどんどんと槍の先端へ収束し、やがて大気が鳴動を始める。
「だが知っているだろう。四神の中で、白虎の西方と対をなす東方を守護しているのは青龍だ。龍は空を飛び、水を司る。当然天から雨を降らす事もでき、その力で旱魃などか

「……」

ふと己の過去に想いを馳せた刃更は、表情を暗いものにする。それでも、

「俺が何とかしなきゃな……」

頼りになる刃更の父――東城迅は、現在とある理由でこの家を空けてしまっている。留守を預かる長男として、妹になった澪や万理亜の事は自分が守ってやらなくては。

「ふう……」

汗を流しながら、シャワーは徐々に刃更の身体を温めてくれる。頭を濡らした以上、ついでに洗いたくなってしまうのは人の本能のようなもので。しかし、

「あれ……っと」

身体がまだ澪の電撃で少し痺れていて、上手く頭を洗えずにいると、

「――任せて」

静かな声と共に細い指が刃更の髪の中へ差し入れられ、優しく髪と頭皮を洗い始めた。理容室などでされるのと同じく、自分以外の人に頭を洗われる心地良さに、

「おうサンキュー、助かったよ……――へ？」

余りにも自然に洗われたため、事態の異常さに気付くのが遅れた刃更は、ようやく背後を振り返る。そこに、キョトンとした顔をしたバスタオル姿の少女がいた。

整った顔立ち。高い身長にスレンダーな体型のためモデルと見紛うばかりのルックス。澪や万理亜とはタイプが異なる、透き通るように綺麗なその少女に、

「ゆ、柚希……お、お前、何でここに……っ？」

刃更は思わず混乱と驚愕を得た。眼の前に居たのは、刃更の幼馴染の野中柚希だ。

――先日、刃更はおよそ五年ぶりに柚希と再会した。柚希はまるで別人のように綺麗になっていて。幼い頃の姿しか知らなかった刃更は、その変化と成長に心の底から驚いた。とはいえ再会こそしたものの、流石に同居まではしていない。本来この東城家――しかも朝の浴室には決している筈のない柚希は、いつものように感情の見えにくい顔で、

「迎えに来た。刃更と一緒に学校へ行こうと思って」

「そ、そうなのか……いや待て、どうやって家の中にっ？」

遺憾ながら、柚希と澪や万理亜の間には少なからず因縁がある。

それは各々の立場によるものに加え、感情的な部分もあるのだが、

「普通に玄関から。あのサキュバスが入れてくれた」

あのロリエロサキュバス。人のTシャツの中に入ってきただけでは飽き足らず、またおかしな悪戯心を発揮しやがったな！

「いや、でもいつの間に風呂場まで入ってきたんだ……？」

ら都を守っていた。ならば白虎もまた、それと対となる力で都を守っていたとは考えなかったか？　水害などに対抗するための力で――雨雲を吹き飛ばす力で」

「まさか……」

呆然と呟くこちらに、

「迂闊だったな。こいつが力を発揮できるのは、何も東の敵に対してだけじゃない――上空に対しても行なえるという事だ」

逃げる暇はなかった。声を上げる事さえ。そして、

「喰い千切れ――『白虎』」

そう早瀬高志が告げた瞬間、全てを薙ぎ払う閃光が弾けた。

解き放たれた『白虎』の咆哮が、天を貫くようにして駆け抜けた。

生まれたのは激しい衝撃。そして――長い長い轟音と振動が収まった後。

ようやく真っ白に染まっていた高志の視界が晴れていった。

解放された『白虎』の全力。それは全てを薙ぎ払う豪風の波動となり、ビルの五階から上を全て吹き飛ばした。瓦礫の散乱する四階に一人立つ高志は、ゆっくりと『白虎』の穂先を下げる。終わった。これで自分達の任務は終了だ。そう思った瞬間、

『――――』

ふと『白虎』が、敵の気配を察知して煌いた。

高志は怪訝に思いながら、気配の方へと歩き出した。

そして吹き飛んだ窓の手前――フロアの端ギリギリの所に立ってビルの外へ視線を送ると、こちらに背を向け西の方角へと逃げる二人の少女の姿を確認する。高志の視線に気が付いたのか、逃げながら一瞬こちらを振り返ったのは、成瀬澪とあのサキュバスだ。

どんな手を使ったのかは解らないが、どうやら『白虎』の一撃から逃れていたらしい。

――しかし、高志に焦りはなかった。

こちらはスピードタイプだ。すぐに追い付ける。また建物の中のような限定された空間ならともかく、開けた外でならばスピードを最大限に活かし、思う存分戦える。

だから高志は外へと跳んだ。四階の高さから音もなく地面へ降り立つと、最大速度の疾走で澪と万理亜を追い掛け始める。あっと言う間に距離を詰めるこちらに、

「この……っ！」

苦し紛れに澪が牽制の爆炎魔法を放ってくるが、その全てを高志は『白虎』で斬り裂くと、そのまま一気に距離を詰めようとして、

「――っ？」

ふと横からの衝撃波に後方への回避を強いられた。そして、

「……何の真似だ？」

苛立たしげに問う。自分の足を止めた少女――霊刀『咲耶』を手にした柚希に対し、

「成瀬澪を逃がすために俺を攻撃するだと……気でも狂ったのか柚希」

しかし柚希は無言のままで。だから高志は、『白虎』を柚希へと向けた。

「どのような理由があろうと、魔族に与するというのならお前はもう仲間じゃない――裏切り者の敵だ。たとえお前だろうと容赦なく斬るぞ」

すると、ようやく柚希が口を開いた。ポツリと、それでもはっきりした声で、

「……好きにすれば良い」

そう呟いた柚希に、

「まさか……お前まで、五年前の悲劇を忘れたというのか」

思わず声が震えた。それまでの苛立ちを明確な怒りへと変えて高志は睨む。すると、

「……覚えてる。忘れる訳がない。あんな想いは、もう絶対にしたくない……」

「だったら――」

「でも、このままだと五年前と同じになる。何も出来ずに見ている事しかできなかったあの時と。だから今度こそ大切な人と、大切な人の守りたいものを守ってみせる」

だって、と柚希。

「そのために私は強くなった。そのためにこの五年を生きてきた。もし刃更を守れないのなら――私が勇者でいる意味はない」

それは野中柚希の揺るぎない意思表明。

こちらに対して霊刀『咲耶』を構えた彼女は、もはや高志の仲間ではなかった。だから、

「馬鹿が……！」

吐き捨てるように言うと、高志は動いていた――眼の前に立ち塞がる敵を倒すために。

背後で始まった柚希と高志の戦闘に、澪と万理亜は足を止めた。

二人の視線の先で繰り広げられているのは、勇者の一族同士の仲間割れである。

――しかし、成瀬澪は何故とは思わない。野中柚希という少女が何を――否、誰を想っているかをよく知っていたからだ。だから放っておけない。たとえ柚希に自分達を守る意思がなかったとしても。彼女の気持ちが痛いくらいに解るから。

「あの馬鹿っ――」「――お待ち下さい、澪さまっ」

取って返そうとする澪を、しかし万理亜が制止した。
「あの男の狙いは澪さまです。ここで澪さまが戻れば、相手の思うツボですっ」
「だからって、このまま野中を放っておける訳ないでしょうが！」
感情を叩き付けるように言った澪に、
「落ち着いて下さい。私達が時間を稼いでいた理由は何です？　今回、彼らを倒すのは私達では駄目なんです。そして――あの野中柚希さんでも」
「それは……っ」
無論、その事は忘れていない。今回の戦いで澪や万理亜が勝利しては、勇者の一族にこちらをより脅威と思わせてしまうだけだ。そうならないためには、まずは高志達に勝利し、その上で刃更ならば澪を抑える事ができるので脅威ではないと証明しなくてはならない。
「でもっ、野中がここに居るって事は、きっと刃更は……っ」
澪の声が悲愴なものになった。柚希は、刃更と胡桃が心配で二人の戦いを見ていた筈。その柚希が一人でこちらへ来たという事は、最早その心配の必要がないからだ。
――無論、刃更は死んでいない。主従契約を結んだ以上、主である刃更にもしもの事があれば配下の澪にはそれが解るし、意識を集中すれば刃更の位置を感じられる。
間違いなく生きている。だが、どちらが勝ったかまでは解らないが、少なくとも今の刃

更が戦える状態にあるとは思えない。思わず苦い表情になるこちらに、
「しっかりして下さい澪さまっ！　ここで諦めてどうするんです！」
万理亜が声を強めて言った。ビクっと身を竦めたこちらに、
「約束したでしょう。誓ったじゃないですか。絶対に勝とうって。主従契約は信頼が二人を強くします。それなのに、配下の澪さまが刃更さんを信じないでどうするんですか」
「っ……だけど！」
「確かに状況は厳しいですが、刃更さんはきっとまだ諦めていません。それでも今ここに来られないのならば、澪さまが迎えに行ってあげて下さい。自分の主を助けるのが配下の役目です――何より家族を、大切なお兄さんを助けるのは妹の役目です」
そして、今も戦い続けている柚希と高志を見据えながら、
「行って下さい――今なら、まだきっと間に合います」
「ま、待ってよ……じゃあアンタは？　まさか――」
思わず息を呑んだ澪に、
「私も加勢してここで時間を稼ぎます。澪さまが刃更さんを連れて戻るまで」
成瀬万理亜は言った。笑顔でこちらを振り返り、
「澪さまの配下である私の役目です――ええ、こればかりは誰にも譲れませんとも」

6

意識を失っている刃更に対し、野中胡桃は不本意ながらも己の膝を貸していた。
「ったく、何であたしが……」
アスファルトの地面に横座りの状態で、胡桃は不満そうに呟く。
それでも膝を許したままでいるのは、柚希に頼まれてしまったからだ。
……それに。
先程の戦闘で、胡桃は敵として戦っていた刃更に命を助けられている。
その借りを返すという訳ではないが、卑怯な真似をせずに堂々と正面から戦った相手だし、敵とはいえ仮にも命の恩人だ。道端に転がしたままにしておくというのも忍びない。
――しかし、胡桃がこの状態でいなければならない時間はそう長くはないだろう。
柚希が向こうへ行った後すぐ、凄まじい轟音と衝撃が駅前の方で生まれていた。
間違いない、あれは『白虎』が全力で放った一撃によるものだ。たとえもし何かで生き残ったとしても、柚希と高志の二人に澪達が敵うとは思えない。
この戦いはもう間もなく、決着を迎えるだろう。だから自分はただ待てば良い。勝利を

収めた柚希と高志が、迎えにきてくれるのを。そして、出来る事が限られている状況で、
「……」
野中胡桃は、自分の太股の上にある刃更の寝顔を見詰めた。
一週間前に再会を果たした時は距離があったし、先程までは互いに激しい戦闘の中に身を置いていた。よって胡桃は、五年ぶりに再会した刃更の顔をようやくきちんと見た。
……男っぽくなった、よね。
胡桃が知っているのは、刃更が《里》に居た頃――まだ幼さのある十歳の頃の彼だ。
あれから五年。十五歳になり、第二次性徴の只中にある刃更の身体は、大人の男へと変わり始めている。だが、それでも面影は昔とほとんど変わっていなかった。
この五年、共に日々を重ねてきた姉の柚希や、高志を始めとする他の幼馴染達の方が、むしろ変化を感じられるくらいである。人の変化や成長は少しずつ行なわれる以上、毎日顔を合わせていればそれだけ変化を感じ難いというのにだ。
特に――自分達の中で最も変わったのが柚希だった。笑顔を殺し、感情を封じ込め、ただひたすらに強くなろうと修行に臨み続けた姉の姿を、胡桃は忘れる事ができない。大人しい性格で、誰よりも戦う事を苦手としていた柚希が、壊れてしまうのではないかと思う程に己を追い込み続け、ついには霊刀『咲耶』の使い手として正式に選ばれる程にまで

成長を遂げたのだから。五年ぶりに再会した刃更など、それこそ別人だと思っただろう。

だが変わる事が心の傷の大きさや深さだとしたら、大きく変わってしまった柚希に対し、身体こそ大きくなってはいても刃更の変化は余りにも乏しい。

柚希や自分達が悲劇の現場となった《里》で苦しみ続けたのに対し、当の刃更は離れた場所でのうのうと暮らしていたのだ。だからこそ、先代魔王の娘を守るなどという真似に及べたに違いない——そう思うと許せなかった。——と、その時、

「えっ、ちょっと……何？」

ふと刃更の表情が苦悶に歪んだのを見て、胡桃は焦りを得た。気を失わせただけの柚希の一撃はともかく、自分は戦闘中にかなり深いダメージを刃更に与えてしまっていた。もしかしたら、内臓や脳を傷付けていたのかもしれない。戸惑う胡桃の眼の前で、

「……ぅ……っ、く……っ……ぁ……！」

とうとう刃更は表情だけでなく、身体を小刻みに震わせ始めた——そして、

「————」

か細く発せられた刃更の呻き声に、胡桃は思わず息を呑んだ。

聞き取れてしまったからだ。途切れ途切れになりながら、それでも確かに、

——ごめん、みんな。

今も駆けつけられずにいる澪や万理亜に対しての謝罪ではない。彼女達は二人だ、ならば、刃更が口にした「みんな」とは一体誰を指すのか？　そんなものは決まっている。

その答えを想った時——胡桃は思わずハッとなっていた。

「——まさか」

胡桃はようやく理解する。刃更が変わっていなかったのは、別にあの悲劇に何も感じていなかったからではない。変わろうとしても、変われなかったのだ。

恐らく東城刃更の時間は、五年前のあの悲劇の日から止まったままで、

「そんな……」

野中胡桃は言葉もない。苦しんでいたのは自分達だけだと思っていた。それでも自分達はまだ良い。同じ傷を抱えた者同士、時に励まし合う事ができた。

——だが刃更は違う。《里》を追われ、この地で迅と二人だけで新たな生活を始めた。

だが、迅は五年前のあの時、《里》にはいなかった。刃更の傍には、刃更の苦しみを慮り、父親として支えてあげられる存在はいても、分かち合う事ができる者は一人もいなかった。しかも胡桃達と異なり、刃更は眼の前で《里》の仲間や友人を殺されただけでなく、己の能力を暴走させて取り返しのつかない事態を起こしている。心の傷は、それこそ胡桃達よりも大きい。当時の刃更はまだ十歳。将来を嘱望され、天才と呼ばれてい

ても、まだほんの子供だった。とてもじゃないが、一人で抱えきれるものではない。

この五年、胡桃達はいつも傍に仲間が居た。辛い時も、苦しい時も共にいて、皆で一緒に少しずつ強くなる事ができた。だがその頃、刃更は後悔で押し潰されそうになりながら、異郷の地でたった一人、変わる事すらできずにいたのだ。

一体どれだけ悩んだだろう。どれだけ苦しんだだろう。どれだけ自分を呪っただろう。その苦しみを象徴するかのように、刃更は表情を歪めながら虚空へと手を伸ばした。

そんな刃更の手を、胡桃はギュッと握った。湧き上がりそうになる嗚咽を堪えながら、

「刃更兄ちゃん……っ」

我知らず、昔のように刃更を呼んでいた。

誰よりも強く、優しく、本物の兄のように慕っていた彼を。そこへ、

「――刃更っ！」

息を切らしながら駆けて来た少女がいた。成瀬澪だ。

「なっ、何でアンタが……っ!?」

胡桃は思わずギョッとなった。ここへ来るとしたら、てっきり柚希か高志だと思っていたのだ。慌てて構えを取ろうとするこちらに、

「今はアンタと争ってる場合じゃないわ、チビっこ！」

眼の前まで来た澪が、感情を叩きつけるようにして言ってくる。

「た、戦う気はないとか……そんな、敵の言う事が信じられるとでも思ってんのっ？」

「馬鹿っ！　戦う気があるなら、離れた場所から魔法でとっくに攻撃してるわよ！」

言われてみればその通りだ。思わず胡桃は口篭もり、

「っ……だ、だったら何で……」

「そんなの緊急事態だからに決まってるでしょっ！」

困惑する胡桃に、いよいよ澪が苛立ちをぶつけるように叫んだ。そして、

「刃更っ、起きてよ刃更っ、ねえっ！」

こちらの膝の上で眠る刃更を乱暴に揺さぶり始める。

そして直後、野中胡桃は信じられない言葉を耳にした。

「早く行ってあげないと――野中が、あの早瀬って男と戦ってるのよ！」

成瀬澪は、こちらが発した言葉に眼の前の胡桃が愕然となるのを見た。

「そんな……お姉と高志が？　何でっ？」

「――コイツのためよっ。決まってるじゃないっ！」

澪が告げた真実に今度こそ胡桃は絶句したが、今は構っている場合ではない。

「刃更っ、しっかりして！　野中と万理亜が戦ってるの！　このままじゃ二人とも危ないのよ！　それに、あたしや万理亜じゃいけないって……これ以上の戦いを止めるためには、『白虎』を倒すのは自分じゃなきゃ駄目なんだって言ってたじゃない！」

しかし、どれだけ呼び掛けても、どれだけ身体を揺すっても刃更は目覚めない。

「む、無理だよ……お姉が睡眠香を使ったの、多分あと半日は目覚めない……っ」

と、悲痛な声で胡桃が言った。

「……っ、そういう事……！」

おおよその事態を理解した澪は、表情を険しいものにした。

……このままじゃ……っ。

自分達がここまで苦労して戦った意味がなくなってしまう。それでも万理亜や柚希が勝ってくれるならまだ良い。問題なのは、二人が負けた場合だ。あの早瀬という男は、どこまでも勇者の使命に忠実だ。敵と定めた相手に対しては一切の容赦をしないだろう。

よって万理亜と柚希の敗北は、二人の死を意味する。だがもし、自分が眠らされている間にそんな事になったと後で知ったら——たとえ刃更の命は助かっても、未だに五年前の悲劇の悪夢に苛まれ続けている刃更の心は、今度こそ完全に壊れてしまう。

……させないわ！

刃更の心を壊させやしないし、それ以前に万理亜や柚希も死なせない。それに万理亜は言っていた。刃更は来られないだけで、決して諦めてはいない筈だと。その証拠に、

「っ……う、く……っ」

ふと刃更が、苦しそうに表情を歪めた。きっと夢の中で戦って——、

「……夢？」

ハッとなる。もし夢を見ているとしたら、今の刃更は眠りの浅いレム睡眠の筈だ。先ほど胡桃は「半日は目覚めない」と言っていたため、てっきり柚希が使用したという睡眠香とやらは、かなり深い眠りを与えるものだと思っていたのだが、

……まさか、薬の効きが甘くなってる？

考えられる可能性は幾つかある。直前まで命を懸けた戦闘を繰り広げていれば脳は興奮状態にあるだろうし、それに澪と刃更は戦いの前に主従契約にとって大事な信頼関係を深める事でパワーアップにも成功している。自己治癒能力や代謝が上がるなどして、薬への抵抗力が強まっていてもおかしくはない。だとしたら、

「……野中が使ったのは、アンタ達の一族の薬よね？　他にも確か、回復薬みたいなものとかなかった？　それで代謝を上げて、体内から少しでも薬を出せない？」

以前、柚希から貰った薬のお陰で刃更が回復した事があったのを思い出し提案する澪に、

「た、確かにそういう薬はあるけど、あたしは持ってない……あれは強制的に身体と精神の調子を回復に集中させちゃうものだから。下手に魔力タイプが使うと、薬が効いている間は魔法が上手く使えなくなったりしちゃうんだよ」

首を振る胡桃に対し、しかし成瀬澪は最後まで諦めない。

「だったら、毒消しとかの解毒剤系は？　魔法を使う上で意識の集中を阻害する、毒や痺れ――強制睡眠や催眠なんかの状態異常から回復するための薬は必要よね？」

7

自分から仕掛けた高志との戦闘――しかしそれは、柚希にとって厳しいものになった。

戦闘は結界の西側で繰り広げられていた。全力の『白虎』を高志に使わせないため、こちらへ澪達が逃げたからである。その判断は間違ってはいないが、その結果高志は己を西方に見立て、守護の力を行使した『白虎』による自動防御を行なえるようになっていた。

中距離からは斬撃による空気の刃を、さらに接近して連続の剣撃を繰り出すのだが、

「――無駄だ」

その全てが『白虎』を中心に展開される風の障壁と、『白虎』そのものに防がれる。

そして、こちらの攻撃の隙間を縫って放たれる高志の攻撃はどれも高速で、

「っ――！」

その度に柚希は、必死の回避を強いられた。

だが、こちらの動きを高志のスピードが上回り、鋭い刺突が柚希へと迫り、

「させませんよっ！」

万理亜が横から高志へ襲い掛かった。だが高志には反応できない筈の死角からの不意打ちを、『白虎』の自動防御があっさり阻む。そのまま万理亜と連動して二対一で攻めるのだが、高志はそんな柚希達と互角以上に渡り合う。そして、

「どうした……動きが鈍いぞ」

高志の指摘に、柚希は表情を苦いものにした。

――柚希を苦しめているのは、戦況だけではなかった。

別に身体のどこかを負傷している訳ではない。問題なのは心の方だ。

刃更と刃更の守りたいもののために戦う――確かに自分はそう決めた。

――しかし、どれだけ覚悟を決めても、迷いまでそう簡単には捨てられない。

眼の前に居る高志は味方で、幼馴染で――そしてあの悲劇を共に生き抜いた仲間だ。

この五年、強くなるために高志がどれ程の犠牲を払ってきたかを野中柚希は知っている。悲劇を前に何もできない己ではいたくない――その一心で自分達は強くなった。

よって柚希のしている事は、そうした仲間達に対する裏切りだ。この戦いが終われば責任を取るが、それでも家族には大きな迷惑を掛ける事になるだろう。無論、これは戦いの最中に考えるべき事ではない、と解ってはいる。今は戦う事だけを考えるべきだと。

……でも。

確かに、野中柚希が最も大切にしているものは東城刃更だ――だが、彼だけでもない。家族も、仲間も大切なのだ。その想いを消す事はできない。

……それに。

刃更は、澪を守るために柚希達と戦う事を選んだ。柚希達よりも澪を選んだのだ。

それは仕方のない事だと解ってはいる。あの悲劇では刃更も被害者だったのに、そんな彼を《里》は追い出し、柚希達はそれを見ている事しかできなかった。

そう。刃更は自分達を裏切ってはいない――自分達が刃更を裏切ったのだ。

だから、刃更が澪を選ぶ事は解っていた。

……だけど。

野中柚希は思ってしまう。いけないと解っているのに。あの悲劇から自分が過ごした五

年間は――抱えきれない程に募った彼への想いは、一体どこへ行けば良いのだろうと。

――だが、そんな柚希の想いは眼の前の戦闘の邪魔でしかなかった。

迷いが生んだ刹那の思考の空白が、命取りの隙となり、高志の放った斬撃を『咲耶』で受けた柚希は背後へと吹き飛ばされた。路上に止まっていた乗用車へ背中からぶつかり、

「――終わりだ」

いけないと思った時にはもう、『白虎』の刃の先端が迫っていた。

避けられない。自分の死が不可避である事を悟り――野中柚希は己の命を諦めた。

だが勝負は諦めない。自分が負ければ刃更が命を落とすかもしれないのだ。

それだけはさせない。だから柚希はとっさに、高志の背後にいる万理亜を見た。

……お願い。

瞳で伝える。自分の身体を『白虎』が貫いた瞬間に、高志を倒せと。

それが刃更を――そして万理亜の主である澪を助けられる唯一の方法だと。

そうなればこちらに残るのは、肋骨を折って戦えない胡桃のみ。胡桃の性格なら無理をしようとするかもしれないが、高志が柚希を殺したと知れば戦意を失ってくれるだろう。

そして今回、斯波はお目付け役のため《里》から刃更達との戦闘を禁止されている。

つまり――柚希を殺した高志を万理亜が倒せば、この戦いは終わる。だから、

「――――」

柚希はスッと瞳を閉じて。最後にそっと、笑みと共に一番大切な人の名前を口にした。

――刃更。貴方が大切だったと。ずっと貴方を想っていたと。

たとえ貴方が他の誰かを想っていても……自分は、貴方の事が誰よりも好きだったと。

だから忘れないでと――別れを告げた、その時だった。

――甲高い金属音が鳴り響いたのは。

「……え？」

野中柚希は見る。眼の前に、何があろうと決して見間違う事のないものがあるのを。

子供の頃からずっと見てきた――それは野中柚希の最も大切な人の背中だ。

信じられなかった。睡眠香をたっぷりと吸わせたのだ。

戦闘のダメージもある。眠ったまま半日は目覚めない筈だった――それなのに。

その背中は、柚希自身ですら諦めた彼女の命を諦めず、高志の『白虎』を防いでいた。

五年前の悲劇の現場で、柚希の命を救うために戦ってくれたあの時と同じように。

現在の東城刃更がそこにいた。

8

『白虎』の槍撃をブリュンヒルドで受け止めた刃更に、眼の前の高志が言った。

「来たか――」

それは問い掛けではなく事実の確認だ。だから刃更は「ああ」と頷いて、

「高志……柚希を殺すつもりだったのか？」

「先に攻撃をしてきたのは柚希だ」

と高志。

「それも戦わないだけならともかく、消滅対象である成瀬澪を助けようとした。自分の使命を忘れ、魔族の味方をしたんだ。ならば敵として排除するのが当然だろう」

「……幼馴染だぞ」

「だからどうした。俺達は勇者の一族だ。この世界を守る――その使命は、あらゆる感情よりも優先される。その事は柚希も、そしてお前も解っている筈だ」

淡々と言い放つ高志に、刃更は無言を返しながら思う。

……ああ、これか……。

「朝早くから騒がしくしたら、刃更に悪いと思って。――完全に気配を消してみた」
「奥ゆかしさがこじれてるっ！」
風呂場でいきなり後ろから頭を洗われたら、気の弱い奴は心臓止まるわ！
そんなこちらに構う事なく、柚希は身を寄せてきながら、
「刃更……洗わせて？」
「い、いや、一緒に入るのはまずいって柚希……解るだろっ？」
「……どうして？　昔はよく一緒に入ってた」
「いや、それは五年以上前の――小さい子供の時の話だから！」
もうお互い、無邪気なだけの子供ではないのだ。バスタオル越しでもわかる。柚希の肢体は、もう立派な女である事を強く主張していた。
刃更は慌てて腰にタオルを巻きながら、
「それに柚希だって、平気そうにしてるけど顔赤いし……やっぱ恥ずかしいだろ？」
「……うん。少し恥ずかしい。でも、刃更と一緒にお風呂に入りたかった」
一息、
「刃更は……私と一緒に入るのは嫌？」
「いや、別に嫌って事は……ないけど」

至近距離で見上げられ、恥ずかしさから刃更は思わず眼を逸らす。「嬉しい」と言ってしまうのも憚られたため言葉を濁したのだが、それを否定的な意味に取ったのか、
「あれ……えっと、柚希さん？」「……」
むーと柚希は、どこか不満げな表情になっていった。そして、
「……成瀬澪やあのサキュバスとは一緒に入ったのに、ウチとは嫌やの？」
少し訛りの交じった口調。それは、柚希が感情を抑えられなくなった時に出る癖だ。
先日、学校の屋上で万理亜が暴露した件がまだ尾を引いていたのだろう――だが、そう分析できた時にはもう遅かった。
「お、おい……っ!?」
刃更が制止するのも聞かず、柚希は自分のバスタオルの結び目を解いた。
浴室の床に白の布が落ち、透き通るように美しい柚希の肌が露わになる。
慌てて後ろを向くが、それでも刃更はしっかりと見てしまった。
野中柚希の身体がどれだけ大人に成長し、どれだけ綺麗になったのかを。さらに、
「――刃更、洗わせて」
先刻よりもやや強めの口調で言うと、柚希は刃更の背中にぴったりと身体をくっつけるようにして抱き付いてきた。その感触の破壊力に硬直した刃更の背中に、柚希は頬を寄せ、

ようやく五年前の、迅の気持ちが理解できた。確かにこれは我慢できない。勇者としての使命――たったその一言で、自分の大切なものを諦めなければいけないなど。五年前ならともかく、今の刃更にはとてもじゃないが無理だった。だから、

「……解った。もう良い」

静かに言うと同時、刃更は動いていた。説得が不可能ならば、叩きのめすしかない。一瞬の脱力で『白虎』を横へ捌いた刃更は、身を沈めながらの横薙ぎを繰り出した。その斬撃を背後に跳んで避けた高志に対し、刃更は己の肉体のギアを一気に切り替え、その後を追った。自分の大切なものを守るために。

――だが願うだけで、想うだけで現実が味方してくれるとは限らない。

最初こそ拮抗した刃更と高志の戦いは、徐々に刃更の劣勢へと傾いていった。

それ程までに『白虎』の力は強大だった。さらに、刃更の身体にはまだ柚希に吸わされた睡眠香の効果が残っている。そして思うように身体が動かないこちらに対し、高志の身体能力はこの五年で飛躍的に上昇していた。しかもパワーだけでなく、スピードタイプの最大の武器である速さでも完全にこちらを上回っていて。高志がどれだけの想いを抱いて修行に励んでいたのかを痛感しながら、刃更は防戦一方になっていった。

……クソっ。

身体が重い。ブリュンヒルドもだ。情けない自分の体たらくに歯噛みしながら、それでも刃更は戦う事を止めなかった。今の刃更には守りたいものがある。譲れないものがある。かつて自分を守ってくれた父親の迅と、新たな家族となった澪と万理亜だ。

――だが今。澪達に味方すると決めた自分を、それでも守ろうとしてくれる勇者が居る。五年前。刃更が彼女の命を救う事ができたのは、ほとんど偶然のようなものだった。何せ自分は意識を手放し、《無次元の執行》を暴走させてしまったのだから。

しかし彼女は違う。この五年で見違えるように強くなり、己の意志で刃更と、刃更の守りたいもののために戦ってくれた。

今日や、先日の滝川との一件だけじゃない。きっとこの五年、彼女はずっと戦っていた。

そんな彼女を――野中柚希という少女を、東城刃更は今度こそ守ってみせる。

今も昔も変わる事はない。自分にとって、彼女は掛け替えのない存在なのだから。

「――――っ」

よって刃更は、そのために必要な事を行なった。

上手く動かない身体で綺麗に戦っても仕方がない以上、他に方法はない。

だから東城刃更は意を決し、一つの事を諦めた。

己の戦闘スタイルを捨てたのだ。

――もうすぐあの刃更に勝つ事ができる。

間もなく訪れるであろう己の勝利に、高志が鼓動を僅かに速いものにした時だった。

眼の前の刃更の動きに、不意に変化が生じたのは。

……何だ？

呼吸が荒くなり無駄な動きも増えたため、最初はスタミナが切れたのかと思った。

だがそうではなかった。徐々に高志の槍撃が空を切り始め、さらに刃更は時折こちらが眼で追えないような動きをし始めている。

――人の肉体は、無駄な動きを排する事で速く動けるようにできている。その意識を己の心と身体に刻み込み、徹底できるようにする事こそが、スピードタイプの修行の始まりにして目指すべき到達点だ。そして極限の集中を行ない、心と身体から限界まで無駄を排除する事ができた者だけが、自らを風の領域へと到達させる事ができるのである。

そのためスピードタイプ同士の戦闘は、互いの動きの読み合いになる。無駄を可能な限り排していけばいく程、最善にして最速の動作はシンプルなものに限られてゆくからだ。

しかし――今の刃更は明らかに、その理念とは真逆の動きを見せていた。

「この……ふざけるなっ！」

怒りと共に高志は連続で刺突を繰り出した。だが、そのどれもが掠りもしない。

信じられなかった。別れてからのこの五年という月日は、高志にとっては己を高める時間であり、そして刃更にとってはマイナスとなるブランクだった筈だ。無論、成長期のため体格は成長している。だが五年という時間は長い――鍛錬を怠れば、たとえ肉体は成長しても身体能力は落ちる筈。天才を凡人に変えるには、充分すぎる月日なのだ。

それなのに――今の刃更は、間違いなく五年前よりも速かった。

……だとしたら。

一つの可能性に思い至り、高志はまさかという愕然を得た。《里》を追放されてからこの五年、成瀬澪と出逢うまで、刃更がブリュンヒルドを具現化した事はなかった筈だ。

勇者である事を止めた刃更に、剣を持つ理由は――戦う理由はないのだから。だが、

……まさか、お前は……。

滅茶苦茶な動きとはいえ、それでも自分と渡り合えている。それは無為に時を過ごしてきた者にできる事ではない――だとしたら答えは一つ。

東城刃更は鍛錬を続けていた。たとえ剣は持てなくても、過去の悲劇に、自分の犯した罪の重さに心が壊れそうになりながら――それでも刃更もまた、高志達と同じようにこの

五年戦い続けていたのだ。だが、

「――だからどうしたっ！」

高志は『白虎』の斬撃を刃更へと叩き付けた。

確かに刃更は鍛錬を続けていたのかもしれない。しかし、刃更が成瀬澪の――この世界にとって脅威となる先代魔王の娘を守ると決めたのは事実だ。

あの悲劇を経て、この五年という月日を経て、それが刃更の出した結論なのだ。

だとしたら、早瀬高志はそれを許す訳にはいかない。

たとえ刃更や迅や、柚希が捨てようとも、自分は勇者の一族としての使命を貫き通す。

それが自分の――あの悲劇を生き延びた早瀬高志の、己に課した生き方だ。

――しかし。そうしている間にも刃更の速度は上がり続けていた。

こちらの一つの攻撃の間に、三つの反撃が来て、五つの連撃が来て、八つの斬撃が来た。

相手から攻撃という選択肢を奪う――それこそが、神速剣術使いたる刃更の真骨頂だ。

そうした刃更の神速の攻撃に、高志の意思とは別に『白虎』が反応してしまう。

「くっ……！」

半強制的に発動する自動防御は、やがて高志から攻撃という選択肢を奪っていった。

そして、ついには自動防御すら追いつかなくなり、とうとう風の障壁が展開された。

刃更の攻撃を防ぐために、高志の意識や肉体の動作が遅いと判断したのだろう。

それは、高志を守るためには高志の存在が邪魔だと『白虎』に判断されたという事で、

「っ――そんな事がっ！」

認められる筈がなかった。

だからカッとなった高志は、『白虎』を振り上げ風の障壁を破壊しようとした。

このままでは自分は、攻撃すらできないと思ったからだ。

発作的な動き。だが――それは高志自身が、『白虎』が守護すべき西方とみなしている己を危険に晒す行為で。西方を守るべき守護神が、西方を危険に晒すために使われる――その矛盾がどのような事態を引き起こすかを、高志は身を以て知る羽目になった。

風の障壁に『白虎』がぶつかった瞬間、激しい衝撃が生まれ、高志を吹き飛ばした。

眼の前で生まれた衝撃に巻き込まれた刃更は、背後へ飛ばされながらそれでも着地し、

「高志……っ！」

慌てて高志を助けに行こうとした。だが――できなかった。

視線の先に巨大な白の獣が立ちはだかっていた。その名を東城刃更は知っている。

西方を守護する神獣――白虎だ。そこへ、

「――刃更っ！」

やって来たのは、眠らされた自分の眼を覚まさせ、柚希の危機を教えてくれた澪だった。柚希を助けるためには急がなくてはならないが、澪自身には消耗があった。負傷した胡桃も居る。よって彼女を任せて、刃更だけが神速の疾走でこちらへと駆けつけたのだが、待っているだけの状況に我慢できなくなったのだろう。

見れば、澪の後からやって来る胡桃の姿もあった。すると、

「澪さまっ、ご無事でしたか！」

刃更と高志の戦いを見守っていた万理亜も合流し、刃更達四人は白虎を見据える。その巨体から放たれる凄まじい圧力に、

「っ……な、何なのあれ？　これもあの早瀬って男の仕業なわけ？」

「いや、違う……あれは高志の意思じゃない。多分、『白虎』が暴走したんだ」

それで槍の中に封じられていた力が解き放たれ、本来の姿で顕在化したのだろう。

「……襲ってきませんね」

疑問を含んだ声で言った万理亜に、

「『白虎』は守護獣だからな。恐らく敵と認識しない限りは、攻撃して来ないんだろう」

「敵って……？」

「こちらから攻撃を仕掛けるか、不用意に接近しない限りは大丈夫だと思う……」

その距離は、恐らく元となった霊槍と同じ間合いだろう。だが、

「まずいな……この結界の半分は『白虎』の力で構築されている。下手すると結界に綻びが生じるかもしれない」

もし結界の外にあれが出たら――その先は考えたくもない。ここは駅前なのだ。外は、多くの人で溢れている。本来は異能に関する事象は一般人には見えないが、『白虎』は既に使い手である高志のコントロール下から離れて暴走状態だ。もし一般人の目につきでもしたら、集団パニックは避けられないだろう。その騒ぎに白虎が周囲の人間を敵と判断などしてしまったら、一般人に犠牲者が出てしまうかもしれない。

「あの霊槍を破壊すれば、あそこに居る虎も消えたりしないの？」

と澪。しかし、胡桃が慌てたように、

「何言ってんの！　神獣としての概念を込められたのが『白虎』なんだ。槍を破壊したら、それこそ完全にその力を解き放つ事になっちゃうよ！」

つまり、どうにかしてあれを倒すしかない訳だ。すると万理亜が、

「あの……刃更さんの『あの技』で何とかできませんか？」

問い掛けを放ってくる。万理亜の言っている事は理解できた。だが、
「無理だ。《無次元の執行》はカウンターでしか出せない技なんだよ」
前に力を暴走させた澪を助けた事があるが、あれはあくまで彼女が解き放った力に対してカウンターで繰り出したからこそ発動させられたのだ。今回のケースでは使えない。
「要は正面から倒すしかないって訳ね……上等よ、百回殺してやるわ」
そう言って前に出ようとする澪を、慌てて万理亜が制止した。
「駄目です澪さまっ。恐らくあの虎は強固な風の障壁を張っています。今の澪さまの状態で使える魔法じゃ、傷一つ付けられません。別の方法を考えるべきです！」
「何言ってんのよっ。そんな都合の良いものが――」
そう言い掛けた澪に、
「――いや、方法はある」
確かな声で刃更は言った。
「でも……《無次元の執行》は使えないって」
「ああ、だから他の方法だよ。でも、上手く行けばやれる筈だ」
ただし、
「そのためには、あの虎の懐に飛び込まないといけない。だから、少なくとも風の障壁だけは先に破っておく必要があるんだが――」
そう告げた刃更の言葉に、
「――なら、その役は私がやる」
静かな声が名乗りを上げた。それは、この結界に残っていた最後の一人。
刃更を守るために戦ってくれた美しい女勇者――野中柚希だ。

9

白虎の風の障壁を打ち破る事を自ら志願した柚希に、
「お姉……っ？」
慌てた声を胡桃が上げた。しかし、こちらを制止しようとする妹に対し、
「――――」
柚希は静かな笑みを返すと、刃更へと向き直り、
「やらせて刃更……私なら出来る。私と――『咲耶』なら」
そう言って、手の中に己の霊刀を呼び出した。
「……多分、他に方法はない」

万理亜が言ったように、澪には無理だ。『白虎』の干渉を受ける精霊魔術師の胡桃もだ。パワータイプの万理亜なら可能性はあるが、肉弾格闘士の戦闘スタイルは接近戦。強さの底が見えないあの虎と単独で戦わせるのは危険すぎる。だからこそ、

「刃更、お願い……ウチを信じて」

力を込めて柚希は言った。そして、後はただ刃更の瞳を見据える。

自分は刃更を信じている——だから。どうか刃更も、自分を信じて欲しいと。そして、

「……解った」

やがて刃更は、そう言って頷いてくれた。柚希を信じてくれたのだ。だから、

「ありがとう……」

柚希は笑みを浮かべると、そのまま白虎へと向かって駆け出した。すると、

『——』

白虎の瞳が柚希を見据えると同時、巨大な体軀から凄まじいプレッシャーが放たれた。しかし、柚希に恐れはない。あるのはただ——震えるような悦びだ。

刃更が自分を信じてくれた。その刃更のために戦えるのだ。柚希は今こそ強くなって良かったと思う。これでようやく、この辛く苦しかった五年の歳月に確かな意味を見出せる。

野中柚希が強くなったのは——きっと今この時のため。東城刃更のためなのだから。

よって、もう高志との戦いの際にあったような迷いはなかった。
白虎と十mの距離を以て対峙した柚希は、
「お願い――『咲耶』」
そう呟くと同時、己の霊刀を大上段から振りぬいた。

その瞬間、大気を震わす衝撃が駆け抜けたのを刃更達は見た。
それは白虎の風の障壁へと激突し、激しい轟音を響かせる。その凄まじい破壊力に、
「ちょ、ちょっと……何よあれ？　野中って、あんなに強かったの？」
「ったく、今さら何を言ってんの」
呆然となる澪に、胡桃はフンと言った。一撃では白虎の障壁を破壊するまでには至らなかった事に気付き、連撃を放ち始めた柚希を見ながら、
「先代魔王の娘のアンタの監視なんて重要任務を単独で任されていたんだよ、お姉は」
「いや、でも……」
と、こちらも信じられないように万理亜。もはや白虎は柚希を敵と認識し、攻撃に移ろうとしているというのに、柚希の繰り出す連続の衝撃波が一切の反撃を許さないのだ。

「明らかに、先日の公園での戦闘の時より強そうなんですが」
「当然でしょ。お姉の『咲耶』は富士の霊峰の力を凝縮した桜の神木の中から取り出されたものなんだから。自然を破壊する恐れのある場所で、本来の力が出せる訳ないでしょ」
だが周囲に被害の出ない結界の中ならば、その本領を発揮する事ができる。
恐らく――先ほど刃更の意識を一撃で断ったあの攻撃も、その内の一つなのだろう。
……そうか。躍動する柚希の後ろ姿に、刃更は頼もしさを覚えた。
――だが、これ以上の感動は後だ。刃更はスッと腰を落として己の意識を集中する。
これから繰り出すのは今から一週間前――自分達を襲撃してきた巨漢の魔族ヴァルガに対して放とうとしていた一撃だ。測るのは、敵を斬り裂くための最善にして最短のルートと、それを可能とするために必要な己の速度。その両方を確かに見出した時。
柚希の繰り出した一撃が、とうとう白虎が展開している風の障壁を破壊した。だから、
「――――」
己の中にある全ての力を速度へと変え、東城刃更は行った。

風の障壁を破壊したこちらに対し、白虎が形振り構わぬ行動に出たのを柚希は見た。

こちらが放つ衝撃波に対し、敢えて身を縮めてから弾かれたように動いたのだ。
それは攻撃という名の防御。白虎はこちらの繰り出した衝撃波を体当たりで粉砕すると、
『――――』
そのまま柚希へと襲い掛かった。
鋭い牙でこちらを食い千切ろうと、見上げるような巨体が迫ってくる。
――だが、その牙が柚希へと届く事はなかった。
それよりも先に、柚希のすぐ隣を背後から来た風が駆け抜けたからだ。
その風の中にある背中を、野中柚希が確かに見た時。
西方を守護する神獣・白虎は、その巨体を上下に斬り裂かれていた。

10

顕在化した白虎を倒し、霊槍の回収を終えると、刃更達は高志の下へと向かった。
暴走した『白虎』の衝撃をまともに受けたものの命に別状はなく、程なくして高志は意識を取り戻した。自身を除く敵と味方の全員が揃っている事に、敗北を悟ったのだろう。
「……殺せ」

唇を噛みながら、絞り出すような声で呟いた。
「お前達を倒すべき存在と《里》が決めた以上、それを果たすのが俺の使命だ。命ある限り、俺はお前達を狙い続けるぞ」
そんな高志に、刃更は首を横に振った。
「できる訳ないだろ……そんな事」
「――一族を敵に回すのが怖いのか？」
「違う。お前を殺したくないからだ……幼馴染なんだぞ俺達は」
説得するこちらに対し、高志はせせら笑うように、
「幼馴染は殺せない……だと？　ふざけるなっ！　五年前のあの時、お前が消した連中の中に、俺達の幼馴染が何人いたと思ってる！」
「それは……」
その言葉に、思わず俯いた刃更に、
「……どうした。消してみろよ俺を。お前の得意な、あの呪われた技で。あの日の悲劇を忘れて、魔王の娘の味方になど成り下がったお前になら簡単な事だろうが」
そう言って高志が食って掛かろうとした時だった。高志に対し、動きを見せた者がいた。
それまで他の皆と同じく、刃更と高志のやり取りを横で見ていた少女――澪だ。

澪は無言で刃更達の間に割って入ると、やおら高志の頬に盛大な平手を見舞った。

「っ――貴様っ！」

呆然をすぐさま激情へと変えた高志に、

「良いわ。来なさいよっ！　百回殺してやるから！」

しかし澪は、まるで怯む事なく言い放つ。

「昔の事を忘れた？　ふざけんじゃないわよ！　刃更が今でもどれだけ苦しんで、どれだけ悪夢にうなされ続けているかも知らないで、よくもそんな勝手な事……っ。アンタ達が忘れられない事を、こいつが忘れられる訳ないでしょうが！　苦しい想いをしているのは、自分達だけだとでも思ってるのっ!?」

「何だと……」

「み、澪さまっ……気持ちは解りますが、どうか落ち着いて下さいっ」

「放してよっ。こんな馬鹿、もっといっぱい殴ってやれば良いのよ！」

さらに高志へと詰め寄ろうとする澪を、万理亜がどうにか引き離した。

そんな二人からこちらへと視線を移した高志に、刃更は告げる。

「高志……もしお前がまた澪を、俺達を狙うのなら、俺は何度だって阻止してみせる。それが今の俺の――勇者の一族じゃない、ただの東城刃更として選んだ道だから」

それだけは何があっても譲る事はできない。

「でも、俺はお前を絶対に殺さない。過去も、今のお前の憎しみも一生背負い続けるよ」

ああそうだ、と刃更は思う。絶対に忘れられないし、絶対に忘れる事もないけれど。

『過去』に背を向けるのではなく、しっかりと背負って。『未来』を見据えて『今』を生きてゆく。時に立ち止まり、時に振り返りながら、それでも前を向いて。何故ならば、

「たとえ《無次元の執行（バニシング・シフト）》でも――俺の過去は消せないから」

「……っ」

こちらの言葉に、高志が唇を噛んで俯いた時だった。

「――さて、そろそろ話はまとまったかな？」

ふと背後から明るい声がした。振り返れば、そこには斯波恭一が立っていて、

「そんな……どうやって結界の中に？」

呆然と問う胡桃に、斯波は肩を竦めながら、

「結界の半分を構築していた『白虎』が暴走した挙句、顕在化までしたんだ。力の大半を放出しちゃったせいで、結界の力も半分に弱まっていたからね。入るのは簡単だったよ」

と笑って、

「さあ――勝負は付いたみたいだし、話も終わったなら帰るよ三人共」

「何を言ってるんだ……長老達は成瀬澪を消滅対象にしたんだぞ。彼女を滅ぼすまで俺達の任務は終わらない。だからこそ、『白虎』の使用許可まで――」

「その決定なら、一旦撤回されたよ。さっさと戻って来いってさ。これ、長老達が下した《里》の正式な決定ね」

「っ――本当ですか斯波さん？」

思わず訊き返す刃更に、「うん」と斯波は頷いて、

「高志が『白虎』を暴走させた挙句、その尻拭いを刃更達にさせちゃったからね。結界が壊れて、一般人に被害が出ていた可能性もあるし。そもそもの消滅対象への切り替えは、そこの彼女にウィルベルトから受け継いだ力の覚醒の兆しが見られたからなんだけど、まだ彼女自身が特に周囲に危害を及ぼした訳でもない」

よって、

「ここまで正当性を欠いた状況で、無理に彼女を消滅させでもしたら、間違いなく『穢れ』が生じる。しかも彼女の中にある力の大きさを考えると、恐らく相当なレベルのね。下手をすると僕らや《里》が契約している、精霊や神々からの加護や恩恵が受けられなくなるかもしれない。長老達も、流石にそれはマズいと思ったんじゃないかな」

「馬鹿な……そんな事が……っ」

聞かされた説明に、それでも納得できないとばかりに高志が言ったのと――その場の空気が一気に張り詰めたのは同時だった。誰もが思わず息を呑む中、

「聞こえなかったかい高志、僕は終わりだと言ったんだ。君の感情も感傷もどうだって良い。黙って《里》の命令に従え。僕を結界から締め出した事を今とやかく言うつもりはないけど、これ以上の醜態を晒すというなら――その下らない意地ごと君を潰すよ？」

「……っ」

その言葉に高志は悔しそうに表情を歪めると、やがて刃更達の間を抜けて斯波の隣へと並んだ。するとようやく斯波が表情を緩め、張り詰めていた空気が弛緩する。そして、

「さあ胡桃ちゃん、それに柚希ちゃんもおいで――帰るよ」

その言葉に、まずは胡桃が。続いて柚希が斯波の方へと向かおうとして、

「ま、待ってくれ斯波さん、柚希は――」

とっさに後を追おうとした瞬間、斯波から息を呑むような圧力が発せられた。そして、

「――動かないでくれ刃更。僕は今回、最後までお目付け役でいたいんだ」

薄く眼を開いた冷笑を浮かべて斯波が告げてくる。

「もし洗わせてくれなかったら――もっと凄い事する」
その静かな声に込められている本気の色に、刃更は即座に降参。
「わ、解った……洗って良いっ。だから、これ以上は許してくれ……！」
こっちは仙人でも聖人君子でもない。健康な年頃の青少年なのだ。今でも既にヤバイというのに、これ以上の事なんてされたら完全に理性が崩壊してしまう。
こちらの承諾を得られた事に少し機嫌を直してくれたのか、柚希は「なら動かないで」と口調を落ち着いたものに戻すと、刃更の頭を洗い始めた。その優しく丁寧な指使いは、柚希の真面目な性格と、何よりも刃更を大切に想ってくれている事を感じさせるもので、
……五年、か。
かつて幼い頃。無邪気に互いの身体を洗い合っていた時と今とでは、自分も柚希も色んな事が変わってしまっている。単純に年を重ねただけでなく、互いの立場や関係も含めて。
――しかし、それでも変わらないものは確かにあるのだ。
柚希がこちらを大切に想ってくれているように。
東城刃更もまた、今も昔と変わる事なく、野中柚希を大事に想い続けているのだから。
「……」「……」
いつしか二人ともが無言になり、浴室内には沈黙が降りていた。

「っ……そんな脅しが……っ！」

だが刃更は動こうとした。斯波を敵に回せば、自分がどうなるかなど承知の上だ。

それでも、このまま柚希を行かせたくなかった。しかし、

「刃更……駄目……」

他ならぬ柚希が首を横に振った。

「私の事なら平気。戦いが終われば《里》には戻るつもりだった。私は自分のした事の責任を取らないといけない……胡桃や父さん達に迷惑を掛ける訳にはいかないから」

「そういう事だね。ここで柚希ちゃんが戻らないと、折角まとまった話が台無しだ。状況も余計に悪化する事になる。一時の感情に流されると、皆が不幸になっちゃうよ？」

「――――っ」

刃更が悔しそうに押し黙ると、柚希は静かに微笑んで、

「ありがとう刃更。短い間だったけど――また会う事ができて本当に嬉しかった」

それが、五年ぶりに再会した東城刃更と野中柚希の別れの言葉になった。

斯波と共に去ってゆく柚希の後ろ姿を、刃更達はただ黙って見送る事しかできなかった。

エピローグ　未来の可能性

1

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

起立、礼――その号令を掛けるのは本来、クラス委員長の仕事である。

だがこの日、聖ヶ坂学園の一年Ｂ組の号令は、全て副委員長が行なっていた。

委員長の野中柚希が欠席していたからだ。

その理由を知っている成瀬澪は、自分と同じ窓際の列――その一番前の席を見た。

今朝からずっと空いたままの柚希の席を。そして澪が次に見たのは、彼自身の席に座る刃更の背中だった。刃更もまた、澪と同じく柚希の席を見つめていて、

「――――」

そんな刃更の後ろ姿に、澪は静かに瞳を伏せた。

――澪達が、柚希らと戦ったのは三日前。先週の金曜の事だ。

戦いを終えた後、あの斯波という男に従い、柚希は他の二人と共に行ってしまった。

刃更や澪を守るため、仲間を裏切ってしまった責任を取るために。

だから今日、柚希は学校に来なかった。そして多分、これからも来る事はないだろう。

……だって。

昨日、澪達は柚希のマンションを訪れていた。不在なのは解っていた。それでもいても立ってもいられなくて、つい足を向けてしまったのである。

だが――澪達はそこで信じられないものを見た。業者が、柚希の部屋から荷物を運び出していたのだ。しかも引っ越し業者ではない。リサイクルとゴミ処理を行なう業者だった。

慌てて業者やマンションの管理人に事情を訊ねると、柚希が部屋を解約し、残した家具や荷物の処理を頼まれたとだけ教えられた。

そして呆然としながら家に戻ると、一通のメール便が刃更に届いていた。

差出人は柚希。しかし中に入っていたのは手紙ではなかった。東城家の鍵だ。聞けば、あの戦いの前に刃更が柚希に合鍵を渡していたらしい。それが返されたのである。

だから澪達は悟った。きっと柚希はもう、二度と戻って来る事はないのだと。

恐らくそう遠くない内に、学校側に退学届が出される筈だ。

あそこまで迅速にマンションを引き払っている事を考えると、もしかしたら生徒である自分達に知らされていないだけで、手続き自体はもう済んでいるのかもしれない。

……野中。

柚希がした事は、柚希自身が望んだものだ。だが、もし澪が刃更と出逢っていなければ、刃更が澪を守ると決めていなければ――柚希が仲間を裏切らなければいけなくなる事はなかっただろう。それこそ澪と出逢うより先に、刃更と柚希が再会を果たしていれば、柚希だけでなく刃更までもが澪の敵になっていてもおかしくはない。

たったそれだけの差なのだ、自分と柚希は。そう思いながら自分の席で俯いていると、

「……大丈夫、成瀬さん？」

ふと、澪を気遣う声が横から掛けられた。見ればこちらの席のすぐ傍に、クラスメイトの少女達が立っている。相川志保と榊千佳の二人だ。だから、

「え……っと、大丈夫って何が？」

「だって、今日ずっと上の空だから……今だってぼんやりとしてたでしょ」

慌てて取り繕う澪に、苦笑しながら相川。そして榊が、

「もしかして、東城君や野中さんと関係ある事？」

「な、何で……？」
「だって東城君もずっと同じ感じだし。野中さんは今日休んでるし」
「う……」
刃更が転入してきた日に、柚希が抱きついた事によるドタバタもあって、澪達は周囲からすっかり三角関係と思われてしまっている。
「三人の内、一人が学校を休んで、残りの二人が憂鬱な顔をしてるんだよ？　そりゃ、何かあったと思うのが普通でしょ？」
「そんな……違うわよ、別に」
指摘されて口篭もるこちらに、
「本当に～？」「怪しいなぁ……」
相川と榊は、からかうように疑惑の瞳を向けてくる。
だがそこには、澪達の関係を興味本位で探ろうとするような嫌らしさはなかった。
多分、落ち込んでいるように見えた澪を元気付けようとしてくれているのだろう。
――澪は、学校では基本的に誰とでも分け隔てなく接する。
だが現魔王派の魔族に狙われているため、何かで巻き込んでしまう事のないよう、特定の友人を作らないようにしていた。それでも、やはり同性の友人との会話や一緒に過ごす

時間は楽しいし、向こうから仲良くしてくれる相手を邪険にもできない。
よって相川と榊とは昼食を共にしたり、体育などの授業ではよく一緒に行動していた。
この二人だけが、高校に進学してから澪にできた友人と呼べる存在だった。そして、
「でも……もし何か悩みがあるんだったら、何でもあたし達に言ってね」
「そうだよ。どんな些細な事でもいいから。遠慮せずにいつでも携帯とか鳴らしてよ」
そう言って、相川志保と榊千佳はニッコリと笑った。
「だって――あたし達は友達なんだから」

2

結局この日は、ぼんやりしている内に放課後になった。
澪と一緒に下校した刃更は現在、そのまま家に帰らず、とある場所に寄り道をしていた。
それはあの日の晩、高志や胡桃――そして柚希と戦った駅前だ。
時刻は間もなく夕暮れ。行き交う人々の姿はまだ少ない。しかし、あと二～三時間もすれば、仕事終わりで帰宅する人達で賑わいを見せるだろう。
「まだ、ほんの十日前なのにな……」

ここで柚希と待ち合わせをして、一緒に都心へ買い物へ行った。慣れない場所に戸惑いはあったけど、途中から澪や万理亜も加わって、皆で楽しい時間を過ごしたのだ。

「――刃更？」

ぼんやりと眼の前を眺め続けていると、隣の澪が心配そうに袖を引いた。

だから、応える代わりに刃更はポツリと呟いた。

「……守りたかった」

それだけだ。だが、隣の澪は小さく息を呑んだ。そして摑んでいた袖を離すと、澪はそっとこちらの手を握ってくる。刃更はその手を握り返すと、やがてゆっくりと歩き出した。

家に帰る道中、刃更も澪もずっと無言だった。そして――程なく二人は家に到着。

「ただいま……」

帰宅を伝える呟きをしながら家に入ると、美味しそうな匂いが玄関まで来ていた。恐らく万理亜が夕食の準備をしているのだろう。制服から着替えに自分の部屋がある二階へと上がる澪と別れ、刃更はリビングへ直行した。そして扉を開けて中に入ると、そのまますぐにキッチンへ。冷蔵庫の扉を開けて牛乳を取り出しながら、

「美味そうな匂いだな……今日は何を作ってるんだ？」

何気なく問うこちらに、

「……特製ビーフシチュー」

返ってきたのは、万理亜とは異なる静かな声だった。その透き通る声に、

「――っ？」

刃更は慌ててそちらを見た。その声が誰のものかを知っていたからだ。

間違える筈がない。そして、想像した通りの少女がそこに居て、

「柚希……」

驚きに眼を見開きながら、東城刃更は呆然とその名を口にした。

もう二度と会えないかもしれないと思っていた、その覚悟をしていた幼馴染の名を。

「お前、何で――」「責任を取りに来た」

信じられないように問うこちらに、さらりと柚希は言った。

「いや、だって……」

だからこそ、柚希は斯波によって《里》へ連れ戻される事になった。それが、あの戦いの結末だった筈だ。現に、住んでいたマンションまで早々に引き払っている。すると、

「《里》は成瀬澪を消滅対象から元の監視対象へ戻した。だから、改めて監視の任務を遂

行する者が必要になる」

それは理解できる。だが柚希は、理由はどうあれ《里》の指令に背き、仲間を裏切ったのだ。殺される事はないとは思っていたが、幽閉くらいは充分に有り得た筈だ。少なくとも、《里》の外へ出られる可能性は限りなく低いと思っていた。それなのに、柚希は今ここにいる——それも、柚希が裏切る原因となった刃更や澪の傍に。困惑するこちらに、

「刃更……今回の件は、始めから全てなかった事になった。だから——」

「……あ」

東城刃更はようやく理解する。高志達がやって来たのは澪が消滅対象になったからで、その結果戦いの中で『白虎』が暴走する事態になり、周囲に危険が及びかねない事態にまで陥った。その事実を隠すのであれば、そもそもの始まりである澪を消滅対象とする決定自体をなかった事にするのが一番だ。また——あの戦いがなかった事になるのなら、『白虎』の暴走だけでなく、あの時あの場所であった全てがなかった事になる。柚希の裏切りについてもだ。そして、状況は澪が監視対象だった時点まで巻き戻される。

柚希が澪を監視していた一週間前まで——皆で一緒に過ごしたあの日まで。しかし、

「《里》が、長老達が許してくれたっていうのか……？」

温情ある《里》の判断に呆然となる刃更に、柚希は首を横に振った。

「それは解らない……最初、《里》を裏切った私は処分を受け、幽閉される筈だった。でも、昨日になって急に全てなかった事にするって」

「何だっていきなり……」

まだどこか信じられずにいる刃更に、柚希が静かな声で言った。

「胡桃が言ってた——迅さんから長老に電話があったって」「——親父が？」

いきなり出てきた迅の名前に、刃更は驚いた。五年前の刃更に対する決定を巡って対立してから、迅は《里》や長老達をかなり毛嫌いしている。向こうからならともかく、自分からコンタクトを取るような真似は絶対にしない筈だ。

ならば何故か——そんな事は決まっている。

柚希達と戦う事になった後、迅が自分に言った言葉を刃更は思い出す。

『ケツは俺が持つ。相手が「白虎」を持ち出そうが関係ねえ——ブチのめしてやれ』

そうだ。迅は確かにそう言っていた。てっきりあれは、いざとなれば自分も一緒に戦うと言っていたのだとばかり思っていた。だが、そうではなかったのだ。

ならば、全てをなかった事にするというアイディアは迅のものだろう。それをどうやっ

て長老達に呑ませたかは解らない。或いは何らかの脅しを掛けたりした可能性もある。
だが――それでも東城迅は、刃更達を助けてみせたのだ。離れた場所から、彼にしか出来ない方法で。その事を理解した刃更は、
「……っ」
身体の奥から込み上げるような震えを得た。
「……刃更？」
キョトンとしたように眼の前の少女がこちらを見上げた。
それは、東城刃更が守りたいと願った大切な幼馴染。世界で唯一自分達の味方になってくれた勇者だ。だから、刃更はもう我慢できなかった。
強引に柚希を抱き寄せ、抱き締める。一瞬、腕の中の柚希が驚いたように身を竦めたが、刃更は構わずに抱き締める手に力を込めた。野中柚希の存在を目一杯に感じるように。
それは感情任せの乱暴な抱擁。だが、それでも柚希は痛がる素振りを見せず、逆にそっと刃更を抱き締め返してくれた。――そうして、二人で抱き合う事しばし。ようやく柚希が居るという実感を得られてそっと身体を離した刃更は、思わず息を呑んだ。
眼の前に、瞳を閉じた柚希の顔があったからだ。
「刃更……」

それは完全な不意打ち。虚を衝かれた刃更の唇に、柚希の唇が、
「――コホン」
触れる直前、いきなり真横で咳払いが生まれた。
ギョッとなった動きでそちらを見れば、制服から私服へと着替えた澪が立っており、
「もう会えないと思っていたのに、再会できたんだもの……気を利かせてしばらく黙って見ていてあげたけど、何を調子に乗ってキスシーンに突入してるのかしら」
「い、いやっ、これは……！」
頬をヒクつかせながら言われ、慌てて刃更は柚希から離れようとした。
しかしできなかった。こちらの背中に、柚希が両手を回していたからだ。
そして、澪に見せ付けるようにして刃更へギュッと抱きつき、
「成瀬さん……悪いけど今、私と刃更は取り込み中。用があるなら後にして欲しい」
「馬鹿じゃないのっ!?　人の家で何をヌケヌケと言ってんのよっ！」
大体、と澪。
「合鍵を返したアンタが何で入って来られたのよ。おまけに勝手に料理までしてくれちゃって……不法侵入で警察呼ぶわよっ？」
「そういえば――何で中に入れたんだ柚希？」「入れてくれた」「誰がっ？」

間髪容れずに澪が問うと、ガチャリと扉を開けて犯人がリビングへと入ってくる。
「お待たせしました柚希さん……おや。刃更さんに澪さま、いつの間に？」
「万理亜っ!?　まさかまたアンタなの、コイツを中に入れたのは！」
「えっ？　あれ？　マズかったですか……？」
怒り心頭の澪に、万理亜はキョトンとして、
「柚希さんがいなくなって、刃更さんかなり気落ちしてましたし……喜んでいただけるとばかり。サプライズにしようと、靴まで隠してお二人の帰りを待ってたのですが」
「何でそんな余計な真似を……っ！」
「だって――澪さまもあれからずっと柚希さんの事を気にされていたじゃないですか」
「そ、それは……っ」
思わず澪が顔を赤くすると、パチクリと眼を瞬かせた柚希が万理亜に問う。
「そうだったの？」
「ええ。刃更さんと同じくらい柚希さんの事を心配されてました」
「……ふーん」
「あっ、何よそのムカつく顔！　ちょっと可哀想かもって同情しただけよっ！　でも無事な事はもう充分に解ったわ。さっさと家から出て行きなさいよ！」

「まあまあ澪さま。危ないところを助けてくれた恩人なんですし、そう邪険にされなくとも。折角おもてなしの準備もできたところですので」
「おもてなしって……そういやお前、柚希に料理させて自分は何をしてたんだ？」
「はい、ちょっと刃更さんのパソコンをお借りしてました」
そう言って、万理亜はリビングの奥の方へ。そしてテレビの電源を入れると、どこからともなく取り出したのは、
「何だそのディスク……？」
「これですか？　うふふのふ。私の一番のお宝です。澪さまを助けてくれたお礼に、特別に柚希さんにお見せしようと思いまして。丁度良いので、皆で見ましょうか」
持っていたディスクをテレビの横から挿入すると、万理亜はうきうきしながらリモコンを操作して画面表示を切り替えた。そして――次の瞬間、
『ああっ、やぁん、はぁっ……んぅ、お兄ちゃ、お兄ちゃぁん……んっ、ふあぁぁっ！』
陶酔した喘ぎ声と共に、画面いっぱいに映し出されたのは、メープルシロップ塗れになった大きな胸を刃更に吸われて、表情をとろけさせた澪の姿だった。
思わず絶句する刃更達に、万理亜は上機嫌で、
「ホラ見て下さい、澪さまのこのはしたない顔といやらしい胸！　これはもうブルーレイ

じゃないともったいないです！　ビバ高画質っ、フルハイビジョン万歳ですっ！」
「っ……きゃあああああああああああああああああああ――――っ！」
確実にご近所迷惑になるレベルの悲鳴を上げた澪は、神速で万理亜からリモコンをひったくると速攻で停止ボタンを押した。
「あっ、澪さま一体何をっ？　良いところはこの後だというのにっ」
「アンタこそ何考えてるのっ!?　ってゆーか、こんなのいつの間に撮ってたのよっ！」
「もちろん最初からですっ！　初めての調教といえば、運動会や学芸会を超える家庭の録画必須イベント。そんな大事な思い出を、この私が撮り逃すとお思いですか！」
「そりゃアンタ達サキュバスだけの話でしょっ!?」
「そんなっ……では初めての一人Hはっ？」
「撮らせる訳ないでしょうがあああああああああっ！」
澪は絶叫しながら万理亜の首を絞め上げる。すると、
「……刃更、今のは何やの？」
それまで黙っていた柚希が、据わった目でこちらを見た。しかも訛りが出ております。
「いや、あれはっ……」
お前達との決戦を前に、戦闘能力を上げるために行なった……などと言える筈もなく。

「……」
刃更が答えに窮していると、スッと眼を細めた柚希がいきなり服を脱ぎ始めた。
「お、おいっ……！」
刃更が上げた慌てた声が聞こえたのか、
「ちょっとっ!?　何してんのよ野中っ！」
万理亜の首を絞めたまま、澪がこちらへ駆けてくる。そして、そこからはもう滅茶苦茶。
「成瀬さんは黙っといて。ウチも刃更に同じ事して貰う」「それでは私はカメラの準備を」
「万理亜っ、いい加減にしないと百回殺すわよ！」「待ってて刃更。今、全部脱ぐ」
「だから脱ぐなって言ってるでしょうがっ！」「刃更メープルシロップはどこ？」
「いえ、柚希さんは肌が白いのでチョコレートソースの方が映えるかと」
眼の前で繰り広げられる三人の少女のやり取りに、東城刃更は――。

3

「で……収拾つかなくなって、逃げ出してきた訳か。ヘタれだなぁ、バサっち」
「……無茶言うな」

情けないものを見るようにして言った滝川に、刃更は疲労困憊の声で答えた。

刃更達が居るのは、国道沿いのハンバーガーショップだ。

戦略的撤退を行ない、自転車で行くあてもなく走っていると、たまたま滝川に遭遇。話す事もあったため、二人でこの店を訪れたのである。とはいえ刃更が頼んでいるのは飲み物だけだった。家には柚希が作ったビーフシチューがあるのだ。ただでさえ現場から逃げ出してきているのに、これでもし外で何か食べて帰りでもしたら命に関わってしまう。

対する滝川は、注文したセットのポテトをぱくつきながら、

「しかし大変だな……成瀬澪やお付きのサキュバスだけじゃなく、これからは野中まで、一緒に暮らす事になったとは」

そうなのだ。驚くべき事に、これからは柚希も一緒に暮らす事になったのである。澪と言い争う中で柚希が口にしたのだが、別に売り言葉に買い言葉という訳ではないらしい。

何でも迅が柚希の件について長老達と交渉した際に、刃更達と同居する事も提案していたらしく、既に素性を知られている以上、監視するなら同居した方が都合が良いという事で長老達も納得したらしい。東城家には空き部屋があるため、物理的なスペースは特に問題はない。あるとすれば、先程のような澪と柚希のケンカが起きた場合の事を思うと失われてゆく刃更の心のゆとりなんかだろう。いや、そっちの方が切実なのだが。

「まあ俺の方は、そんな感じなんだけど……お前の方は大丈夫なのか？　確か、新しい監視役とは別に、厄介な奴が来てるって話だったけど」

「ん？　まあ取り敢えずは、だけどな……」

と肩を竦めながら滝川。

「確認したい事は一通りできたし。興味深いものも見られたから、一旦報告に戻るとさ」

「興味深いものって――俺達の戦闘の事か？」

決戦の当日、滝川は電話で言っていた。刃更達との戦いを見せて貰うと。そして、もし澪が危機に陥るような事があれば自分達が戦闘に介入し、必要ならば柚希達を殺すと。

刃更の問い掛けに、滝川は「ああ」と頷いて、

「戦いの途中で、成瀬澪が例の霊槍の全力の一撃を食らいそうになっただろ。まあ結局、ビルの上半分が吹っ飛ばされながらも、成瀬は無事だった訳だが」

「ひょっとして……お前達が助けてくれてたのか？」

「いいや。成瀬が助かったのは成瀬自身の力だ」

「澪が？　でも、アイツにそんな真似が――」

そこまで言って、刃更はハッとなった。

あるのだ――一つだけ、『白虎』の全力の一撃を澪に防げる方法が。すると、

「――そう。バサっち達は勿論、成瀬本人も気付かなかったみたいだけどな……あの時、一瞬だけだが成瀬はウィルベルトから受け継いだ力を発動させていたのさ」

と、真実を語る口調で滝川。

「実はあの時、俺と一緒に戦闘を見ていた奴も、成瀬を守るために彼女の前面に障壁を展開したんだ。バサっち達が張った結界はかなりのレベルだったが、そいつの力ならどうとでもできる。だが成瀬の作り出した重力子フィールドの断層障壁は、そいつが張った障壁もろともあの霊槍の一撃を弾いてみせた。だから驚くよりも冷静に分析してたよ。少しずつだが、成瀬は確実にウィルベルトの力に目覚めつつあるようだってな」

「それが、そいつの言う興味深いものって訳か……」

呻くように言った刃更に、滝川は「いいや」と首を横に振った。

「成瀬の覚醒は、そいつには想定の範囲内のものだ。興味を惹かれてたのは別の事だよ」

そこまで言うと、声のトーンを落として、

「バサっち――お前、あの戦闘で一度だけだが例の消去技を使っただろ。その瞬間を、そいつは見ていたんだ。一度発動した魔法はおろか、確立されていた精霊とのチャンネルまでバサっちが消し飛ばす所をな。今頃そいつは、魔界で自分の主に成瀬とバサっちの事を報告しているだろうよ」

「……そうか」

滝川からは見られていると忠告を受けていた――それなのに、とっさに感情的になって《無次元の執行（バニシングシフト）》を繰り出し、みすみす現魔王派の魔族に警戒されてしまうとは。

己の犯した失態を悟り、唇を噛んでいた刃更はふと、

「？　ちょっと待ってくれ滝川……そいつが今、誰に報告をしているって？」

滝川の言葉の中に、気持ちの悪い違和感を覚えた。澪が受け継いだウィルベルトの強大な力を狙っていたのは、現魔王派のトップ――ウィルベルトの後釜に座った新たな魔王の筈だ。それなのに今、滝川はあえて『自分の主』と限定して言った。

その言葉が意味するものは一体何か――嫌な予感が膨れ上がり、

「教えてくれ滝川……お前と一緒に俺達を見ていた、厄介な奴って誰なんだ？」

問い掛けを放った刃更に対し、

「名前はゼスト……成瀬の養父母を殺したあのゾルギアの腹心だよ」

そう言うと、滝川八尋は決して避ける事のできない未来を口にした。静かな声で、

「気を付けろ――恐らくゾルギアは諦めていない。成瀬を奪いにやって来るぞ」

だが、そこに気まずさはない。あるのはただ、互いを想って生まれる静寂で。

やがて、シャワーのお湯で刃更の頭を綺麗に洗い流してくれた後、

「……刃更」

ふと。背後の柚希がこちらへと呼び掛けてくる。それはとても静かな声で、

「刃更も迅さんも、もう《里》には戻ってこないの……？」

投げられた問いに、刃更は沈黙を返した。それこそが、刃更が魔王の血を引く澪や、サキュバスの万理亜を受け入れられた理由だった。

――柚希が口にした《里》というのは、単に故郷の田舎を指している訳ではない。

先ほど柚希は、サキュバスがこの家に入れてくれたと言った。

それは万理亜のような魔族の存在を受け入れている者の発言。この世界を魔族から守るため、太古より戦い続けてきた《勇者の一族》――それが野中柚希の正体であり。

そして東城刃更もまた、かつては同じ使命の下に戦っていた。

そう――五年前、《里》をあの凄惨な悲劇が襲うまでは。

封印していたS級クラスの邪精霊に操られた、里の青年による一族の大量虐殺。

その際、眼の前で多くの仲間を殺され、友人らにまで凶刃が迫った事で、刃更は己の力を暴走させてしまった。《無次元の執行》という、本来は敵の攻撃だけを消去する筈の

その技は、邪精霊に操られた青年も、彼に殺された一族の仲間の遺体も、全てをゼロ次元へと消し去ってしまって。事件後、《里》は刃更を牢へ幽閉すると決定したものの、刃更の父親である迅がこれに反発。結果、刃更と迅は勇者の一族としての資格を剝奪され、里を離れる事になった。要は追放されたのだ。だから、

「……難しいと思う、《里》に戻るのは」

無論、《里》に対する郷愁はある。だが五年前の悲劇によって刻まれた爪痕は、今もまだ消える事なく残っているのだ。里にも、一族の仲間にも、そして――刃更自身にも。

現に五年が経った今でも、刃更はあの日の悪夢に苛まれ続けているのだから。

――それに。何よりも、東城刃更は既に己の新たな道を決めていた。

望まぬ形で先代魔王の力を受け継いでしまい、その力を現魔王とその配下達から狙われ続けている少女を――成瀬澪を自分が守ると。魔王も魔族といった澪達の立場も、勇者の一族だった己の過去も関係ない。家族として、兄として、二人を守ると。そう誓ったのだ。

だがそれは、勇者の一族の理念とは決して相容れる事はない。先日の戦闘で、柚希が力を貸してくれたのは例外中の例外だ。その事を互いに理解しているからこそ、

「でも刃更――」

柚希が、どこか縋るような口調で何かを言おうとした時だった。

あとがき

既に本編をお読みの方も、これから読まれようとしている方も、本書を手に取っていただきましてありがとうございます。上栖綴人です。

まずは、皆さんにご報告を！　関係各所の多大なご尽力とご協力、そして何よりも読者である皆さんの応援もあり、お陰様で早くもこの作品のコミカライズが『月刊少年エース』さんで始まる事が決定しちゃいました！　コミック版を描かれるのは、みやこかしわ先生です。今年の初夏頃には連載開始予定だそうなので、皆さん是非お楽しみに！

さて、小説は作者が書いた原稿がそのまま本にはなりません。担当さんや校閲さんのチェックを受け、より良い形に修正して出版されるのです。そして一巻も二巻も、初稿段階で私が担当さんに指摘されたのは「ページ数が多い」と「メインのサービスシーンをもっとエロく」の二つでした。前者はともかく後者はもう「お前のエロは温いぜっ！」と言われたも同然です。なので何とか満足して貰おうと頑張った結果、一巻の最終稿を読んだ関係者からは以下の感想が。

「面白かったです。でもスニーカー文庫で出して大丈夫か心配になりました（笑）」

「あんなエロい作品を書かれるのに、意外と真面目な方なんですね（笑）」

「凄い過激でした。原稿を入稿しながら、途中でふと『私は何をしてるんだろう？』って思ったくらい（笑）」

「余りにエロくなってて笑っちゃいました（笑）」「ああ、あれはエロかった（笑）」

何ですかね、この試合に勝って勝負に負けたみたいなの（笑）。ちなみに二巻のメインサービスシーン、初稿から攻めたつもりだったのですが、前述の通り担当さんから修正依頼が入ったので、過激度を「濃厚」と「超濃厚」の2バージョン送ったところ、当初は「濃厚」で行く予定だったものが、最終的に「超濃厚」で行く事になったそうな。そして、結果はご覧の通りです。本作は、私も担当さんもアクセル全開でお送りしております。

では、本書の関係者の皆様に謝辞を！。イラスト担当のニトロプラス大熊さん、今回も超絶イラストの数々をありがとうございます！　今回の新キャラのデザイン、どれも本当に素敵なのですが、中でもゼストが最高でした！　そして担当さんを始めとする関係各所の皆さん、今回もありがとうございました。今後ともよろしくお願いします。

そして何よりも読者の皆さん。今回も刃更達にお付き合いいただき、ありがとうございます。それでは、次巻でまたお会いしましょう。

上栖綴人

お前達に教えてやろう
決して抗えない
絶望と快楽を――

ソンキアが動き出した。警戒を強める刃更達。しかし、そんな刃更達を

新妹魔王の契約者 テスタメント

The Testament of Sister New Devil

III

刃更達がいる浴室の外――脱衣所と廊下を隔てるドアが、ノックの後に開けられて、
『もしかして刃更……まだ入ってるの？　朝ごはん、とっくにできてるんだけど』
脱衣所からした澪の声に、刃更はギョッとなって硬直した。
いつまでもシャワーから上がらない刃更を呼びに来てくれたのだろう。つい先刻あんな事があったばかりだというのに――基本的に澪は面倒見が良いのだ。一緒に暮らすためこの新居へ引っ越してきた時も、刃更が案内役を頼むと何だかんだ文句を言いながらも街の散策に付き合ってくれたし。今は亡き――澪をこの人間界で育てた養父母の教育が良かったのだろう。澪の本当の父親である先代の魔王ウィルベルトの配下だったそうだが、余程できた性格の持ち主だったに違いない。
――だが、今はそうした澪の背景に想いを馳せている場合ではなかった。
何せ今の刃更は、浴室の中で裸の柚希と一緒なのだ。
「わ、悪いっ……もう出るよ。うん、もうちょっとで出られそうだ……」
慌てて返事をしながら、刃更は床に落ちているバスタオルを柚希に渡した。視線で「頼むから巻いてくれ！」と訴えると、柚希は仕方なさそうな顔でバスタオルを巻き始め、
『……ねえ刃更。もしかして、先刻の事怒ってる？』
そこへ少し不安そうな声音で、澪の問い掛けが来た。電撃はやりすぎたと思ったのか、

『で、でも刃更だって悪いんだからね……だってあたしお風呂上がりだったのに、いきなり脱衣所に入ってきて抱き寄せるんだもん。刃更が乱暴にするからバスタオル解けちゃうし、挙句にどさくさであんな事まで……あたし、本当に恥ずかしかったんだから』
「わ、悪いっ……でもあれは……！」
刃更は心の中で悲鳴を上げた。確かに澪が口にした内容は事実だ。事実だが、その抜粋の仕方だと事情を知らない者には多分に誤解を与えてしまう。案の定、
「――――」
柚希はスッと眼を細めると、何故か浴室の曇りガラスの窓を開けた。そして、
「（お、おい何してんだ……柚希？）」
小声で問う刃更の眼の前で、あろう事か柚希は自分のバスタオルを解くと、窓の隙間から外に向かって投げ捨てた。ぎゃー、と驚愕の余り刃更はムンクの叫び状態になり、
『？　どうかした刃更？』「い、いや何でも。何でもないぞっ」
どうにか必死に取り繕おうとするものの、窓を閉めた柚希は刃更へと歩み寄ってきた。
澪がいるため下手に逃げられないこちらに、正面からそっと身体をくっつかせて、
「刃更……どさくさで何したの？」
「（い、いや、ちょっとした事故が……本当だって！）」

見上げる視線で問い詰めてくる柚希に、刃更が落ち着くように告げると、浴室の外で、
『まあ……何でもないなら良いんだけど』
と澪は言って、
『でも刃更――どうして脱衣所に、あたしのものじゃない学校指定の女子の制服と下着があるの？　しかもご丁寧に畳んで』
すまんそれは俺のだ、実は俺は女装趣味があったんだ、あははは――無理だよ畜生！
言い訳不能。刃更が観念したのと、浴室の扉が無慈悲に開けられたのは同時だった。
『……』
気まずさ大爆発。そんな三者三様の沈黙の後、最初に口を開いたのは澪だった。
「……上は洪水、下は大火事なのは？」
「お、お風呂、ですかね……？」
答えと同じ場所で裸の柚希に抱きつかれながら、「はは」と答えた刃更に、
「――お風呂で・す・が。では、上は大火事、下も大火事、全て大火事なのは？」
と、引っ掛け問題よろしく、剣呑な瞳で澪。

「い、いや～……何だろうな。炎上したSNSとか、かな？」
「ううん、違うわ――それはね、これから火達磨になるアンタよっ！」
抑えていた感情が爆発した。湧き上がる怒りのままに魔法を発動しようとして――その瞬間、澪は突然「あ」と身体をピクンと反応させた。そして、
「やっ……嘘、こんな時まで……？　――ふあぁんっ」
途端に声を甘いものにしながら、澪はぺたんと床にへたり込んでしまう。
「お、おい――大丈夫か？」
慌てて駆け寄ると、澪の首には首輪のような痣がぼんやりと浮かんでいて、
「うわ……主従契約の呪いか」「……どうしたの？」
澪の変貌にキョトンとした柚希に、刃更は自分のために用意しておいたバスタオルを渡してあげながら、床にへたり込んで甘い色香を放っている澪を見た。
……ここのところは、しばらく発動してなかったもんな。
実は現在――刃更と澪は魔法による『主従契約』を結んでいる。
契約を結んだ者同士が互いの位置を把握できるようになるため、澪が危険に巻き込まれた時に刃更が彼女の位置を把握できるようにと、万理亜から提案されたからだ。ところが本来は澪が主になる筈が、何故か契約が逆転して発動。刃更が澪の主になってしまった。

しかもこの主従契約。主と配下の関係を確固たるものとする目的もあり、配下側が主となった者に対して裏切りなど後ろめたい感情を抱くと、途端に呪いが発動してしまう。

刃更達が結んだ契約魔法は、万理亜の力を借りて唱えたため、発動する呪いもサキュバスである万理亜の特性に則したものになっていた。

――夢魔であり淫魔でもあるサキュバス。その特性は『催淫』だ。

刃更が風呂上がりの澪のいる脱衣所へ入ってしまった時は、刃更の謝罪を受けてから電撃魔法を唱えたので問題はなかった。だが今回、澪は先程の件を少しやりすぎたかもと心配していた。それで刃更を攻撃しようとした際に、とっさに心のどこかで後ろめたさを覚えてしまったのだろう。それが呪いの発動のスイッチになってしまったのかもしれない。

「や、あっ……はぁん、ふぅっ……んぅ……っ」

必死に声を押し殺そうと唇を噛み、しかし全身を襲う快楽の奔流に耐えられなくて。

床の上の澪が切なげに躰をよじらせていると、脱衣所の扉が勢いよく開き、

「失礼します！　澪さまが快楽でヘロヘロになっているのはここですかっ？」

一体どうやって気付いたのか、万理亜がズンズンと中へ入ってきた。

そして床の澪や、裸の刃更や柚希を見つけると「おおっ」と眼をキラキラさせて、

「こんな事もあろうかと、買っておいたのですよ世界最小・最軽量！　ずっと色褪せない思い出、青春メモリアルをいつまでも貴方と共に！」

どこからか取り出した小型のビデオカメラを神速で構え、澪の撮影を開始した万理亜に、

「……」

刃更は無言でその首根っこを摑むと、浴室の中へ放り込んで扉を閉め、外からモップと洗濯機で容赦なく閉じ込めた。途端にドンドンと向こう側から扉が叩かれ、

『何するんですか刃更さん！　Tシャツの件をまだ怒ってるんですか？　澪さまの入浴中の札を隠した事なら謝ります！　私はいいですからカメラだけでも……カメラだけでもお願いします！　サキュバスの誇りと魂に賭けて、今の澪さまだけは撮らなくてはっ！』

「やかましいっ！　自重しろ、ロリエロサキュバス！」

全ての元凶の隔離に成功した刃更は、澪の隣に腰を落として彼女をスッと抱き上げた。

「――大丈夫か、澪？」

「刃更が悪いのに……っ、んうっ、お、お兄ちゃんの馬鹿ぁ……百回殺してやるぅ」

快楽を持て余した澪が、悔しそうにしながらも、刃更の首に両手を回してキュッと抱きついてくる。刃更を「お兄ちゃん」と呼ぶのは、主従契約の呪いが発動してしまった時の澪に出る、無意識の癖だった。だが恐らく、発動した主従契約の呪いの効果はそれほど強くない。横になって休んでいれば、程なくして呪いは治まる筈だ。それでも負けん気の強

い澪の事だ。今のような自分の姿を柚希に見られたくないのだろう。時間をかけずに呪いを解くには、刃更が主として配下を――澪を屈服させ、忠誠心を強めるしかない。

そして、ここまで快楽に溺れた状態な以上、やれる事は必然的に限られる。だから、

「解った……じゃあ、お前の部屋に行こうな」

朝からリビングのソファでというのは、流石に恥ずかしいだろう。

「悪い柚希……ちょっとコイツ具合が悪いみたいだから、介抱してやってくる。すぐ戻るから、服を着たらリビングで待っててくれ」

「……解った」

澪の様子がおかしい事は理解してくれたのか、少し不服そうにしながらも柚希は頷いてくれた。だから、刃更は澪を抱きかかえると脱衣所を出た。

廊下を歩き、二階へと続く階段を上りながらつくづく思う。

自分は澪の日常を守りたいと思っているが、この状況を含めるのは流石に違う気がする。とてもじゃないが、このままでは刃更の理性も我慢も、心も身体も保ちそうにない。

いつか絶対に間違いを起こす。そんな最悪の形で澪を――妹を傷付ける訳にはいかない。

だから、東城刃更は静かに呟いた。互いの位置を把握できるメリットは捨てがたいが、

「契約を無効化できる次の満月の晩には、この主従契約は破棄だな――身が保たない」

第1章 ヤキニクと青春番外地

1

圧巻という言葉が相応しい光景があった。

見る者の食欲をそそる、赤と白のコントラスト。木製のテーブルの上を所狭しと埋め尽くす鮮やかな彩り。それは、様々な部位を最も美味しい形でカットされた牛肉達だ。

焼肉。青少年にとっての永遠の絶対正義を提供する店で、東城刃更はクラスメイトの滝川八尋と向かい合うようにしてテーブル席に座っていた。

「な、何だこの縦置きできそうな牛タン……厚みが一cmくれーあるぞ、バサっち」

「ああ、早く焼いて食おう……肉はまだ他にも沢山あるからな」

「お、おお……じゃあ焼くぞ？」

意を決し、滝川が牛タンを七輪という名のフィールドへと投入する。
途端にジュウゥゥという音と共に、肉が焼ける美味そうな匂いが立ち込めて、
「そ、それじゃあお先に行かせて貰うぜ」
ゴクリと喉を鳴らすと、滝川は緊張の面持ちで牛タンを口へと運んだ——次の瞬間、
「う、う、美味いぃぃっ、何だこれっ!? こんなのもう牛肉ってレベルじゃねえーっ!」
くわっと眼を見開いて叫んだ。刃更は思わず苦笑して、
「いや、立派な牛肉だけどな」
「何やってんだ、バサっちも食えよ！　ヤバイ……この肉はマジでヤバすぎるぜ」
「ああ勿論。でもお前もどんどん食えよ滝川。焼きすぎると折角の肉が焦げちまうし」
次々と肉を七輪に載せ始める滝川に、刃更がそう告げると、
「させねえよ、こいつらを焦げさせたりなんか。全部美味しく食いまくってやるっ！」
そうして喜びと興奮は最高潮を迎え、箸を動かす手と肉を食べる口は止まる事なく。
刃更と滝川の夕食が、本格的に始まった。
「——でも、良いのかよバサっち？　こんな高そうな店で奢って貰って」
肉を食べる手は止めないまま滝川に問い掛けられ、刃更は「ああ」と頷いた。
刃更が滝川を連れて来たのは、『赤木』という名の焼肉屋なのだが、

「言っただろ。この店は、学生限定の食べ放題があるんだ……それも学割価格のな」
「でも俺の分と合わせると五千円だぜ。結構な出費だろ」
確かに一人前二千五百円という金額は、高校生が単なる雑用のお礼に奢る金額として考えると高い。だが刃更が滝川をこの店に連れて来たのには、別の理由があるのだ。
——魔族は現在、大きく分けて二つの勢力に分かれている。人間界への侵攻を再開しようとしているタカ派の「現魔王派」と、人間と争う事を可能な限り避けようとした先代魔王ウィルベルトの遺志を継ぐ「穏健派」だ。とはいえ、ウィルベルトの死後、かつて最大勢力だった穏健派は勢力としての力を急速に失いつつある。そして澪は、意図せず父親から魔王の力を受け継いでしまった事で、現魔王派からその力を狙われていた。
そして——この滝川八尋の正体は、そんな現魔王派が派遣した澪の監視役なのだ。
そんな滝川と、成り行きからではあったが刃更は戦った。それもつい先日の事だ。
そして現在、刃更は滝川と密かに協力関係を結んでいる。滝川が任務に失敗したという情報を現魔王派に流さない事と、
……それに。
恐らくは滝川が、万理亜のような澪を守ろうとする勢力——穏健派が、澪を狙う現魔王派へ極秘裏に送り込んだスパイであろう事を黙認するという交換条件で。

新妹魔王の契約者（テスタメント）Ⅱ

上栖綴人

角川スニーカー文庫
17796

結んだのは対等の関係。それでも滝川は、刃更に重要な情報を教えてくれた。

それは成瀬澪が、彼女を狙う魔族と戦う動機。澪の養父母を殺した犯人の正体だ。

だが、刃更はまだ澪にその真実を伝えてはいない。澪の戦いは、殺された養父母の復讐に端を発している。下手に教えて感情を暴走させてはまずいし、まだ色々と状況が見えていない事もある。よって今はまだ、この情報は刃更だけが知っておけば良いだろう。

そんな訳で刃更は滝川に大きな借りを作っていた。当然、焼肉を奢った程度でその借りを返せるなどとは思っていないが、

「勘定の心配はいらない。毎月の小遣いから何割かは貯金できてた分があるからな」

「なら良いけどよ。でもバサっちの親父さんは今、家を空けてるだろ？　ある程度の生活費とか預かってるんじゃないのか？　ここの払いも、言わば必要経費みたいなもんだし」

「流石によく知ってるな……でも、お前との飯代に親父の金は使えないよ」

現在、家を空けている迅からクレジットカードを預かってはいる。だが、滝川との協力関係は刃更の独断によるものだ。この件に迅のカードは使えない。

「ふーん、成る程ね……」

網の上の肉を一通り食べ終えた滝川は、こちらの意図を見透かしたかのように言って、

「てっきり焼肉を奢る見返りとして、また何か訊いて来るとばかり思ってたんだけどな」

「メシを奢ったくらいで、有用な情報や協力を要求できるなんて思う程、俺は楽観的じゃない。今日のこれは、あくまで『これからよろしく』っていう、それだけの話さ」

だから、

「坂崎先生から頼まれた雑用を代わってくれたお礼はまた改めてするし、ゾルギアの――澪の養父母を殺した敵の情報の借りは、俺にできる事でこれから返していくよ」

「やれやれ、バサっちは真面目だね～。俺が聞いた事のあるジン・トージョーに関する話なんて、どれも破天荒なものばかりなんだがな――本当に親子なのかよ？」

かつて迅は、一族の《里》では最強の勇者の名をほしいままにしていた英雄だった。刃更が聞いた話でも、大戦中の迅の武勇伝はどれも信じられないものばかりだ。昔の迅を知る大人達から《里》にいた頃に聞いた話では、今のあれでかなり丸くなっているらしいが、

「……やっぱ魔界でも、親父って有名なのか？」

「そりゃもう。大戦じゃ、こっちの高位魔族が結構な数やられてるからな。ジン・トージョーつったら、俺達魔族の間でも最強の敵――それこそ戦神扱いだよ。先代魔王のウィルベルトが軍を引くって決定した時に、まだ戦おうとしていた連中が渋々でも従った理由は二つ。穏健派でありながら、当時の魔族の中で最強だったウィルベルトの影響力と、ジン・トージョーの化け物みたいな戦闘力を恐れての事だったらしいぜ」

魔族である滝川から改めてこうして聞かされる程だ。やはり迅は偉大な存在だったのだろう。息子として父親を褒められて悪い気はしないし、誇らしかった。

そして――一旦話に区切りがつくと、刃更達はしばし美味い焼肉に舌鼓を打った。

カニよりも無言で食べ続け、最初に注文していた分の最後の皿に手を付けようとして、

「っと、そうだった。そういや、バサっちに伝えておいた方が良い情報があったんだ」

「情報？　……良いのか？」

「ま、どうやらバサっちは協力相手としては信用できるみたいだしな。それに、一度手を結んだ以上、バサっちには上手く切り抜けて貰わないと俺としても色々とマズいし」

と滝川はやれやれと苦笑してから、ふっと瞳だけを真剣なものにして、

「――こないだの公園の一件で、成瀬澪が力を暴走させただろう。あれだけの規模だ。後でこっそり魔法で修復しておいたが、現魔王派は勿論、穏健派にも情報は回っちまってる。穏健派がどう動くかはまだ解らないが――少なくとも現魔王派は、成瀬澪がウィルベルトから受け継いだ力に目覚めた可能性があると判断し、新しい監視役の派遣を決定した」

その言葉に、刃更はギョッとなる。

「新しい監視役って……まさか滝川、お前は入れ違いで魔界に帰るのか？」

滝川に頼りきりになるつもりはなかったが、今の刃更達は現魔王派と比べて圧倒的に戦

力が不足している。よってある程度状況が読めるまでは、滝川の力を借りたいと思っていたし、アテにもしていた。それをここで魔界に戻られては――、

「――いいや。俺の監視任務は継続される。要は状況が動いた事で、念のため応援を寄越したって感じだ。何せ上は、成瀬澪が受け継いだ力をとにかく欲しがっているからな」

「そういう事か……お前が行っちまうかと思って焦ったよ」

「だからって油断するなよ。監視の眼が増えれば、俺も協力しにくくなるのは間違いないし。たとえ応援だからといって、俺より弱い奴が来るとは限らないんだからな。それに今、バサっちと成瀬澪は主従契約を結んだばかりだろ？」

「？　どういう事だ？」

何か主従契約に気を付けなければいけない事でもあるのだろうか。

「あの魔法は歴史が古いんだ……昔から結構使われてきて、何度も改良が重ねられてきている。最初は単に互いの居場所が解ったり、裏切ると呪いが発動するだけだったが、今では忠誠や信頼を強めれば、それに伴い主も配下も自分の力を増幅させる事ができるんだよ。主は配下のために、配下は主のために戦闘力が上がってゆくんだ。だから高位魔族ほど、自分の力を大きくするために主従契約魔法で配下を多く持とうとする」

「そうなのか……？」

そこまでの説明は、万理亜から受けてはいない。恐らく万理亜は、澪に何かあった時に彼女の居場所を特定できるようにするための対策用として割り切っていたのだろう。

「――その一方で、もし敵の手に落ちた場合は、情報漏洩を防ぐための役割も担っている。敵に捕らえられて主の足手纏いになる――それは主に対する最大の裏切りだからな」

と滝川。

「どんな特性でも、最大限の力で発動した呪いを受ければ大抵は生きてはいられない」

「……らしいな」

刃更と澪が結んだ主従契約で発動する呪いの特性は、契約魔法を唱える際に魔力を貸してくれた万理亜のもの――サキュバスの『催淫』だ。だが、それも最大限で発動すれば、余りの快楽に脳の神経が焼き切れると言っていた。冗談半分ではあったが、あれは真実なのだろう。捕虜の情報漏洩の防止の効果もあるとは、よくできている契約魔法だった。

「だから気を付けた方が良い。確かお前らは、先代魔王の力を受け継いだ成瀬澪の特性だと危険だって事で、サキュバスの特性で契約してたよな？」

「ああ……まあ、そうだけど」

「余り楽しい話じゃないんだが――長く生きてる高位魔族の中には、自分で主従契約魔法を唱えず、わざとサキュバスの特性で契約を結んでいる奴がいるんだよ。長い時を生きて

いると、どうしても娯楽が欲しくなるからな」

「娯楽って……？」

「性愛玩用さ。女をクスリ漬けにするのと同じで、『催淫』の快楽で縛っちまうんだ」

「……成る程。確かに最悪な話だな」

「いや、その程度ならまだマシなんだよ。本当に最悪な連中になると、同じ趣味の奴と自分達の下僕を入れ替えて、わざと呪いを発動させて遊んだりしている奴もいる」

「遊ぶ……って、まさか何の意味もなく自分の配下を殺してるっていうのか？」

「いや、そうじゃねえよ……まあ真面目なバサっちには解らない世界の話なんだろうな」

と滝川は苦笑して、

「身も心も捧げた自分の主以外の相手に何かをされれば、それも立派な主に対する裏切りだ。自分の貞操を守れなかったんだからな――すると、どうなると思う？」

あ、と気づいたとばかりに表情を変えた刃更に、滝川は頷いた。

「そうだ。自分の主以外の奴にされる――その背徳感で呪いが発動しちまうのさ。運が良ければ呪いが強すぎて死ぬ事ができるが、悪けりゃ余りの快楽に正気を失って背徳感すら感じられなくなっちまう。だが壊れたオモチャには用はないからな。結局は処分されて、新しいオモチャが用意される――後はその繰り返しさ」

そして、

「ちなみに、その腐った遊びの発案者な――成瀬澪の養父母を殺したゾルギアだぜ」

刃更はギョッとなって息を呑む。

「じゃ、じゃあ……監視役がお前に交代したのって、まさか」

「そういう事だ。ゾルギアがおかしな真似をして、もし成瀬が死ぬような事があれば、彼女の中にあるウィルベルトの力まで消えちまう可能性がある。養父母役だった穏健派の魔族を殺したついでに、ゾルギアが成瀬に手を出す危険性があると上は判断したのさ」

余りの話に刃更は言葉もない。

「だから気を付けろ。ゾルギアなら、成瀬に主従契約が掛かっている事は簡単に見破れる。もし成瀬がゾルギアの手に落ちるような事があれば、相手は憎い憎い養父母の仇だ。何かされたら恐らくもう正気には戻れないぜ。まあ成瀬の性格なら、何かされるくらいなら自分で舌を噛みそうだが――バサっちとしては、そういう事態は避けたいところだろう」

「当然だろ……っ！」

そんな真似だけは断じてさせてたまるものか。俯き、ギリっと歯を食い縛る刃更に、

「まあ、上はもうゾルギアを成瀬に近付ける事はないだろうし、彼女に主従契約魔法が掛かってると解ったら、呪いで死なせてウィルベルトの力が消えたりしないように、おかしな真似をする連中はいないと思うけどな」

確かにそのメリットは大きい。非常に大きいが、

「……でも、敵がウィルベルトの力を狙っている奴だけとは限らないだろ」

魔族の中には、澪を守ろうとしている穏健派以外にも現魔王派に反発する勢力はあるだろう。そういう連中からしてみれば、澪を殺した方が現魔王派にダメージを与えられる。敵の敵が、こちらの味方とは限らないのだ。

改めて澪を守る事の難しさに刃更が苦い表情でいると、滝川がふと静かな声で、

「――まあ、全く対策ができない訳でもないけどな」「本当かっ？」

バッと顔を上げた刃更に、

「主従契約魔法を解く方法は二つある。一つは主と配下両者同意の上、同じ魔法で解約する無効化。そして、もう一つが契約の『誓約化』だ」

と滝川。

「主従契約の象徴として、首に浮き出る首輪みたいな痣があるだろ。あれの色は忠誠度に従ってその色が変わるんだ。忠誠度合いが低い状態だと青だが、強まるにつれて青紫になり、赤紫になり、最後には真紅になる」

そして、

「そこからさらに上――忠誠が完全にMAXまで高まると、痣が消えて呪いが発動する事がなくなる。何せそこまで忠誠が高まれば、配下は絶対に主を裏切る事なんてなくなるからな。これは主従の『契約』が『誓約』にまで昇華される事で起こる現象らしい。そこまでの主従関係に到達できた例は過去にも数例しかないけどな。だが、その状態の主と配下には誰も勝つ事ができなかったって話だ」

「つまり俺と澪も忠誠を誓約のレベルまで高めて、その前例みたいに強くなれっていうのか……俺と澪は、まだ出逢って少ししか経ってないんだぞ」

そんなのは、それこそ長い寿命の魔族だからできる事だろ。

「まあな。だが、たとえ誓約化までは無理でも、お前と成瀬の信頼関係や忠誠度を高めておくに越した事はないと思うぜ。何せ主従契約魔法は、互いの想いを力に変えられるんだからな……つっても、やる前から諦めるような奴には絶対に無理だろうけど」

チクリと皮肉を言われ、思わず黙り込んだ刃更に、「まあ」と滝川は言って、

「一人で結論が出せる話じゃない。どうするかは成瀬とも相談して決めるんだな」

「……ああ。そうするよ」

対する刃更は、低い声でそれだけを言った。

――澪を信頼できない訳ではない。刃更が、自分自身に対して自信が持てないのだ。

自分は決して、澪にそこまで信頼して貰えるような人間ではない。

東城刃更が、東城刃更を信じられないのだ。

かつて罪を犯した自分を、多くの仲間を消し去ってしまった自分の事を。

そんな自分を信じろなどと――口が裂けても言えなかった。

自分達が置かれている厳しい状況を再認識した刃更が黙り込んでいると、

「折角の肉なんだ。暗い話はここまでにしておこうぜ……そもそも、下手に考えすぎても仕方がないからな、最悪の事態なんてものは」

「……ああ」

「つーか、これ食べ放題なんだろ？　だったら、どんどん追加を頼まないと損だろ」

話題を変える滝川の言葉からは、彼なりの優しさが感じられ、

「そうだな……よし食うか！」

刃更は一旦気を取り直し、「すいませーん」と店員を呼んだ。滝川とメニューを見ながら、カルビだロースだ、いやホルモンを攻めるかなどと相談しつつ追加をオーダー。

そして店員の背中を見送り、ソフトドリンクのコーラで喉を潤した時だった。

「――何だ。先刻からどうも聞き覚えのある声だと思っていたが、やはりお前達か」
ふと横からした色っぽい女性の声に、刃更達がそちらを見ると、
「長谷川先生……」
そこに居たのは、刃更や滝川が通う聖ヶ坂学園の養護教諭――長谷川千里だった。
口調こそ男っぽいが、綺麗に整った顔にグラマラスすぎる胸――それは最早、年頃の高校生男子には教育上よろしくない美しさと色気を長谷川は持っていて、
「東城、それに滝川……お前達二人だけか？」
「え？　ええ、まあそうですが」
「なら丁度良い。すまないが、良かったら相席させてくれないか？　実は友人と待ち合わせていたのだが、たった今用事が入ってしまったと連絡があってな」
と長谷川。
「折角来たんだし一人でも食事をして行こうと思ったのだが、先程から他のテーブルの男性客が入れ替わりで『自分達と一緒に食べないか』と声を掛けてきてな。女の一人焼肉というのは、そんなに寂しそうに見えるものなのか？」
「いや、それは多分……」「ああ、違うと思うぜセンセー」
刃更と滝川が目を見合わせてから告げると、

「とにかく、余りにもしつこいからもう食事は諦めて帰ろうと思っていたんだが、この店は前から食べてみたかった所なんだ。生徒のお前らからしてみれば、教師と一緒に食事というのは嫌かもしれないが、もし相席をさせてくれるならばありがたい」

「はあ……そういう事なら、俺は構わないですけど」

とはいえ、もし滝川が嫌なら申し訳ないが断らせて貰うしかない。今日のこの席は、刃更と滝川が協力関係を結んだ一環なのだ。刃更が「どうする？」と滝川に視線で問うと、

「いやいや、そんなの俺もＯＫに決まってるだろ。ウチの学校で生徒・教師を問わず、長谷川センセーと飯を食いたい野郎が何人いると思ってんだ」

「……だそうです」

「そうか。ではすまないが相席させて貰おう」

「よっしゃ先生、そうと決まれば俺の横が空いてるぜ？」

滝川がニヤッと笑って隣の席に長谷川を誘うが、当の長谷川は「それじゃあ」と、あっさり刃更の隣に腰を下ろした。

「あ、でも俺達は学生限定の食べ放題だから、同じテーブルは厳しいんじゃ――」

「心配はいらない。店側に落ち度はないが、それでもこちらは店内で迷惑を被っているんだ。少しくらいの融通なら利かせてくれるだろう」

その言葉の通り、長谷川が席に着くとすぐに店員がお冷とおしぼりを持ってきて、「すみません」と頭を下げてきた。どうやら店側としても、他の客を抑えられずに申し訳ないと思っていたらしい。そんな店員に、長谷川は飲み物と肉などを何点か注文し、

「しかし、この店に学生用の食べ放題メニューがあったとは知らなかったな。ひょっとしてウチの生徒は、よくこの店に食べに来ているのか？」

「どうですかね。学校からは駅を挟んで結構な距離がありますから。味を考えれば食べ放題の金額は安いくらいですけど、それでも高校生が気軽に来るには少し高いので」

「だな。俺も今日、バサっちに連れて来て貰うまでは知らなかった」

「では東城は、前からこの店を知っていた訳か。以前からよく来ていたのか？」

「いえ、俺も今日で二度目です。この近くに引っ越してきたのは、夏休みの途中からですし……でも以前、この店には親父と一緒に来た事がありまして」

と刃更。

「ウチの親父、プロのカメラマンをしているんですけど、この店のオーナーさんが親父のファンらしいんです。で、一度親父に写真を頼んだ事があって。店の入口にでかい風景写真が飾られているんですが――あれ、親父が撮ったものなんですよ」

そして写真の代金とは別に、この店に招待して食事をご馳走してくれたのである。

「ほう……こんな店にも『JIN』のファンが居たとはな」
「親父を知っているんですか？」
「意外か？　熱狂的なファンとまではいかないが、私も彼の撮る写真は好きだよ。雑誌か何かで評論家も言っていたが、彼の写真には他の人間には決して撮れない一瞬が――被写体が本来の魅力を放つ刹那が写し出される。確かにあれは芸術と言って良い。私のような素人が見ても、惹き付けられるんだからな」
「どうも……そう言って貰えると。今度親父に伝えておきます」
と刃更が気恥ずかしそうに頭を下げたところで、注文していた肉と飲み物がやってきた。
刃更と滝川の追加分に、長谷川が注文したものがまとめてやって来たため、テーブルの上が一気に皿でいっぱいになって、
「さて、それではいただくとするか」「よっしゃ、こっちもこれからが本番だぜ」
二人の言葉と共に、さっそく様々な肉が網の上で踊り、美味そうな音を立て始める。
――そんな中、刃更は先ほど長谷川が口にした言葉を思い出していた。
刃更を守るために勇者である事を捨て、共に里を出て。生きてゆくために、迅が新たに選んだ道がカメラだった。五年前に一族の里で起きた悲劇を経て、心に深い傷を負った当時の刃更は、人の感情を心の底から揺さぶるような迅の写真に、何度となく救われてきた。

その時の迅は、もう世界を救う勇者ではなかったが、それでも刃更にとっては間違いなく自分を守ってくれる勇者で。そんな迅の背中を見てきたからこそ、今こうして澪や万理亜を守るために戦える自分がいるのだろうと――そう素直に思えた。

2

刃更と滝川は制限時間ギリギリまで食べ続け、この日の焼肉は大満足で幕を閉じた。
家の方向が違うからという事で、滝川とは店を出てすぐに別れて。
そして現在――刃更は、長谷川と帰り道を一緒にしていた。
「しかし東城、本当に構わないのか？」
隣の長谷川が問い掛けてくる。
「こちらが頼んで相席させて貰ったんだ。お前らの払いも持ってやりたかったんだが」
「いや、大丈夫ですよ本当に。今日のあれは、俺が払わなきゃいけないものだったし」
滝川の分については、刃更が払わなければ何の意味もない。ところが、
「しかしだな……」
まだどこか納得できずにいる長谷川に、律儀な人だなと刃更は苦笑する。

「それなら今度、機会があったらご馳走して下さい。その時は先生のオススメの店で」
「ふむ……解った。お前がそれで良いと言うのなら、また今度お前を誘うとしよう」
あれ、滝川は誘わないんだ。まあ、アイツの分も俺が払ったしな。
「それにしても……『魔族』だの『忠誠』だのと、お前と滝川は随分とおかしな話をしていたな。漫画かゲームかは知らないが、最近はそういうものが流行っているのか？」
どうやら聞かれてしまっていたらしい。とはいえ刃更に焦りはなかった。たとえ聞かれていたとしても、大抵の人は長谷川のようにゲームか何かの話だと勝手に勘違いしてくれる。むしろ堂々と話してさえいれば、余り問題はないのだ。だから、
「ええまあ……ゲームですかね」
「そうか。私はその手のものには疎くて、面白さがよく解らないのだが、若い連中は随分とハマっているらしいな。そんなに楽しいものなのか？」
「まあ人によっては。楽しさの度合いは、人それぞれでしょうけど」
「そうなんだろうな。だが少なくとも東城、お前は随分とハマっていそうだ」
「どうしてです……？」
「滝川と話していた時のお前の声や口調が、真剣そのものだったからさ」
からかうような声音の長谷川の指摘に、

「……そうですね。そうかもしれません」
僅かに視線を落としながら、刃更は告げる。
「たとえゲームだろうと——絶対に負けられないものはありますから」
別に楽観的に考えていた訳ではない。だが、やはり自分達が置かれている状況は厳しかった。新たに派遣されてくる監視役。澪の養父母を殺したゾルギアの存在。主従契約の利点と問題点。対処と対応を考えなければいけない事は山のようにあった。すると、
「——えっ？」
不意に、刃更は柔らかな温もりに包まれた。そして自分の置かれた状態に気が付く。
隣を歩いていた筈の長谷川に、首の後ろへと両手を回され抱き締められていた。
長谷川の大きな胸に、こちらの顔を埋めさせて貰うようにして抱かれ、
「せ、先生……っ!?」
突然の事にどう反応して良いか解らず、ドギマギする刃更に、
「動くな。良いからジッとしていろ」
窘める口調で長谷川が言ってくる。
「全く……急に黙ったかと思えば、そんな思い詰めた顔をして。眼の前で、生徒にそういう顔をされる教師の気持ちにもなってみたらどうだ」

自分では抑えていたつもりだったが、焦りや苛立ちが顔に出てしまっていたのだろう。

「……すみません」

「謝る必要はない。悩む事は、生きている者の権利だ。特にお前のような年頃はな。だが、そんなお前を放っておけない奴もいるという事を覚えておけ」

刃更は小さく頷くと、少しだけ長谷川の気遣いに甘えさせて貰った。

眼を瞑れば、長谷川の優しさと柔らかさをより一層感じられて、

「……ありがとうございます。もう大丈夫です」

やがて礼を告げると、長谷川は刃更の頭を解放してくれた。だが、首に回されていた長谷川の両手は下へ降りはしたものの、そのまま刃更の腰へとしっかり回されていて、

「えっと、あの……先生？」

「放っておけないと言っただろう。言える範囲で構わないから、ここで私に話してみろ」

「いや、でも……」

思わず躊躇いを口にした刃更に、長谷川はそっと顔を近付けてきた。

「それとも――東城は、私に話すのは嫌か？」

ノーとは言えなかった。長谷川を心配させたのは、他ならぬ刃更なのだ。だから、

「実は……今、親父が家を留守にしているんです」

刃更は言える範囲で、己の悩みを口にする。

それは、澪や万理亜に対しては彼女達を心配させたくないという理由で言えず、また滝川に対しては泣き言になるため口にはできなかった想い――東城刃更が抱える苦悩だ。

「男は俺しかいないので、家の事で何かあった時は、俺が澪や万理亜――澪の妹なんですが、彼女らを守ってやりたいと思っているんです」

「うん……」

長谷川の穏やかな頷きに促される形で、刃更は苦笑する。

「でも難しいですね……何かを本当に守るって事は。人間、生きていれば色んな悩みが生まれますし、中には人には言えない事だって出てくる。それでも守ろうとすれば、そうした秘密まで守らなきゃいけない……でも、今の俺の力じゃ全部は無理そうで」

唇を噛んだ。拳をギュッと握り締める。

「守りたいんです。絶対に、何があろうと守ってやりたい……でも、守りたいものをきちんと守るって事が、どれだけ難しい事なのかを改めて思い知らされました。自分の力と存在が、どれだけちっぽけで頼りないものだったのかも」

別に何もかも上手くやれるとは思っていない。どれだけ無様でも、守り抜ければ文句はないのだ。どんな状況になろうと、自分は自分にできる全力を尽くすだけなのだから。

The Testament of Sister New Devil II

ConTeNts

プロローグ
朝の妹の魔王無双 ——— 005

第①章
ヤキニクと青春番外地 ——— 035

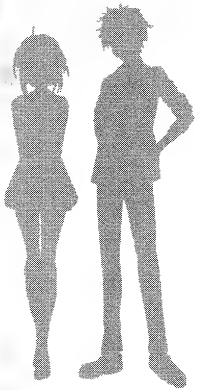
第②章
募る想いを抱えて ——— 085

第③章
主従と信頼の向かう先 ——— 140

第④章
消せない過去を見つめて ——— 207

エピローグ
未来の可能性 ——— 279

あとがき ——— 298



口絵・本文イラスト／大熊猫介（ニトロプラス）
口絵・本文デザイン／濵崎正隆（NARTI;S）

……でも。

もし守れなかったら――そう思うと、刃更は気が狂いそうになる。もう二度と嫌なのだ、大切なものを失うのは。五年前の苦しみと後悔を、繰り返す事だけは。すると、

「……一人で抱え込みすぎだな」

それまで黙って話を聞いていた長谷川が口を開いた。

「何となくだが、お前の抱えている悩みは理解できたよ。その事で、成瀬や下の妹に心配させたくない事もな……だが、もしお前が新しくできた家族を、妹達を大切に想っているというなら、彼女らとはしっかり意思疎通をしておく事だな」

何故ならば、

「どうしても失敗したくない事があるのなら、置かれている状況と立場をきちんと把握し、理解しておく必要がある。その際に最も重要なのは、守る側と守られる側の協力と信頼関係だ。それがあって初めて、本当の対策を練る事ができるようになる。だが、良いか――何事も完璧に成し遂げる事はほとんど不可能だ。だから優先順位を付け、絶対に譲れないラインを引いたら、それだけは何があろうと守れば良い」

「絶対に譲れないライン……」

「そうだ。たとえば、確かに秘密は守られるべきだが、守るべきは秘密じゃないだろう。

東城――お前が本当に守りたいものは何なのか、もう一度よく考えてみるといい」

自分が本当に守りたいもの――長谷川が口にしたその言葉を心の中で反芻して、

「……解りました。そうしてみます」

刃更が頷くと、長谷川は「よし」と満足そうに頷いて。

――次の瞬間、東城刃更は額にキスをされていた。

「へ――？」

いきなりの出来事に思考を停止させていると、

「……の未来に……の加護と導きを」

こちらの額から唇を離した長谷川が、何かを呟くのが聞こえた。思わず呆然となり、

「せ、先生……？」

「ああすまない、ついな……私の田舎に伝わるちょっとしたおまじないのようなものだ」

気にするな――と長谷川は笑うと、刃更から手を離して歩き出した。

額にされたとはいえキスはキスだ。てっきり何かあるのではと思ったのだが。ここまでサバサバしているという事は、どうやら本当に深い意味はないらしい。

だから刃更は長谷川の後を追い掛け、隣に並ぶと速度を合わせて歩いてゆく。

自分が本当に守りたいものと絶対に譲れないライン――それが何なのかを考えながら。

3

刃更や長谷川と別れた後、滝川八尋の姿は彼の自宅とは別の場所にあった。
下水処理場と産廃処理場に挟まれた、やや殺風景な立地にあるスポーツ広場だ。
敷地内にある芝生のグラウンド――その中心に滝川は一人で佇んでいた。
利用可能時間をとっくにすぎた敷地内は暗く、他に人の姿はない。しかし、
「……遅かったじゃねえか」
ふと滝川の背後から、野太い声が投げ掛けられた。
「悪かったな。人間として潜っていると、色々と付き合いってモンがあるんだよ」
滝川は声がした方を振り返った。すると眼の前に、見上げるような巨漢の魔族が立っている。その大きな体軀は、そこに存在するだけでかなりの威圧感を発していた。
「聞いていた応援が、まさかお前だったとはな――ヴァルガ」
「そりゃどういう意味だよラース。何か文句でもあるってのか？」
魔界での名を呼ばれた滝川は、「いや別に……」と肩を竦めた。
――先日、澪がウィルベルトの能力を暴走させた件について、滝川は澪の監視役として

現魔王派への報告を行なった。要点は三つ。
澪がウィルベルトの力を一時的に解放したものの、完全に覚醒には至っていない事。
柚希のように勇者の一族が監視をしている事。
そして――かつて勇者の一族だった刃更が、現在家族になっている事の三点である。
下手に勇者の一族に介入されても面倒だ。てっきり上は、しばらくは様子見など穏便に事を進めると思っていたのだが、よりにもよって好戦的で武闘派なヴァルガを寄越してくるとは。どうやら上には、澪の中に眠るウィルベルトの力が目覚め始めているようにしか見えないらしい。案の定、
「――さて、それじゃあ目標の様子でも見てくるとするか」
早速とばかりに動こうとするヴァルガに、
「おいおい、いきなり勝手な真似とか冗談だろ。こっちに来たばかりで、状況もロクに理解できてない奴がノコノコどこへ行くって？」
「あァ？　だから、その状況ってのを確認しに行くんだろうが。何の問題がある？」
「勝手に動くなって言ってるんだよ。お前はあくまで追加要員、仕事は俺のサポートだ。先任の俺の指示に従うのが筋だろ」
「知らねえな。俺の性格を知っていて、それでも上は俺に任せたんだ。そいつはつまり、

好きにやって良いって事だろ」

フンと笑うヴァルガに、

「ポジティブだね、お前は……そういう男前なのは結構だけどな」

そこで滝川は表情をスッと真剣なものにして、

「報告は聞いている筈だ。既に勇者の一族も動いている。下手に刺激して本格的に連中が動き出す事になって、もし成瀬澪に何かあったら――上に殺されるぞお前」

「おいおい、物騒な事を言うなよラース。別に俺だって、すぐにどうこうしようってつもりはねえぜ。だが元勇者の一族が家族になったりと、成瀬澪にも味方が出来てるっていうじゃねえか。なら、俺もきちんと状況は知っておくべきだろ」

そう言うなり、ヴァルガは風と共に姿を消した。

「ったく……」

ヴァルガの性格で、様子見だけで済む訳がない。後を追うべきか滝川が思案していると、

「――お待ち下さい」

ふと横から新たな声がした。滝川がそちらに視線を向けると、ぐにゃりと空間が歪み、虚空から美しい女性魔族が現れた。その魔族の登場に、滝川は俄かに表情を硬くして、

「……応援はひとりと聞いていたんだが？」

「その通りです。ですから、**私は貴方の応援ではありません**」

「だったら――ゾルギア侯の懐刀が、わざわざお出ましになった理由は何だ」

そう。そこに居たのは、滝川の前に澪を監視していた高位魔族――ゾルギアの配下の者だった。名はゼスト。頭脳と実力、その両方でゾルギアが最も信頼を置いている存在だ。

「ゾルギア侯はもう、成瀬澪の監視任務から離れられている。配下とはいえ対象に接近するなんて勝手な真似、よもや陛下のお許しを得ずにやっている訳ではないだろうな？」

「勿論。陛下から成瀬澪の監視役の任を解かれる前、ゾルギア閣下は布石を打たれていました。その事はラース……貴方もご存じの筈です」

確かに。ゾルギアは監視任務から離れる際、成瀬澪に対して罠を仕掛けていた。

そして――その罠はまだ活きているのだ。この事実を、滝川はまだ刃更に伝えていない。迂闊に話せない事情があるのだ。

「あれからこちらの世界では半年以上が経過しています。例の布石が今もきちんと有効に働いているのか、確認するために私が来たのです――陛下のご許可もきちんと得て」

だから、とゼスト。

「そのためには、ゾルギア閣下が監視任務を離れてから現在までの状況を正確に把握する必要があります。協力していただけますね、ラース」

向けられた冷たい瞳に、滝川は心の中で舌打ち。

……マズいな。

下手にゼストに調べられれば、余計な腹まで探られるどころか、こちらの腹の底まで覗かれかねない。刃更と結んだ協力関係については、第三者からはその線を手繰られないように細心の注意を払ってはいるが、単純なヴァルガを相手にするのとは訳が違う。ゼストがゾルギアの右腕なのは伊達じゃないのだ。

さらに――滝川は刃更の《無次元の執行（バニシング・シフト）》については伏せて報告していた。下手にあの技について知られれば、間違いなく刃更の存在は危険視されてしまう。全てを消し去るあの技が、澪の中に眠るウィルベルトの力を消し去ってしまわない保証はないからだ。

そのため、この事は滝川が所属しているもう一方の勢力側にも伝えていなかった。滝川自身、まだ刃更の技については知らない部分が多い。下手に報告すれば、かえって事態を混乱させる。何より、刃更にはまだ死なれる訳にはいかないのだ。だから、

「俺の任務はあくまで成瀬澪の監視だからなあ……ゾルギア侯のために働かなきゃいけない理由も義理もないんだが」

とぼけてみせる滝川に、

「私がここに来たのは、ゾルギア閣下の指示だけではありません。陛下の命も受けてここに居るのです。貴方には、協力する理由と義理があると思いますが」

それとも、とゼスト。スッと瞳を細くして、

「――何か、こちらに協力できない理由でもあるのですか？」

成る程そう来たか。ならば、と滝川は方針を変更。

「いやいやまさか。そういう事ならナンボでも協力させていただきますとも」

ニッとゼストに笑い掛ける。ここで幾らゴネたところで、どうせゼストは独自に動くだろう。それで下手に真実に近付かれるよりは、いっそ自分が案内役を買って出て不都合な真実から遠ざけた方が良い。ヴァルガの動向も気にはなるが、

……ま、せいぜい頑張ってくれよバサっち。

何せ――こっちもこれから、もっと面倒な奴の相手をしなければならないのだ。

4

刃更が家に着いたのは、夜の十時を回った頃だった。

澪が入浴中だった事もあり、取り敢えず刃更は万理亜と二人だけで自分の部屋へ。

そして、新たに浮上した不安要素を含め、これからどう対応すべきかの相談を行なう。

まず訊ねたのは、主従契約魔法のメリットとデメリットについてだ。すると、

「確かに――刃更さんの仰る通り、主従契約魔法には利点とリスクの両方があります」

テーブルを挟んで向かい合いながら、クッションの上に座った万理亜が神妙な表情で、

「ただし現魔王派の狙いは澪さまの命ではなく、ウィルベルトさまの力ですから。連中としても澪さまに死なれては困る以上、私達が注意しなくてはいけないのは――」

「――誘拐か」

たとえ殺す事はできないとしても、拉致して魔法や魔導具などを使用し、無理矢理にでも能力を覚醒させようとしてくる事は考えられる。「そうです」と万理亜は頷いて、

「ですが主従契約で魂が結ばれた主と配下は、その気になれば互いの居場所を感知できるようになりますので。より護衛がしやすくなるだけでなく、もし何かで攫われてしまった場合でも助けに行けます。刃更さんと澪さまに主従契約を結んでいただいたのは、そうした誘拐などへの予防策です」

確かに敵としても澪を死なせる訳にはいかない以上、攫われた澪が後ろめたさを感じて呪いでどうにかなるリスクよりも、いかに誘拐されないようにするか。もし誘拐されても、いかに助け出すかを考えるべきだろう。

――現に。先日、学校の屋上で正体を隠した滝川と戦闘した際に刃更が重傷を負った後、

澪はそれ以上周囲を巻き込まないように一人で決着を付けに行ってしまった。

そうして窮地に陥っていた澪の下へ、どうにか刃更が間に合う事ができたのは、主従契約魔法のお陰で澪の居場所を感知する事ができたからだ。無論、あの時の滝川は刃更が来る事を想定し、こちらが間に合うようにわざと時間を掛けていたのだろう。――だが、これからはそうはいかない。滝川の話では、新たな澪の監視役が派遣されてくるのだ。

「話は解った……でも万理亜、だったら何でそうと言ってくれなかったんだ？」

呪いの件を黙っていた事といい、いささか秘密主義がすぎるだろう。すると、

「すみません……澪さまの性格を考えると、言わない方が良いかなと思いまして」

と万理亜。

「澪さまは素直じゃないところがありますが、基本的には優しく、何よりも真面目な方です。互いの居場所が解るようになるという即効性のメリットならともかく、刃更さんと信頼関係を深めれば、それだけ二人とも強くなれると言ってしまうと、無理に何とかしようとして、かえって上手くいかないと思ったんです」

「……それはあるかもな」

幼い頃から、勇者の一族として修行を積んでいた刃更とは違う。半年前に養父母を殺されるまで、澪は普通の女の子として生きていた。そんな澪に、目的のために気持ちを割

り切れというのは無茶だし無理だ。ならば下手に真実を伝えるよりも、自然と信頼関係が深まるのを待つ方が良いと考えたのだろう。だが、

「それならせめて、俺にだけは話してくれても良かっただろ……まあ、まだ一緒にいる時間は長くないから、いきなり何もかも信じろってのは難しいかもしれないけどさ」

「まさか。私は刃更さんの事はちゃんと信頼していますよ？」

ただ、と万理亜。

「もし私と刃更さんだけが知っていて、後になって自分だけが知らなかったと解ったら、私や刃更さんに対する澪さまの信頼が失われてしまう可能性がありますから」

かつて澪や万理亜と同居する事になった際。迅は二人の正体や狙いを何もかも知っていながら、黙って騙されたフリをしていた。だからこそ——刃更達がその真実を知った後、一度は壊れかけた関係を立て直す事ができたのだ。万理亜が主従契約の諸々について黙っていたのは刃更と、何よりも澪の気持ちを想っての事だったのだろう。

「なので、できればお二人には隠し通しておきたかったのですが……まさか刃更さんが、主従契約についてお調べになってくるとは思いませんでした」

誤算です、と万理亜は言って、

「それにしても刃更さん、一体どちらでこの話を？　信頼関係が深まれば力が強まる事はともかく、一部の高位魔族がしている、**主従契約の際にサキュバスの特性を利用した遊び**については、それこそ魔族でも一部の者しか知らない情報の筈ですが」

「まあ、ちょっとな……これでも一応、元勇者の一族だし。《里》を追放されたとはいえ、ツテの一つや二つはあるんだ」

滝川の事を話す訳にはいかないため、刃更は真実を隠した言い回しで告げて、

「しかしそうすると、現状は主従契約は結んでおいたままの方が良いんだろうな……なら、それを前提にした対策を考えておかないと」

「——お任せ下さい刃更さん。僭越ながら私、この状況で最も有効な対策を考えました」

我が意を得たとばかりに万理亜。

「さあ、どうぞこちらへ」

そう言って部屋の奥へ——パソコンの前へと刃更を誘った。椅子に座ると、自然とデスクの上のＰＣモニターと向かい合う体勢になり、そこへ、

「では、ちょっと失礼して」「お、おい何を……！」

困惑する刃更の膝の上に、万理亜がちょこんと腰掛けてきた。既に入浴を済ませていたのだろう。万理亜は、上はパジャマに下はショーツのみという無防備な格好だ。帰宅後、話が長くなる事を想定して、Ｔシャツにハーフパンツという組み合わせに着替えた己の判

断を刃更は後悔した。万理亜が身に着けているショーツの滑らかな生地と、スベスベの太股――その両方が、万理亜が女の子である事を強烈に主張してくる。ボディソープで洗われた身体が、万理亜の肉体と体温でしか生まれない甘い匂いを放ってきて、

「良いものでしょう？　お風呂上がりの女の子の匂いは」

内心ドギマギしていたこちらを見透かしたように、膝の上の万理亜が振り返った。こちらの股間の辺りに尻を押しつけ、もぞもぞとさせる万理亜に、

「べ、別に……いいから降りろよ！」

「駄目です。これからする事は、今後の刃更さんと澪さまにとって必要な事なのです」

そう言って、万理亜は刃更のパソコンの電源を入れる。

「おい勝手に――」

万理亜は慣れた手付きでマウスを操作してハードドライブのフォルダを開けてゆき、ふと刃更が見た事のないアイコンのプログラムを立ち上げた。起動したソフトは、まず英字デザインのメーカーロゴを表示。そして、次に映し出されたものを見るなり、刃更は思わず眼を丸くした。見えたのは一瞬だけだったが、

「万理亜……気のせいか？　今、『このゲームはフィクションです』って出たような」

「いやですね刃更さん。ゲームソフトなんて、どれも基本的にフィクションです」

うん。そりゃそうだ。その事は別に否定はしない。

「でも、その次に『ゲームと同じ事をすると法的に罰せられます』って――」

嫌な予感と共に言った刃更の眼の前で、とうとうそれが表示された。

可愛らしい少女だった。だが、如何せんこの少女には突っ込みを入れたい所が沢山ある。

まずは、なぜ鎖の付いた革製の首輪をしているのか。

そして、なぜ服を着ておらず扇情的な下着姿なのか。

さらに、なぜ背後から男に抱き竦められているのか。

何より、なぜそんな状況なのに、少女は恍惚とした濡れた瞳で、こちらを見ているのか。

全ての謎はすぐ解けた。表示されたタイトルが教えてくれたからだ。

『俺とリアル義妹の青春番外地』――エロゲーだった。

「人のパソコンに、無断で何てもんインストールしてやがるっ！」

アホかっ！　というか、確かにこのゲームって引っ越し祝いと称して無断で俺のベッドに仕込んだ例のソフトだろ。あの日の朝の始まりは、こちとら人生の中でも最悪の部類にランクインしてんだぞ。内心毒づく刃更に、

「刃更さんがこのソフトを憎む気持ちは解ります。ですが、どうか耐え忍んでいただければと。これも澪さまのためなんです」

「いや、俺は別にこのソフトには何の恨みもないが」
あるのは、人のベッドに地雷を仕込んだお前という名の犯人にだよ。
「つーか、何でこのソフトが澪のためになるんだよ……」
「言ったでしょう。これからの事を考えると、刃更さんと澪さまの信頼関係を深める事は急務です。自然な形が理想ですが敵は待ってくれませんし、刃更さんも主従契約魔法について色々と知ってしまいました。ならば、この状況で最善を模索するしかありません」
即ち、
「刃更さんに、澪さまに後で事情を知られても問題ないような状態まで信頼関係を高めて貰います――つまり、澪さまにとっての絶対的なご主人様になっていただく訳です。澪さまが絶対に逆らえない、逆らおうとも思えない、心の底から忠誠を誓う存在に。澪さまのような気の強いタイプは、優しさだけでは縮められる心の距離に限界があります。このソフトは、そんな澪さまを刃更さんが躾けるための参考書です」
「……すまん。良い機会だから、前から思ってた事を言わせてくれ――お前、馬鹿だろっ？」
「おやおや。こちらは限られた戦力しかなくて、それでも現魔王派と戦っていかなくてはいけないというのに。正攻法のお綺麗なやり方でどうにかしようとする方が、馬鹿げているような気がしますが。まさか刃更さん、私たちに手段を選べるような余裕があるとでも思ってますかー？」

「いや……でも、澪の事も考えてやらないと。大事なのは、アイツの気持ちだろ」
「確かに澪さまのお気持ちは大事です。ですが、澪さまの気持ちと命――どちらかを選ぶとしたら、答えは決まっていると思います」
「それは……けど条例とか、倫理ってモンが」
「なら国や法律に――警察や裁判所に『魔王に狙われているので助けて欲しい』と言えば、澪さまを守って貰えるんですか？　忘れないで下さい。今こうして澪さまの傍にいて、澪さまを守る事ができるのは、刃更さんと私だけです。私達しかいないんです」
「……だな。悪い」
と刃更は低いトーンで言って、
「でも、だからってこういうゲームを参考にするのはどうかと思うんだが……信頼関係を深めるにしたって、選択肢が澪の調教オンリーって事はないだろ」
「ない事はないでしょうが、発動する呪いは催淫ですから。それを活かせる方が良いと思いますよ？　それに、何も絶対にこのゲームの通りにしなくちゃいけない訳ではありません。あくまでこれは、刃更さんと澪さまの関係を深めるためのヒント探しなのです」
そう言って、万理亜はゲームのマニュアルを渡してきた。その中に書かれているあらす

じを、刃更は何ともなしに口に出して読む。

「『悪魔に淫乱化の呪いを掛けられてしまった義理の妹。彼女はその可愛らしさから周囲の男達に狙われています。彼女を守るため、どうか主人公である貴方の手で、貴方だけを想う女の子へと変えて下さい。二人の絆が深まれば、きっとあらゆる困難を乗り越えられる筈。これぞ究極の家族愛。レッツ・義妹調教♪』……世も末だなおい！」

「さあ刃更さん、イヤホンをどうぞ。同じ台詞でも、音声に込められた感情によって意味が全く違ったりしますから。私もご協力したいので、片方イヤホンを貰いますね」

「え？　俺、お前を膝に載せて、仲良くイヤホンを分け合いながらこれプレイすんの？」

本気か？　字面的にも絵面としても、結構な最悪具合だと思うぞ、それ。

「我慢して下さい。澪さまのためです」

「……解ったよ。もう好きにしてくれ」

そして、万理亜を膝に載せてのレッスンが始まった。ゲームはプロローグ部分だけで実に三十分、主人公とヒロインの生い立ちや現在の境遇、互いへの想いなどが、設定を羅列した説明ではなく、二人のドラマによってきちんと描写されており。プロローグの最後――義妹が呪いに掛かり、たとえ正しくはなくても自分達にはこれしか方法がないからと、禁断の道を主人公とヒロインが進む事を決意し、主題歌付きのアニメパートが流れた。

しかし本番はここから。いよいよ最初の夜を迎え、二人きりでぎこちない会話をした後、早速画面に選択肢が表示される。

1／普段通りに接して緊張をほぐす
2／とても優しく紳士的に振る舞う
3／義妹の決意を知っているからこそ中途半端はしない。彼女の想いに応えるため、愛をもって強引かつ乱暴にする。後悔はしない。それこそが家族として、義兄としての責任だと――そう信じているから

「……何だこの3番。選択肢っつーより、ただのネタとしか思えないんだが」

馬鹿じゃねえの考えたスタッフ。

「では、まずはこれだと思う選択肢を選んで下さい。刃更さんのお手並み拝見です。あ、でも念のためセーブしておいて下さいね。後でロードが必要になるかもしれませんので」

膝の上の万理亜が、魔族のくせにすっかりエロゲー慣れした様子で言ってくる。

……しかし、お手並み拝見って言われてもな。

普通に考えて、答えはもう決まっている。刃更は1番を選択。その途端、

「あー、やっぱり」「何だよ。何か文句でもあるのか？」
やれやれといった感じで言った万理亜に、刃更が問うと、
「ああ、すみません、つい……さ、どうぞ先のプレイを」
釈然としないものを感じながら刃更はテキストを進め始めた。焦らずゆっくりいこうという主人公に、ヒロインはうんと頷いて。何もしないけど、今日は一緒に寝よう。こんなの何年振りかな、などという会話が繰り広げられながらそのシーンは終了。そして翌日、
「……あれ？」
主人公が眼を覚ますとヒロインの姿はどこにもなかった。代わりにあったのは置き手紙。何でもヒロインは、主人公が度胸を見せられるか悪魔と賭けをさせられており、その賭けに負けてしまった。これから地獄で悪魔達の慰みものになるが、それでも最後に主人公の優しさに触れられて幸せだったと、置き手紙には記されていて。
そして画面は暗転。ＢＡＤ　ＥＮＤと表示された。
「……何なんだこの展開」
「解りませんか？　これは刃更さんの優しさが招いた悲劇です。優しいだけの男に女は守れないという事です。まったく……嘆かわしくて私、涙が出てきます」
「エロゲーの選択肢一つでそこまで言われたくないんだが――っていうか、１で既に優しくて駄目なら、まさか2も？」

「当然です！　刃更さんはそんなにこのヒロインを殺したいんですか？　刃更さんをそこまで猟奇的な選択肢に駆り立てるなんてっ。まさか前世で親でも殺されましたか？」
「待て。お前は俺の前世を何だと思ってる」
エロゲーのヒロインに親を殺された前世とか、悲惨すぎるだろ。
「もう、仕方ないですね……」
万理亜は嘆息すると、マウスを握っている刃更の手の上に自分の小さな手を重ねて、
「――さあ、彼女を助けてあげましょう」
そう言って、先程のセーブデータをロード。刃更が候補から省いた選択肢の3を選んでプレイを再開する。ところが、万理亜は自信たっぷりだったものの、ゲーム内のヒロインはいきなり態度を豹変させた主人公に困惑し、激しく抵抗していた。
「ホラ見ろ。やっぱ3はないって」
「何を言ってるんです？　そっちこそよく見て下さい」
言われて画面のテキストウィンドウを見れば、それまで抵抗していた筈のヒロインが、いつの間にか従順になって主人公の調教を受け入れていた。それどころか、強引にされる事にどこか興奮と幸せを覚えていて、

この世界を守るために勇者は存在している。
ならば――そんな勇者を守ってくれる者とは。

プロローグ　朝の妹の魔王無双

1

男ならば、誰もが一度は想像した事があるだろう。
もし朝起きた時、布団の中に可愛らしい女の子が潜り込んでいてくれたら。
感じるのは温かくて柔らかな感触。香るのはほんのりと甘い匂い。
女の子は言う。少しだけ恥ずかしそうに、それでも笑顔を浮かべて――おはよう、と。
それは言わば、限られた者だけが得られる幸せで、
「……」
しかし、この日の朝。ふと息苦しさを得て眼を覚ました東城刃更は、それに近い状況に身を置いていた。別に悪夢にうなされていた訳ではない。息苦しさの原因は他にある。

「良いですか刃更さん。このヒロインもそうですが――気の強い女の子なんてものは、一皮剝いてやれば基本的にみんなドMなんです」

「いきなり何を暴論かっとばしてんのお前っ!?」

「いいえ真実です。だから、澪さまの事は刃更さんが強引に剝いてあげて下さい。なに心配はいりません、抵抗するのは最初だけです。何せ私の見立てでは、澪さまの本性は相当のドMです。あれは、尽くすと決めた相手に強引にされる事に幸せを覚え、そんな相手をそれでも従順に受け入れる自分に悦びを得るタイプですから」

「何だその鬼畜分析！　お前はそれでも本当にアイツの配下か？」

「配下だからこそ、澪さまには無理に強がったりされずに、本当のご自分のままで居て欲しいんじゃないですか」

万理亜はえへんと胸を張って、

「さあ刃更さん、続きをプレイしましょう。一刻も早く澪さまと揺らぐ事のない絆を結ぶために、正しい義妹の調教の仕方を学ぶのです！」

そう言ってモニターへと向き直った万理亜の頭を――刃更の右の肩越しに、にゅっと伸びた手が摑んだ。ギョッとなった刃更がそちらを見ると、一体いつから居たのだろう。冷たい笑みを浮かべた澪がそこに立っていて、

「何度もノックしたのに返事がないと思ったら……随分と楽しそうな話をしてるのね」
発せられた底冷えするような声に、万理亜はビクっと身体を硬直させる。
そして、途端に顔中に脂汗をだらだら流しながら振り返り、
「澪さま……」「……なあに？」「話せば……話せば解ります」「そうね。聞かせてよ。アンタが何を語ってくれるのか楽しみだから」
でも、
「その前に、ちょっと良いかしら万理亜。心配しないで、そんなに時間は取らせないわ」
澪はそう言って、頭を摑んだ万理亜を引きずるようにして歩き出した。
「な、何をしてるんです刃更さん……見てないで助けて下さいっ。教えたじゃないですか。強気です。今こそ強気に澪さまを痛たっ、痛い痛いです澪さまっ」
頭を摑む手に力を込められジタバタする万理亜に、刃更は合掌。
「すまん。やっぱりどう考えても無理だ。悪いが成仏してくれ」
やれやれ助かった、と嘆息すると、しかし澪は部屋の入口でこちらを振り返り、
「刃更……言っておくけど、この後アンタにも話があるんだからね」
ドSにしか到底不可能な鋭い眼で睨まれ、刃更は頷く事しかできない。
そしてこの後、万理亜への折檻を終えた澪に事情を説明し、納得して貰うまで実に数時間を要した。命の大切さを改めて思い知る羽目になった数時間だった。

5

夜と共に比例して深くなってゆくものがある。
月光や街の明かりがどれだけあろうと、決して届く事のない場所。
闇だ。先の見えない、吸い込まれそうな程の暗い漆黒を人は避ける。それは、そこに危険が潜んでいる事を本能的に理解しているからだ。
――しかし、人間とは対照的にその闇を好む者達もいた。暗い深淵を己の棲み処とする存在、低級のはぐれ悪魔である。魔族の中でも、低級の悪魔は自我を持っていない。そのため力はそれ程ではないものの、かえって性質が悪いとも言えた。
勇者の一族との全面衝突を避けるため、魔族が人間界で無闇に人を襲わないのに対し、低級のはぐれ悪魔にそれを考えるだけの知能はない。あるのは己の本能に忠実な欲求だけ。
そしてこの夜。コンビニやファミレス、ファストフード店以外は閉店を迎えた頃。
繁華街の一角にある裏路地の闇の中から、じわりと浮かび上がるものがあった。
闇に溶け込むような『それ』は、暗い路地裏から表通りを見詰め続ける。まるで獲物が

通り掛かるのを待ち受けるように。そして――若い女性が眼の前を通り過ぎた瞬間。
はぐれ悪魔は容赦なく、彼女へと襲い掛かった。特別な力を持たない人間に、悪魔の姿を見る事はできない。それに魔族と比べれば弱くても、一般人より遥かに力は上。
よって抗う術を持たない女性は、そのままはぐれ悪魔の餌食になる――その筈だった。
――だが次の瞬間、突如放たれた斬撃がはぐれ悪魔の命と存在自体を断っていた。恐らく自分が消滅した事も理解していなかっただろう。虚空へと消えてゆく悪魔の残滓に、
「――やはり、随分と引き寄せられているようだな」
フンと吐き捨てるように言った声があった。と同時、はぐれ悪魔が居た背後――路地裏の暗がりから三つの人影が出てくる。姿を現したのは二人の青年と一人の少女だ。
「良かったのかい高志？　被害者が出た方が『目標』を消滅させる理由になったろうに」
軽い口調で告げる右端の青年に、高志と呼ばれた青年――はぐれ悪魔を斬り倒した彼は、どこか不機嫌そうな低い声で、
「無駄に犠牲を増やす必要はないだろう。斯波さん、《里》は既に判断を下したんだ」
一息、
「『目標』を――成瀬澪を、監視対象から消滅対象に切り替えるとな」
それは先日の柚希からの報告を受けた、勇者の一族の判断。先代魔王から受け継いだ力に覚醒した可能性がある危険性を鑑み、彼らは決定を下していた。
即ち、魔王ウィルベルトの娘を――成瀬澪を滅ぼすと。
「……大体、眼の前で犠牲者が出るのを見過ごせるか。俺達は勇者の一族なんだぞ」
「高志は真面目だね……やれやれ、正義の味方ってのは大変だ」
おどけたように肩を竦めた斯波は、
「――胡桃ちゃんも、そうは思わないかい？」
高志を挟んだ反対側で、はぐれ悪魔が消えた虚空を無言で眺めていた少女に呼び掛ける。
「……いいえ。それがあたし達の使命だし」
対する胡桃と呼ばれた少女から、ぶっきらぼうに答えられ、
「参ったな……二人共、表情が硬いよ？」
斯波は苦笑しながら、
「そんなに気になるかい？　この件に彼が――刃更が絡んでくる事がさ」
告げたその言葉に、高志と胡桃はしばし無言になった。そんな二人に、
「まあ君達は刃更と同い年と、それに近い年齢の幼馴染だ。五年前の事件が起こるまでは、いつも一緒にいた間柄だしね。色々とやり難いだろうし、特別な想いもあるだろう」
でも、

「柚希ちゃんからの報告を聞いて、それでも自分達でこの任務に志願したんだ。頼むからおかしな情に流されて、任務に失敗するなんて事はくれぐれもないようにしてくれよ」

「……そんな事は、言われるまでもない」

と高志。

「成瀬澪は倒すし、邪魔する者は容赦しない。たとえ、それが刃更だろうと」

「……あたしも。今はもう、刃更に対して躊躇する理由なんてないよ」

そう言い放つ胡桃の言葉に迷いはなかった。刃更とは既に、決定的に道を違えていたからだ——五年前の『あの悲劇』の日から、もうずっと。そんな二人に、

「結構。君達の想いは君達のものだ、それを邪魔するつもりはないよ。僕は今回、あくまでお目付け役だからね。やるのは君達。僕は見てるだけ」

よろしく頼むよ、と笑いながら。

「それじゃあ行くとしようか。この世界を守る勇者の一族として、使命を果たしに——」

斯波恭一は告げる。

「——未来の魔王になるかもしれない者を倒しに、ね」

第2章 募る想いを抱えて

1

滝川や養護教諭の長谷川と共に美味い焼肉を食べ。

万理亜にエロゲーをやらされた事が澪にバレて、たっぷりと叱られた翌日。

昼休みを迎えた聖ヶ坂学園で、東城刃更は囲まれていた。

場所は人気のない中庭の校舎裏。建物の壁面を背負った状態のこちらの行く手を塞ぐようにして並んでいるのは、十名を超える男子生徒達だった。滝川が今日は休みのため、昼休みに一人で購買へ向かった刃更を廊下で待ち伏せし、「東城だな？」と容疑者を見つけた刑事よろしく確認を放つと、こちらが頷くよりも先に両腕を左右から摑んでここまで連行してきた。まあ刃更としても確かめておきたい事があったため、それは構わないのだが、

「あの……俺に何か用ですか？」

相手の多くは上級生のため、刃更は丁寧語で訊ねてみる。

……っても。

何故この状況になっているのか、大方の予想はついていた。成瀬澪と野中柚希。刃更の義妹と幼馴染にしてクラスメイトでもある彼女達は、この学園ではそれぞれ「澪姫」「柚希姫」と呼ばれるアイドル的な存在らしい。転校してきたばかりの刃更はまだ校内事情に詳しくないのだが、滝川の話ではかなり熱狂的なファンもいると聞いている。そして、

「澪姫と同居してるらしいが……まさかお前、おかしな真似してないだろうな？」

「僕らの柚希姫に抱き締められたと聞いているけど、本当にただの幼馴染なのかい？」

澪と柚希、それぞれの派閥のリーダー格と思しき二人が問い掛けを放ってくる。その言葉の根底にあるのは、澪と柚希は自分達みんなのものだという強い認識なのだろう。

……にしても、本当に居るんだなこういう奴ら。

活発そうなタイプから真面目そうなタイプ、無骨なタイプからやや軽薄そうなタイプまで、澪と柚希のファンは実にバリエーション豊かだった。だがそんな彼らは今、想いを同じにしていた。こちらへ向けられる、敵意の篭った眼差しが否応なしにそれを教えてくる。

とはいえ、その瞳に操られたものや正気を失い狂っているものはなかった。

……男の嫉妬は恐いって話だったが、これなら大丈夫そうだな。

行き過ぎた感情は、そのまま付け込まれる隙になり、利用されやすい。澪を狙う敵性魔族に操られてしまう可能性も考えられたため、一度澪達を慕っているのがどんな連中なのかを調べておきたかったのだが、少なくとも眼の前の彼らに問題はなさそうだった。

――まあ澪の今後を考えれば、こういうグループは解散して貰った方が安心ではある。

そして――この程度の人数の一般人なら、今の刃更でも充分に圧倒できる。

刃更は眼の前の男子生徒達の位置や呼吸を確認し、脳内で彼らの動きをシミュレート。手前の青年に一歩を踏み込んでの掌底を顎へ食らわせて昏倒させると、呆然としている左右の二人には胴への当て身で共に気絶させ、向こうが一瞬怯んだ隙に前へ。そこでようやく動いてきた右端の相手の突進を利用して左に投げ飛ばし、先にいる二名を巻き込んで倒すと、一気にトップスピードで残る五名と距離を詰め、身を硬くした手前の男子の膝を足場に跳躍。足裏で後頭部に入れた一撃でさらに前へと飛び、一番奥に居る二名のリーダー格の背後に着地すると、首の後ろへの手刀で彼らの意識を絶つ。自分達のリーダーが地面に崩れたのを見れば、残る二人は戦意を喪失するだろう。後は軽い脅しを込めれば、彼らに澪や柚希を諦めさせる事はできる。だが、

……流石にそれはな。

刃更はもう、自分達の使命を何よりも優先する勇者の一族ではない。澪を守る事を決めたが、それはあくまで家族としてである。何より、眼の前の彼らの恋愛感情を否定する権利は刃更にはない。ただでさえ現状、滝川以外に話せる男子がほとんどいないのだ。昨夜、万理亜と一緒にやったエロゲーではないが、ここで下手に選択肢を間違えればさらに孤立を深めてしまい、始まったばかりの高校生活がBAD ENDで確定してしまう。こちとら『目指せ脱ぼっち』を密かな心のスローガンに掲げているのだ。よって、ここは逃げたりせず、大人しくしておくのが吉だろう。

己が貫くべき態度を決めた刃更が黙ったままでいると、

「おい、何とか言えよ……！」

案の定、業を煮やした一人の男子が刃更に摑みかかろうとして、

『んー？　そんな所で何してんだお前ら？』

ふと上方から声がした。見れば、二階の渡り廊下からこちらを見ている男性教諭が一人。刃更のクラスの担任を務める坂崎守だ。それを見た男子生徒達は、

「チッ……別に何もしてないっすよ」

軽い舌打ちと共にそう言うと、刃更を置いてぞろぞろと去って行った。どうやら今回は見逃してくれる気になったらしい。そんな彼らを見送った坂崎は、

「やれやれ、成瀬と野中のファンにすっかり睨まれてるみたいだな東城」

「はあ、まあ……そうですね」

刃更は相槌を打ってから坂崎を仰ぎ見て、

「でも助かりました、先生。ありがとうございます」

「俺は何もしてないさ。本当ならきちんと注意してやった方が良いんだろうが、それで東城が余計睨まれる事になってもいけないしな」

と坂崎は苦笑して、

「でも何かされたら……いや、何かされそうになったらだな。その時はすぐに言ってくれ」

「……はい。ありがとうございます」

刃更が頷きを返すと、坂崎は「じゃあな」と言って渡り廊下の向こうへ消えた。

「さて……早いとこ購買に行かなきゃな」

昼飯抜きで午後の授業を受けるのは避けたい。何か残っていると良いが。そこへ、

「――刃更」

静かな声がこちらを呼び止めた。中庭の植木の陰から姿を現したのは、

「柚希……そうか、お前が先生を呼んでくれたんだな」

「ん。私が出て行くより、坂崎先生の方が良いと思ったから」

コクンと柚希は頷く。確かにあの場には柚希のファンも居た。下手に柚希が刃更を庇ってややこしい事になるよりは、第三者の坂崎に介入して貰った方が良かっただろう。

「助かったよ、ありがとな。……どうした？」

黙ったままジッとこちらを見つめてくる幼馴染に、刃更は問い掛ける。

「……実は刃更にお願いがある。だから探してた」

「お願い？　何だよ改まって……」

「今度の週末、付き合って欲しい場所がある……刃更、何か予定は？」

「いや……特にないけど」

すると「よかった」と柚希は言って、それからこちらの制服の袖をキュッと摑んだ。

そして柚希は静かに、しかしはっきりとした口調で言った。

「だったらデートして刃更――二人きりで」

2

そして週末の土曜日の朝。

家を出た刃更は、デート日和の快晴の空の下、柚希との待ち合わせ場所へと向かった。

約束は駅前に十一時。その十分前には着いたのだが、柚希は既に先に来ていた。

「刃更、おはよう」

休日という事で柚希は私服だった。いつもは学校の制服姿しか見ていないので、私服姿の柚希は中々に新鮮だ。とはいえ、私服のチョイスは性格が出る。やや暗い色のカーディガンなど、地味な感じにまとめている辺りに柚希の大人しい性格が表れていた。

――だが、柚希の透き通るような美しさは、地味な服程度で抑えられるようなものではない。現に先程から、周囲を通り過ぎてゆく人達の多くが思わず柚希に見惚れている。中には足を止める者もいる程だ。刃更はほんの少しだけ優越感を得ながら、

「おはよう柚希……ちょっと早めに来たつもりだったんだけど、待たせちゃったか？」

「ううん。私も少し前に来たところ」

首をふるふると振る柚希に、

「少し前って――いつ頃来てたんだ？」「……一時間前？」「え……そんなに前から？」

いやいや早い、早すぎるだろ。先に来て待っててくれて嬉しいのを通り越して、もはや申し訳なくなってくるレベルだ。

「それなら電話してくれよ。そうしたら俺だってもっと早く来られたのに」

「別にいい。刃更の事を待っていたかったから」

「まあ、お前が楽しいならそれで良いんだろうけど……でもさ柚希、次からは早く来すぎた時は連絡してくれ。やっぱ待ち合わせ相手を待たせすぎるのは、俺が嫌だからさ」

「次からは……」

オウム返しに呟いた柚希は、表情を少しだけ嬉しそうにして、

「……解った。次からは気を付ける」「ああ、頼むな。それじゃあ行くか」

そう言って、刃更と柚希は駅の改札へと歩き始めた。行き先は都心の繁華街だ。休日だからだろう。改札を抜けると、ホームは同じように都心に出る人でごった返していた。なるべく短い列に刃更達が並ぶと、程なくしてホームに電車が入ってくる。しかし、その車内も既に混雑していて、刃更達が乗り込むと当然のように乗車密度はさらに増す事になった。座席は完全に埋まっており、吊り革や手摺りも持つ場所がなかったが、刃更は何とか柚希と共に車両の連結部分付近——扉前へと入り込む事に成功。柚希が扉に背をもたれ、刃更がそれに覆い被さる体勢までどうにか持ち込めた。それでも限られた車内空間では、否応なしに互いの身体が密着してしまい、

……う、こいつは……。

ラッキーかも——違う、駄目だ余りよくないぞこの体勢。本音がポロリしちまった。だが柚希の身体の温もりと柔らかさ、そして匂いをどうしようもなく感じてしまい、

「えっと……大丈夫か柚希？」

電車が動き出してから、刃更が少し顔を赤くしながら問うと、

「私は平気。刃更は……？」「俺も何とか——っと!?」

ガタンと電車が揺れた拍子に、傾いた背後の人垣に刃更は押されてしまう。

「あ……」「わ、悪い！」

短い声と共に顔を赤くした柚希に、刃更は慌てて謝った。ただでさえ密着していたというのに、今のでさらにとんでもない体勢になってしまった。こちらの右足——その膝を、柚希の太股と太股を押し広げるように間へと入れてしまったのだ。

太股の辺りが、完全に柚希のスカートの中に。というか、

……うわ、これひょっとして……っ。

こちらの膝上辺りを左右から挟んでいる柔らかい感触は、柚希の内股だろう。

だとしたら、こちらの太股の上にある柔らかい感触って、

「んっ……刃更、脚が……当たって」「す、すまん……っ！」

とんだ「当ててんのよ」状態。電車が微かに揺れる度、柚希は「ん」と鼻を鳴らしたような声を上げ、ピクンと躰を小さく震わせる。気まずいどころの騒ぎではなかった。刃更は何とか足を後ろへ戻そうとするのだが、背後に隙間なく人がいるせいで、すぐに前へと

押されてしまう。諦めずにそのせめぎ合いを何度か行なっていると、柚希がキュッとこちらの胸にしがみ付いてきた。恥ずかしそうに頬を赤くしながら視線を俯いたものにして、消え入りそうな声で告げられた言葉。その意味を理解し、一瞬で刃更の鼓動が速くなる。

「ば、刃更……そんなに動かないで……先刻からずっと擦れてる」

「――っご、ごめんっ！　俺そんなつもりじゃ……ど、どうすれば良いっ？」

「そのまま動かないで……んっ、そうしたら多分、平気……だから」

「わ、解った――他は？　何かできる事あるか？」

「……なら背中に……腕を回して、しばらく抱き締めてて」

「――え？　な、何でだ……？」

「身体が扉に押し付けられてるから……ちょっと痛くて苦しい」

あ、そういう事か。だったら仕方がない。仕方がない、よな……この場合。

「じゃ、じゃあ失礼して……」

刃更は柚希の言う通り、背中側に両腕を回して抱き締めた。

すると、柚希の背中と扉の間に僅かにだが空間が生まれ、

「ど……どうだ？」「ん……少し楽になった」

その言葉に刃更は胸を撫で下ろしたものの、しかし鼓動は治まらなかった。

柚希の身体は温かくて柔らかくて、**それに良い匂いがして――何よりも**、

東城刃更の右脚は、今も野中柚希の太股の間に差し入れられたままなのだ。

そんな刃更と柚希の様子を、隣の車両から窺っている者達がいた。

刃更が家を出た直後から、密かに後をつけていた二人――澪と万理亜だ。

「電車の中で抱き合うとか、先刻からもうバカップルみたいになってますね、あの二人」

「……」

「どうしましょうか澪さま。取り敢えず、引き続き様子を――澪さま？」

「……」

「澪さ……痛っ!?　痛たたっ、澪さまそれは手摺りではなく私の手首、手首ですよっ!?」

「ふ、ふーん。野中と出掛けるとは言ってたけど、電車の中であいう事しちゃうんだ」

努めて平静を装いながら、澪はギリギリと右の手を握り締めた。

「ひぃぃっ、澪さま落ち着いて下さい！　このままでは私の手首がえらいことにっ！」

万理亜の切羽詰まった声は、しかし澪の耳には届かない。

何せ扉を二枚隔てた向こう側では、刃更が柚希を抱き締めているのだ。

——刃更が柚希と出掛けると伝えてきたのは、昨夜の夕食後の事だった。

「良いか？」と問われては駄目とも言えない。確かに澪と刃更は家族だし、彼は澪を守ってくれると約束もしてくれた。主従契約だって意図せぬ形とはいえ結んでいる。だが、だからといって四六時中刃更を束縛する権利は澪にはないのだ。でも、

……し、心配する権利ならあるわよね。

別に刃更と柚希のデートを邪魔するつもりはない。彼女とは互いの立場から色々あったが、学校の屋上や都立公園での白仮面との戦闘を経て解り合えた部分は少なからずあるからだ。だが、柚希は変なところで積極的すぎるのである。再会した刃更にいきなり抱きついたり、朝から人の家に上がりこんで刃更が入っている風呂場へ突撃したり。もし二人きりにしたら、もっととんでもない行為に及ばないとも限らない。

だからこの尾行は正当な追跡。この前は刃更と柚希が二人きりになると思うと、嫉妬心から呪いが発動してしまった事があったが、今は特に問題はない——つまり、

「そうよ……違うんだから。嫉妬とかあたしはそんなの……全然」

「ええ解ってますっ！　澪さまは刃更さんが心配なだけです！　だから澪さま、ちょっと握力を緩めましょうっ？　私の左手がすっかり鬱血して、結構な紫色ですよっ!?」

呟くように言った澪に、万理亜は涙目で懇願する。しかし、電車がとある駅に停まり、

「あ、降りた！　やっぱりここで乗り換えるみたい。行くわよ万理亜っ！」

刃更と柚希の後を追い、澪も電車を降りた。決してはぐれないように、万理亜の左手を一層しっかりと摑むと、気のせいか「ゴキッ」という音と、万理亜の「ひぐぅっ!?」という短い悲鳴が聞こえた気がしたが澪は構わない。主従契約を結んでいる以上、その気になれば刃更の居場所を知る事はできるが、離れた場所で何をしているかまでは解らないのだ。

今はとにかく、刃更と柚希を一瞬たりとも見失う訳にはいかないのである。

3

乗り換え一回、所要時間四十分を経て電車は目的の駅に到着した。

時刻は昼前。まずは食事にしようと柚希が提案すると、刃更も賛成してくれて。

柚希の希望で、ハンバーガーチェーンの店で少し早めのランチにした。

別に柚希は、ファストフードが好きな訳ではない。だが高校生が恋人と行く店として、最も相応しい場所はこういう店だと思ったのだ。

——勇者の一族として生きてきた野中柚希は、普通の高校生がどういうものか解らない。

柚希が現在都内の高校へ通っているのは、先代魔王の遺児である成瀬澪の監視任務を遂

刃更が寝ているベッド――その布団の中にいる、一人の女の子が原因だ。その少女が布団の中を通り越し、刃更が着ているTシャツの中にまで潜り込んでいるのである。

さらに、刃更の眼の前には少女の可愛らしい顔があった。つまり、既に刃更が頭を通している襟ぐりに、少女も頭をすっぽりと通しているのだ。

「お早うございます、刃更さん」

「万理亜……？　って、いやちょっと待て――うおっ!?」

壮絶の対面二人羽織りのため、軽い身動きもままならない。

――いや、物理的に不可能ではないのだ。刃更がパジャマ代わりに着ているTシャツは大きめで、生地も伸縮性がかなり高い。首回りもゆったりしているため、やろうと思えば多少の無茶はできるだろう。だが――できたとしても本当にその無茶をやるか？

「いやん。もう駄目ですよ、刃更さんてば。無理に起きようとしたら結構危険です」

その反応に軽くムカつくが、突っ込みは入れられない。代わりに刃更はギョッとなった。万理亜が潜り込んできているTシャツの中、刃更の胸から腹の広い範囲が柔らかくてスベスベした感触を得ていたからだ。それは間違いなく万理亜の素肌によるもの。つまり、

「お、お前……人のTシャツの中に、裸で――」

「いやですね刃更さん。服を着たまま殿方のベッドに入るだなんて、そんな無作法をこの

私がする訳がないじゃないですかー」

「何だその無駄な気遣いっ！」

だったら先に、人のTシャツの中に入るという最悪の無作法に気を遣え。

「――っていうか、何だってこんな事態になるまで起きられなかったんだ俺は？」

軽くショックだ。すると、

「お忘れですか刃更さん。私はサキュバス。夢魔ですよ。眠りの魔法ならお手の物です」

万理亜はうふふーと笑って、

「もちろん普段起きている時の刃更さんには通じないかもしれません。ですが、寝ていて無防備な時ならバッチリなのですよ。油断しましたね？」

「計画的犯行すぎるっ！」

自宅の自室だというのに、オチオチ寝てもいられないとか治安的にどうなんだ。

「またまた刃更さん、本当は嬉しいクセにー。さあ、素直になるのです」

悪戯っぽい笑みを浮かべると、万理亜はこちらの首の後ろへ腕を回してより身体を密着させ、まるで押し付けるようにして肌を滑らせてくる。

……ちょっ、これはヤバいって……っ。

顔立ちが幼く身体が小さくても、万理亜は立派な女の子だ。その外見はとびっきりの可

行するためである。そこにあるのはただ、勇者としての使命だけだ。

……でも、今だけは。

せめて今日だけは、今だけは——普通の女の子でありたかった。

若者の街、しかも休日のため、既に店内は混んでいた。人混みも騒がしい場所も柚希は余り得意ではなかったが、周りの席は若い恋人同士でいっぱいで。何よりも、向かいの席では刃更がハンバーガーを頬張っている。そんな状況に、

「……」「ん？　どうした？」

ふわふわした気持ちが伝わってしまったのかもしれない。不思議そうにこちらを見た刃更に、柚希は「ううん」と首を振った。ハンバーガーの味も、シュワシュワするコーラの炭酸も、何もかも慣れないものばかりだったけれど。それでも野中柚希は、その味を覚えておこうと思う。高校生になった自分と刃更との、大切な思い出の一つとして。

そして食事を終えて店を出ると、本日のメインイベント——服の購入へと向かった。

ランドマークとしても有名なファッションビルに入るなり、

「っと、凄いなこりゃ……」

隣の刃更が気圧されたように呟いた。ビルの中は、流行のオシャレを求める女の子達でいっぱいだったからだ。大きめのボリュームで流れるＢＧＭが一層の活気を感じさせる。

——ところがここで問題が発生した。**エスカレーターで上へ向かいながら一通りショップの前を通るのだが、正直いってどこで買い物をすれば良いのか解らないのだ。**

……迂闊。

てっきりここへ来れば、自然と服が見つかるとばかり思っていたのだが。一階には確かインフォメーションがあったが、正直何を訊けば良いのかさえ解らない。

どうするべきか迷っていると、それがこの手の場所が初めての柚希の隙となり、

「どうも～、何かお探しですかぁ？」

ふと近くのショップ店員が、いきなり声を掛けてきた。

その様子を、離れた場所から澪は見ていた。

予想外の事態だったのだろう。突然の事に、明らかに狼狽している柚希に、

『急に声掛けちゃってスミマセン～。困った顔してるから助けてあげたくなっちゃって』

女性店員は屈託のない笑みでそう言うと、

『今日はどうしました？　迷ってたっぽいし、特に買うものとか決めずに見て回ってる感じです？　だったらウチとか見ていきません？　秋冬の新作とか揃ってきてるんで』

『えっと……でも』

しかし柚希は難色を示した。柚希に声を掛けたのはストリート系のブランド――それもビビッドな原色を使用した服をメインに売っているショップの店員だったからだ。

とてもじゃないが、柚希のようなタイプが好む服があるブランドではない。澪の知る柚希はあくまで真面目で大人しいタイプだ。刃更とデートという事で若者ファッションの聖地に来てみたのだろうが、

……カモだと思われたわね。

澪は店員の狙いに察しを付けた。明らかに柚希からは、こういう場所に対して慣れてない雰囲気が出てしまっていた。店員が言うように、今は秋冬シーズンの新作が出始める時期。店からすれば一番の稼ぎ時であり、だからこそ販売ノルマも厳しくなる。それこそ中には、やや強引に客に売りつけてでも売上げを確保したい店員もいるだろう。女性店員は畳み掛けるかの如くまくし立てる。

『私って仕事柄、色んな人のオシャレのお手伝いとかするじゃないですかぁ？　きっと力になれると思うんですよ。たとえば、これとか多分お客さんに超似合うんで』

近くの棚にあったパーカーをさっと手に取り、柚希の身体に合わせて、

『ホラ～絶対ヤバイですってこれ。着回しも利くんで、色んな物とも合わせられますよ』

確かにヤバイ。店員が薦めているのはショッキングピンクにラメが入ったパーカーだ。あれを柚希に薦められるのは、相当に面の皮が厚くないと不可能である。しかも、

「着回しが利いて色んな物と合わせられるのは、アンタの店の商品とでしょうに……」

恐らくパーカーを皮切りに、トータルコーデと称して様々な商品を買わせるつもりなのだろう。グイグイ押しまくる店員を見て、こちらの隣で万理亜が、

「あの幼馴染さんが困ってるのに、刃更さんは助けてあげないんですかね？」

視線の先では、柚希の傍らでどうしたものかと頬を掻いている刃更の姿があった。

「……ううん、先刻から助け舟を出そうとしてるわよ。でも、刃更もこういう場所は慣れてなさそうだから。相手の店員も女の子だし、あしらい方が解らないんでしょうね」

女の柚希にすらできない事を、男の刃更に求めるのは酷というものだろう。

……まあ。

別に柚希が困ろうが、自分の知った事ではない。刃更だってそうである。電車の中であんなに柚希とベタベタして……少しぐらい困れば良いのだ。

澪はそのまま離れた場所から見ているだけで、助けるつもりはなかった。しかし、

「……」「――澪さま？」

隣にいた筈の万理亜の問い掛けを、しかし澪は背中で聞いた。

気が付けば足が前へと歩き出していた。ツカツカと柚希と店員の間に割って入り、
「ゴメン野中、お待たせ～！」
さっと腕を絡めて柚希を引っ張った。
「さ、行こっか」「――え？」
こちらがいきなり現れた事に、柚希は驚いていた。隣に居た刃更もだ。しかし、そんな二人に構ってはいられない。澪は柚希の腕を引いてその場を立ち去ろうとして――ところが前へ進む筈の足が、澪の意志に反して止められた。店員が柚希の袖を摑んでいて、
「っと、もしかしてお友達ですかぁ？　良かったら一緒に見ていきません？　今ちょうどこの人に、ウチの新作を気に入っていただいてたところなんで」
流石に店員も百戦錬磨だ。一度捕まえた獲物を簡単に放そうとはしない。ニコ～っと口元だけは笑いながらも、鋭い眼差しで澪を牽制してくる。しかし澪もニッコリと笑って、
「いらない」「いやでも、これ」「いらない」「ちょ、よく見ないで何が」「いらない」
食い下がる店員に同じ言葉だけを繰り返すと、程なくこちらを引き留めていた店員の手が離れた。もう何を言っても買わせる事はできないと諦めたのだろう。最後に「また見に来て下さいね～」と笑顔でこちらを解放する辺りは、接客のプロとして見事ではあった。
そのまま柚希を引っ張るようにしてショップのないエレベーター付近まで来るなり、

「――言っておくけど、偶然だからっ！」
やおら柚希や後を付いて来た刃更を振り返り、叫ぶようにして言い放つ。
「えっと……澪？」
「たまたまよ！　万理亜と買い物に来たら、たまたまアンタ達を見掛けたの。それで、困ってたみたいだから仕方なく……本当よ！　全っ然そんなんじゃないんだからっ！」
「澪さま落ち着いて下さいっ。あんまり興奮されては自爆っぽく聞こえます！」
「っ――こ、興奮なんてしてないわよっ」
澪は顔を真っ赤にしながら叫んだ。いけない。とっさに割って入ったは良いものの、言い訳など何も考えずに動いてしまったせいで、自分で言ってて支離滅裂だ。
……でも、だって……。
仕方がないだろう。つい身体が動いてしまったのだから。
――多分、自分は柚希に負けたくなかったのだと思う。
先日の公園での戦闘の際、柚希は本来助ける義理などない澪を助けてくれた。刃更を傷付けられたのが許せなかったにせよ、それは紛れもない事実だ。それなのに、ここで澪が困っている柚希を見て見ぬフリをしては、何かで彼女に負けたような気がしてしまう。
そう、これはきっと性分。成瀬澪は、野中柚希に負けたくない――それだけなのだ。

「まあでも助かったよ。あのままだと確実に買わされてたからな……なあ柚希？」

「……」

嘆息交じりに言った刃更の隣で、柚希は無言で頷いた。その表情が少しだけ悔しそうなのは、澪に助けられた事が面白くないというよりも、助けられてしまった自分を不覚だと思っているといったところか。

「で、どうだ柚希？　これまで見た中で、良さそうな店とかあったか？」「それは……」

柚希が言葉を濁すと、刃更は優しい表情になって、

「そっか……柚希はどうしたい？　もう少し見て回ってみるか？」

刃更の問い掛けに柚希は黙り込んだ。それは恐らく思案ではなく葛藤の沈黙だ。すると、

「あのー……何なら私達がご一緒しますが？」「ちょっと、万理亜っ!?」

いきなりな提案に慌てた声を上げる澪に、万理亜は平然と、

「いえ、お二人ともこの手の場所には不慣れなようですし。その点、澪さまが居れば先刻のように押し付けられそうになっても、上手く断ってあげられるじゃないですか」

「それは、そうかもしれないけど……」

でも。そんなデートの邪魔を許可するような話、柚希が承知する筈がないだろう。

「どうする柚希……？」

刃更に意思を訊ねられると、柚希はしばしの沈黙の後スッと眼を瞑り、

「……解った」

やがて何かを諦めたように、万理亜の提案を承諾した。

そして柚希は静かに瞳を開けると、驚くこちらをジッと見詰めて言った。

「成瀬さん――良かったら服を選ぶのを手伝って欲しい」

柚希の頼みを澪は承諾した。

別に柚希の手助けをする事にそれほど抵抗は感じなかった。もしそんなものがあれば、そもそも先程の女性店員から柚希を助けたりなどしていない。

――そのためか、その後の買い物は比較的スムーズなものになった。

柚希の希望を聞いた澪が、彼女が希望するようなデザインの服を扱っている店へ案内。店員を上手に使い、一緒に柚希の服を選んであげて。挙句には、

「……ホラ、こんな感じよ。どう？」

服の上手な着こなし方が解らないという事で、澪まで試着室に一緒に入って服を合わせるのを手伝ってあげた。本来こういうのは店員の仕事なのだが、先程の女性店員の強引な

接客が尾を引いているのだろう。柚希は、澪に手伝って欲しいと頼んできた。
「うん……良いと思う、とても」
すっかり垢抜けた自分の姿を見ながら、柚希はコクンと頷いた。少しだけ頬が紅潮しているのは、澪のコーディネートに満足している証だろう。
「――刃更、見て」
カーテンを開けて外に出た柚希が、刃更の前でくるりと回って見せる。
「ん？　へえ……凄いな、そういう服も似合うんだな」
思わず感嘆の声を上げる刃更に、「ん」と柚希は嬉しそうに表情を柔らかくした。それは澪には決して見せる事のない、普通の女の子としての柚希の表情だった。
すると、スッと万理亜が寄ってきてこちらへ耳打ち。
「良いんですか澪さま？　こんな敵に塩を送るような真似をして」
「……あのね、アンタが提案した事でしょうが」
「いや、まあそうなんですけど……だからって、本当に真面目に選んでどうするんです？　あの女が刃更さんに色目を使ってしまっているじゃないですか」
「だからって手を抜いたりおかしなものを薦めたりするのは、あたしの主義に反するの」
女が一度した約束だ。いい加減な事はしたくない。何より卑怯な真似をすれば、自分

が柚希に劣っていると認めるようなものだ。そんな事ができる筈ないだろう。

澪が選んだ服を刃更に見せ終えると、満足げに柚希は試着室へと戻ってきた。

着ていた服を脱いでブラとショーツだけの下着姿になると、スラリとした長身の柚希のスタイルの良さが一層際立つ。そんな柚希のしなやかな肢体を隣に立って鏡で見て、

……やっぱり綺麗よね、この子。

改めて澪は、柚希の魅力を目の当たりにした。透き通るような柚希の美しさは、澪にはないものだ。身体のラインも澪とは別種の女らしさを感じさせる曲線を描いており、同性ながら軽く見惚れてしまう。学校で自分とは異なるファン層がいるのも納得だった。

とはいえ羨む事はしない。人には人に合った魅力がある——要は服と同じだ。自分には自分の魅力があると思うし、その点においてならば自分は柚希に負けていないと思う。

……それよりも。

驚いたのは、柚希が自分や万理亜に同行を頼んできた事の方だった。わざわざ刃更とのデートに選んだ程だ。強引に店員に迫られた事で腰が引けてはいたものの、折角来た以上もっと見て回りたかった——それが柚希の本音だったのだろう。だが、だからといって澪に頼む事には抵抗があった筈だ。それなのに、柚希は素直に感謝の言葉を口にする。

「ありがとう、成瀬さん」

「別に……店員と一緒に服を選ぶのを手伝っただけよ。大した事はしてないわ」

ぶっきらぼうに澪が答えると、「ううん」と柚希は首を振った。視線を落として、

「そんな事ない。私はこれまで、こういう場所に来た事がなかった……一族の里に居た頃はずっと修行ばかりだった。だから、正しいデートがどういうものかも解らない」

「……そう」

「私は刃更と一緒に居られれば、それだけで嬉しいけれど……多分、こっちで一般人としての生活に慣れている刃更は、退屈してたと思う」

静かな声で言われ、改めて柚希が勇者の一族である事を澪は思い出した。

そして——自分が先代魔王の血と力を受け継いでいるという事も。

——だが、澪と柚希とでは己の立場を理解したタイミングが決定的に異なっている。

澪が自分の本当の素性について知ったのは半年前——両親だと思っていた養父母が殺された日だ。それまで澪は普通の女の子として生き、普通の幸せを享受してきた。

しかし、対する柚希は物心が付いた時には自分がどういう存在か知らされ、修行をさせられてきたのだろう。無論それを不幸だと決め付けるのは傲慢だ。勇者の一族にはこの世界を守るために戦うという使命があるが、当然ながら幸せを感じる事もあった筈だ。

……だけど。

それでも普通の人間が得る、当たり前の幸せに憧れを抱いた経験はあったに違いない。
思わず黙り込んでいると、想いが表情に出てしまっていたのか、柚希は無機質な声で、
「別に貴女は気にしなくて良い。お陰で刃更を悩殺できる服が買えた」
「悩殺って……アンタね」
「おまけにデートの仕方も勉強できた。今日の経験を活かして、今度は刃更と二人だけでもっと上手くデートしてみせる」
しれっと柚希。流石にこれには聞き捨てならなくて、
「ちょっと――アンタまさか、また刃更とデートするつもりなワケ？」
「当然そのつもり。さあ早く次の店に案内して、私に服を選んで」
この女……人に物を頼んでおいて、随分な上から目線ではないか。しかし、
「良いわ――やってやろうじゃない」
柚希が放った挑発を真っ向から受け止め、澪はフンと不敵に笑った。
一度約束した以上、最後まで付き合いはしよう。手だって抜かない。
だが忘れて貰っては困る。
新しい服を買う事ができるのは――綺麗になれるのは、何も柚希だけではないのだ。

それから色んな店を回り、澪や店員の助けも借りて。
ようやく柚希は、今回購入する服を決定した。
澪や万理亜も自分達の服を選び始めると、途中からは競い合うようにして試着をするようになり、柚希達は次々に刃更の前で新しい自分を披露していった。
これまで知らなかったファッション用語に、考えた事もなかったコーディネート。どれも新鮮なものばかりで――きっと自分はその半分も理解できなかったけれど。それでも刃更と一緒に休日を過ごす事ができて、柚希は楽しかった。澪や万理亜にしても、変にこちらのデートを邪魔するのではなく、真っ向からぶつかってきたため、不快に思う事はほとんどなかった。もちろん欲を言えば刃更と二人きりが良かったが、それでも澪達に救われた場面が何度かあったのも事実だ。だから――これで良かったのだと柚希は思う。
「……それじゃあ、買って来る」「ああ。俺達は店の外で待ってるよ」
そう応えた刃更に頷きを返し、柚希は会計の列へ並んだ。多くの店を回ったせいか、腕時計を見れば既に時刻は夕方から夜へと変わりつつあった。ずっと照明のある建物内で過ごしていたため実感しにくいが、ビルを出れば外は暗くなっている事だろう。
……そうだ。

電車で帰る前に、刃更とどこかで何か食べて行こう。服を選ぶのを手伝って貰った事もあるし、仕方ないから澪や万理亜も誘ってあげても良いかもしれない。

小さく笑みを浮かべた柚希は、チラリと背後を――刃更達がいる店の外を振り返り、

「――――」

視線の先にあった光景に、思わず瞳を切ないものにした。会話の内容は遠くのため聞こえない。だがその表情から、恐らくは万理亜が澪をからかい、それで澪が怒って、そんな二人に刃更はやれやれと苦笑を浮かべているのが、はっきりと見て取れたからだ。

何より、澪や万理亜を見詰める刃更の横顔は穏やかで。

野中柚希は、自分の手の届かない場所に、自身が求める幸せの形を見てしまう。

――勇者の一族である事を止めた刃更は、新しい場所で新しい家族と暮らし、さらには彼女達のために戦う事を決めている。それが刃更の現在であり、見据えている未来だ。

そして――そんな刃更にとって、柚希は過去の象徴でしかない。刃更と共に五年前に《里》を襲った悲劇の当事者である柚希は、今も刃更の心を苦しめ続ける過去そのもので、澪との未来を見ている刃更にとっては邪魔にしかならない。

「……っ」

だからとっさに柚希は視線を逸らし、刃更達に背を向けた。もうそれ以上は見ていられなかったからだ。後はただ俯き、会計の列で自分の順番が来るのを待ち続ける。そして、

「お次のお客様、どうぞ～」「……」

自分の番が来た柚希は、レジの前へと向かおうとして――ふと横から腕を取られた。触れられるまで、まるで気配を感じなかった。驚愕と共に相手を見て、

「っ――？」

柚希は思わず息を呑んだ。そこに自分のよく知る顔がある。

自分と同じ――冷たい瞳をした少女が。

「胡桃……」

呆然とその名を呼ぶと、少女は淡々とした声で告げる。

「《里》が正式な決定を下したの。新しい指令も下りてる――来て」

一息。

「馴れ合いの時間は終わりだよ……お姉」

「……ん？」

澪や万理亜と会話をしていた刃更は、ふと違和感を得て眉を顰めた。

自分達が待っていた柚希の気配が、不意に消失したのだ。

「柚希……？」

急ぎ会計の列の方へと視線を送るが、しかしそこに居る筈の柚希の姿はなかった。どれだけ店内を見渡しても。どれだけ周囲を見回しても。先程まで一緒だった野中柚希の姿は、刃更達の前から忽然と消え去っていた。

4

結局その後、柚希を見つける事はできなかった。

刃更達は店員に話を訊いたが解らないと言われ、その後もビル内の他の店などを見て回ったり、外に出て周囲を捜しもしたがやはり姿はなく。何度も携帯に掛けてみたのだが、向こうはずっと圏外のままだった。恐らく電源を切ってしまっているのだろう。これではGPS機能で捜す事もできない。

「……どうしたんでしょう？　先に帰ったんですかね？」

「まさか……あたしやアンタだけならともかく、刃更もいるのよ？　有り得ないわ」

隣で交わされる万理亜と澪のやり取りを耳に入れながら、しかし刃更は別の事に想いを馳せていた。それは柚希と二人だけで居た時に感じていたもの——視線だ。

……でも。

程なくして澪達がやって来て、それからは特に視線を感じなくなった。タイミングも良すぎたため、てっきり澪達がこちらを見ていたのだとばかり思っていたのだが。

まさか——他にもこちらを見ていた者が居たという事だろうか？

電車で地元へ戻った後、念のため柚希のマンションへと向かったのだが、

「……駄目だ。いない」

最後にもう一度携帯に掛けてもやはり圏外。いよいよ打つ手をなくした刃更達は、仕方なく東城家へと帰る事にした。

「……」「……」「……」

空には雲が掛かり、街灯が照らす夜の帰り道を刃更達は黙って歩く。先刻まであんなに楽しかったのに。その時間を共有できていたというのに。それがまるで嘘みたいな沈黙。

……こんな時。

もし——自分と澪とのように、柚希とも主従契約を結んでいたなら。すぐにでも、柚希の居場所を感じ取ってやる事ができるのだろう。しかし、

……何を考えてんだ、俺は。

刃更はすぐに、己の安直な考えを振り払った。不安を解消したいあまり、思考がおかしな方向に行ってしまっている。だが、もし柚希に何かあったら――そう思うと、刃更の胸はどうしようもなく締め付けられた。

――五年前、一族の里を襲った悲劇。あの日、あの時、多くの仲間の命が失われ、己の力を暴走させた刃更はより禍根を深いものにしてしまった。それでも救われた命もあって、その一つが他ならぬ柚希だったのだ。そんな柚希に何かあったら、自分は――、

「……刃更？　どうしたの、刃更！」

横から強く腕を引かれ、刃更はハッとなった。

「大丈夫ですか、刃更さん……？」

「……ああ、大丈夫だ。悪い……ちょっと考え事をしてた」

力のない笑みで「大丈夫」と刃更が繰り返すと、ふと懐で電子音が鳴った。電話ではなくメールの着信。それでも刃更は反射的な動作で携帯を取り出し、まず相手を確認する。だが、残念ながら相手は柚希ではなかった。刃更が首を横に振ると、隣の澪が「そう……」と小さく呟いた。しかし差出人の名前を見た刃更は、僅かに表情を硬いものにする。名前はなかった。空欄だ。だが、初めて貰う相手であればメールアドレスが表示される筈。それが表示されないという事は、刃更自身がそうなるように細工したからだ。

周囲に知られる事なく秘密裏に手を結び、極秘のやり取りをする用に通常とは別の登録をしている相手。そんな彼がこちらのアドレスで寄越した初めてのメール。

「……」

書かれていた内容は刃更が想像した通りのものだった。だから無言で眼を通すと、すぐにメールを削除しようと決定ボタンを押して、携帯が削除を始めた――その瞬間だった。

ふと辺りが一段階暗くなったのは。さらに周囲からは音が消えており、

「空間がずらされた……？」

周囲の空間との繋がりを強制的に隔絶された。それは一般人の意識を逸らす『人避け』よりも高度な魔法によるもの。その事を理解した刹那――真上から衝撃が来た。

「っ――避けろ万理亜っ！」

刃更はとっさに警告を発しながら、澪を抱えて跳躍した。

「ちょ、ちょっと！」

澪が驚きの声を上げるが刃更は構う余裕がなかった。地面に激突した衝撃が、轟音と共に大気を激しく揺さぶったからだ。刃更は澪を抱えたまま着地して、

「――大丈夫かっ!?」「はい、何とかっ！」

視界の端から来た万理亜の応答に、一先ず胸を撫で下ろす。

愛らしさを誇っており、はっきりいってこの距離はヤバい。女の子独特の滑らかな肌も、控えめながらも柔らかな胸の膨らみも、万理亜の全てが男の刃更にとっては心地良いものでしかない。何よりも、万理亜の動きに合わせて刃更の身体をくすぐる二つの感触があった。擦れる度に少しずつ感触が確かになってきているのは、恐らく万理亜の胸の先で、

「ん……あ、……んっ……ふぅ……」

段々とその幼い表情が艶めき、漏れる声に熱が帯び始め、

「わ、解った……俺の負けだ。頼むからTシャツの中から出てくれっ」

「お断りします」

「な、何でだっ？」

パニくるこちらに、万理亜は浮かべていた満足げな笑みを悪戯っぽいものに変えて、

「刃更さんの服の中は、もはや私のものです。どうしてもと言うなら『万理亜……お前の中に入りたい』とか言って貰いましょうか――そう、甘い声で囁く吐息のように！」

完全に調子に乗ったサキュバスの少女に、しばし無言を返してから、

「万理亜……」「はい刃更さん」

無駄に瞳をキラキラさせている万理亜の脳天に、東城刃更は右の拳を振り下ろした。

ゴスっと鈍い音がした。万理亜は「おおお」と苦悶の声を上げると、涙目になりながら、

「お、女の子に手を上げましたねっ？」

「ああ……俺は男として最低だ。だがな、お前はもっと最低なんだから仕方ないだろ！」

刃更は素早く袖から両手を抜くと、Tシャツの中で万理亜の身体を押して空間を確保。

そして彼女の裸を見ないように眼を閉じた状態で、一気にTシャツの中から脱出した。

上半身裸の刃更は、こちらのTシャツをワンピースのように着た格好になった万理亜に、

「大体『甘い声で囁く吐息』って何だ……まあ何となく意味は解るけど」

「日本語は難しくていけませんね。ですがコミュニケーションで一番大事なのは、伝えるという気持ちだと思います。マインドなのですよー」

「違う。コミュニケーションで一番大事なのは礼儀作法と常識だ」

取り敢えず金輪際、人のTシャツの中には無断で入るな。不法侵入で訴えるぞ。

2

「ったく、何て朝だ……」

やれやれと刃更は部屋を出た。万理亜を裸にする訳にもいかないので、Tシャツを取り返すのを諦め、ハーフパンツに上半身裸という格好で階段を下りてゆく。

――万理亜に対して警告しかできなかったのは、彼女が澪を挟んで反対側に居たからだ。
だが近接戦闘を得意とする肉弾格闘士の万理亜は、とっさの体捌きは得意な筈――そう信じての判断だった。そんな刃更のとっさの判断と選択に、
「ほお――思ったよりは反応良いじゃねえか」
どこかこちらを小馬鹿にしたように、上から野太い声がした。

澪が振り仰ぐ動きで見上げると、宙空には巨漢の男が浮かんでいた。
その身から発せられているのは、禍々しい黒のオーラ。
間違いない。現魔王派の魔族だ。すると少し離れた場所で、
「……どういうつもりです？」
ゆらりと万理亜が立ち上がって言った。敵の魔族をキッと睨み据え、
「今の一撃……私や刃更さんを狙うだけならまだしも、下手をすれば澪さまを巻き込んでいました。それが貴方達、現魔王派の考えという事ですか？」
「あァ？　別に巻き込もうなんて思っちゃいねえよ。下手に殺しちまって、ウィルベルトの力が失われちまったらマズいんでな。だが現場ってのは生き物だ。だったら、たまに起こる事もあるだろうよ――不測の事態ってヤツがよ」
宙にいる魔族は巨漢を揺らしてせせら笑うように、
「大体――上の思惑はウィルベルトの力らしいが、今の攻撃で死んじまうような間抜けが受け継いだ力なんざ、どうせ大した役には立たねえだろ」
しかし、と刃更の方を見て、
「お付きのサキュバスはともかく、そっちの小僧も結構やれるみたいじゃねえか……とはいえ、あのラースが手こずるようなレベルとも思えねえがな」
そう言うと、フンと鼻を鳴らして、
「まあどうだって良いか――どうせウィルベルトの娘以外は殺しちまうんだ」
その言葉に、こちらの腰を抱いたままの刃更が反応した。
「……お前の仕業なのか？」
低く冷たい刃更の声に、巨漢の魔族は怪訝そうに、
「あン？　何の話だ？」
「柚希が消えたのは、お前の仕業なのか？」
刃更は問い掛けを重ねた。すると、ようやく魔族は思い当たったように、
「ああ――あの勇者の一族の女の事か」

そう言った瞬間、澪の隣にあった刃更の姿が掻き消えた。

「えっ――？」

突然の事に、澪が困惑の声を上げた時――刃更の姿はもはや巨漢の魔族の前にあった。

その右手は既に、彼の愛剣ブリュンヒルドを具現化している。

振り抜いた。

刃更が放った横薙ぎの斬撃は、吸い込まれるようにして巨漢の魔族の胴に入った。

――その瞬間、刃更は確かな手応えを得る。

だがそれは、斬撃が通ったものとは異なる硬すぎる手応えで、

ギッィィィィィィィン！

「くっ……！」

甲高い金属音と共に、刃更の右手が痺れる。防がれた。しかも武器や防具によるガードではない。巨漢の魔族の胴が、そのままブリュンヒルドを受け止めていた。

「おいおい、随分と気が短いじゃねえか――ちゃんとカルシウム摂ってんのか？」

魔族はフンと笑いながら、

「あっさりこっちの懐に入りやがって……全身バッキバキに折っちまうぞオラ！」

そう言って、刃更に向かって右の拳を繰り出してくる。とっさに刃更は魔族の胴を蹴り、紙一重で拳の射程外へと回避した。しかし魔族が繰り出した拳はそのまま衝撃波を生み、

「っ？　ぐっ、がああぁぁっ――――――っ!?」

目に見えぬ衝撃をまともに食らい、刃更は後方へと吹っ飛ばされた。そのまま隔絶された空間の端――本来の空間との間にある壁に叩きつけられ、

「何だ、どうしたァ。終わっちまうぞオイ！」

そこへ魔族が迫ってくる。止めを刺すつもりだ。しかし、再び繰り出した拳が刃更に届くより先に、轟音と共に魔族が爆炎に包まれた。澪が放った攻撃魔法だ。

「いきなり出てきて、調子に乗ってんじゃないわよっ！」

さらに連続で炎塊を放つ澪に、

「ハッ……効くかよ、そんなショボイ炎が！」

それでも魔族の突進は止まらない。そのまま爆炎を突き破り、

「――なら、これならどうです？」

その炎をブラインドにして前へと回りこんだ万理亜の拳が、魔族の胴に叩き込まれた。

ズドン！　という重い衝撃音。パワー重視の肉弾格闘士（ハード・ストライカー）である万理亜の一撃は、確かに

魔族の突進を止めて、
「……痛えなオイ」
「えっ――……がッ!?」
まるで振り払うような左の裏拳が、万理亜の小さな身体を吹っ飛ばした。そのまま地面へ叩き付けられる直前で、どうにか刃更が万理亜の身体を受け止めるのに間に合うが、
「最初の威勢はどこ行った！　チョロチョロするしか能がねえのか？」
巨漢の魔族はオーバーモーションで次々と拳を振り下ろし、宙から衝撃波を放ってくる。
刃更達は散り散りになってどうにか回避するものの、とても反撃までは行なえない。
……くそっ、完全なパワータイプか！
単純な力押しに見えるが、パワータイプはその一極集中だけでも充分に戦闘が行なえる。
力は強さだ。大きな力を扱える肉体は、当然ながら頑強で高い防御力も備えており、現に先程は刃更の斬撃をあっさりと防いでいる。恐らく同じパワータイプでも万理亜よりランクは上――しかも衝撃波による攻撃まで可能な中距離拳闘士（シューティング・ファイター）。
問題なのは、刃更の斬撃だけでなく、万理亜が放った拳撃も通用しなかった事だ。これではたとえ距離を詰めても、向こうに有効なダメージを与える術がない。
そうなると、頼みの綱は魔力タイプの澪による強力な高位魔法なのだが――当然ながら、魔法は強力なものほど精神の集中を長く必要とする。よって、

……こうも絶え間なく衝撃波で攻められると……っ。
澪を見るが、やはり魔法を唱える余裕を作れないのか、降り注ぐ衝撃波の嵐を回避するだけで手一杯でいた。恐らくあの体躯なら、スタミナも向こうの方が上だろう。いずれは刃更達の方が先に息が上がり、衝撃波を避けられなくなる――このままでは手詰まりだ。
……だったら。
刃更はスッと腰を落として意識を集中させた。測るのは、宙の敵を斬り裂くための最善にして最短のルートと、そこへ至るために必要な己の速度だ。
そして――刃更が地面を蹴って駆け出そうとした時だった。
「面倒臭ぇな……まとめて始末するか」
そう言うなり、万理亜の相手をしていた敵が想定外の攻撃を放ってきた。
――それまでの直線的に穿つタイプの衝撃波は、拳を打ち抜く事で生み出していた。
その拳を敢えて途中で止めたのだ。すると宙の大気が殴打され――その結果、生じた衝撃波は直線ではなく放射状に広がり、刃更達へと一気に襲い掛かった。
「っ？　このおおおおお――っ！」
仕方なく刃更は己の体内に溜めていた高速移動と攻撃のための力を、迎撃に使用した。

澪や万理亜の前へ出て繰り出した斬撃は《無次元の執行》ではないものの、敵の衝撃波を斬り裂く事に成功。刃更の横から斜め後方へ、放射状に衝撃波が抜けていった。すると、

「おお良いねえ、そうこなくっちゃな！」

自分の攻撃が防がれながらも、巨漢の魔族はむしろ嬉々として、

「だったら――コイツはどうする？」

そう言った途端、ただでさえ太かった魔族の右腕が一回り――否、二回り膨れ上がった。

……っ、まずいっ！

恐らく敵が放とうとしているのは、これまでの比ではない強力な一撃だ。

この時、昔の刃更なら即座に前へ出ただろう。

己の速度を最大限に活かして距離を詰め、敵から攻撃という選択肢を奪ったに違いない。

しかし、今の刃更は迷いを得てしまう。そのまま攻撃に出るべきか、澪や万理亜を守るために防御に徹するべきか、即座の判断を行なえなかった。

そんな刃更の僅かな躊躇の隙に、敵は攻撃のモーションへと入って、

「――――あ？」

しかし、ふと何かに気が付いたように、巨漢の魔族の動作が止まった。一体なぜ？　その答えを、刃更は魔族の胴に見た。宙に浮かぶ魔族――その巨体を何かが貫いていたのだ。

「槍……？」

別の角度から見ていた澪が眉を顰めて呟くと、魔族の身体に急速な変化が生じた。

音を立てて真っ白に凍り始めたのである。

そして瞬く間に全身を固まらせた魔族の巨体は、浮遊する事を止めて地面へ落下。

パリィインと、まるでガラスが割れたかのような破砕音と共に魔族は粉々に砕け散った。

5

後に残ったのは、地面に突き立つ一振りの白い長槍だけだった。

突然の事に、澪達は動く事ができない。そんな不動の静寂の中で、

「――――」

どこからともなく一人の青年が現れた。無言でその槍を引き抜く横顔を見て、

「高志……」

澪は、ふと眼の前の刃更が呆然と呟いたのを耳にした。

名を呼ばれた青年は、手の中にある槍からスッと刃更に視線を移した。その鋭利な瞳に、

「……誰なの刃更？」

「早瀬高志……幼馴染だ。柚希と同じで、《里》にいた頃の」

こちらの問い掛けに対する刃更の答えに、澪は大方の事情を察する。

……道理で、この空間の中に入って来られた訳だわ。

刃更がかつて勇者の一族の里に居た頃、巻き込まれた『悲劇』を澪は知っている。

そして巻き込まれた刃更が、己の能力を暴走させた結果、何が起きたかも。それは多くの人の心に癒える事のない傷を負わせ、刃更が里を追放される事になった原因だ。柚希のようにその事件を経てもなお、刃更に対して好意的な人間は恐らく少ない。

少なくとも——眼の前の青年が刃更を見る瞳は、久しぶりに再会した幼馴染に向けられるようなものではなかった。それでも、

「高志、どうしてお前が……それにその槍、まさか」

まだどこか信じられないように刃更が問い掛けると、不意に、

「うん——正解、それは『白虎』だよ」

笑みを含んだ声がこちらの背後からきた。澪が振り返ると、そこには糸目の青年が居て、

「——っ!?」

その青年を見るなり刃更が表情を一変させ、弾かれたように動いた。
澪と万理亜を庇うようにして、糸目の青年の前に立ちはだかったのだ。
「ちょ、ちょっと刃更……っ？」「どうしたんですか急に？」
尋常ではない様子に困惑する澪と万理亜に、しかし刃更は応えない。厳しい表情のまま、ジッと青年の反応を窺っている。すると、
「やれやれ、久しぶりの再会だっていうのに……そうイヤな眼で人を見ないでおくれよ」
糸目の青年は肩を竦めて苦笑する。そんな青年に、
「斯波さん……何でアンタがここに居る？」
早瀬高志という青年に対してとは、明らかに異なる態度で刃更が問い掛けた。
……刃更？
斯波を見る刃更の横顔には、激しい警戒と緊張の色が浮かんでいた。
「ここに居る理由って……そんなの決まってるじゃないか。《里》の指令だよ」
「ふざけるな。《里》がアンタを外に出すなんて、普通じゃありえない筈だ」
「――ふざけているのはどっちだ」
と、遮るように高志が言った。
「刃更……まさかお前、自分が今居る場所が普通だとでも言うつもりか？」

「どういう意味だよ、それは……」
「先代魔王の力を受け継いだ娘が居るんだぞ。お前はそれを普通と言い張るのか」
「……柚希だけじゃ、こいつの監視は不充分だと判断したって事か？」
問い掛ける刃更に、答えたのは斯波だ。
「いいや、監視なら柚希ちゃんで充分だよ。逆さ。監視じゃ不充分だと判断したんだ」
そこで斯波の言葉を引き継ぐ形で、高志が決定的な宣言を口にする。
「《里》は成瀬澪を準S級監視対象から、準S級消滅対象へと切り替えた。これは正式な決定だ。だから俺達はここへ来たんだ――一族としての使命を果たすためにな」
スッと高志に視線を向けられ、澪は思わず息を呑んだ。言葉こそ消滅という単語を使用してはいるが、高志が言っているのは要は澪を殺すという事だ。澪としては、なるべくなら勇者の一族と敵対する道は避けたいと考えていた。それは現魔王派の魔族を相手にしながら勇者の一族とも戦うのは、状況的に厳しいというのが一つ。
……それに。
元勇者の一族の刃更には共に戦って貰える事になり、さらには現在も勇者の一族である柚希とも先日の一件を通してそれなりに解り合えたと思っていた。だからこそ今日も、買い物を共にできたのだ。だが澪は、そんな自分の考えがいかに甘かったかを思い知る。

現魔王派がそうであるように、勇者の一族にとっても、自分は成瀬澪ではなく――先代魔王ウィルベルトの娘なのだと。それはきっと、穏健派の万理亜であろうと同じで、

「……」

俯き、無言で唇を噛み締めていると、ふと澪の肩に置かれる手があった。

それはこの場でたった一人だけ、澪を澪として見てくれる青年。

家族として、妹として守ろうとしてくれる兄――東城刃更だ。

「――――」

静かに。しかし確固たる意志を込めた瞳で、刃更は高志を見据えた。

それは己の決意の表明だ。右手にはブリュンヒルドが握られたままの状態。だから、

「まあ、そう来ちゃうんだろうなあ……刃更は。やっぱり迅さんの息子だね」

やれやれ、と後ろの斯波が苦笑して、

「とはいえこっちも遊びじゃないからね。《里》を追放された時点で君は同胞ではなく一般人として扱う事になった訳だけど――邪魔をするというなら敵としてみなすよ？」

「ああ……覚悟の上だよ、斯波さん」

勇者の一族では守れない澪を自分が守る。そう決めたからこそ**自分は今ここに居るのだ**。

「それより、一つだけ聞かせてくれ。柚希が急にいなくなったのは……」

「ん？　ああ、柚希ちゃんなら――」

その言葉に、斯波の背後からスッと一人の少女が姿を現した。

「柚希……お前」

刃更の呼び掛けに、柚希は一瞬だけこちらを見ると、しかしすぐに悲しげに眼を伏せた。

感情はどうあれ、向こう側に居る――それが柚希の立場を雄弁に物語っていて、

「《里》は、柚希にも戦わせるつもりなのか……？」

「――どういう意味だ？」

スッと瞳を細めて問う高志に、刃更はやや苛立たしげに、

「そのままの意味だよ。柚希は昔から大人しくて、戦う事が好きじゃなかった。澪の監視役に選ばれたのは《里》の方針なんだろうけど、こいつを無理に戦わせるなんて――」

間違っている……そう刃更が口にしようとして、しかしできなかった。

こちらの言葉を遮るようにして、横から雷球が迫っていたからだ。

「危ないっ！」

とっさに澪が前に出て、魔法の障壁を展開するが、

「――っ？　きゃあああああぁっ！」

障壁にぶつかった雷球が、そのままスパークして澪を吹っ飛ばした。

「澪さまっ！」

慌てて駆け寄る万理亜に、「……大丈夫よ」と顔を顰めながら澪は身体を起こすと、雷球が飛んで来た方向の路地の陰から一人の少女が姿を現した。それを見た刃更は、

「胡桃、お前まで……」

「気安く呼ばないで、この裏切り者っ！」

と、憎悪を思わせるような声音で胡桃は叫ぶ。

「先代魔王の娘を守る？　よくもそんなふざけた真似……この五年、お姉がどんな想いで過ごしてきたかも知らないでっ！」

「――――」

胡桃が発した怒りの叫びに、東城刃更は立ち尽くした。その通りだったからだ。

聖ケ坂学園で再会した時、刃更は柚希の変化に驚いた。会わずにいた五年という時間が、それ程までに柚希を変えてしまっていた。だが里を離れて一族である事を止めた刃更には、柚希の事を心配できるような権利はない。そして、先代魔王の血を引く澪を守るという事は、柚希を始めとするかつての仲間にとっては裏切り以外の何物でもないのだ。だ

が、

「言いたい事はそれだけですか――」

ゆらりと万理亜は立ち上がると、いきなり地面を蹴って跳躍した。パワータイプの脚力が放つスタートダッシュで、一瞬で胡桃との距離を詰めてそのまま殴り掛かろうとし、

「――調子に乗るな、サキュバス風情が」

そんな万理亜以上の速度で、高志が横から霊槍『白虎』で斬り掛かる。その斬撃を、万理亜と高志の間に入った刃更がブリュンヒルドで受け止めた。そして刃更ＶＳ高志、万理亜ＶＳ胡桃で本格的な戦闘に突入しかけた四人を、しかし強引に制止するものがあった。大気を震わすような轟音だ。と同時、空間を隔絶していた結界があっさりと破壊され、

「なっ……!?」

突如、通常空間へと戻った刃更達はとっさに戦闘を停止する。

「はい――そこまで。勝手に盛り上がって、こんな所で始めないでね」

静かな笑みを湛えて、斯波が言い放つ。どこかおどけたような口調で、

「結界を張った魔族はもう死んでるんだ。僕の軽い攻撃一つで壊れちゃうような空間で戦い始めるとか正気かい君達？　それでもし周囲に被害とか出たらどうするのさ」

その言葉に、刃更はゴクリと喉を鳴らした。冗談ではない。確かに魔族は死んでいる

が、結界はまだきちんと生きていた。巨漢の魔族の衝撃波を、完全に空間内で処理できるだけの結界が。それが解っていたからこそ、刃更達は戦闘を始めようとしていたのだ。

「困るな、高志に胡桃ちゃんも……確かに今回やるのは君達だけど、相手がどうあれ感情的になりすぎるなって言っておいた筈だよ。僕はただのお目付け役で、《里》からは刃更達との戦闘を禁止されているんだからさ。あんまり働かせないでくれるかい？」

「……」「っ――解ってるよっ！」

高志と胡桃は不機嫌そうにしながらも跳躍し、斯波と柚希の傍に着地。それを見た刃更と万理亜もまた、警戒しながらも一先ず構えを解くと、自然と両者の間に距離が生まれて、

「そういう訳だから刃更、取り敢えず今日のところはこれで失礼するよ。下手に街を破壊なんかしたら、また長老達の血圧が上がっちゃうんでね。この決着は一週間後。僕らの戦闘に耐え得る結界空間を準備するから、そこで付けたいんだけど――どうだい？」

「……嫌だって言ってもどうせ無駄なんだろ」

「うん、まあそうだね」

さらりと言う斯波に、刃更は訊ねる。

「結界を張るって話だが、場所はどうするつもりなんだ？」

「どうせならなるべく結界を張るのに適した場所にしたいけど、生憎と僕達はまだこの街

を全て把握しきれていなくてね。どこにするか決め次第連絡するよ」

「斯波さんがただのお目付け役なら、俺達と戦うのは高志と胡桃って事か」

「それと柚希ちゃんだね。そっちも三人だから、人数的にも丁度良いでしょ」

「……」

柚希は戦わせないで欲しい――そんな願望を刃更はもう口にする事はできなかった。

せめてと柚希を見つめたが、柚希は最後までこちらと眼を合わせる事はないままで、

「――それじゃあ、一週間後に」

そう言って、斯波達はこちらに背を向けて去って行った。

6

『へえ――いつか来るとは思っていたが、頭の固い長老達にしては対応が早かったな』

高志達との邂逅を果たした後、家に戻った刃更は自室で迅と連絡を取っていた。

――東城家の家長である迅は現在、単身で魔界へ潜入している。

連絡を取りたい相手がいるという話だったが、詳しい事までは聞かされていない。迅が話さないという事は、恐らく今はまだこちらが聞くべき段階ではないのだろう。

そんな迅の携帯には特殊な魔力チップが組み込まれており、魔界での場所や時間にもよるが、条件次第でこうして通話を行なう事もできた。そして、

『しかし、長老共があの恭一を《里》の外に出すとはな……』

一通り事情を話した刃更に対し、迅にしては珍しく真剣なトーンで言った。

「ただ斯波さんは今回はあくまでお目付け役で、戦闘には参加しないって話だけどな」

『まあアイツを外に出す以上、何らかの首輪は付けているだろうが……用心はしろよ』

「ああ、解ってる……」

かつて五年前の悲劇の後。《無次元の執行》を暴走させた刃更に対して、すぐに幽閉論が噴出したのは「前例」があったからだ。刃更が一部の者達から「天才」と呼ばれていたのに対し、斯波恭一を評する言葉は「鬼才」だ。その強すぎる力に対し、余りにも気分屋すぎる性格のため「問題」を起こし、その結果何年も座敷牢に幽閉され続けていた。

正直に言って——今回は戦わずに済むのは不幸中の幸いだった。

よって刃更は、まずは直面している問題へと思考を切り替える。

「……成り行きもあったけど、この間一緒に戦ってくれてから、柚希はそこまで澪と敵対しようとはしていなかったと思う。今日だって皆で買い物に出掛けていたんだ」

無論——そう簡単に《里》が澪を見逃してくれるとは刃更も思っていなかった。

しかし。心のどこかでは、僅かな希望を抱いていた。先代魔王の力を受け継いでしまったとはいえ、それは何も澪が望んだ事ではない。そもそも澪は、自分が魔族の血を引いているとは知らずに、半年ほど前までは人間の女の子として普通に育てられてきたのだ。

よって今後も監視対象として警戒される事は避けられなくても、消滅対象として澪を退治しようとはしないのではないかと——そう願っていたのだが。

『仕方ないだろ。向こうは人間界の平穏を守る事が唯一の使命って連中なんだしよ』

「ああ……解ってる。だけど、守りたいものならこっちにだってあるんだ」

堅く右の拳を握り締める刃更に、

『ま、そういう事だな。あっちの使命の崇高さを否定するつもりはないが、どうしても折り合えないっていうのなら、割り切ってやり合うしかねーだろ』

「……良いのか、親父はそれで？」

澪の受け継いだ力を狙う現魔王派の魔族らを相手にするのとは訳が違う。追放されている身とはいえ、相手は仮にも仲間であり同胞だ。さらに厄介なのは、この世界の平穏を目的とする勇者の一族は、澪が受け継いだウィルベルトの力を脅威としか捉えない。それは、力を手に入れたり利用しようとしている魔族らと異なり、澪を容赦なく殺しに来るという事だ。もし仮に今回、高志達に勝利したとしても、《里》が一度下した決定を覆す可

秋の訪れが見えない夏の終わり。気温はまだ高く、肌寒さを感じる事はない。
寝惚けた頭をハッキリさせるため、刃更が向かったのは洗面所だった。
頭の後ろを掻きながら、木目調の扉を開けて中へと入り、
「――――」
思わず静止した。そこに刃更が同居しているもう一人の少女――成瀬澪が居たからだ。
――刃更が顔を洗い、歯を磨こうと訪れたこの洗面所には、別の役割も存在する。
奥にある浴室を利用する者にとっての脱衣所だ。だから、
「……」
澪の存在とその姿に、刃更は眼を奪われた。
バスタオル一枚――それが今、刃更の眼の前にいる澪の姿だった。
綺麗だった。朝風呂かシャワーかまでは解らない。それでも頬を上気させたその顔は勿論、まだ水滴が残る肢体も、濡れて艶めく腰まである長い髪も、何もかもが綺麗だった。
さらにそのプロポーションは最早、抜群というよりも反則に近い。目の毒すぎる程に大きな胸や、細い腰から尻を通り太股へと抜ける曲線は、日本人離れした魅惑のラインを描いている。その肢体は巻かれた白のバスタオルを色っぽく押し上げ、澪が女である事をこれでもかとばかりに主張していた。

起き抜けには強すぎるその刺激に、刃更が思わず立ち尽くしていると、
「――――っ」
澪がカッと顔を赤くして、息を吸い込むのが見えた。悲鳴を上げられる――そう思った瞬間、刃更は反射的に動いていた。背後にある洗面所兼脱衣所の扉を開けて速攻で外へと飛び出し、どう謝ったものかと思案する。
……しかし。
こういう事態が起きないため、同居を始めてすぐ様々な取り決めを行ない、対策を講じておいた筈だ。ところが扉には「女の子入浴中」の札は掛かっていなかった。もしかして札を掛け忘れた？　いや、そんな迂闊なミスを澪が犯すとは思えない。だとしたら、
……さては、万理亜だな……。
恐らく刃更の部屋を訪れる前に脱衣所の前を通り掛かり、澪が掛けていた入浴中の札を外したのだろう。悪戯好きの万理亜がやりそうな事だ。全く困ったものである。
とはいえ、これでどうするべきかは決まった。澪がこちらの言い分を信じてくれるかは解らないが、きちんと事情を説明し、弁解と謝罪を行なうしかない。だから刃更は「よし」と頷きを一つして――そこでふと気が付いた。いつの間にか、澪がすぐ眼の前にいた。
てっきり烈火の如く怒られると思っていたのだが、しかし澪は何も言わずにいる。

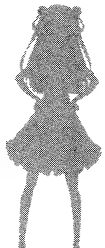
能性は低い。むしろより危険と判断して、さらに強い刺客を差し向けてくるだろう。
——しかも。勇者の一族は、何も日本にしか存在しない訳ではない。
魔族や魔獣が姿を現すのは、別に日本だけに限定されてはいないのだ。
守るべきは日本ではなく、この世界。よって勇者の一族は世界を幾つかのエリアに分割し、それぞれの担当エリアを守っており、その内の一つが日本なのである。よって日本の《里》を敵に回せば、必然的に世界中の勇者の一族を敵に回す事になってしまう。だが、
『別に構いやしねえよ。澪を守ってやるっていうのは、そういう事だろうが』
電話の向こうで、迅はあっさりと言ってのける。
『お前を要監視対象にして里から追放するとか、何かあったら始末する気満々だった上に、俺を監視役にするとか抜かす連中だぞ。果たさなきゃいけない義理なんざ今更あるか』
「それは……そうなんだけどさ」
澪を守るためには、割り切らなくてはいけない事は解っている。
……でも。
刃更の中では、どうしてもかつての仲間達を敵に回す事に抵抗があった。
負ければその時点で終わり。だが勝っても苦しみが増すだけという状況下では、戦いの果てに何を見出せば良いのか解らない。しかも、よりにもよってその最初の相手が高志

や胡桃——さらには柚希とは、余りにも皮肉すぎるではないか。しかし、
『おいこら——まさか、戦う前から勝った後の心配か？　何を余裕こいてんだお前は』
「っ、そんなつもりは……！」
慌てて否定する刃更に、
『先の事を考えるなとは言わないが、欲張りすぎるなよ。どれだけ思い悩んでも、なるようにしかならない事ってのはある。なら、まずはもっと目先の事にこだわれ。少なくとも今、お前が負ける事で失われるものがあって、お前が勝つ事で守れるものがあるんだ。それは、お前にとって絶対に譲れないものなんだろうが』
「……」
そうだ。何を悩む事がある。養護教諭の長谷川にも言われていたではないか。
自分の中で絶対に譲れないラインを引き、それを守れと。
思い出せ。自分が——東城刃更が本当に守りたいものは一体何かを。
「そうだよな……うん、やってみる」
己の中にあった迷いを振り払うように言った刃更に、迅は『そうだ』と笑った。
『ケツは俺が持つ。相手が「白虎」を持ち出そうが関係ねえ——ブチのめしてやれ』

第3章 主従と信頼の向かう先

1

決戦まで一週間。しかし、今のままでは間違いなく高志達には勝てない。
よって刃更達は対策を迫られた。戦闘能力を上げるための鍛錬が必要なのは間違いないが、猶予が限られている以上、効率と効果を最大限に考えて行なう必要がある。
――そのためにはまず、どのような相手かを知らなくてはならない。
柚希が技タイプであり、霊刀『咲耶』を駆使して、中・近距離の戦闘を器用にこなせる全応型剣士である事は澪や万理亜も理解しているだろうが、高志や胡桃は澪達にとっては未知の相手だ。あの二人と戦うには、まず彼らの事を知る必要がある。
鍛錬用に澪が人避けの魔法を使用した河川敷で、



「――まず高志だが、アイツは俺と同じスピードタイプだ」
刃更はかつての仲間について、澪と万理亜に語り始めた。
「戦闘スタイルは高速槍術使い。基本的にはスピードで攪乱しつつ、相手に接近しての攻撃がメインだ。ただし、それは俺がまだ《里》に居た頃――もう五年も前の話だけどな」
「今はタイプが変わっている可能性があるって事？」
まだ異能の知識を得て半年足らずの澪には説明が必要なのだろう。
眉を顰めて訊ねてくる澪に、刃更は「いいや」と首を振って、
「それはない。万理亜は知っていると思うけど、能力タイプは本人の先天的な資質が大きく影響するんだ。勿論、後から他の系統を鍛える事もできるけど、それでも本来の系統を上回るようなレベルにまで行く可能性はほとんどゼロと言って良いと思う」
そして、
「昔は俺の方が実力的には上だったと思うけど、この間少しだけ斬り結んだ感じだと、多分今は向こうの方が上だ……少なくとも、パワーは間違いなく高志の方が強い」
「そんな……」
「ご心配なく澪さま。それでも向こうはスピードタイプですから。腕力が強いといっても、パワータイプの私の力には遠く及びませんよ」

不安げになる澪に、えへんと胸を張りながら万理亜が言った。
「そうだ。魔力なら澪の方がずっと上だし、要は得意分野の話だよ。必要以上に気にする事はない。後は自分の系統から、有効な戦術を組み立てれば良い。魔力タイプの――それも上位魔法士の澪は、とにかく距離を取って戦う事に集中してくれ」
「でも……彼、私達三人でも押されていたあの魔族をあっさりと倒したわ」
珍しく澪が弱気なのはそのせいか。確かに高志は、刃更達を追い込んでいた巨漢の魔族を倒してみせた。だが、
「それも戦い方だ。特にあれは完全な不意打ち――しかも大技を出す直前で隙ができていて、防御も疎かになっていた時だからな。正面からやりあっていたら、あそこまで簡単には倒せていないよ」
もちろん、だからといって高志が弱いという訳では決してないが。
「それよりも問題なのは――」「――あの槍ですね？」
こちらの言葉を継いだ万理亜に、刃更は「ああ」と頷いて、
「高志が使っていた長槍……あれは『白虎』という特殊な霊槍なんだ」
「『白虎』って、日本史の教科書にも出てくる高松塚古墳の壁画にある？」
「ああ。元は中国に起源を持つ『四神』の一角で、西方の守護聖獣とされている。あの霊槍には、その『白虎』の力が宿っているんだ」

「勇者の一族が聖獣を使役する事があるのは知っています。ですが四神クラスの存在となると、その力は伝承に従い中国に縛られると思うんですが……」
「勿論そうだ。そもそも、あの霊槍に宿っているのは、本家の『白虎』じゃない。でも過去に日本にも『白虎』は存在したんだ。高松塚古墳とは別に」
刃更の言葉に、あっと澪が気が付いた。
「――平安京の四神相応ね？」
刃更は頷く。
「そうだ。陰陽道が盛んだったあの時代、京の都の守護を任された陰陽師の一部によって四神は神格化され、その際の媒介として神器が作られた。あの霊槍はその内の一つだよ」
何人もの高名な陰陽師達が持てる力を注いで作り上げ、さらには多くの民衆の信仰によって力を増大させた神器だ。その力の凄まじさは言うまでもないだろう。
「とはいえ、強すぎる武器は使い手を縛る。『白虎』も霊槍としての力を発揮するためには条件と制限が存在している。その点に注意すれば何とか戦える筈だ」
「西方の守護聖獣ですか……やっぱり西へ向かって攻撃させるとマズいんですかね？」
万理亜が発した問い掛けに、刃更は首を横に振る。

「いや逆だ。守護する以上、『白虎』は西に向かって力を発動できない。反対に西を背にして守りながら、東に対して放つ攻撃の時に最大の力を発揮する」

もっとも中国天文学に由来する西方とは、正確には方角の西とは異なる。

だが、あの『白虎』はあくまで日本の平安京における概念を元にした神器であり霊槍だ。この場合は方角としての西で考えるのが正解である。そして、

「『白虎』は中国の五行思想では金だが、四大元素だと風を割り当てられている――スピードタイプの高志には一番適してる属性だろうな」

「風……？　じゃあ、あの魔族を凍らせたのは？」

「本家の白虎を構成する西方七宿の内、オリオンとおうしは日本では冬の星座だからな。そこから限定的に氷の属性も引っ張っているんだろう。でもそれはあくまで副次的なものだ。そうじゃないと、あっさりとこちらに見せたりはしないよ」

「刃更さんは、あの霊槍の本来の力を見た事があるんですか？」

「流石に直接はない。でも『全てを薙ぎ払う豪風』を生み出すって話は聞いた事がある」

とはいえ、と刃更。

「長槍はリーチが長いが、それでも射程なら澪の魔法の方が上だし、懐にまで入った接近戦なら万理亜の方が有利だ。高志との戦闘では、とにかく西側を背負って戦ってくれ。

だが、こっちがそう来る事は高志も承知しているだろうし、おまけにアイツの動きは俺達よりも速い。もし西に回りこまれたら、最悪でも対角線上の東には行かないでくれ」

一息、

「距離と方角――この二つに注意すれば、必ず勝機はある」

2

『うーん、やっぱり都会だと良い場所はそうそうないなぁ。そっちはどうだい高志？』

「……こっちもだ。通常の結界でどうにかするのは諦めた方が良いかもな」

携帯のコードレスイヤホンから聞こえてくる斯波の声に、高志は淡々と応えた。

――刃更達と再会したあの日の晩から既に二日後の昼前。高志達は、手分けをして街を見て回っていた。その目的は、刃更や成瀬澪らとの決戦に適した舞台の選定だ。単純に人的被害が出ない事だけを考えれば、広大な敷地に森を持つ都立公園が最適である。しかし森や山などの自然は、その土地を守り清める霊的ポイントである事が多い。この辺りも、北の一級河川と都立公園の森と丘が交差している事にはきちんと意味があるのだ。

先日はその森における戦闘で、成瀬澪が己の中に眠る力を暴走させ、あわやという事態

に陥ったと柚希からの報告で聞いている。案の定まだ地脈が乱れており、あの場所を今回の戦闘場所に選ぶのは得策ではないと判断した。下手にあの辺りを破壊すれば、地脈が完全に崩壊し、将来的に自然災害によって辺り一帯が壊滅する可能性が出てきてしまう。

それに、今回は『白虎』も持ってきているのだ。その強大な力を発動させられる場所は、必然的に限られてしまう。最悪、力のセーブも考えなければいけないが、

……いや、『白虎』が全力を出せる場所でなければ。

敵は成瀬澪やお付きのサキュバスだけではない。刃更も相手にしなければいけないのだ。

――里に居た頃の刃更がどれだけ圧倒的な存在だったかを、早瀬高志は忘れていない。

天才。

持って生まれたその才能は、残酷なまでに高志とは異なっていて、同じスピードタイプでありながら、どれだけ息を切らしても自分が刃更に追い付く事はなかった。

だがあれから五年。自分はもう昔とは違う。自分だけではない、柚希や胡桃もだ。

そして――刃更も、もうあの時とは違う。それこそ決定的なまでに。

『今頃、刃更達は必死に対策を練っているんだろうねえ……』

「……好きにすれば良いさ。どうせ結果は変わらない」

あの凄惨な事件から今日まで、自分達はずっと厳しい修行を重ねてきた。

あの日の悲劇を忘れる事なく、その絶望の記憶を抱えて。

だからこそ、どれだけ辛い修行にも耐える事ができたし、強くもなれたのだ。

――だが、自分達が強くなれた理由は、それぞれ異なっている。

柚希は、里を追放された刃更への想いを己の強さに変え。

胡桃はそんな姉の助けになりたいと願ったからこそ、今の強さを手に入れた。

そして自分は――あの時のような悲劇が二度と起きないように。

それだけを願い、強くなった。刃更とは、過ごしてきた時間の密度が絶対的に違う。

別に仲が悪かった訳ではない。柚希や胡桃と同じく、高志にとっても刃更は幼馴染だ。

一緒に過ごした時間は、柚希や胡桃にだって負けてはいない。だが、

……里を出て、一体何をしていたかと思えば。

まさか、この世界にとって災いの種にしかならない先代魔王の娘と一緒にいるとは。

あれだけの悲劇を経験しておいて、よくもそんな真似ができるものだ。

一族の使命を忘れ、一時の感情任せの正義感に酔っているのか知らないが、どうやら刃更の中では、あの日の悲劇はすっかり過去の事になっているらしい。

「だとしたら、思い出させてやる……」

自分が犯した罪を。自分が消してしまった、二度と救われる事のない仲間達の魂を。

あの事件では、生き残った者は誰もが被害者であり、そして加害者なのだから。
柚希は刃更に対する想いがあるため奴を庇うだろうが、妹として、柚希のここ五年を見てきた胡桃が、刃更を許せない気持ちはよく理解できる。自分も想いは同じだ。
早瀬高志は吐き捨てる。
「忘れるなよ東城刃更――お前の過去は消せない」
たとえどれだけ時が流れようとも。
自分達の心に刻まれたあの日の記憶は、決して消える事はないのだから。

3

「――――」
成瀬澪は、喉元に受けたひんやりとした感覚に息を呑んだ。
眼の前では刃更が、魔剣ブリュンヒルドの切っ先をこちらへと突き付けている。
紙一重で剣を止められているのは修行だからだ。しかし、これがもし実戦だったら――
相手があの早瀬高志や斯波恭一、野中胡桃なら澪は間違いなく命を落としていただろう。
「――よし、ちょっと休憩にしよう」

表情を緩めた刃更にスッと剣先を引かれ、
「あ……」
己の身動きを奪っていた圧力から解放された事に、澪はぺたんと地面に尻餅をついた。
と同時、全身から緊張が抜け、代わりにどっと疲労が吹き出す。しかし、
「まだよ……まだやれるわ……っ」
それでも立ち上がろうとする澪の肩に、柔らかな白のタオルが掛けられた。
「解ってる。でも続きは少し休憩して、体力が回復してからにしよう。あまり無理をしすぎた状態でやると、集中力を欠いたりして危ないからな」
「……っ」
優しく頭に手を置かれ、澪はコクンと頷いた。
――霊槍『白虎』を持つ早瀬高志を始め、野中柚希・胡桃姉妹、果ては今回は戦闘には参加しないと言っていた斯波恭一の戦闘スタイルまで念のため刃更から聞いた後。澪達は毎日のように実戦形式の修行を行なっていた。
この街には有名な都立公園を始め、大きな河川や複数のゴルフコースがあるなど、人避けや結界などの魔法を使用すれば修行を行なう場所には困らない。そのためこの日も学校が終わってすぐ、都立公園に隣接するゴルフコースの中にある雑木林で、澪達は修行を行

なっていた。刃更の言葉に甘えて、澪が大きく息を吐いて呼吸を整えていると、
「どうぞ澪さま、ミネラル入りのスポーツドリンクです。これで水分補給をして下さい」
「ん……ありがと」
汗と同じ成分が謳い文句のスポーツ飲料のペットボトルを万理亜から受け取った澪は、キャップを開けて喉を潤した。心地良い冷たさが、喉を通して体内へと流れ込んでゆく。
「――あ、刃更さん。今度はまた私の相手をお願いできますかね？」
「ん？　ああ解った」
今日の修行を開始して既に二時間。澪だけでなく、万理亜の相手も一人でしているというのに、刃更に疲労の色は感じられない。
「では行きます」「ああ――いつでも」
短く言葉を交わすと、二人は表情から笑みを消し――次の瞬間、真っ向から激突した。
ブリュンヒルドを振るう刃更と、徒手空拳ながら怪力の万理亜による接近戦が、澪の眼前で繰り広げられる。刃更の愛剣ブリュンヒルドは、片刃ながらもその剣身は巨大かつ重厚だ。よって峰を返しても重い剣撃を放つ事ができるのだが、サキュバスであり、さらにパワータイプとして身体能力の高い万理亜は刃更の剣撃を受けても平然としていた。
無論、これは訓練だ。刃更も本気で打ち込んではいないのだろうが、もし澪があれを下

手に受ければ、骨が折れるどころか砕けてしまう。互いに攻守を入れ替えながら、刃更の放つ剣撃と、万理亜の繰り出す拳撃と蹴撃の応酬が次々に行なわれ、
「……」
そんな二人の戦いを見ながら、澪は心の中で悔しさを覚えていた。
……解ってはいたけれど。
ここ数日、澪は己の力がいかに不足しているかを痛感していた。
世界の理の外にある力や存在を知ってからおよそ半年。幸いにも魔法の才能はそれなりにあったのか、強力な魔法を唱える事ができるようにはなっている。
万理亜に言わせればそれは驚異的な成長スピードらしい。しかし、これまでも万理亜を相手に鍛錬を行なってきてはいたが、やはりまだ自分は刃更達と比べると圧倒的に実戦経験が足りていなかった。
そのため刃更や万理亜と実戦形式での修行を行なうと、最初こそそれなりに良い勝負ができるのだが、戦闘の緊張やプレッシャーに慣れていないため二人より先に肉体的・精神的に消耗してしまい、徐々に追い込まれてしまう。
修行でこれなのだ。実際の戦闘はもっと消耗が激しい。しかも、間もなく戦う事になる勇者の一族の早瀬高志らは、刃更と同等かそれ以上の実力の持ち主ばかり。

……このままじゃ。

自分だけが足を引っ張ってしまう。そんな気がして。

決戦は四日後だというのに――澪の中で、焦りと不安だけが募ってゆく。

4

朝起きて学校へ行き、放課後は暗くなるまでひたすら修行、そして帰宅して就寝。

この三つを繰り返すと、あっと言う間に数日が経過した。

そして、決戦まであと二日と迫った晩――刃更は高志から連絡を受けた。戦いの舞台が決まったのだ。世間話は一切なく、場所と時刻だけを告げられて電話は切れた。

「……」

リビングで電話を受けた刃更は、無言で携帯を見つめる。すると背後の扉が開き、

「……決まりましたか？」

静かな声と共に万理亜が入って来た。浴室で今日の修行の汗を流し終えたのだろう。

刃更は背中を向けたままソファへと向かい、

「ああ。なるべく人が来ないように、夜にやろうって事になった」

「そうですか……まあ、確かにその方が良いでしょうね」

万理亜の声がキッチンの方へ移動すると、冷蔵庫が開く音がした。恐らく何か飲み物でも取り出しているのだろう。そんな彼女に、刃更はソファへと腰を下ろしながら、

「結界は構成や空間内部に細工の余地がないように、戦闘の直前に向こうとこっちの共同で張る。確か澪は人避け以外に、空間式の結界魔法も使えたよな？」

「はい。誰かと共同で結界を張った事はありませんが、恐らく大丈夫だと思います」

ならばこれで舞台の方は整った。後は戦いへ向けて最後の準備を、詰めを行なうだけだ。

「刃更さん。良かったら刃更さんも牛乳飲みますかー？」

「ん？　ああ、じゃあ貰おうかな」

はーい、と返事をした万理亜は、しかしすぐにこちらへ来なかった。キッチンから聞こえてきたのは低い稼動音。どうやら電子オーブンレンジを使用しているらしい。そして、

「刃更さんの分はホットミルクにしてみましたー。お好みでメープルシロップを使って下さい。緊張が解れてよく眠れます」

「サンキュ……って、おい何だその格好っ!?」

プラスチックのトレーにホットミルクの入ったマグカップと、大きめのメープルシロップの瓶を載せてやって来た万理亜は、あろう事か裸にバスタオル一枚という姿だった。

「何って……お風呂上がりとしてはごく普通の格好ですよ？　これで派手なドレスとか着てたら、そっちの方がビックリすると思いますが」
「誰がドレスを着ろと言ったよ！　風呂上がりに着るものなんか一つしかないだろっ」
「エロい下着ですね」
「パジャマだよっ！」
こちらの突っ込みに「まあまあ」と万理亜は言うと、ソファの隣にちょこんと腰掛けた。
そして、小さな身体に残る入浴の熱でほんのりと湯気を立ち上らせ、仄かにシャンプーやボディソープの香りを放ちながら、
「あのですね刃更さん。私、ちょっとご相談があるんですが」
「そ、相談……？」
その幼い外見からは信じられないような色気にドギマギする刃更に、
「はい――とっても大事なご相談です」
成瀬万理亜はそう言って、こちらへと身を寄せてきた。

――万理亜から遅れること数分。一緒にお風呂に入っていた澪はようやく浴室を出た。

やや長風呂かもしれないが、これも修行の疲れを翌日に残さないための対策だ。
それに、これでも今日は短い方だった。いつもならあと十数分は入っている。恐らく今日使用した入浴剤が澪に合っていたのだろう。それでも長くなるため、念のため刃更には先に入って貰っていたお陰で、ゆっくりと芯から温まる事ができた。
仄かに桜色に染まった身体に付いた水滴を、澪はバスタオルで拭いてゆく。マイクロファイバー製のタオルは、澪の濡れた髪からもしっかりと余分な水分を吸収してくれた。
片方ずつ足を入れた着替え用のショーツを尻まで引き上げ、
「ん……」
食い込みを直した指を横に抜くと、澪の尻で伸縮性の高い生地が小さくペチっと鳴った。
後はパジャマ代わりのシャツに袖を通し、ボタンを留めてゆく。上からではなく下からなのは、寝苦しくないように胸の前を開けておくためだ。これだと谷間はおろか胸元まで見えてしまうが、澪が見られて困るような相手はこの家にはいない。万理亜は同じ女だし、
……それに。
刃更にはもう、もっと恥ずかしい姿や状態を見られている。
――別に、変な開き直りをしている訳ではない。恥ずかしさはある。だが、主従契約や一緒にお風呂に入った際に乱れてしまった姿を見られているのに、鉄壁の防御のように服

を着込んだりしては、まるで刃更の事を変に意識してしまっているようではないか。
だから澪は、あの後も敢えて普通に過ごし、時には無防備な姿も晒していた。ふとした時に胸や尻などに刃更の視線を感じると、恥ずかしさを覚えながらも嬉しい気持ちもある。思わぬ形で主従契約を結んでしまい、おかしな弱みも握られてしまったが――刃更がこちらを意識している時は、少なくとも澪が主導権を握れているという事だからだ。
濡れた髪をドライヤーで乾かした澪は、脱衣所を出るとリビングへと向かい、
『刃更さん――もっと澪さまを服従させて貰えませんか？』
ふとリビングの扉の隙間から、万理亜の問題発言が漏れ聞こえて来た。

こちらが口にした提案に、眼の前の刃更が怪訝そうな顔になったのを万理亜は見た。
「……どういう意味だよ？　またからかってるなら」
「別にからかってません。これは刃更さんと澪さまのためでもあるんです」
と万理亜。
「刃更さんのかつてのお仲間との戦いまで、あともう二日しかありません。ここ数日、対策を練って修行を続けてはいますが、やはりそう簡単にレベルアップはできません。現状、正面から彼らとぶつかって互角に渡り合える可能性があるのは、恐らく刃更さんだけでしょう。残念ながら、今の私や澪さまではあと一歩……いえ二歩は及びません」
「それは……」
刃更は言葉を濁した。それは万理亜の分析が正しいという事だ。
恐らく刃更は、万理亜以上に彼我の実力差と戦力差が解っているのだろう。
「頼みの綱の刃更さんも五年のブランクがあります。さらに、あの霊槍使いの方の実力を、刃更さんはご自分以上と仰いました――このままでは、私達は彼らに勝てません」
こちらの断言に黙り込んでしまった刃更に、
「しかし打開策はあります。刃更さんもご存じのように、主従契約を結んだ者同士は、互いの信頼が深まれば主側も配下側も力が強まります。刃更さんと澪さまがそうなれば、勝機が見えてくるんです」
「だから、澪を服従させろって訳か……」
「はい。信頼を深めるといっても、それはあくまで交わした契約に――主従関係に則ったものである必要がありますから。ですが恐らくこれが今、私達に残された唯一の勝利への可能性だと思います。そして、私達はその可能性を諦めるべきではありません」
「……諦めないのは同感だ。主従契約を利用するのが有効なのも事実なんだろう。でも、

「？　あれ……？」

そこで刃更はさらに気が付く。自分の左手が澪の腰に回され、右手が彼女の口を塞いでいた。そして――何故か刃更は脱衣所の外ではなく中にいた。

「……えっと、これは一体……？」

言いながら語尾が軽く震えた。冷や汗がぶわっと吹き出してくる。

あれ、おかしいな？　これは、ひょっとしてひょっとするのか？

つまりあれか。脱衣所の外へ出たというのは、極限状態を迎えて現実逃避をした自分の意識が見せた、実際とは異なる未来の走馬灯のようなもので？　現実の自分は悲鳴を上げようとした澪を強引に抱き寄せ、無理矢理手で口を塞いでいた？

「――――」

何という事だろう。そんなにも誤解で悲鳴を上げられたくなかったのか。どうやら、うっかり肉体が精神を凌駕してしまったらしい。とはいえ状況は悪化の一途を辿り、最悪へと突入しつつあった。強引に抱き寄せ、口を塞いで黙らせてしまった拍子にバスタオルが床に落ちたのか、刃更と澪の身体は完全に密着してしまっていて、

「……」

余りに突然の事態に困惑しているのだろう。どう反応すれば良いのか解らないのか、刃

更の腕の中で澪は身動きもせずに呆然としていた。

何せ今や澪は完全に裸。刃更も着ていたTシャツを万理亜に貸してやったせいで、上半身は裸の状態だ。そんな状態で抱擁を行なえば、どうなるかは火を見るよりも明らかで。

いけないと解っていながらも、刃更が視線を落とすと、澪の豊かすぎる胸が刃更の腹の辺りに密着し、その極上の柔らかさを証明するかのように、いやらしい形に押し潰されていた。万理亜のものとは異なる大きさと感触は、視覚的にも感触的にも抜群の破壊力で、

「わ、悪い、これは――おわっ!?」

刃更は慌てて飛び退こうとして、澪の身体や髪から床に落ちていた水滴で盛大に足を滑らせた。当然、抱き締めていた澪も巻き込む形になり、

「――きゃっ」

自分の腕の中で上がった短い悲鳴に、刃更はとっさに反応していた。宙で体を強引に捻りながら澪を引き寄せる事で、どうにか床に激突する前に彼女の下へ自分の身体を入れる事に成功。己をクッションに変え、澪が受ける転倒の衝撃を軽減。澪をホールドしているせいで両手が塞がった状態だったが、背中と腕や肩で辛うじて受身を取った。

それでも転倒の衝撃で鈍い痛みを得てしまい、顔を顰めながら起き上がろうとして。

万理亜が言う信頼関係だって、すぐに深まったり強まったりするものでもないだろ」

「いいえ。想いの強さは必ずしも時間の長さに比例しません。一日で生まれた想いが一年の想いに勝る事も、それこそ一秒が一生に勝る事だってあります。刃更さんさえ覚悟を決めてくだされば、澪さまが助かる可能性がぐっと上がるんです」

万理亜の言葉に、しかし刃更は硬い表情で無言のままでいた。

「……刃更さん？」

こちらの放った問い掛けに、やがて刃更はゆっくりと、

「万理亜の言う事も解るけど……できれば俺はそれをやりたくない」

その言葉に、万理亜はスッと眼を細めた。この期に及んで、そんな選り好みをしていられるような余裕が自分達にあるとでも思っているのだろうか。

「どうしてです？　家族だから遠慮してるんですか？　それとも義理や仮面であっても、妹相手にはそういう真似はできませんか？」

剣呑な声で問う万理亜に、

「まさか……そういう訳じゃない」

逆だよ、と刃更。

「良い機会だから言っておくけど、俺にとっては澪もお前も大切な家族だ。本当の妹だと思ってる。でも、だからってそんなに信頼しないでくれ。俺は別に聖人君子じゃないんだ。その辺にいる年頃のガキなんだよ。血の繋がっていない女の子と一つ屋根の下で暮らしていて、どれだけ俺が理性を保つのに苦労しているか解るか？　例の主従契約魔法の件がなけりゃ、とっくに何かしでかしてもおかしくないんだ」

「？　それは一体どういう意味です……？」

刃更と澪の主従契約にはサキュバスである万理亜の催淫特性が付加されている。間違いが起こりやすくなりこそすれ、踏み止まらせる理由にはならないと思うのだが。

「解らないか？　呪いを解くためとか、強くなるためとか……そうやって『澪のためでもあるから』みたいなのを免罪符にして、アイツに恥ずかしい想いをさせるのは卑怯だろ。全く不純な感情なしにしてやれるならともかく、俺にはそんな真似は無理なんだから」

「え……そうだったんですか？　でも、最初に主従契約を結ぶために澪さまを屈服させた時は、途中からはかなり冷静な感じだったような気がしますが」

「俺が恥ずかしがったら、澪はもっと恥ずかしくなるだろ。それにあの時は澪が少しでも早く俺に屈服するように、こっちは冷静だって見せる必要があると思ったんだよ」

「な、成る程……」

刃更の説明に、万理亜は軽い衝撃を覚えていた。刃更が恥ずかしがっていた事実に対

してではない。極上の外見とプロポーションの澪が、呪いの催淫効果であそこまで乱れていたのを眼の前で見ている状態で――刃更は、どうすれば澪をより己に屈服させられるかを考えていたと言うのだ。

……あれ、ひょっとして。

風呂場でのケーキの一件では、冗談半分に刃更の事を鬼畜だなどとからかったが、実は刃更は本当にああいう才能があるのではないだろうか。若干戦慄を覚える万理亜に、

「とにかく俺に下心があるのに、澪を助けるためだって言って何かをするのは間違ってると思う。もちろん呪いが発動した時は楽にしてやれたらって思うけど……もしそういう真似をするとしたら、『俺がやりたいから』って言ってする方がまだマシだろ」

「ご自分が悪役になるという事ですか……？」

「まさか。そんな高尚な考えができる訳ないだろ」

ただ、と刃更。

「ああいう行為をするのはあくまで澪を助けるためで、俺にはやましい気持ちはないんて言ったら、それは間違いなく嘘なんだ。そういう卑怯な誤魔化しをしたら、俺は澪と主従関係はおろか、家族としても信頼を結べなくなっちまう。でも俺は、それは嫌なんだよ。たとえ成り行きだったとしても、俺はアイツの主だし――その前に兄貴なんだから」

真剣な表情で言った刃更に、万理亜は思わず眼を丸くした。

夢魔であり淫魔でもあるサキュバスの万理亜は、男性がこの手の欲求にどれだけ弱いかを知っている。そうして腹の底で、女という生き物に対してどれだけ汚く卑怯な事を考えているのかも。ましてやそれが、澪のような可愛い女の子が相手なら尚更だ。

……でも。

眼の前にいる東城刃更という青年は、自身にもそうした欲望がある事をきちんと認め、誤魔化さなかった。そんな刃更を目の当たりにし、不覚にも万理亜の背中を震えるような感覚が駆け抜けて、

「……解りました。それでは別の方法がありますので、そちらで行きましょう」

「そんなのがあるのか……って、おいっ!?」

不意に刃更が慌てた声を上げた。万理亜が刃更の膝の上に乗り、身体に巻いていたバスタオルの結び目を解いたからだ。万理亜は驚愕している刃更のシャツの前を捲り上げると、

「動かないで下さいね……」

そう言って、肌を露わにした自分の躰を刃更へと擦りつけ始めた。以前に刃更のTシャツの中へ潜り込んだ時とは違い、万理亜は己の裸といやらしい躰の動きを刃更に見せる。

それは万理亜の躰の熱と柔らかさを視覚でも刃更へと与えて、

「ま、待て万理亜……急にどうしたっ？」
「澪さまには悪くて出来ないというなら、代わりに私を強くする事に協力して貰います」
サキュバスである万理亜は、欲望や興奮を吸収して己の力にする事ができる。
刃更のように若く、さらには純粋な心の青年のものとなれば、その効果は抜群だ。
万理亜はとろんとした眼で「ふふ」と笑って、
「すみません……でも刃更さんが悪いんです。あんな顔であんな事言うんですから」
自分でも驚くぐらい興奮しているのが解った。サキュバスとしての本能が一気に膨れ上がって抑えられない。万理亜は刃更の胸元に舌を這わせ、さらに吸い付くと、たくましい背中に腕を回してより密着を強めた。口と全身で、刃更の興奮を己の中に吸収する。
「ああ……刃更さんのは美味しいです」
まるで麻薬のようだった。眼の前の青年の全てを吸い尽くしたくなり、万理亜は刃更の臍から下へと手を滑らせた。そのまま彼のパンツの中へ小さな手を潜り込ませると、
「お、おい……！」
ふと刃更の身体がビクっとなった。その敏感な反応が、万理亜をますますたまらない気持ちにさせる。しかし——てっきり自分を見ているとばかり思っていた刃更の眼は、万理亜ではなくこちらの背後を見ていた。

「……？」
キョトンと背後を振り返った万理亜は、そこで動きを静止させる。
扉が開いたリビングの入口——そこに澪が立っていた。
その瞬間、東城刃更は修羅場を覚悟した。
同じ状況だったからだ。万理亜に一緒にエロゲーをやらされてる現場を見られた時と。
否、状況としては今回の方が悪い。何せ今の刃更は、裸の万理亜とほぼ抱き合っているような状態である。怒り狂った澪がこちらへ詰め寄ってくる——そう思い、
「いや、これはっ——」
慌てて弁解しようとしたが、とっさに言葉が見つからなかった。
——この状況は刃更の意思ではなく、万理亜の主導によるものだ。
だが、一概に万理亜が悪いとも言えなかった。このままでは確かに自分達は勝てない。
だから勝つために、澪を守るために、澪を快楽で屈服させ、主従契約の関係を強化して欲しい——それが澪の配下であり、淫魔のサキュバスでもある万理亜の主張だった。
彼女の立場や種族としての生い立ちを考えれば、それはごく当然の提案なのだ。

何か言うべきなのは解っている。それでも刃更が言葉を見つけられずにいると、
「おや澪さま――何をしているんです、そんな所に突っ立って」
あろう事か万理亜が、澪に見せ付けるようにして刃更へとギュッと抱きついてきて、
「――――っ」
それを見た澪がカッと顔を赤くしたのを刃更は見た。完全に火に油だ。
「ま、万理亜っ……？」「（シッ、大丈夫です……見てて下さい）」
困惑の声を上げるこちらに、しかし万理亜が囁いてくる。
……いや、見てろって言われても。
そうこうしている内に、澪はツカツカと刃更達の下へとやって来た。
そして、こちらの眼の前に立つ。だが、
「……っ」
それだけだった。てっきりまた万理亜をしばくなり、刃更に電撃を放つなりするかとばかり思っていたのに。澪は刃更達の眼の前で、顔を赤くしたまま棒立ちでいる。
……澪？
こちらが向けた怪訝の視線に対し、澪は唇を噛んで視線を逸らした。そんな彼女に、
「澪さま……すみませんが、これから私と刃更さんは明後日の戦いへ向けて大事な営みがありまして。そうやってそこに立たれると――はっきり言って邪魔なのですが」
万理亜は、挑発的な笑みを浮かべた。完全にサキュバスの本能に火が付いた状態だ。
「……っ」
そんな万理亜を、顔を赤くした澪がキッと睨む。その表情はどこか悔しそうで、
「どうしたんです、そんな顔して？　まあ、どうしても見ていたいというなら、そこに居て貰っても構いませんが。ただし、私と刃更さんの邪魔だけはしないで下さいね」
笑みと共に、再び万理亜が刃更のTシャツの下から中へと手を入れてきた時だった。
「っ……お願い、待って」
消え入りそうな声で澪がそう言ったのは。

自分が発した制止の懇願に、眼の前の万理亜が手を止めたのを澪は見た。
そしてこちらを見上げてくる。その幼くも妖艶な瞳が言っていた。
どうしました――さあ続きをどうぞ、と。だから澪は、震える声で言った。
「……あたしがやる……ううん、あたしにやらせて」
だって、

「一番強くならなくちゃいけないのは、万理亜じゃない……あたしだもの。だからお願い、刃更――あたしを屈服させて」

「いや、でも……」

戸惑いの声を上げた刃更に、澪は首を横に振って、

「足手纏いは嫌なの……それに、勝つためにあたしに出来る事があるならしておきたい。だって、このままじゃあたし達は勝てないかもしれない。でも、あたし達にはまだ強くなれる方法があるんでしょ？」

「……やはり聞いていたんですね」

万理亜の言葉に、澪は「ええ」と頷いて、

「主従契約にそういう効果があるなら、あたしは構わない。やれる事をやらないで負けたりしたら――それこそ死んでも死に切れないもの」

そして、戦いに負けて命を落とすのは澪だけではない。狙われているのは澪だが、共に戦ってくれる刃更や万理亜まで殺されてしまうかもしれないのだ。

そんな事にだけはさせてたまるものか。

「でも、屈服させろって言っても……お前、自分がどうなるか解って言ってるのか？」

「……うん。多分、主従契約を結んだ時みたいになるんでしょ？」

「それが解ってるなら――」

「――それでも強くなりたいの！」

何故と言わんばかりの刃更に、ギュッと拳を握って、

「勿論……本音を言うと、凄く恥ずかしい……自分があんな風になっちゃうなんて思いもしなかった。自分がどんどん自分でなくなっちゃうような気がして、もの凄く怖かった」

澪は浅く自分の身体を抱きながら、刃更と主従契約を結んだ時の事を思い出す。

自分の本能を曝け出したあの日、成瀬澪は初めて刃更をお兄ちゃんと呼んだ。そして、おかしくなりそうな快楽が何度となく訪れる中、それをくれる彼を自分の主と認めたのだ。

あの時の記憶は朦朧としているのに、刻まれた快楽だけは鮮明で。今でも時々夢に見る。

同じ屋根の下で意識していたのは刃更だけではない。澪もそうだったのだ。

「でも……」

刃更が、あんな風にこちらを大切に考えてくれているなんて思いもしなかった。自分は刃更に主導権を握られたくなくて、たまに無防備な姿を見せては彼をからかっていたというのに。その度に刃更は澪の事を想って、必死に我慢してくれていたのだ。

……あたし、ずっと大切にされてたんだ。

先程の刃更と万理亜の会話を廊下で聞いていた時、澪は身体の芯から震えるような感覚

を得た。それは以前、駅前の喫茶店で刃更がこちらをどう思ってくれているか、柚希に話しているのを聞いた時と同じか、それ以上の感動だった。

だから、澪は顔を赤くしたままそれでも笑みを見せて、

「ありがと刃更……心配してくれて。あたしの気持ちを考えて、時間を掛けてゆっくりと信頼を育みたいって言ってくれて、凄く嬉しかった」

「澪……」

こちらを呼んだ刃更に、「うん」と澪は頷いて、

「でも、あたしは大丈夫……あたしが恥ずかしいの我慢する事で――ううん、刃更に屈服させられて、より強く忠誠を誓う事で、少しでもあたしと刃更が強くなれるなら。あたしはその可能性を諦めたくない。あたしも、刃更と一緒に強くなりたいの」

自分の想いを――願いを、確かな言葉にして刃更に告げると、

「……」

澪はそれ以上は何も言わずに、ただ黙って待った。

何故なら成瀬澪は、東城刃更という青年を知っている。彼がどれだけ自分を想ってくれているかも――ここまで言った自分に、応えてくれないような男ではない事も。そして、

「……解った」

やがてそう呟くと、刃更は膝の上の万理亜を退かせて、ゆっくりと立ち上がった。

そして。こちらの眼の前に立った刃更を見て、澪は先日あった出来事を思い出す。

それはこの間――脱衣所で刃更と遭遇してしまった時の事だ。

――強引に刃更に抱き寄せられ、手で口を塞がれたあの時。澪は信じられなかった。

刃更に対してではない。そんな乱暴な真似をされながら、抵抗できずにいる自分にだ。

風呂上がりでバスタオル一枚というはしたない格好だった。刃更が向かってきた時、てっきり澪は押し倒され、組み敷かれてしまうのではと思った。

とっさに抵抗しようとした。だが腰に腕を回され強引に抱き寄せられたら、主従契約の呪いが発動している訳でもないのに、全く抵抗できなかった。素の自分――素の成瀬澪だったというのに、これから刃更に何をされてしまうのか、それを自分はどう受け止め、どう受け入れてしまうのか――あの時の澪は、ただそれだけを考えていた。

あそこで刃更が慌て出したから、どうにか自分も我に返る事ができた。

……でも。

もしあの時。本当に刃更が何かしようとしていたら、自分は一体どうなっていたのか。

その答えを――あの時とは違う、今の刃更が教えてくる。

そっと澪の頬に触れた刃更の右手が、下へと降り始めた。首筋を滑り、鎖骨をなぞられ、

「んっ……」

くすぐったさの中に淡い快感を得て僅かに身を震わせると、それだけで澪の大きな胸がたゆんと揺れて。来る――そう思った瞬間、澪は胸を揉まれた。

胸は澪の一番の弱点だ。主従契約を結んだ時は、最後の方は直接胸を揉まれて一気に乱れてしまったが、今はノーブラだがシャツは着ている。

布地を一枚挟んだ状態だ。よって、そこまで凄い事にはならないと思っていた。

――だが、甘かった。

「え――そっ、や……ああっ!? ふぁんっ、ふあああぁぁんっ！」

主従契約の催淫の呪いは発動していないのに。服の上からなのに。

信じられないような快感が走り、澪は甘い声を上げていた。

……な、何で……っ？

驚きと共に必死に声を堪えようとするのだが、どんどん快感が強くなり、

「ふあっ、ん……っ」

膝と腰から力が抜けて前へと倒れそうになった澪は、その身を刃更に受け止められる。

「だ、大丈夫か……？」「う、嘘……あたし、何で……？」

驚いたように問う刃更に、いきなり強い快感を得てしまった澪が呆然となっていると、

「駄目ですよー澪さま。呪いが発動してないからって、ご自分が以前と同じと思っては」

ふふ、と万理亜が笑った。

「主従契約を結んだ時、強情な澪さまは中々刃更さんに屈服しませんでした。あの時の快感は、普通の人では滅多に得られないようなレベルのもの。それを九回も味わってしまったんです。さらに一緒にお風呂にも入りましたし、あれからも何度か呪いの発動がありました。そうやって快楽の味を知っていった澪さまの躰は、以前とは比べ物にならないほど敏感になっているんです」

「そんな……そんなのって」

信じられなかった。もちろん知識としては知っている。人の躰は性的快楽を得る程に、性感が開発されてゆくのだと。だが、まだ主従契約を結んで一ヶ月も経っていないというのに、

……あたしの躰、もう刃更に開発され始めちゃってるんだ。

その事実に、思わずぶるりと身を震わせた澪を、刃更がソファへと寝かせてくる。

刃更の顔は少し赤かった。それでも澪の瞳をジッと見据えると、こちらへと手を伸ばし、

「あ……」

刃更の意図を理解した澪は、僅かに声を上げた。すると、こちらの胸元へと伸びた刃更

の手が、澪が着ていたシャツのボタンを上から順に外し始める。
「刃更……あたしの胸、見ちゃうの？」
言いながら、それでも澪は抵抗しない。だがどうしても恥ずかしさが募ってしまい、澪は僅かに眼を逸らして、
「……刃更のえっち」「それは……いや、そうだな」
刃更は己の感情や行動を誤魔化さなかった。それでも澪に謝る事はしない。
そして、澪も抵抗しなかった。自分はこれから刃更に服従するのだ。
だから必死に受け入れる。
少しだけぎこちない手付きだったが、それでも刃更が澪のシャツの前を全て開けるのにそれほど時間はかからなかった。ボタンを全て開けられれば、シャツがワンピースとしての役目を果たせなくなり、穿いていたショーツが露わになって、
……あの時と同じ。
かつて主従契約を結んだ際——最後は直接胸を揉まれた。あの時に着ていたのはブラトップだったため、下から捲り上げられたが、今回はボタンを外せばそれで済む。
あたし、また直接胸を揉まれるんだ——そう思っていると、
「……あ、刃更さん。前にされた事のある行為に対しては、精神的な耐性が生まれます。

もちろん今の澪さまは前より敏感になっていますし、感じる快楽が増幅されるので全く意味がないとは言いませんが……趣向を変えるなどした方が、より効果的かと」
「そうなのか……？」
その言葉に、刃更はふと澪の胸へと伸ばしていた手を止めた。そして、
「……なら、何か良い方法は？　サキュバスのお前なら、その手の知識は豊富だろ」
効果の低い事をして、澪を辱める時間を長引かせてしまわないようにと思ったのだろう。
そんな刃更の問い掛けに対し、万理亜は笑みを浮かべると、
「頼られては応えたくなりますねー……とはいえ、まだ経験の浅い澪さまに、サキュバスの本気の洗礼を与える訳にもいきませんし」
そうですね、と思案する事数秒、
「では——丁度良いので、これを使ってはどうですか？」
そう言って万理亜が手に取って見せたのは、
「メープルシロップ……？」
「ええ。これを澪さまの躰に垂らして下さい……ローションとして使いましょう」
「ちょ、ちょっと……っ!?」
思わず焦る澪に、しかし万理亜は笑みをさらに深いものにする。

「焦るという事は、それだけ澪さまが恥ずかしいからです……ですが羞恥は、屈服させる相手に与える感情としては最も有効なものの一つ。――さあ、どうぞ刃更さん」

「……」

万理亜からメープルシロップの瓶を受け取った刃更は、やがてゆっくりと蓋を開けた。そして澪は、黄金色の液体が自分の躰へと落ちてくるのを見た。

まるでスローモーションのようだった。甘い匂いを放つ液体が澪の胸へ落ち、谷間にとろりとした蜜が溜まってゆく。

「んっ……あぁ……っ」

風呂上がりに加え、刃更に胸を揉まれて火照っていた澪の躰は冷たさを得て――そして準備が調った。自分へと伸びる刃更の両手に、澪は間もなく訪れる強い快楽を覚悟する。

だがこの直後、刃更の取った行動は、澪が全く予想だにしていなかったものだった。

「そういえば澪――お前、先刻の俺と万理亜の会話をずっと立ち聞きしてたんだな」

「え……そ、それは――んうっ!?」

きっと澪を屈服させるために、最も効果的な方法を取ったのだろう。先ほど盗み聞きしていた事実をいきなり指摘され、焦った澪が感じたのは後ろめたさだ。

次の瞬間――主従契約の呪いが発動した。サキュバスの特性である催淫の効果で、極限まで感覚を高められた状態で、メープルシロップ塗れになった胸を直接揉まれた瞬間、

……え？

成瀬澪はふと己の感覚に空白を覚えた。一体何が――そう思ったのも束の間、すぐに事態を理解する。脚の指を何かの角にぶつけた時、痛みを感じるまでにある不意の感覚喪失。神様がくれたかのような一瞬の猶予。それと同じものを今、自分は味わっている。

刹那に意識を加速させながら、その事実を理解した直後、

「――――っ」

激しい快楽の渦が、澪の全てを呑みこんだ。

何もかもが白に染まった世界で。

優しい温もりに包まれた澪は、微睡むような心地の良い揺れを得ていた。どこまでも気持ち良くて、ただ幸せで――それしか澪は考えられなかった。そんな状態がしばらく続き、

「……あ」

ふと澪の視界から白い霧が晴れた。だが、自分がどこに居るのか解らない。すると、

「あ――気付いたみたいですね。澪さま、解りますかー？」

眼の前で、幼い少女が手を振っていた。だが姿は見えていても、それを脳が理解できなかった。少女が裸でいるのを見ても、特に違和感も覚えない。何か言っている事は解るのだが、頭には入ってこなかった。代わりに、

……これ……何の音？

澪は、自分の胸の辺りから水が滴るような音がしているのを聞いた。

一体何だろうと、ぼんやりと思っていると、

「まだとろんとしていて、ご自分の状況が理解できていないみたいですね……」

「――大丈夫なのか？」

ふと澪の耳元で優しい声がした。

……誰？

まるで心の奥底にまで染み入ってくるような声だった。すると、

「この状態なら、口で説明するよりも自分で見た方が良いかもしれません」

そう言うと、眼の前の少女が一旦視界から外れ――少しして、

「……？」

ふと澪の眼の前に、知らない少女が姿を現した。

思わず澪は驚いた。その少女が、余りにも艶かしい顔をしていたからだ。顔を朱に染め、

そのまま、何か柔らかいものに顔を突っ込んだ。
「――ひぁんっ!?」「っ？　す、すまないっ！」
驚いたような声に、刃更はさらなる己の失態を理解。恐らく澪の胸に顔を埋めてしまったのだろう。慌てて澪の肩を摑んで離れようとして、
「ちょっ、やっ……そこは、駄目……っ」
しかし澪が困惑と共に甘い声を上げた。これには刃更も、何事かと驚きを露わにする。
澪の上げた声もそうだが、摑んだ筈の肩がビックリするほど柔らかかったからだ。
――もちろん女の子の身体は男と比べて柔らかく、それは肩も例外ではない。
だが、その感触は明らかに肩とは異なるものだった。そして東城刃更は、ようやく己が置かれた状況を理解する。
「え……っと」
眼の前にあると思っていた澪の顔はそこにはなかった。あったのは割れ目だ。尻である。
一体いつの間にそうなったのか、刃更の上にいる澪はこちらと頭の向きを逆にしていて。刃更が顔を突っ込んでいたのは、澪の胸ではなく股間だった。そして、肩だと思って摑んだ場所は澪の尻で。太股との境目にある左右の曲線部分を両手でがっしりとホールドしてしまった挙句、肩だと思って押し上げようとした事で、その割れ目をむにゅっと押し広

げてしまっていた。図らずも澪の全てを見てしまった刃更に、
「っ――きゃあああああああぁぁっ」
今度こそ澪が悲鳴と共に、刃更の上から慌てて飛び退いた。顔を真っ赤にして床に落ちていたバスタオルを摑むと、自分の身体を隠す様に引き寄せながら、
「あたしが先に入ってたのに、何で入ってくるのよ！　エッチっ！　百回殺すわよっ！」
もっと重大な問題があるだろうに、気を動転させたのかそもそもの疑問を叫ぶ澪に、
「ゴメンっ！　扉に入浴中の札が掛かってなかったから、てっきり――」
「嘘つきっ！　言い訳するなら、もっとマシな嘘を吐きなさいよ刃更！」
「いや嘘じゃないって！　本当だっ、信じてくれっ！」
刃更は首をブンブン横に振りながら、脱衣所の扉を引くようにして開け放つと、
「ほら、掛かってないだろ札？　な？」
「そんな……あたしはちゃんと」
札がない事を見た澪は、信じられないとばかりに、
「まさか刃更、隠したりしてないわよね……お風呂を覗いて、バレたら札を掛け忘れたあたしのせいにして、『これは事故だ』とか言い張るつもりだったとか」
「するかっ！　大体――そんな卑怯な真似をしたら、全部終わっちまうだろ！」

どこまでも陶酔を深めたその表情は、見る者に息を呑む程の「女」を感じさせた。だが、

「どうです、解りますかー？」「え……？」

その少女の横から、先程の幼い少女が顔を出した。そして幼い少女が澪の隣に並ぶと、何故かその姿はその官能的な少女の隣に立っており、

「――――っ？」

そしてようやく、成瀬澪は気が付いた。眼の前に居た艶かしい少女は自分だった。全身を見られるサイズの鏡に映った澪自身だ。もはや申し訳程度にシャツを羽織っているだけの澪は、脚を大きく開いていた。そうして誰かの両膝の上に跨っている。

そして澪は、自分の両胸が背後から揉みしだかれているのを見た。何かの液体で濡れた澪の胸はヌラヌラと艶めいており、揉まれる度にいやらしい水音を立てていた。その胸が放つ嘘せ返るような甘い匂いに、澪は意識を覚醒させ、とっさに背後を振り返る。

そこに居たのは、成瀬澪の主――忠誠を誓うと決めた青年だ。

「……澪、解るか？」

今の自分がどんな状態か。

「刃更っ……やっ、あたし……あっ、ふあああぁぁぁっ？」

意識の覚醒と共に一気に感覚が戻ってきて、その快楽の奔流に澪は再び絶頂した。

全身が勝手に痙攣し、震えるような快感が澪を駆け抜ける。

「あ、あぁ……ん……はぁ」

とっさの事に眼を瞑る暇もなかった。だから成瀬澪は、決定的な瞬間を目撃してしまう。

それは鏡に映った自分。達する前と、達している最中――そして達した後の己の顔だ。

「ふふ。澪さま、いやらしい顔になってます……」

「やっ……いや、ぁ……っ」

鏡に映った自分の姿を見せられた澪は、とっさに手で顔を覆おうとした。だができなかった。鏡の中の自分に、見えてはいけないものが映し出されているのを見たからだ。

……や、やだ……っ。

たっぷりと掛けられたメープルシロップは、胸から下へ零れ、腹から臍を通って澪が穿いているショーツを濡らしていた。たっぷりと水分を吸収して透けたショーツの中に、冷たいメープルシロップでは生まれない筈の熱がある。それは快楽を得て分泌された、澪自身の密液だ。成瀬澪の最も恥ずかしい場所の形が、くっきりと浮かび上がっている。

その状態を、同じ女だからかこちらの視線を追っていた万理亜に気付かれてしまい、

「ち、違うの……これはっ」

慌てて取り繕おうとするが遅かった。万理亜は薄い笑みを見せると、

「刃更さん、ちょっと……」

あろう事か、こちらの背後に回って刃更に何事かを耳打ちした。そして、

「……」

鏡の中の刃更の視線が、静かに下へと降りたのを澪は目の当たりにし——その瞬間、

「あ、ああっ……あああぁぁぁっ」

己の状態を知られてしまった事に、全身を激しい羞恥に打ち震わせると、

「大丈夫だ澪……おかしくないから」

こちらを抱き締めた刃更が、優しく耳元で囁いた。それは澪の最も恥ずかしい姿を受け入れてくれる言葉で——己を取り繕う必要がなくなった澪は、躰から力を抜いてしまう。

——快楽を得てしまっている己を認め、刃更がくれる全てを受け入れたのだ。

だから澪は乱れた。

大きな胸をメチャクチャに揉みしだかれ、その度に淫らな嬌声を上げる。

触れられているのは胸なのに、腰がいやらしく動いてしまうのを止められない。

恥ずかしいのに、その恥ずかしさが余計に澪を堪らない気持ちにさせ、刃更の膝の上で澪はひたすらに陶酔を深めてしまう——まるで主従契約を結んだ時のように。そして、

「お兄ちゃん……」

澪は自分の胸を揉みしだいている刃更の手に己の手を重ねた。

縋る存在を求めた手の平が刃更の体温を得ると、一気に澪の全身に安心が押し寄せ、胸で感じている快楽が幸せへと変わった。

その幸せがもっと欲しくて。気が付けば澪は刃更と向かい合う体勢になっていた。

限りなく股間に近い場所に跨がれば、自然と彼の顔の前に澪の胸が晒される。大きく柔らかな膨らみは、最早メープルシロップですっかり淫らに濡れ、桜色の先端はまるで芽吹いた蕾のようにぷっくりと張り詰めていた。

……あたし、主従契約の呪いでおかしくなっちゃったの？

そんな世界で最も甘くいやらしくなった自分の胸を、刃更に味わって欲しい——だって、そうすれば自分はもっと刃更に屈服できる。それだけ自分も刃更も強くなれるのだ。

だったら、いっそ徹底的に支配して欲しい。そうした想いがどんどん膨れ上がって、

「……っ」

とうとう澪は、刃更の首の後ろに己の両手を回してしまう。

勿論、自分から何をして欲しいかなど口が裂けても言えなかったけれど、それでも、

「……お兄ちゃん、お願い……っ、胸が熱くて、切ないの」

代わりに澪は懇願した。そして——それで通じた。刃更は驚いたような表情を見せた後、

「解った……今、楽にしてやる」

こちらの腰をグイっと抱き寄せると、澪の胸を口に含んだ。胸を吸われるのは当然ながら初めてだ。それは、想像していたよりもずっと気持ちの良いものだった。

「ああっ、やぁん、はぁっ……んぅ、お兄ちゃ、お兄ちゃぁん……んっ、ふあぁぁっ！」

白い喉を見せながら澪は激しい快楽に仰け反った。羽織っていたシャツが床に落ち、上半身が完全に露わになってしまうが構わない。激しい浮遊感に襲われた澪は、刃更の腰に両足を絡め、しがみ付くようにして彼の頭を掻き抱いた。強く胸を吸われながら、

……す、凄い。何これぇ……っ。

自分が激しく絶頂しているのが解る。圧倒的な快楽に思考が酩酊し、これまでの価値観が根底から塗り替えられてしまうのを澪は感じた。

――そして、いつしか澪の中で刃更の存在がこれまでとは異なるものになっていた。

それまでの兄や家族、形式だけの主から、どこまでも己を捧げたい、そしてどこまでも己を屈服させてくれる絶対的な支配者へと。

その事を想った瞬間――突然、澪と刃更の全身を光が包み込んだ。

とっさには何事か解らず呆然となる澪に、万理亜は穏やかな笑みを浮かべて、

「おめでとうございます――その光は、主従契約がお二人の関係が一段階進んだものとな

った事を認めた証です」

熱い快楽の残滓がくすぶっているため、澪は己の変化を感じる事はできない。だが、

「あ……首の、痣が……」

首に浮かび上がった首輪状の痣が、僅かに赤みがかったものへとその色を変えていた。

「……これで、あたし達……強くなれたの？」

「ええ。現在、身体能力から魔力まで全体的なベースアップが起きています。その光が収まる頃には、お二人共今までよりも強くなっている筈です。ついでに私も、澪さまが感じていた興奮を吸収させていただけましたので、一週間はパワーアップしていられます」

その言葉に呆然と前を向くと、そこには澪が心の底から屈服を誓った青年がいて、

「頑張ったな……」

そう言ってこちらの頭を撫でようとした刃更は、自分の手がメープルシロップ塗れになっている事を思い出したのか、澪に触れるのを止めようとした。だから、

「――――」

澪はそんな刃更の右手を取ると、垂れそうになっているメープルシロップごと彼の指を口に含んだ。それは澪の胸へ徹底的に快楽を刻み付けた支配者の手だった。

すると、口の中いっぱいにメープルシロップとそれ以上に甘い快楽の味が広がって、

……あたし、上手に屈服できたのかな。

刃更の指をしゃぶりながら、澪はぼんやりと想う。

だが、ちゅぷっと音を立てて舐める度、ゾクリとした快楽が背筋を抜けて、いつしか澪は夢中になって刃更の指を舐めていた。何度となく舌を這わせ、隅々まで丹念に味わう。

そして刃更の手を舌で綺麗にした後、澪はようやく口を離し、その手を己の頬へと持っていった。たった今、自分を支配した青年の手に頬を重ねながら、そっと願うように、

「……勝とうね」

言ったこちらに、刃更が耳元で囁いたのは。

飾る事のない、たった二文字の力強い肯定の言葉だった。

5

刃更と澪の主従関係を深めるため、東城家のリビングで行なわれた官能的な行為の数々。

その一部始終を、外から視ていた者達がいた。彼らが居るのは、隣の家の屋根上。閉められている東城家のリビングのカーテンを、魔法によって無視の対象に変え、中での出来事を視ていたのは、ふたりの魔族——滝川とゼストだ。だが、

「……」

その内容がどれだけ過激になっても、滝川の隣でゼストは平然として視ていた。

そんなゼストの態度が、滝川にとって余計にその場の空気を気まずいものにする。

……やれやれ、参るね。

ここに居るのは、何も出歯亀が目的だった訳ではない。澪を監視する事が滝川の任務であり、ゼストもまたゾルギアから現在の澪の周辺を確認するよう命を受けてやって来ている。よって滝川達は、この数日で刃更や澪らが置かれている状況をある程度把握していた。澪を滅ぼすためやって来た勇者の一族——高志達と戦う羽目になった事もだ。そのため、刃更達がどのように動くかをずっと見ていたのである。

だが任務による監視対象とはいえ、滝川にとって刃更と澪はクラスメイトでもあるのだ。知り合いの半濡れ場など、ひとりで見てもそれなりに気まずいというのに、

……どうしてくれんだ、この空気。

何ともばつが悪かった。男のヴァルガならまだしも、ゼストは女なのだ。この数日、滝川は学校を休んでゼストに付いて回っていた——言うなれば接待である。ここに来たのも滝川の提案ではなく、あくまでゼストの要望によるものだ。滝川には何の責任もない。

だが——たとえ責任はなくても、親しくもない接待相手の女と、知り合いの濡れ場を見

なければいけないとか、一体何の拷問だ。いたたまれない事この上ないにも程がある。

——とはいえ、刃更を責める訳にもいかない。こちらに視られている事など思いもしていなかっただろうし、何より焼肉屋では澪との主従関係を強めるようにと、滝川自身が唆しているのだ。また濡れ場の甲斐もあってか、どうやら刃更と澪の主従関係の絆はこれまでよりも一段階深いものになっている。流石にあれだけで高志達を相手に五分にまで持っては行けないだろうが、それでも全く勝ち目がないという状況は脱せただろう。ならば、

「そろそろ行こうぜ。成瀬澪の自宅での様子が見たいって話だったが、あっちはどうやら一区切りしたみたいだし、アンタも気は済んだだろ」

と滝川は提案。しかし滝川が踵を返そうとしても、ゼストは動こうとしなかった。

代わりに東城家のリビングの方をジッと見ている。滝川はややうんざり顔になりながら、

「あのな……こっちはこれ以上気まずくなる前に、さっさと帰って寝たいんだが」

「お気遣いなく。この半年での成瀬澪の変化を確認するのが私の仕事です」

あれだけのものを見ても何も感じなかったかのように、さらりとゼスト。

「あの元勇者の一族の青年、東城刃更と言いましたか……中々に面白い素材ですね。成瀬澪を屈服させる事に抵抗感を持ちながら、それでも必要とあらばサキュバスの催淫特性の呪いさえ利用し、気の強い成瀬澪をあそこまで的確に服従させるとは」

しかし、

「主従契約にサキュバスの特性を付加している事は報告で聞いていましたが、あの感じ方を見るに、やはりゾルギア閣下の見立て通り成瀬澪は相当に敏感な躰の持ち主のようです。成瀬澪は随分と快楽に酔いしれていたようですが、あの程度の行為であそこまで感じられるのであれば、ゾルギア閣下ならばあれ以上の快楽を幾らでも与えられます。彼女の心を上書きし、忠誠心を奪う事は容易いでしょう」

「あーそうかい。仕事熱心で実に結構な事だな。しかし、あれを見て眉一つ動かさないどころか、性感のチェックまでするとは。流石はゾルギア侯の懐刀、目の付け所が違う」

滝川が肩を竦めて口にした皮肉に、ようやくゼストはこちらを向いた。冷たい瞳で、

「……それは皮肉のつもりですか、ラース？　もし今の発言に閣下を侮辱する意図があったのなら、こちらも相応の対処をさせていただきますが」

「いやいや、まさか……そんなつもりは微塵もない。ただ、俺は感心してただけだよ」

と笑いながら滝川。これまで上から言う事を聞かされていた相手に、ようやくからかう材料を見つけたかのように告げる。

「男を知らないクセに——言う事だけは一人前とは大したもんだ。まあゾルギア侯の傍にいれば、それだけでその手の行為を見る機会が山程あるんだろうな」

その言葉に、ゼストは一瞬静止した。それから顔を僅かに顰めたものにして、
「何を根拠にそのような決め付けを――」
「――生憎と、男を知らない女は匂いで解るんだ。自分じゃ気付かないだろうがな」
「……」
しれっと言ってやると、今度こそゼストは黙り込んだ。それが滝川の指摘が事実である事を雄弁に物語っていた。
主従契約魔法の呪いにわざとサキュバスの催淫効果を付ける遊びを考案し、性愛玩用の女配下が山程いるゾルギア――その懐刀を務めているのがゼストだ。
よって普通に考えれば、真っ先にゾルギアの相手をさせられそうなものなのだが、
……あの情報は本当らしいな。
滝川は内心ほくそ笑んだ。半分は噂レベルの話だったのだが、曰く、ゾルギアが最も頼りにする懐刀は、彼のどの配下よりも美しいが――それは男を知らないからであり、そこにはゾルギアが決して手を付けられない理由があるのだと。
――ちなみに、淫魔であるサキュバスやインキュバス、また真祖の吸血鬼でもない滝川に、匂いで処女かどうかの判別など付く筈がない。あたかも秘密を知っているかのようにカマを掛けて、仕入れていた情報の信憑性を確かめたのだ。

そして、ようやくゼストもその事に気が付いたのか、
「――――」
一瞬こちらを険しい表情で見ると、虚空に溶けるようにその場から姿を消した。
「ま、一本取ってやれたってところかね……」
ふっと笑いながら滝川。周囲からはゼストの気配が消えていた。恐らく、今日のところはもう終わりという事だろう。
「……それじゃあ俺も帰るとするか」
最後に滝川はもう一度だけ、己の意識を東城家の中へと戻した。すると刃更は澪を抱き上げ、万理亜と共に浴室へと向かっていた。まあ、メープルシロップを使ってあそこまで盛大にローションプレイをやったのだ。ベトベトの身体は洗う必要があるのだろう。
『――――』
脱衣所で澪を床に下ろし、自分だけ出て行こうとする刃更を、万理亜が引き留めている。どうやら刃更も汚れているため、一緒に入ろうと誘っているようだった。
刃更は狼狽している。先程まであんなに大胆に澪を屈服させていたのがまるで嘘のようだ。しかし困惑する刃更とは対照的に、澪は顔を赤くして恥ずかしそうにしているものの拒んでいる様子はない。恐らくまだ、刃更に与えられた快楽で躰に火が付いたままになっ

ているのだろう。やがて澪は立ち上がり、背後からそっと刃更に抱きついた——行かないでと言わんばかりに。ショーツ一枚の澪に抱きつかれた刃更は、完全に硬直している。

滝川八尋は苦笑して、

「まあ、今日くらいはドタバタを楽しめよバサっち——それが、お前さんの楽しかった最後の思い出にならない事を祈ってるぜ」

そう呟くように告げると、自らもまた夜の闇の中に姿を消した。

6

そして決戦の日が訪れた。戦闘開始は夜のため、刃更と澪は学校を休む事なく普通に登校。放課後に万理亜と合流し、約束の場所へと向かう事にした。

対する柚希はあれから学校に来ていなかった。こちらと会う事を避けたのかもしれない。仕方がない事とはいえ、今回は敵同士なのだ。戦いの前に会えばどうしたって気持ちが揺らぐ。それでも、できる事なら戦う前にもう一度話がしたかったのだが、

……だけど。

会ったところで何を言えるというのだろう。自分も柚希もそれぞれの決断を下した結果として、現在の状況があるというのに。

そうして答えの出ない想いを抱えたまま午前の授業が終わり、昼休みになった。

……澪は、相川と榊と一緒か。

いつものように、仲の良いクラスメイトの女子らと一緒に昼御飯を食べに教室を出てゆく澪の背中を見送ってから、刃更も席を立った。

滝川と話すようになったお陰か、最近は刃更もクラスで完全に孤立はしていない。しかし多少の話はするようになっても、お昼を共にする程の仲になっている者もおらず。滝川がいないこの十日程は独りで昼食を取っていた。また先日以降、一人で居ても澪や柚希のファン連中が絡んでくるような事もなかった。中庭の一件で彼らの感情が解決したとは思えないが、可能ならこのまま有耶無耶にできると有り難いところだ。

そんな事を思いながら刃更が教室から廊下へ出ると、担任の坂崎が声を掛けてきた。

「東城。ここのところ滝川がずっと休んでいるんだが、お前何か詳しい事知らないか？」

「いえ、何も……もしかしてアイツ、学校に休むって連絡とかしてないんですか？」

「いや……まあ一応休み始めた日に『家庭の事情でしばらく休む』とだけ電話があったんだが、如何せんそれっきりでなぁ」

「そうですか……」

一緒に焼肉を食べに行った翌日から、滝川は学校に来ていない。連絡も、現魔王派の魔族による襲撃の可能性がある事をメールで報せてきたっきりだ。恐らく――あちらも色々と状況が動いているのだろう。そうした事情とは無縁の坂崎は頭を掻きながら、

「一人暮らしのアパートはおろか、実家の方に電話しても誰も出ないし。仲の良いお前なら、ひょっとして何か知っているかと思ったんだが……野中もここのところ休んでるし、おかしな風邪でも流行っているのかな」

そう言って、首を捻りながら去っていった。

そして刃更が購買へ向かって歩き出そうとした時――懐の携帯電話が着信を報せた。

登録名は空白。よって刃更は近くの備品室に移動すると、人がいない事を確認して中から鍵を掛け、ようやく通話を開始する。

「……もしもし？」

『おっ、良いねえバサっち。いきなり俺の名前を言わない辺り、この電話の危険性をよく解ってるみたいだなー』

「まあな……」

これでもし、この電話が滝川から携帯を奪った何者かが掛けてきていたら、刃更と滝川の関係について知られてしまう。それが現魔王派の魔族だったりしたらお終いだ。

『さてバサっち、お前今学校だよな？　昼休みの時間だが、ちょっくら話せるか？』

「ああ。人のいない場所に移動した。しばらくなら大丈夫だ。それより、お前こそ学校に来てなかったし、連絡もつかなかったみたいだけど……大丈夫なのか？」

『まあ何とかな。実は、新しい監視役の他に面倒な奴まで来ちまってよー』

「……って事は、こないだ俺達を襲ってきた魔族が、新しい澪の監視役だったって訳か」

『そういう事。バサっち達を襲ったゴツイの――ヴァルガって言うんだが、そいつよりもっと厄介な奴でな。今だってようやく隙ができたんで、どうにか電話できてるんだぜ』

「成る程な……――で？　そんな厄介な状況なのにわざわざ電話してきた理由は？」

『いやあ、何かそっちはそっちでかなり面倒な事になってるみたいだからさ』

笑みを含んだ滝川の言葉に、刃更は呆れたように、

「よく知ってるな……ひょっとしてどこからか見てたのか？」

『さてな。でも新しく派遣されたばかりの監視役がやられたんだ。こっちとしてもやった奴ぐらい調べるさ。そうしたら勇者の一族が何人かこの街に潜り込んでるし、バサっち達はここのところずっと修行してたからな』

成る程。滝川の任務は、あくまで澪を監視する事なのだ。たとえ追加の魔族が派遣されても――その魔族が倒されても、その役目は変わらないのだろう。

「つまり、決戦前に激励の電話をくれたって事か」『――それと忠告だな』

電話の向こうの滝川の声が、どこか冷たい色を含んだものになり、

『様子見にちょっかい出しに行ったついでにやられたみたいだが……恐らく上がヴァルガに下した命令は、成瀬澪の覚醒を促すだけでなく、その護衛も含まれていた筈だ。成瀬が死んで、彼女の中に眠るウィルベルトの力が失われるような事態を避けるためにな』

ところが、

『そんなヴァルガをいきなり倒しちまった奴らが、成瀬澪を狙っているんだ。悪いが、こっちとしてもいざという時は介入させて貰うぜ。成瀬を殺そうとする奴は、俺達が実力行使で排除させて貰う――たとえそれが、野中だろうとな』

「っ……お前っ!?」

驚愕を露わにする刃更に、

『おいおいバサっち、何を驚いてるんだ。当然だろ？　ついでに言うなら、もしバサっちが死んだ場合は、当然俺達の協力関係も無効にさせて貰うぜ。何せ真実を知っているのはお前だけで、俺はあくまでその事で脅迫されて仕方なく協力してるんだからな』

嘲笑うように滝川は言う。

『忘れるなよ。俺達はあくまで、互いにメリットがあるから手を組んでいるだけだ。成瀬だけじゃなく野中の事も守りたいなら、連中との戦いに自分達の力で勝ってみせる事だな』

その挑発とも取れる言葉に、携帯電話をきつく握り締めて、

「……解った。見ていろ滝川、俺達は絶対に負けない」

東城刃更はハッキリと宣言する。

「そして、俺もこれだけは言っておく。もし柚希や高志達を殺すというなら、俺は絶対にそれを阻止してみせる――たとえお前の敵に回ってでも」

7

滝川との電話を終えた刃更は、しばし備品室に佇んでいた。

そして嘆息を一つすると、備品室を出るため鍵を開けた。そのまま廊下へと続く扉を開き――しかしそこで足を止める。すぐ眼の前に、一人の少女が立っていたからだ。

「柚希……」

そこに居たのは、今日も学校を休んでいた筈の野中柚希だった。柚希は無言でこちらを備品室の中へと押し戻すと、後ろ手に扉を閉め鍵を掛けた。そして、

「お願い刃更……今夜の戦いから手を引いて欲しい」

やおら詰め寄るようにして告げてくる。縋り付き、至近距離でこちらを見上げる瞳は、真剣というよりも悲愴の色を濃くしていた。しかし刃更は首を振って、

「それはできない……前にも言った筈だろ」

刃更も迅も、澪を守ると決めたのだ。たとえ敵が魔王だろうと——そして勇者だろうと。

「解ってる、刃更の気持ちは……でも前と状況が決定的に変わった。刃更なら『監視対象』から『消滅対象』に変わる事が、どういう意味を持っているか解っている筈」

「……そうだな」

これまでは追放だけで済んでいたが、今後は完全に勇者の一族を敵に回す事になる。だが、刃更はそっと柚希の両肩に手を置いた。悲しげな上目遣いの瞳を見据えて、

「それでも俺は澪を守りたいんだ……俺はもう勇者じゃない。この世界を守る資格も使命も失ってる。だけど、俺は今アイツの家族で兄貴なんだ。それは誰を敵に回そうと、どれだけ厳しい状況に追い込まれようと変わらない事実なんだよ。だから、アイツを守るために戦う——それが何もかも無くした、今の俺の使命だって思うから」

「……私や胡桃達と戦う事になっても？」

「ああ……」

これだけは譲る事はできない。

……それに。

滝川の傍には現在、この間の巨漢の魔族よりも厄介な奴が居るという。そして、澪達に命の危険が迫れば「自分達が介入する」とも言っていた。だとすれば、いざとなれば間違いなくその厄介な奴まで動き出すだろう。

——先日の学校の屋上や都立公園の森における戦闘で見せた実力が滝川の全てだとは刃更は思っていない。

恐らく滝川はまだ本当の力を隠している。

そんな滝川が厄介という相手だ——その戦闘能力は推して知るべしだろう。

もしその力が、自分や高志らを遥かに凌駕するものだったとしたら、

……きっとあの人が動いちまう。

今回はお目付け役と言っていた、あの斯波恭一が。よって皆を守るためには、刃更達が高志らを退けるしかないのだ。すると、刃更の決意が揺るがない事を悟ったのだろう。

「……そう」

ポツリと呟くと柚希はそっとこちらから身を離し、踵を返して立ち去ろうとする。だが、

「——っと」

刃更は慌てて柚希の手を取った。まだ柚希を行かせる訳にはいかなかったからだ。

父親である迅の再婚話から始まった澪や万理亜との同居生活。結局、再婚については作り話だったものの、それでも刃更は澪や万理亜の事を自分の妹のように――新しい家族のように思っている。それは澪の正体が先代魔王ウィルベルトの娘であり、万理亜がお付きのサキュバスであるという真実を知っても変わらなかった。訳ありなのは、刃更や迅も同じだったからだ。しかし普通の関係とは異なる以上、共に一つ屋根の下で暮らしてゆくためには何よりも信頼関係が重要になる。

――つい先日、刃更は澪を狙った敵を退け、さらに先代魔王から受け継いだ力を暴走させてしまった澪を救い出す事に成功した。守ると決めた、守ってやりたいと思った彼女を、どうにか助ける事ができたのだ。それまでは信頼関係に少し不安があったが、あの一件を通して、これから共にやっていける程度にはなれたと刃更は思っている。その証拠に、

「……そっか。うん、そうよね……」

少し冷静になった澪が、刃更の言葉に納得してくれた。もし澪に対して卑怯な振る舞いをして裏切るような事をすれば、折角できた信頼関係を失ってしまう。

そんな馬鹿な真似を刃更はしない――そう信じてくれたのだろう。

「でも……だったらどうして」

「お前が札を掛けて、俺は外していないんだ。なら他に容疑者は一人しかいないだろ」

正直、刃更としてはもう一人の同居人を疑うような真似をしたくはない。したくはないが、何せ朝っぱらから人のTシャツの中に潜り込んでくるような奴だ。あれがなければまだ味方をしてやったかもしれないが、こうなってはもう庇ってやろうとは思えない。

「ふーん、そう……そういう訳。なら、あの子には後でたっぷりと話を聞かなきゃね」

澪は迫力のある笑みを浮かべながらそう言い放ち、しかしふと、

「でも――刃更は契約魔法であたしの位置は解る筈じゃない。何で入ってきたの？」

「あのな……怒った拍子にド忘れしちまったのか？」

放たれた問い掛けに、刃更は嘆息する。確かに刃更と澪は、魔法で『とある契約』を結んでおり、その気になれば互いの位置を把握する事ができた。だが、

「いつも位置を把握されたらプライバシー的にキツいからって、有事の時以外は互いの位置を探らないようにしようって決めただろ」

下手をすればいつ風呂に入り、いつトイレに行ったか。どれくらいの時間そうしていたかなど、やろうと思えば色々と把握する事ができるのだ。幾ら同じ家に暮らす家族とはいえ、そこまで相手に知られてしまうのは正直キツイ。何より自分達は一応お年頃なのだ。異性と同居生活を行なうのであれば、最低限のプライバシーの保証と、適度な無関心という気遣いが必須となる。あれはあれで必要にかられて交わした契約ではあるが、普段はな

新妹魔王の契約者（テスタメント）Ⅱ

上栖綴人

角川スニーカー文庫
17796

●上栖綴人（うえすてつと）

今年の冬は寒いですね。皆さん体調など崩されていませんか？　しかし聞くところによると、体温を上げれば免疫力が上がるそうな。ならば「スニーカー史上初！　かなりHぃバトルアクション」の本作『新妹魔王の契約者（テスタメント）』をどうぞ。読めばきっと体温が上がります。電車の中だとより効果的。もし満員電車の中で音読などすれば、それこそ効果は絶大です——ただし万一タイホされても当方は責任を取れませんので、自己責任でお願いします。

カバーイラスト／大熊猫介（ニトロプラス）
カバーデザイン／濵﨑正隆（NARTI;S）

The Testament of Sister New Devil II

ConTeNts

プロローグ
朝の妹の魔王無双 ——— 005

第①章
ヤキニクと青春番外地 ——— 035

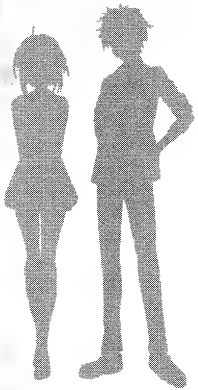
第②章
募る想いを抱えて ——— 085

第③章
主従と信頼の向かう先 ——— 140

第④章
消せない過去を見つめて ——— 207

エピローグ
未来の可能性 ——— 279

あとがき ——— 298



口絵・本文イラスト／大熊猫介（ニトロプラス）
口絵・本文デザイン／濵崎正隆（NARTI;S）

S
246-2
Y600

上栖綴人

新妹魔王の契約者（テスタメント） Ⅱ

角川スニーカー文庫

9784041006702

ISBN978-4-04-100670-2
C0193 ¥600E

定価：本体600円（税別）

1920193006001

「刃更（バサラ）……洗わせて」「いや、一緒に入るのはまずいって柚希（ゆき）」「昔はお風呂一緒に入ってた」新しい妹達と順調？に同居生活を送る刃更。幼なじみの柚希もやって来て賑やかな毎日だ。一方、魔王の力を受け継ぐ澪（みお）を危険視する勢力は魔族だけにとどまらなかった。勇者側は柚希に非情な命令を下し新たな刺客が澪を狙う。それは刃更をよく知る者達だった。勇者VS元勇者・刃更、新妹（しんまい）魔王を巡る戦いの行方は!?　加速するディザイア・アクション！

スニーカー文庫☆上栖綴人の本　(2013.2)
新妹魔王の契約者（テスタメント） Ⅰ～Ⅱ

カバー　泉文社

この世界を守るために勇者は存在している。
ならば――そんな勇者を守ってくれる者とは。

プロローグ　朝の妹の魔王無双

1

男ならば、誰もが一度は想像した事があるだろう。
もし朝起きた時、布団の中に可愛らしい女の子が潜り込んでいてくれたら。
感じるのは温かくて柔らかな感触。香るのはほんのりと甘い匂い。
女の子は言う。少しだけ恥ずかしそうに、それでも笑顔を浮かべて――おはよう、と。
それは言わば、限られた者だけが得られる幸せで、
「……」
しかし、この日の朝。ふと息苦しさを得て眼を覚ました東城刃更は、それに近い状況に身を置いていた。別に悪夢にうなされていた訳ではない。息苦しさの原因は他にある。

The Testament of Sister New Devil

新妹魔王の契約者 テスタメント II

刃更が寝ているベッド――その布団の中にいる、一人の女の子が原因だ。その少女が布団の中を通り越し、刃更が着ているTシャツの中にまで潜り込んでいるのである。

さらに、刃更の眼の前には少女の可愛らしい顔があった。つまり、既に刃更が頭を通している襟ぐりに、少女も頭をすっぽりと通しているのだ。

「お早うございます、刃更さん」

「万理亜……？　って、いやちょっと待て――うおっ!?」

壮絶の対面二人羽織りのため、軽い身動きもままならない。

――いや、物理的に不可能ではないのだ。刃更がパジャマ代わりに着ているTシャツは大きめで、生地も伸縮性がかなり高い。首回りもゆったりしているため、やろうと思えば多少の無茶はできるだろう。だが――できたとしても本当にその無茶をやるか？

「いやん。もう駄目ですよ、刃更さんてば。無理に起きようとしたら結構危険です」

その反応に軽くムカつくが、突っ込みは入れられない。代わりに刃更はギョッとなった。万理亜が潜り込んできているTシャツの中、刃更の胸から腹の広い範囲が柔らかくてスベスベした感触を得ていたからだ。それは間違いなく万理亜の素肌によるもの。つまり、

「お、お前……人のTシャツの中に、裸で――」

「いやですね刃更さん。服を着たまま殿方のベッドに入るだなんて、そんな無作法をこの

私がする訳がないじゃないですかー」

「何だその無駄な気遣いっ！」

だったら先に、人のTシャツの中に入るという最悪の無作法に気を遣え。

「――っていうか、何だってこんな事態になるまで起きられなかったんだ俺は？」

軽くショックだ。すると、

「お忘れですか刃更さん。私はサキュバス。夢魔ですよ。眠りの魔法ならお手の物です」

万理亜はうふふーと笑って、

「もちろん普段起きている時の刃更さんには通じないかもしれません。ですが、寝ていて無防備な時ならバッチリなのですよ。油断しましたね？」

「計画的犯行すぎるっ！」

自宅の自室だというのに、オチオチ寝てもいられないとか治安的にどうなんだ。

「またまた刃更さん、本当は嬉しいクセにー。さあ、素直になるのです」

悪戯っぽい笑みを浮かべると、万理亜はこちらの首の後ろへ腕を回してより身体を密着させ、まるで押し付けるようにして肌を滑らせてくる。

……ちょっ、これはヤバいって……っ。

顔立ちが幼く身体が小さくても、万理亜は立派な女の子だ。その外見はとびっきりの可

長谷川千里
Chisato Hasegawa
刃更達が通う高校の、美しすぎる養護教諭
早瀬高志
Takashi Hayase
刃更の幼馴染で、澪を狙う勇者一族の刺客
野中柚希
Yuki Nonaka
幼馴染の刃更が好きな、勇者一族の少女
東城刃更
Basara Tojo
澪と万理亜の“兄”。特異能力《無次元の執行》の使い手
東城迅
Jin Tojo
刃更の父で、元・最強の勇者
成瀬澪
Mio Naruse
先代魔王の娘で、刃更の“妹”になった少女
ゼスト
Zest
澪の養父母を殺した魔族“ゾルギア”の腹心
野中胡桃
Kurumi Nonaka
柚希の妹で、澪を狙う勇者一族の刺客
成瀬万理亜
Maria Naruse
刃更と澪を主従契約させた下の“妹”。ロリエロサキュバス
滝川八尋(ラース)
Yahiro Takigawa (Lars)
刃更達のクラスメイトだが、正体は澪を監視する魔族

愛らしさを誇っており、はっきりいってこの距離はヤバい。女の子独特の滑らかな肌も、控えめながらも柔らかな胸の膨らみも、万理亜の全てが男の刃更にとっては心地良いものでしかない。何よりも、万理亜の動きに合わせて刃更の身体をくすぐる二つの感触があった。擦れる度に少しずつ感触が確かになってきているのは、恐らく万理亜の胸の先で、

「ん……あ、……んっ……ふぅ……」

段々とその幼い表情が艶めき、漏れる声に熱が帯び始め、

「わ、解った……俺の負けだ。頼むからTシャツの中から出てくれっ」

「お断りします」

「な、何でだっ？」

パニくるこちらに、万理亜は浮かべていた満足げな笑みを悪戯っぽいものに変えて、

「刃更さんの服の中は、もはや私のものです。どうしてもと言うなら『万理亜……お前の中に入りたい』とか言って貰いましょうか――そう、甘い声で囁く吐息のように！」

完全に調子に乗ったサキュバスの少女に、しばし無言を返してから、

「万理亜……」「はい刃更さん」

無駄に瞳をキラキラさせている万理亜の脳天に、東城刃更は右の拳を振り下ろした。

ゴスっと鈍い音がした。万理亜は「おおお」と苦悶の声を上げると、涙目になりながら、

「お、女の子に手を上げましたねっ？」

「ああ……俺は男として最低だ。だがな、お前はもっと最低なんだから仕方ないだろ！」

刃更は素早く袖から両手を抜くと、Tシャツの中で万理亜の身体を押して空間を確保。

そして彼女の裸を見ないように眼を閉じた状態で、一気にTシャツの中から脱出した。

上半身裸の刃更は、こちらのTシャツをワンピースのように着た格好になった万理亜に、

「大体『甘い声で囁く吐息』って何だ……まあ何となく意味は解るけど」

「日本語は難しくていけませんね。ですがコミュニケーションで一番大事なのは、伝えるという気持ちだと思います。マインドなのですよー」

「違う。コミュニケーションで一番大事なのは礼儀作法と常識だ」

取り敢えず金輪際、人のTシャツの中には無断で入るな。不法侵入で訴えるぞ。

2

「ったく、何て朝だ……」

やれやれと刃更は部屋を出た。万理亜を裸にする訳にもいかないので、Tシャツを取り返すのを諦め、ハーフパンツに上半身裸という格好で階段を下りてゆく。

「わ、悪い――これは――
おわっ!?」

!?

「ちょっ、やっ
……そこは、駄目……っ」

何せ今や澪は完全に裸。刃更も着ていたTシャツを
万理亜に貸してやったせいで、上半身は裸の状態だ。
そんな状態で抱擁を行なえば、どうなるかは火を見るよりも明らかで。

入浴中

秋の訪れが見えない夏の終わり。気温はまだ高く、肌寒さを感じる事はない。
寝惚けた頭をハッキリさせるため、刃更が向かったのは洗面所だった。
頭の後ろを掻きながら、木目調の扉を開けて中へと入り、
「――――」
思わず静止した。そこに刃更が同居しているもう一人の少女――成瀬澪が居たからだ。
――刃更が顔を洗い、歯を磨こうと訪れたこの洗面所には、別の役割も存在する。
奥にある浴室を利用する者にとっての脱衣所だ。だから、
「……」
澪の存在とその姿に、刃更は眼を奪われた。
バスタオル一枚――それが今、刃更の眼の前にいる澪の姿だった。
綺麗だった。朝風呂かシャワーかまでは解らない。それでも頬を上気させたその顔は勿論、まだ水滴が残る肢体も、濡れて艶めく腰まである長い髪も、何もかもが綺麗だった。
さらにそのプロポーションは最早、抜群というよりも反則に近い。目の毒すぎる程に大きな胸や、細い腰から尻を通り太股へと抜ける曲線は、日本人離れした魅惑のラインを描いている。その肢体は巻かれた白のバスタオルを色っぽく押し上げ、澪が女である事をこれでもかとばかりに主張していた。

起き抜けには強すぎるその刺激に、刃更が思わず立ち尽くしていると、
「――――っ」
澪がカッと顔を赤くして、息を吸い込むのが見えた。悲鳴を上げられる――そう思った瞬間、刃更は反射的に動いていた。背後にある洗面所兼脱衣所の扉を開けて速攻で外へと飛び出し、どう謝ったものかと思案する。
……しかし。
こういう事態が起きないため、同居を始めてすぐ様々な取り決めを行ない、対策を講じておいた筈だ。ところが扉には「女の子入浴中」の札は掛かっていなかった。もしかして札を掛け忘れた？　いや、そんな迂闊なミスを澪が犯すとは思えない。だとしたら、
……さては、万理亜だな……。
恐らく刃更の部屋を訪れる前に脱衣所の前を通り掛かり、澪が掛けていた入浴中の札を外したのだろう。悪戯好きの万理亜がやりそうな事だ。全く困ったものである。
とはいえ、これでどうするべきかは決まった。澪がこちらの言い分を信じてくれるかは解らないが、きちんと事情を説明し、弁解と謝罪を行なうしかない。だから刃更は「よし」と頷きを一つして――そこでふと気が付いた。いつの間にか、澪がすぐ眼の前にいた。
てっきり烈火の如く怒られると思っていたのだが、しかし澪は何も言わずにいる。

「喰い千切れ――『白虎』」

「アンタは
ボロボロになりながら、
最後まで理想だけ
叫び続ければ良い」

「たとえ《無次元の執行》でも――
俺の過去は消せないから」

「あの元勇者の一族の青年……
中々に面白い素材ですね」

「？　あれ……？」

そこで刃更はさらに気が付く。自分の左手が澪の腰に回され、右手が彼女の口を塞いでいた。そして――何故か刃更は脱衣所の外ではなく中にいた。

「……えっと、これは一体……？」

言いながら語尾が軽く震えた。冷や汗がぶわっと吹き出してくる。

あれ、おかしいな？　これは、ひょっとしてひょっとするのか？

つまりあれか。脱衣所の外へ出たというのは、極限状態を迎えて現実逃避をした自分の意識が見せた、実際とは異なる未来の走馬灯のようなもので？　現実の自分は悲鳴を上げようとした澪を強引に抱き寄せ、無理矢理手で口を塞いでいた？

「――――」

何という事だろう。そんなにも誤解で悲鳴を上げられたくなかったのか。どうやら、うっかり肉体が精神を凌駕してしまったらしい。とはいえ状況は悪化の一途を辿り、最悪へと突入しつつあった。強引に抱き寄せ、口を塞いで黙らせてしまった拍子にバスタオルが床に落ちたのか、刃更と澪の身体は完全に密着してしまっていて、

「……」

余りに突然の事態に困惑しているのだろう。どう反応すれば良いのか解らないのか、刃

更の腕の中で澪は身動きもせずに呆然としていた。

何せ今や澪は完全に裸。刃更も着ていたTシャツを万理亜に貸してやったせいで、上半身は裸の状態だ。そんな状態で抱擁を行なえば、どうなるかは火を見るよりも明らかで。

いけないと解っていながらも、刃更が視線を落とすと、澪の豊かすぎる胸が刃更の腹の辺りに密着し、その極上の柔らかさを証明するかのように、いやらしい形に押し潰されていた。万理亜のものとは異なる大きさと感触は、視覚的にも感触的にも抜群の破壊力で、

「わ、悪い、これは――おわっ!?」

刃更は慌てて飛び退こうとして、澪の身体や髪から床に落ちていた水滴で盛大に足を滑らせた。当然、抱き締めていた澪も巻き込む形になり、

「――きゃっ」

自分の腕の中で上がった短い悲鳴に、刃更はとっさに反応していた。宙で体を強引に捻りながら澪を引き寄せる事で、どうにか床に激突する前に彼女の下へ自分の身体を入れる事に成功。己をクッションに変え、澪が受ける転倒の衝撃を軽減。澪をホールドしているせいで両手が塞がった状態だったが、背中と腕や肩で辛うじて受身を取った。

それでも転倒の衝撃で鈍い痛みを得てしまい、顔を顰めながら起き上がろうとして。

そのまま、何か柔らかいものに顔を突っ込んだ。
「――ひぁんっ!?」「っ？　す、すまないっ！」
驚いたような声に、刃更はさらなる己の失態を理解。恐らく澪の胸に顔を埋めてしまったのだろう。慌てて澪の肩を摑んで離れようとして、
「ちょっ、やっ……そこは、駄目……っ」
しかし澪が困惑と共に甘い声を上げた。これには刃更も、何事かと驚きを露わにする。
澪の上げた声もそうだが、摑んだ筈の肩がビックリするほど柔らかかったからだ。
――もちろん女の子の身体は男と比べて柔らかく、それは肩も例外ではない。
だが、その感触は明らかに肩とは異なるものだった。そして東城刃更は、ようやく己が置かれた状況を理解する。
「え……っと」
眼の前にあると思っていた澪の顔はそこにはなかった。あったのは割れ目だ。尻である。
一体いつの間にそうなったのか、刃更の上にいる澪はこちらと頭の向きを逆にしていて。刃更が顔を突っ込んでいたのは、澪の胸ではなく股間だった。そして、肩だと思って摑んだ場所は澪の尻で。太股との境目にある左右の曲線部分を両手でがっしりとホールドしてしまった挙句、肩だと思って押し上げようとした事で、その割れ目をむにゅっと押し広

げてしまっていた。図らずも澪の全てを見てしまった刃更に、
「っ――きゃあああああああぁぁっ」
今度こそ澪が悲鳴と共に、刃更の上から慌てて飛び退いた。顔を真っ赤にして床に落ちていたバスタオルを摑むと、自分の身体を隠す様に引き寄せながら、
「あたしが先に入ってたのに、何で入ってくるのよ！　エッチっ！　百回殺すわよっ！」
もっと重大な問題があるだろうに、気を動転させたのかそもそもの疑問を叫ぶ澪に、
「ゴメンっ！　扉に入浴中の札が掛かってなかったから、てっきり――」
「嘘つきっ！　言い訳するなら、もっとマシな嘘を吐きなさいよ刃更！」
「いや嘘じゃないって！　本当だっ、信じてくれっ！」
刃更は首をブンブン横に振りながら、脱衣所の扉を引くようにして開け放つと、
「ほら、掛かってないだろ札？　な？」
「そんな……あたしはちゃんと」
札がない事を見た澪は、信じられないとばかりに、
「まさか刃更、隠したりしてないわよね……お風呂を覗いて、バレたら札を掛け忘れたあたしのせいにして、『これは事故だ』とか言い張るつもりだったとか」
「するかっ！　大体――そんな卑怯な真似をしたら、全部終わっちまうだろ！」

父親である迅の再婚話から始まった澪や万理亜との同居生活。結局、再婚については作り話だったものの、それでも刃更は澪や万理亜の事を自分の妹のように――新しい家族のように思っている。それは澪の正体が先代魔王ウィルベルトの娘であり、万理亜がお付きのサキュバスであるという真実を知っても変わらなかった。訳ありなのは、刃更や迅も同じだったからだ。しかし普通の関係とは異なる以上、共に一つ屋根の下で暮らしてゆくためには何よりも信頼関係が重要になる。

――つい先日、刃更は澪を狙った敵を退け、さらに先代魔王から受け継いだ力を暴走させてしまった澪を救い出す事に成功した。守ると決めた、守ってやりたいと思った彼女を、どうにか助ける事ができたのだ。それまでは信頼関係に少し不安があったが、あの一件を通して、これから共にやっていける程度にはなれたと刃更は思っている。その証拠に、

「……そっか。うん、そうよね……」

少し冷静になった澪が、刃更の言葉に納得してくれた。もし澪に対して卑怯な振る舞いをして裏切るような事をすれば、折角できた信頼関係を失ってしまう。

そんな馬鹿な真似を刃更はしない――そう信じてくれたのだろう。

「でも……だったらどうして」

「お前が札を掛けて、俺は外していないんだ。なら他に容疑者は一人しかいないだろ」

正直、刃更としてはもう一人の同居人を疑うような真似をしたくはない。したくはないが、何せ朝っぱらから人のTシャツの中に潜り込んでくるような奴だ。あれがなければまだ味方をしてやったかもしれないが、こうなってはもう庇ってやろうとは思えない。

「ふーん、そう……そういう訳。なら、あの子には後でたっぷりと話を聞かなきゃね」

澪は迫力のある笑みを浮かべながらそう言い放ち、しかしふと、

「でも――刃更は契約魔法であたしの位置は解る筈じゃない。何で入ってきたの？」

「あのな……怒った拍子にド忘れしちまったのか？」

放たれた問い掛けに、刃更は嘆息する。確かに刃更と澪は、魔法で『とある契約』を結んでおり、その気になれば互いの位置を把握する事ができた。だが、

「いつも位置を把握されたらプライバシー的にキツいからって、有事の時以外は互いの位置を探らないようにしようって決めただろ」

下手をすればいつ風呂に入り、いつトイレに行ったか。どれくらいの時間そうしていたかなど、やろうと思えば色々と把握する事ができるのだ。幾ら同じ家に暮らす家族とはいえ、そこまで相手に知られてしまうのは正直キツイ。何より自分達は一応お年頃なのだ。異性と同居生活を行なうのであれば、最低限のプライバシーの保証と、適度な無関心という気遣いが必須となる。あれはあれで必要にかられて交わした契約ではあるが、普段はな

るべく互いの位置を調べないようにする事に決めたのである。

「ゴメンそうだった……でも刃更、だったら先刻あたしが居たのに気付いた後、何で脱衣所を出て行かずに、いきなりあたしの口を塞いだりしてきたの？　それもかなり強引に」

……ですよね。やっぱり気付きますよね、その問題に。

「しかも――何で今日に限って上に何も着てないの？」

さらに上目遣いで問われ、刃更は返答に窮した。

澪の口を強引に塞いでしまったのは、反射的に取った無意識の行動によるものだ。

上半身が裸な理由を説明するには、万理亜の件について話さなくてはいけない。

だが、どちらも説明すればするほど言い訳にしかならないような気がして、

「えーと……すみませんでした」

刃更は頭を下げた。自分にも、澪に恥ずかしい想いをさせた責任の一端はある。すると、

「そっか――でもいいよ刃更、謝らなくて」

その穏やかな声に、刃更はホッと胸を撫で下ろしながら顔を上げ――そして見た。

バスタオルを巻き直した澪が、身体から青白い閃光を迸らせながらニッコリと笑い、

「――五十万ボルトで許したげる」

そう言った瞬間、放たれた小さな雷が高電圧の奔流となって刃更の全身を駆け抜けた。

3

「あークソ……酷ってぇ目に遭った」

こちらに電撃を食らわせた澪が脱衣所から出て行った後。刃更は浴室に入り、シャワーを浴びていた。上半身裸でいたのに、うっかり床に転倒してしまった身体を洗いたかったし、夏の終わりとはいえ気付かない内に寝汗を掻いてしまう程度の暑さもある。だからこそ澪も、今の刃更と同じくシャワーを浴びていたのだろう。

――東城刃更が、こうした状況を受け入れられている事には訳がある。

それは何も風呂上がりの澪と遭遇した事や、万理亜による壮絶な朝ドッキリといった異性との同居ハプニングだけではない。万理亜は、彼女自身が言ったように夢魔のサキュバスだし、澪に至っては人間として育てられはしたものの、先代魔王の遺児であり強力な魔法を使う事もできる。そんな二人との共同生活は本来、普通の人間であればとてもじゃないが受け入れ難いものだ。それでも――東城刃更が、澪や万理亜と一緒に居て、家族として共に暮らしていられるのは、通常の世界の外にある理について耐性があるから。

その耐性は、刃更の生まれや過去に関係するもので、

BAD END

「……」

ふと己の過去に想いを馳せた刃更は、表情を暗いものにする。それでも、

「俺が何とかしなきゃな……」

頼りになる刃更の父――東城迅は、現在とある理由でこの家を空けてしまっている。留守を預かる長男として、妹になった澪や万理亜の事は自分が守ってやらなくては。

「ふう……」

汗を流しながら、シャワーは徐々に刃更の身体を温めてくれる。頭を濡らした以上、ついでに洗いたくなってしまうのは人の本能のようなもので。しかし、

「あれ……っと」

身体がまだ澪の電撃で少し痺れていて、上手く頭を洗えずにいると、

「――任せて」

静かな声と共に細い指が刃更の髪の中へ差し入れられ、優しく髪と頭皮を洗い始めた。理容室などでされるのと同じく、自分以外の人に頭を洗われる心地良さに、

「おうサンキュー、助かったよ……――へ？」

余りにも自然に洗われたため、事態の異常さに気付くのが遅れた刃更は、ようやく背後を振り返る。そこに、キョトンとした顔をしたバスタオル姿の少女がいた。

整った顔立ち。高い身長にスレンダーな体型のためモデルと見紛うばかりのルックス。澪や万理亜とはタイプが異なる、透き通るように綺麗なその少女に、

「ゆ、柚希……お、お前、何でここに……っ？」

刃更は思わず混乱と驚愕を得た。眼の前に居たのは、刃更の幼馴染の野中柚希だ。

――先日、刃更はおよそ五年ぶりに柚希と再会した。柚希はまるで別人のように綺麗になっていて。幼い頃の姿しか知らなかった刃更は、その変化と成長に心の底から驚いた。とはいえ再会こそしたものの、流石に同居まではしていない。本来この東城家――しかも朝の浴室には決している筈のない柚希は、いつものように感情の見えにくい顔で、

「迎えに来た。刃更と一緒に学校へ行こうと思って」

「そ、そうなのか……いや待て、どうやって家の中にっ？」

遺憾ながら、柚希と澪や万理亜の間には少なからず因縁がある。

それは各々の立場によるものに加え、感情的な部分もあるのだが、

「普通に玄関から。あのサキュバスが入れてくれた」

あのロリエロサキュバス。人のTシャツの中に入ってきただけでは飽き足らず、またおかしな悪戯心を発揮しやがったな！

「いや、でもいつの間に風呂場まで入ってきたんだ……？」

「朝早くから騒がしくしたら、刃更に悪いと思って。――完全に気配を消してみた」
「奥ゆかしさがこじれてるっ！」
風呂場でいきなり後ろから頭を洗われたら、気の弱い奴は心臓止まるわ！
そんなこちらに構う事なく、柚希は身を寄せてきながら、
「刃更……洗わせて？」
「い、いや、一緒に入るのはまずいって柚希……解るだろっ？」
「……どうして？　昔はよく一緒に入ってた」
「いや、それは五年以上前の――小さい子供の時の話だから！」
もうお互い、無邪気なだけの子供ではないのだ。バスタオル越しでもわかる。柚希の肢体は、もう立派な女である事を強く主張していた。
刃更は慌てて腰にタオルを巻きながら、
「それに柚希だって、平気そうにしてるけど顔赤いし……やっぱ恥ずかしいだろ？」
「……うん。少し恥ずかしい。でも、刃更と一緒にお風呂に入りたかった」
一息、
「刃更は……私と一緒に入るのは嫌？」
「いや、別に嫌って事は……ないけど」

至近距離で見上げられ、恥ずかしさから刃更は思わず眼を逸らす。「嬉しい」と言ってしまうのも憚られたため言葉を濁したのだが、それを否定的な意味に取ったのか、
「あれ……えっと、柚希さん？」「……」
むーと柚希は、どこか不満げな表情になっていった。そして、
「……成瀬澪やあのサキュバスとは一緒に入ったのに、ウチとは嫌やの？」
少し訛りの交じった口調。それは、柚希が感情を抑えられなくなった時に出る癖だ。
先日、学校の屋上で万理亜が暴露した件がまだ尾を引いていたのだろう――だが、そう分析できた時にはもう遅かった。
「お、おい……っ!?」
刃更が制止するのも聞かず、柚希は自分のバスタオルの結び目を解いた。
浴室の床に白の布が落ち、透き通るように美しい柚希の肌が露わになる。
慌てて後ろを向くが、それでも刃更はしっかりと見てしまった。
野中柚希の身体がどれだけ大人に成長し、どれだけ綺麗になったのかを。さらに、
「――刃更、洗わせて」
先刻よりもやや強めの口調で言うと、柚希は刃更の背中にぴったりと身体をくっつけるようにして抱き付いてきた。その感触の破壊力に硬直した刃更の背中に、柚希は頬を寄せ、

「もし洗わせてくれなかったら――もっと凄い事する」
その静かな声に込められている本気の色に、刃更は即座に降参。
「わ、解った……洗って良いっ。だから、これ以上は許してくれ……！」
こっちは仙人でも聖人君子でもない。健康な年頃の青少年なのだ。今でも既にヤバイというのに、これ以上の事なんてされたら完全に理性が崩壊してしまう。
こちらの承諾を得られた事に少し機嫌を直してくれたのか、柚希は「なら動かないで」と口調を落ち着いたものに戻すと、刃更の頭を洗い始めた。その優しく丁寧な指使いは、柚希の真面目な性格と、何よりも刃更を大切に想ってくれている事を感じさせるもので、
……五年、か。
かつて幼い頃。無邪気に互いの身体を洗い合っていた時と今とでは、自分も柚希も色んな事が変わってしまっている。単純に年を重ねただけでなく、互いの立場や関係も含めて。
――しかし、それでも変わらないものは確かにあるのだ。
柚希がこちらを大切に想ってくれているように。
東城刃更もまた、今も昔と変わる事なく、野中柚希を大事に想い続けているのだから。
「……」「……」
いつしか二人ともが無言になり、浴室内には沈黙が降りていた。

だが、そこに気まずさはない。あるのはただ、互いを想って生まれる静寂で。

やがて、シャワーのお湯で刃更の頭を綺麗に洗い流してくれた後、

「……刃更」

ふと。背後の柚希がこちらへと呼び掛けてくる。それはとても静かな声で、

「刃更も迅さんも、もう《里》には戻ってこないの……？」

投げられた問いに、刃更は沈黙を返した。それこそが、刃更が魔王の血を引く澪や、サキュバスの万理亜を受け入れられた理由だった。

――柚希が口にした《里》というのは、単に故郷の田舎を指している訳ではない。

先ほど柚希は、サキュバスがこの家に入れてくれたと言った。

それは万理亜のような魔族の存在を受け入れている者の発言。この世界を魔族から守るため、太古より戦い続けてきた《勇者の一族》――それが野中柚希の正体であり。

そして東城刃更もまた、かつては同じ使命の下に戦っていた。

そう――五年前、《里》をあの凄惨な悲劇が襲うまでは。

封印していたS級クラスの邪精霊に操られた、里の青年による一族の大量虐殺。

その際、眼の前で多くの仲間を殺され、友人らにまで凶刃が迫った事で、刃更は己の力を暴走させてしまった。《無次元の執行》という、本来は敵の攻撃だけを消去する筈の

その技は、邪精霊に操られた青年も、彼に殺された一族の仲間の遺体も、全てをゼロ次元へと消し去ってしまって。事件後、《里》は刃更を牢へ幽閉すると決定したものの、刃更の父親である迅がこれに反発。結果、刃更と迅は勇者の一族としての資格を剝奪され、里を離れる事になった。要は追放されたのだ。だから、

「……難しいと思う、《里》に戻るのは」

無論、《里》に対する郷愁はある。だが五年前の悲劇によって刻まれた爪痕は、今もまだ消える事なく残っているのだ。里にも、一族の仲間にも、そして――刃更自身にも。

現に五年が経った今でも、刃更はあの日の悪夢に苛まれ続けているのだから。

――それに。何よりも、東城刃更は既に己の新たな道を決めていた。

望まぬ形で先代魔王の力を受け継いでしまい、その力を現魔王とその配下達から狙われ続けている少女を――成瀬澪を自分が守ると。魔王も魔族といった澪達の立場も、勇者の一族だった己の過去も関係ない。家族として、兄として、二人を守ると。そう誓ったのだ。

だがそれは、勇者の一族の理念とは決して相容れる事はない。先日の戦闘で、柚希が力を貸してくれたのは例外中の例外だ。その事を互いに理解しているからこそ、

「でも刃更――」

柚希が、どこか縋るような口調で何かを言おうとした時だった。

刃更達がいる浴室の外――脱衣所と廊下を隔てるドアが、ノックの後に開けられて、
『もしかして刃更……まだ入ってるの？　朝ごはん、とっくにできてるんだけど』
脱衣所からした澪の声に、刃更はギョッとなって硬直した。
いつまでもシャワーから上がらない刃更を呼びに来てくれたのだろう。つい先刻あんな事があったばかりだというのに――基本的に澪は面倒見が良いのだ。一緒に暮らすためこの新居へ引っ越してきた時も、刃更が案内役を頼むと何だかんだ文句を言いながらも街の散策に付き合ってくれたし。今は亡き――澪をこの人間界で育てた養父母の教育が良かったのだろう。澪の本当の父親である先代の魔王ウィルベルトの配下だったそうだが、余程できた性格の持ち主だったに違いない。
――だが、今はそうした澪の背景に想いを馳せている場合ではなかった。
何せ今の刃更は、浴室の中で裸の柚希と一緒なのだ。
「わ、悪いっ……もう出るよ。うん、もうちょっとで出られそうだ……」
慌てて返事をしながら、刃更は床に落ちているバスタオルを柚希に渡した。視線で「頼むから巻いてくれ！」と訴えると、柚希は仕方なさそうな顔でバスタオルを巻き始め、
『……ねえ刃更。もしかして、先刻の事怒ってる？』
そこへ少し不安そうな声音で、澪の問い掛けが来た。電撃はやりすぎたと思ったのか、

『で、でも刃更だって悪いんだからね……だってあたしお風呂上がりだったのに、いきなり脱衣所に入ってきて抱き寄せるんだもん。刃更が乱暴にするからバスタオル解けちゃうし、挙句にどさくさであんな事まで……あたし、本当に恥ずかしかったんだから』
「わ、悪いっ……でもあれは……！」
刃更は心の中で悲鳴を上げた。確かに澪が口にした内容は事実だ。事実だが、その抜粋の仕方だと事情を知らない者には多分に誤解を与えてしまう。案の定、
「――――」
柚希はスッと眼を細めると、何故か浴室の曇りガラスの窓を開けた。そして、
「（お、おい何してんだ……柚希？）」
小声で問う刃更の眼の前で、あろう事か柚希は自分のバスタオルを解くと、窓の隙間から外に向かって投げ捨てた。ぎゃー、と驚愕の余り刃更はムンクの叫び状態になり、
『？　どうかした刃更？』「い、いや何でも。何でもないぞっ」
どうにか必死に取り繕おうとするものの、窓を閉めた柚希は刃更へと歩み寄ってきた。
澪がいるため下手に逃げられないこちらに、正面からそっと身体をくっつかせて、
「刃更……どさくさで何したの？」
「（い、いや、ちょっとした事故が……本当だって！）」

見上げる視線で問い詰めてくる柚希に、刃更が落ち着くように告げると、浴室の外で、
『まあ……何でもないなら良いんだけど』
と澪は言って、
『でも刃更――どうして脱衣所に、あたしのものじゃない学校指定の女子の制服と下着があるの？　しかもご丁寧に畳んで』
すまんそれは俺のだ、実は俺は女装趣味があったんだ、あははは――無理だよ畜生！
言い訳不能。刃更が観念したのと、浴室の扉が無慈悲に開けられたのは同時だった。
『……』
気まずさ大爆発。そんな三者三様の沈黙の後、最初に口を開いたのは澪だった。
「……上は洪水、下は大火事なのは？」
「お、お風呂、ですかね……？」
答えと同じ場所で裸の柚希に抱きつかれながら、「はは」と答えた刃更に、
「――お風呂で・す・が。では、上は大火事、下も大火事、全て大火事なのは？」
と、引っ掛け問題よろしく、剣呑な瞳で澪。

「い、いや～……何だろうな。炎上したSNSとか、かな？」
「ううん、違うわ――それはね、これから火達磨になるアンタよっ！」
抑えていた感情が爆発した。湧き上がる怒りのままに魔法を発動しようとして――その瞬間、澪は突然「あ」と身体をピクンと反応させた。そして、
「やっ……嘘、こんな時まで……？　――ふあぁんっ」
途端に声を甘いものにしながら、澪はぺたんと床にへたり込んでしまう。
「お、おい――大丈夫か？」
慌てて駆け寄ると、澪の首には首輪のような痣がぼんやりと浮かんでいて、
「うわ……主従契約の呪いか」「……どうしたの？」
澪の変貌にキョトンとした柚希に、刃更は自分のために用意しておいたバスタオルを渡してあげながら、床にへたり込んで甘い色香を放っている澪を見た。
……ここのところは、しばらく発動してなかったもんな。
実は現在――刃更と澪は魔法による『主従契約』を結んでいる。
契約を結んだ者同士が互いの位置を把握できるようになるため、澪が危険に巻き込まれた時に刃更が彼女の位置を把握できるようにと、万理亜から提案されたからだ。ところが本来は澪が主になる筈が、何故か契約が逆転して発動。刃更が澪の主になってしまった。

お前達に教えてやろう
決して抗えない
絶望と快楽を――

ついにゾルギアが動き出した。警戒を強める刃更達。しかし、そんな刃更達を嘲笑うかのようにゾルギアが仕掛けた卑劣な罠は徐々に彼らを追い詰めてゆく。そして窮地に陥った時、刃更と澪が知らされた残酷な真実とは――？

新妹魔王の契約者 テスタメント III

The Testament of Sister New Devil

COMING SOON!

しかもこの主従契約。主と配下の関係を確固たるものとする目的もあり、配下側が主となった者に対して裏切りなど後ろめたい感情を抱くと、途端に呪いが発動してしまう。

刃更達が結んだ契約魔法は、万理亜の力を借りて唱えたため、発動する呪いもサキュバスである万理亜の特性に則したものになっていた。

――夢魔であり淫魔でもあるサキュバス。その特性は『催淫』だ。

刃更が風呂上がりの澪のいる脱衣所へ入ってしまった時は、刃更の謝罪を受けてから電撃魔法を唱えたので問題はなかった。だが今回、澪は先程の件を少しやりすぎたかもと心配していた。それで刃更を攻撃しようとした際に、とっさに心のどこかで後ろめたさを覚えてしまったのだろう。それが呪いの発動のスイッチになってしまったのかもしれない。

「や、あっ……はぁん、ふぅっ……んぅ……っ」

必死に声を押し殺そうと唇を噛み、しかし全身を襲う快楽の奔流に耐えられなくて。

床の上の澪が切なげに躰をよじらせていると、脱衣所の扉が勢いよく開き、

「失礼します！　澪さまが快楽でヘロヘロになっているのはここですかっ？」

一体どうやって気付いたのか、万理亜がズンズンと中へ入ってきた。

そして床の澪や、裸の刃更や柚希を見つけると「おおっ」と眼をキラキラさせて、

「こんな事もあろうかと、買っておいたのですよ世界最小・最軽量！　ずっと色褪せない思い出、青春メモリアルをいつまでも貴方と共に！」

どこからか取り出した小型のビデオカメラを神速で構え、澪の撮影を開始した万理亜に、

「……」

刃更は無言でその首根っこを摑むと、浴室の中へ放り込んで扉を閉め、外からモップと洗濯機で容赦なく閉じ込めた。途端にドンドンと向こう側から扉が叩かれ、

『何するんですか刃更さん！　Tシャツの件をまだ怒ってるんですか？　澪さまの入浴中の札を隠した事なら謝ります！　私はいいですからカメラだけでも……カメラだけでもお願いします！　サキュバスの誇りと魂に賭けて、今の澪さまだけは撮らなくてはっ！』

「やかましいっ！　自重しろ、ロリエロサキュバス！」

全ての元凶の隔離に成功した刃更は、澪の隣に腰を落として彼女をスッと抱き上げた。

「――大丈夫か、澪？」

「刃更が悪いのに……っ、んうっ、お、お兄ちゃんの馬鹿ぁ……百回殺してやるぅ」

快楽を持て余した澪が、悔しそうにしながらも、刃更の首に両手を回してキュッと抱きついてくる。刃更を「お兄ちゃん」と呼ぶのは、主従契約の呪いが発動してしまった時の澪に出る、無意識の癖だった。だが恐らく、発動した主従契約の呪いの効果はそれほど強くない。横になって休んでいれば、程なくして呪いは治まる筈だ。それでも負けん気の強

新妹２巻お買い上げありがとうございます！

イラスト担当の大熊猫介です。ども！

今回澪ちゃん　イヤン♥アハーン♥　な絵ばかり

だったので　あとがきにて凛々しいお姿をば。。。

でもきっと3巻でもイヤン♥アハーン♥なんでしょう、きっと（○´∀`○）

大熊猫介

い澪の事だ。今のような自分の姿を柚希に見られたくないのだろう。時間をかけずに呪いを解くには、刃更が主として配下を――澪を屈服させ、忠誠心を強めるしかない。

そして、ここまで快楽に溺れた状態な以上、やれる事は必然的に限られる。だから、

「解った……じゃあ、お前の部屋に行こうな」

朝からリビングのソファでというのは、流石に恥ずかしいだろう。

「悪い柚希……ちょっとコイツ具合が悪いみたいだから、介抱してやってくる。すぐ戻るから、服を着たらリビングで待っててくれ」

「……解った」

澪の様子がおかしい事は理解してくれたのか、少し不服そうにしながらも柚希は頷いてくれた。だから、刃更は澪を抱きかかえると脱衣所を出た。

廊下を歩き、二階へと続く階段を上りながらつくづく思う。

自分は澪の日常を守りたいと思っているが、この状況を含めるのは流石に違う気がする。とてもじゃないが、このままでは刃更の理性も我慢も、心も身体も保ちそうにない。

いつか絶対に間違いを起こす。そんな最悪の形で澪を――妹を傷付ける訳にはいかない。

だから、東城刃更は静かに呟いた。互いの位置を把握できるメリットは捨てがたいが、

「契約を無効化できる次の満月の晩には、この主従契約は破棄だな――身が保たない」

第1章 ヤキニクと青春番外地

1

圧巻という言葉が相応しい光景があった。

見る者の食欲をそそる、赤と白のコントラスト。木製のテーブルの上を所狭しと埋め尽くす鮮やかな彩り。それは、様々な部位を最も美味しい形でカットされた牛肉達だ。

焼肉。青少年にとっての永遠の絶対正義を提供する店で、東城刃更はクラスメイトの滝川八尋と向かい合うようにしてテーブル席に座っていた。

「な、何だこの縦置きできそうな牛タン……厚みが一cmくれーあるぞ、バサっち」

「ああ、早く焼いて食おう……肉はまだ他にも沢山あるからな」

「お、おお……じゃあ焼くぞ？」

意を決し、滝川が牛タンを七輪という名のフィールドへと投入する。
途端にジュウゥゥという音と共に、肉が焼ける美味そうな匂いが立ち込めて、
「そ、それじゃあお先に行かせて貰うぜ」
ゴクリと喉を鳴らすと、滝川は緊張の面持ちで牛タンを口へと運んだ——次の瞬間、
「う、う、美味いぃぃっ、何だこれっ!? こんなのもう牛肉ってレベルじゃねえーっ!」
くわっと眼を見開いて叫んだ。刃更は思わず苦笑して、
「いや、立派な牛肉だけどな」
「何やってんだ、バサっちも食えよ！　ヤバイ……この肉はマジでヤバすぎるぜ」
「ああ勿論。でもお前もどんどん食えよ滝川。焼きすぎると折角の肉が焦げちまうし」
次々と肉を七輪に載せ始める滝川に、刃更がそう告げると、
「させねえよ、こいつらを焦げさせたりなんか。全部美味しく食いまくってやるっ！」
そうして喜びと興奮は最高潮を迎え、箸を動かす手と肉を食べる口は止まる事なく。
刃更と滝川の夕食が、本格的に始まった。
「——でも、良いのかよバサっち？　こんな高そうな店で奢って貰って」
肉を食べる手は止めないまま滝川に問い掛けられ、刃更は「ああ」と頷いた。
刃更が滝川を連れて来たのは、『赤木』という名の焼肉屋なのだが、

「言っただろ。この店は、学生限定の食べ放題があるんだ……それも学割価格のな」
「でも俺の分と合わせると五千円だぜ。結構な出費だろ」
確かに一人前二千五百円という金額は、高校生が単なる雑用のお礼に奢る金額として考えると高い。だが刃更が滝川をこの店に連れて来たのには、別の理由があるのだ。
——魔族は現在、大きく分けて二つの勢力に分かれている。人間界への侵攻を再開しようとしているタカ派の「現魔王派」と、人間と争う事を可能な限り避けようとした先代魔王ウィルベルトの遺志を継ぐ「穏健派」だ。とはいえ、ウィルベルトの死後、かつて最大勢力だった穏健派は勢力としての力を急速に失いつつある。そして澪は、意図せず父親から魔王の力を受け継いでしまった事で、現魔王派からその力を狙われていた。
そして——この滝川八尋の正体は、そんな現魔王派が派遣した澪の監視役なのだ。
そんな滝川と、成り行きからではあったが刃更は戦った。それもつい先日の事だ。
そして現在、刃更は滝川と密かに協力関係を結んでいる。滝川が任務に失敗したという情報を現魔王派に流さない事と、
……それに。
恐らくは滝川が、万理亜のような澪を守ろうとする勢力——穏健派が、澪を狙う現魔王派へ極秘裏に送り込んだスパイであろう事を黙認するという交換条件で。

結んだのは対等の関係。それでも滝川は、刃更に重要な情報を教えてくれた。

それは成瀬澪が、彼女を狙う魔族と戦う動機。澪の養父母を殺した犯人の正体だ。

だが、刃更はまだ澪にその真実を伝えてはいない。澪の戦いは、殺された養父母の復讐に端を発している。下手に教えて感情を暴走させてはまずいし、まだ色々と状況が見えていない事もある。よって今はまだ、この情報は刃更だけが知っておけば良いだろう。

そんな訳で刃更は滝川に大きな借りを作っていた。当然、焼肉を奢った程度でその借りを返せるなどとは思っていないが、

「勘定の心配はいらない。毎月の小遣いから何割かは貯金できてた分があるからな」

「なら良いけどよ。でもバサっちの親父さんは今、家を空けてるだろ？　ある程度の生活費とか預かってるんじゃないのか？　ここの払いも、言わば必要経費みたいなもんだし」

「流石によく知ってるな……でも、お前との飯代に親父の金は使えないよ」

現在、家を空けている迅からクレジットカードを預かってはいる。だが、滝川との協力関係は刃更の独断によるものだ。この件に迅のカードは使えない。

「ふーん、成る程ね……」

網の上の肉を一通り食べ終えた滝川は、こちらの意図を見透かしたかのように言って、

「てっきり焼肉を奢る見返りとして、また何か訊いて来るとばかり思ってたんだけどな」

「メシを奢ったくらいで、有用な情報や協力を要求できるなんて思う程、俺は楽観的じゃない。今日のこれは、あくまで『これからよろしく』っていう、それだけの話さ」

だから、

「坂崎先生から頼まれた雑用を代わってくれたお礼はまた改めてするし、ゾルギアの――澪の養父母を殺した敵の情報の借りは、俺にできる事でこれから返していくよ」

「やれやれ、バサっちは真面目だね～。俺が聞いた事のあるジン・トージョーに関する話なんて、どれも破天荒なものばかりなんだがな――本当に親子なのかよ？」

かつて迅は、一族の《里》では最強の勇者の名をほしいままにしていた英雄だった。刃更が聞いた話でも、大戦中の迅の武勇伝はどれも信じられないものばかりだ。昔の迅を知る大人達から《里》にいた頃に聞いた話では、今のあれでかなり丸くなっているらしいが、

「……やっぱ魔界でも、親父って有名なのか？」

「そりゃもう。大戦じゃ、こっちの高位魔族が結構な数やられてるからな。ジン・トージョーつったら、俺達魔族の間でも最強の敵――それこそ戦神扱いだよ。先代魔王のウィルベルトが軍を引くって決定した時に、まだ戦おうとしていた連中が渋々でも従った理由は二つ。穏健派でありながら、当時の魔族の中で最強だったウィルベルトの影響力と、ジン・トージョーの化け物みたいな戦闘力を恐れての事だったらしいぜ」

そこまでの説明は、万理亜から受けてはいない。恐らく万理亜は、澪に何かあった時に彼女の居場所を特定できるようにするための対策用として割り切っていたのだろう。

「――その一方で、もし敵の手に落ちた場合は、情報漏洩を防ぐための役割も担っている。敵に捕らえられて主の足手纏いになる――それは主に対する最大の裏切りだからな」

と滝川。

「どんな特性でも、最大限の力で発動した呪いを受ければ大抵は生きてはいられない」

「……らしいな」

刃更と澪が結んだ主従契約で発動する呪いの特性は、契約魔法を唱える際に魔力を貸してくれた万理亜のもの――サキュバスの『催淫』だ。だが、それも最大限で発動すれば、余りの快楽に脳の神経が焼き切れると言っていた。冗談半分ではあったが、あれは真実なのだろう。捕虜の情報漏洩の防止の効果もあるとは、よくできている契約魔法だった。

「だから気を付けた方が良い。確かお前らは、先代魔王の力を受け継いだ成瀬澪の特性だと危険だって事で、サキュバスの特性で契約してたよな？」

「ああ……まあ、そうだけど」

「余り楽しい話じゃないんだが――長く生きてる高位魔族の中には、自分で主従契約魔法を唱えず、わざとサキュバスの特性で契約を結んでいる奴がいるんだよ。長い時を生きて

いると、どうしても娯楽が欲しくなるからな」

「娯楽って……？」

「性愛玩用さ。女をクスリ漬けにするのと同じで、『催淫』の快楽で縛っちまうんだ」

「……成る程。確かに最悪な話だな」

「いや、その程度ならまだマシなんだよ。本当に最悪な連中になると、同じ趣味の奴と自分達の下僕を入れ替えて、わざと呪いを発動させて遊んだりしている奴もいる」

「遊ぶ……って、まさか何の意味もなく自分の配下を殺してるっていうのか？」

「いや、そうじゃねえよ……まあ真面目なバサっちには解らない世界の話なんだろうな」

と滝川は苦笑して、

「身も心も捧げた自分の主以外の相手に何かをされれば、それも立派な主に対する裏切りだ。自分の貞操を守れなかったんだからな――すると、どうなると思う？」

あ、と気づいたとばかりに表情を変えた刃更に、滝川は頷いた。

「そうだ。自分の主以外の奴にされる――その背徳感で呪いが発動しちまうのさ。運が良ければ呪いが強すぎて死ぬ事ができるが、悪けりゃ余りの快楽に正気を失って背徳感すら感じられなくなっちまう。だが壊れたオモチャには用はないからな。結局は処分されて、新しいオモチャが用意される――後はその繰り返しさ」

そして、

「ちなみに、その腐った遊びの発案者な――成瀬澪の養父母を殺したゾルギアだぜ」

刃更はギョッとなって息を呑む。

「じゃ、じゃあ……監視役がお前に交代したのって、まさか」

「そういう事だ。ゾルギアがおかしな真似をして、もし成瀬が死ぬような事があれば、彼女の中にあるウィルベルトの力まで消えちまう可能性がある。養父母役だった穏健派の魔族を殺したついでに、ゾルギアが成瀬に手を出す危険性があると上は判断したのさ」

余りの話に刃更は言葉もない。

「だから気を付けろ。ゾルギアなら、成瀬に主従契約が掛かっている事は簡単に見破れる。もし成瀬がゾルギアの手に落ちるような事があれば、相手は憎い憎い養父母の仇だ。何かされたら恐らくもう正気には戻れないぜ。まあ成瀬の性格なら、何かされるくらいなら自分で舌を噛みそうだが――バサっちとしては、そういう事態は避けたいところだろう」

「当然だろ……っ！」

そんな真似だけは断じてさせてたまるものか。俯き、ギリっと歯を食い縛る刃更に、

「まあ、上はもうゾルギアを成瀬に近付ける事はないだろうし、彼女に主従契約魔法が掛かってると解ったら、呪いで死なせてウィルベルトの力が消えたりしないように、おかしな真似をする連中はいないと思うけどな」

確かにそのメリットは大きい。非常に大きいが、

「……でも、敵がウィルベルトの力を狙っている奴だけとは限らないだろ」

魔族の中には、澪を守ろうとしている穏健派以外にも現魔王派に反発する勢力はあるだろう。そういう連中からしてみれば、澪を殺した方が現魔王派にダメージを与えられる。敵の敵が、こちらの味方とは限らないのだ。

改めて澪を守る事の難しさに刃更が苦い表情でいると、滝川がふと静かな声で、

「――まあ、全く対策ができない訳でもないけどな」「本当かっ？」

バッと顔を上げた刃更に、

「主従契約魔法を解く方法は二つある。一つは主と配下両者同意の上、同じ魔法で解約する無効化。そして、もう一つが契約の『誓約化』だ」

と滝川。

「主従契約の象徴として、首に浮き出る首輪みたいな痣があるだろ。あれの色は忠誠度に従ってその色が変わるんだ。忠誠度合いが低い状態だと青だが、強まるにつれて青紫になり、赤紫になり、最後には真紅になる」

そして、

「そこからさらに上――忠誠が完全にMAXまで高まると、痣が消えて呪いが発動する事がなくなる。何せそこまで忠誠が高まれば、配下は絶対に主を裏切る事なんてなくなるからな。これは主従の『契約』が『誓約』にまで昇華される事で起こる現象らしい。そこまでの主従関係に到達できた例は過去にも数例しかないけどな。だが、その状態の主と配下には誰も勝つ事ができなかったって話だ」

「つまり俺と澪も忠誠を誓約のレベルまで高めて、その前例みたいに強くなれっていうのか……俺と澪は、まだ出逢って少ししか経ってないんだぞ」

そんなのは、それこそ長い寿命の魔族だからできる事だろ。

「まあな。だが、たとえ誓約化までは無理でも、お前と成瀬の信頼関係や忠誠度を高めておくに越した事はないと思うぜ。何せ主従契約魔法は、互いの想いを力に変えられるんだからな……つっても、やる前から諦めるような奴には絶対に無理だろうけど」

チクリと皮肉を言われ、思わず黙り込んだ刃更に、「まあ」と滝川は言って、

「一人で結論が出せる話じゃない。どうするかは成瀬とも相談して決めるんだな」

「……ああ。そうするよ」

対する刃更は、低い声でそれだけを言った。

――澪を信頼できない訳ではない。刃更が、自分自身に対して自信が持てないのだ。

自分は決して、澪にそこまで信頼して貰えるような人間ではない。

東城刃更が、東城刃更を信じられないのだ。

かつて罪を犯した自分を、多くの仲間を消し去ってしまった自分の事を。

そんな自分を信じろなどと――口が裂けても言えなかった。

自分達が置かれている厳しい状況を再認識した刃更が黙り込んでいると、

「折角の肉なんだ。暗い話はここまでにしておこうぜ……そもそも、下手に考えすぎても仕方がないからな、最悪の事態なんてものは」

「……ああ」

「つーか、これ食べ放題なんだろ？　だったら、どんどん追加を頼まないと損だろ」

話題を変える滝川の言葉からは、彼なりの優しさが感じられ、

「そうだな……よし食うか！」

刃更は一旦気を取り直し、「すいませーん」と店員を呼んだ。滝川とメニューを見ながら、カルビだロースだ、いやホルモンを攻めるかなどと相談しつつ追加をオーダー。

そして店員の背中を見送り、ソフトドリンクのコーラで喉を潤した時だった。

「――何だ。先刻からどうも聞き覚えのある声だと思っていたが、やはりお前達か」
ふと横からした色っぽい女性の声に、刃更達がそちらを見ると、
「長谷川先生……」
そこに居たのは、刃更や滝川が通う聖ヶ坂学園の養護教諭――長谷川千里だった。
口調こそ男っぽいが、綺麗に整った顔にグラマラスすぎる胸――それは最早、年頃の高校生男子には教育上よろしくない美しさと色気を長谷川は持っていて、
「東城、それに滝川……お前達二人だけか？」
「え？　ええ、まあそうですが」
「なら丁度良い。すまないが、良かったら相席させてくれないか？　実は友人と待ち合わせていたのだが、たった今用事が入ってしまったと連絡があってな」
と長谷川。
「折角来たんだし一人でも食事をして行こうと思ったのだが、先程から他のテーブルの男性客が入れ替わりで『自分達と一緒に食べないか』と声を掛けてきてな。女の一人焼肉というのは、そんなに寂しそうに見えるものなのか？」
「いや、それは多分……」「ああ、違うと思うぜセンセー」
刃更と滝川が目を見合わせてから告げると、

「とにかく、余りにもしつこいからもう食事は諦めて帰ろうと思っていたんだが、この店は前から食べてみたかった所なんだ。生徒のお前らからしてみれば、教師と一緒に食事というのは嫌かもしれないが、もし相席をさせてくれるならばありがたい」

「はあ……そういう事なら、俺は構わないですけど」

とはいえ、もし滝川が嫌なら申し訳ないが断らせて貰うしかない。今日のこの席は、刃更と滝川が協力関係を結んだ一環なのだ。刃更が「どうする？」と滝川に視線で問うと、

「いやいや、そんなの俺もＯＫに決まってるだろ。ウチの学校で生徒・教師を問わず、長谷川センセーと飯を食いたい野郎が何人いると思ってんだ」

「……だそうです」

「そうか。ではすまないが相席させて貰おう」

「よっしゃ先生、そうと決まれば俺の横が空いてるぜ？」

滝川がニヤッと笑って隣の席に長谷川を誘うが、当の長谷川は「それじゃあ」と、あっさり刃更の隣に腰を下ろした。

「あ、でも俺達は学生限定の食べ放題だから、同じテーブルは厳しいんじゃ――」

「心配はいらない。店側に落ち度はないが、それでもこちらは店内で迷惑を被っているんだ。少しくらいの融通なら利かせてくれるだろう」

その言葉の通り、長谷川が席に着くとすぐに店員がお冷とおしぼりを持ってきて、「すみません」と頭を下げてきた。どうやら店側としても、他の客を抑えられずに申し訳ないと思っていたらしい。そんな店員に、長谷川は飲み物と肉などを何点か注文し、

「しかし、この店に学生用の食べ放題メニューがあったとは知らなかったな。ひょっとしてウチの生徒は、よくこの店に食べに来ているのか？」

「どうですかね。学校からは駅を挟んで結構な距離がありますから。味を考えれば食べ放題の金額は安いくらいですけど、それでも高校生が気軽に来るには少し高いので」

「だな。俺も今日、バサっちに連れて来て貰うまでは知らなかった」

「では東城は、前からこの店を知っていた訳か。以前からよく来ていたのか？」

「いえ、俺も今日で二度目です。この近くに引っ越してきたのは、夏休みの途中からですし……でも以前、この店には親父と一緒に来た事がありまして」

と刃更。

「ウチの親父、プロのカメラマンをしているんですけど、この店のオーナーさんが親父のファンらしいんです。で、一度親父に写真を頼んだ事があって。店の入口にでかい風景写真が飾られているんですが――あれ、親父が撮ったものなんですよ」

そして写真の代金とは別に、この店に招待して食事をご馳走してくれたのである。

「ほう……こんな店にも『JIN』のファンが居たとはな」
「親父を知っているんですか？」
「意外か？　熱狂的なファンとまではいかないが、私も彼の撮る写真は好きだよ。雑誌か何かで評論家も言っていたが、彼の写真には他の人間には決して撮れない一瞬が――被写体が本来の魅力を放つ刹那が写し出される。確かにあれは芸術と言って良い。私のような素人が見ても、惹き付けられるんだからな」
「どうも……そう言って貰えると。今度親父に伝えておきます」
と刃更が気恥ずかしそうに頭を下げたところで、注文していた肉と飲み物がやってきた。
刃更と滝川の追加分に、長谷川が注文したものがまとめてやって来たため、テーブルの上が一気に皿でいっぱいになって、
「さて、それではいただくとするか」「よっしゃ、こっちもこれからが本番だぜ」
二人の言葉と共に、さっそく様々な肉が網の上で踊り、美味そうな音を立て始める。
――そんな中、刃更は先ほど長谷川が口にした言葉を思い出していた。
刃更を守るために勇者である事を捨て、共に里を出て。生きてゆくために、迅が新たに選んだ道がカメラだった。五年前に一族の里で起きた悲劇を経て、心に深い傷を負った当時の刃更は、人の感情を心の底から揺さぶるような迅の写真に、何度となく救われてきた。

その時の迅は、もう世界を救う勇者ではなかったが、それでも刃更にとっては間違いなく自分を守ってくれる勇者で。そんな迅の背中を見てきたからこそ、今こうして澪や万理亜を守るために戦える自分がいるのだろうと――そう素直に思えた。

2

刃更と滝川は制限時間ギリギリまで食べ続け、この日の焼肉は大満足で幕を閉じた。
家の方向が違うからという事で、滝川とは店を出てすぐに別れて。
そして現在――刃更は、長谷川と帰り道を一緒にしていた。
「しかし東城、本当に構わないのか？」
隣の長谷川が問い掛けてくる。
「こちらが頼んで相席させて貰ったんだ。お前らの払いも持ってやりたかったんだが」
「いや、大丈夫ですよ本当に。今日のあれは、俺が払わなきゃいけないものだったし」
滝川の分については、刃更が払わなければ何の意味もない。ところが、
「しかしだな……」
まだどこか納得できずにいる長谷川に、律儀な人だなと刃更は苦笑する。

「それなら今度、機会があったらご馳走して下さい。その時は先生のオススメの店で」
「ふむ……解った。お前がそれで良いと言うのなら、また今度お前を誘うとしよう」
あれ、滝川は誘わないんだ。まあ、アイツの分も俺が払ったしな。
「それにしても……『魔族』だの『忠誠』だのと、お前と滝川は随分とおかしな話をしていたな。漫画かゲームかは知らないが、最近はそういうものが流行っているのか？」
どうやら聞かれてしまっていたらしい。とはいえ刃更に焦りはなかった。たとえ聞かれていたとしても、大抵の人は長谷川のようにゲームか何かの話だと勝手に勘違いしてくれる。むしろ堂々と話してさえいれば、余り問題はないのだ。だから、
「ええまあ……ゲームですかね」
「そうか。私はその手のものには疎くて、面白さがよく解らないのだが、若い連中は随分とハマっているらしいな。そんなに楽しいものなのか？」
「まあ人によっては。楽しさの度合いは、人それぞれでしょうけど」
「そうなんだろうな。だが少なくとも東城、お前は随分とハマっていそうだ」
「どうしてです……？」
「滝川と話していた時のお前の声や口調が、真剣そのものだったからさ」
からかうような声音の長谷川の指摘に、

「……そうですね。そうかもしれません」
僅かに視線を落としながら、刃更は告げる。
「たとえゲームだろうと——絶対に負けられないものはありますから」
別に楽観的に考えていた訳ではない。だが、やはり自分達が置かれている状況は厳しかった。新たに派遣されてくる監視役。澪の養父母を殺したゾルギアの存在。主従契約の利点と問題点。対処と対応を考えなければいけない事は山のようにあった。すると、
「——えっ？」
不意に、刃更は柔らかな温もりに包まれた。そして自分の置かれた状態に気が付く。
隣を歩いていた筈の長谷川に、首の後ろへと両手を回され抱き締められていた。
長谷川の大きな胸に、こちらの顔を埋めさせて貰うようにして抱かれ、
「せ、先生……っ!?」
突然の事にどう反応して良いか解らず、ドギマギする刃更に、
「動くな。良いからジッとしていろ」
窘める口調で長谷川が言ってくる。
「全く……急に黙ったかと思えば、そんな思い詰めた顔をして。眼の前で、生徒にそういう顔をされる教師の気持ちにもなってみたらどうだ」

自分では抑えていたつもりだったが、焦りや苛立ちが顔に出てしまっていたのだろう。

「……すみません」

「謝る必要はない。悩む事は、生きている者の権利だ。特にお前のような年頃はな。だが、そんなお前を放っておけない奴もいるという事を覚えておけ」

刃更は小さく頷くと、少しだけ長谷川の気遣いに甘えさせて貰った。

眼を瞑れば、長谷川の優しさと柔らかさをより一層感じられて、

「……ありがとうございます。もう大丈夫です」

やがて礼を告げると、長谷川は刃更の頭を解放してくれた。だが、首に回されていた長谷川の両手は下へ降りはしたものの、そのまま刃更の腰へとしっかり回されていて、

「えっと、あの……先生？」

「放っておけないと言っただろう。言える範囲で構わないから、ここで私に話してみろ」

「いや、でも……」

思わず躊躇いを口にした刃更に、長谷川はそっと顔を近付けてきた。

「それとも――東城は、私に話すのは嫌か？」

ノーとは言えなかった。長谷川を心配させたのは、他ならぬ刃更なのだ。だから、

「実は……今、親父が家を留守にしているんです」

刃更は言える範囲で、己の悩みを口にする。

それは、澪や万理亜に対しては彼女達を心配させたくないという理由で言えず、また滝川に対しては泣き言になるため口にはできなかった想い――東城刃更が抱える苦悩だ。

「男は俺しかいないので、家の事で何かあった時は、俺が澪や万理亜――澪の妹なんですが、彼女らを守ってやりたいと思っているんです」

「うん……」

長谷川の穏やかな頷きに促される形で、刃更は苦笑する。

「でも難しいですね……何かを本当に守るって事は。人間、生きていれば色んな悩みが生まれますし、中には人には言えない事だって出てくる。それでも守ろうとすれば、そうした秘密まで守らなきゃいけない……でも、今の俺の力じゃ全部は無理そうで」

唇を噛んだ。拳をギュッと握り締める。

「守りたいんです。絶対に、何があろうと守ってやりたい……でも、守りたいものをきちんと守るって事が、どれだけ難しい事なのかを改めて思い知らされました。自分の力と存在が、どれだけちっぽけで頼りないものだったのかも」

別に何もかも上手くやれるとは思っていない。どれだけ無様でも、守り抜ければ文句はないのだ。どんな状況になろうと、自分は自分にできる全力を尽くすだけなのだから。

……でも。

もし守れなかったら――そう思うと、刃更は気が狂いそうになる。もう二度と嫌なのだ、大切なものを失うのは。五年前の苦しみと後悔を、繰り返す事だけは。すると、

「……一人で抱え込みすぎだな」

それまで黙って話を聞いていた長谷川が口を開いた。

「何となくだが、お前の抱えている悩みは理解できたよ。その事で、成瀬や下の妹に心配させたくない事もな……だが、もしお前が新しくできた家族を、妹達を大切に想っているというなら、彼女らとはしっかり意思疎通をしておく事だな」

何故ならば、

「どうしても失敗したくない事があるのなら、置かれている状況と立場をきちんと把握し、理解しておく必要がある。その際に最も重要なのは、守る側と守られる側の協力と信頼関係だ。それがあって初めて、本当の対策を練る事ができるようになる。だが、良いか――何事も完璧に成し遂げる事はほとんど不可能だ。だから優先順位を付け、絶対に譲れないラインを引いたら、それだけは何があろうと守れば良い」

「絶対に譲れないライン……」

「そうだ。たとえば、確かに秘密は守られるべきだが、守るべきは秘密じゃないだろう。

東城――お前が本当に守りたいものは何なのか、もう一度よく考えてみるといい」

自分が本当に守りたいもの――長谷川が口にしたその言葉を心の中で反芻して、

「……解りました。そうしてみます」

刃更が頷くと、長谷川は「よし」と満足そうに頷いて。

――次の瞬間、東城刃更は額にキスをされていた。

「へ――？」

いきなりの出来事に思考を停止させていると、

「……の未来に……の加護と導きを」

こちらの額から唇を離した長谷川が、何かを呟くのが聞こえた。思わず呆然となり、

「せ、先生……？」

「ああすまない、ついな……私の田舎に伝わるちょっとしたおまじないのようなものだ」

気にするな――と長谷川は笑うと、刃更から手を離して歩き出した。

額にされたとはいえキスはキスだ。てっきり何かあるのではと思ったのだが。ここまでサバサバしているという事は、どうやら本当に深い意味はないらしい。

だから刃更は長谷川の後を追い掛け、隣に並ぶと速度を合わせて歩いてゆく。

自分が本当に守りたいものと絶対に譲れないライン――それが何なのかを考えながら。

3

刃更や長谷川と別れた後、滝川八尋の姿は彼の自宅とは別の場所にあった。
下水処理場と産廃処理場に挟まれた、やや殺風景な立地にあるスポーツ広場だ。
敷地内にある芝生のグラウンド――その中心に滝川は一人で佇んでいた。
利用可能時間をとっくにすぎた敷地内は暗く、他に人の姿はない。しかし、
「……遅かったじゃねえか」
ふと滝川の背後から、野太い声が投げ掛けられた。
「悪かったな。人間として潜っていると、色々と付き合いってモンがあるんだよ」
滝川は声がした方を振り返った。すると眼の前に、見上げるような巨漢の魔族が立っている。その大きな体軀は、そこに存在するだけでかなりの威圧感を発していた。
「聞いていた応援が、まさかお前だったとはな――ヴァルガ」
「そりゃどういう意味だよラース。何か文句でもあるってのか？」
魔界での名を呼ばれた滝川は、「いや別に……」と肩を竦めた。
――先日、澪がウィルベルトの能力を暴走させた件について、滝川は澪の監視役として

現魔王派への報告を行なった。要点は三つ。
澪がウィルベルトの力を一時的に解放したものの、完全に覚醒には至っていない事。
柚希のように勇者の一族が監視をしている事。
そして――かつて勇者の一族だった刃更が、現在家族になっている事の三点である。
下手に勇者の一族に介入されても面倒だ。てっきり上は、しばらくは様子見など穏便に事を進めると思っていたのだが、よりにもよって好戦的で武闘派なヴァルガを寄越してくるとは。どうやら上には、澪の中に眠るウィルベルトの力が目覚め始めているようにしか見えないらしい。案の定、
「――さて、それじゃあ目標の様子でも見てくるとするか」
早速とばかりに動こうとするヴァルガに、
「おいおい、いきなり勝手な真似とか冗談だろ。こっちに来たばかりで、状況もロクに理解できてない奴がノコノコどこへ行くって？」
「あァ？　だから、その状況ってのを確認しに行くんだろうが。何の問題がある？」
「勝手に動くなって言ってるんだよ。お前はあくまで追加要員、仕事は俺のサポートだ。先任の俺の指示に従うのが筋だろ」
「知らねえな。俺の性格を知っていて、それでも上は俺に任せたんだ。そいつはつまり、

好きにやって良いって事だろ」

フンと笑うヴァルガに、

「ポジティブだね、お前は……そういう男前なのは結構だけどな」

そこで滝川は表情をスッと真剣なものにして、

「報告は聞いている筈だ。既に勇者の一族も動いている。下手に刺激して本格的に連中が動き出す事になって、もし成瀬澪に何かあったら――上に殺されるぞお前」

「おいおい、物騒な事を言うなよラース。別に俺だって、すぐにどうこうしようってつもりはねえぜ。だが元勇者の一族が家族になったりと、成瀬澪にも味方が出来てるっていうじゃねえか。なら、俺もきちんと状況は知っておくべきだろ」

そう言うなり、ヴァルガは風と共に姿を消した。

「ったく……」

ヴァルガの性格で、様子見だけで済む訳がない。後を追うべきか滝川が思案していると、

「――お待ち下さい」

ふと横から新たな声がした。滝川がそちらに視線を向けると、ぐにゃりと空間が歪み、虚空から美しい女性魔族が現れた。その魔族の登場に、滝川は俄かに表情を硬くして、

「……応援はひとりと聞いていたんだが？」

「その通りです。ですから、**私は貴方の応援ではありません**」

「だったら――ゾルギア侯の懐刀が、わざわざお出ましになった理由は何だ」

そう。そこに居たのは、滝川の前に澪を監視していた高位魔族――ゾルギアの配下の者だった。名はゼスト。頭脳と実力、その両方でゾルギアが最も信頼を置いている存在だ。

「ゾルギア侯はもう、成瀬澪の監視任務から離れられている。配下とはいえ対象に接近するなんて勝手な真似、よもや陛下のお許しを得ずにやっている訳ではないだろうな？」

「勿論。陛下から成瀬澪の監視役の任を解かれる前、ゾルギア閣下は布石を打たれていました。その事はラース……貴方もご存じの筈です」

確かに。ゾルギアは監視任務から離れる際、成瀬澪に対して罠を仕掛けていた。

そして――その罠はまだ活きているのだ。この事実を、滝川はまだ刃更に伝えていない。迂闊に話せない事情があるのだ。

「あれからこちらの世界では半年以上が経過しています。例の布石が今もきちんと有効に働いているのか、確認するために私が来たのです――陛下のご許可もきちんと得て」

だから、とゼスト。

「そのためには、ゾルギア閣下が監視任務を離れてから現在までの状況を正確に把握する必要があります。協力していただけますね、ラース」

向けられた冷たい瞳に、滝川は心の中で舌打ち。

……マズいな。

下手にゼストに調べられれば、余計な腹まで探られるどころか、こちらの腹の底まで覗かれかねない。刃更と結んだ協力関係については、第三者からはその線を手繰られないように細心の注意を払ってはいるが、単純なヴァルガを相手にするのとは訳が違う。ゼストがゾルギアの右腕なのは伊達じゃないのだ。

さらに――滝川は刃更の《無次元の執行（バニシング・シフト）》については伏せて報告していた。下手にあの技について知られれば、間違いなく刃更の存在は危険視されてしまう。全てを消し去るあの技が、澪の中に眠るウィルベルトの力を消し去ってしまわない保証はないからだ。

そのため、この事は滝川が所属しているもう一方の勢力側にも伝えていなかった。滝川自身、まだ刃更の技については知らない部分が多い。下手に報告すれば、かえって事態を混乱させる。何より、刃更にはまだ死なれる訳にはいかないのだ。だから、

「俺の任務はあくまで成瀬澪の監視だからなあ……ゾルギア侯のために働かなきゃいけない理由も義理もないんだが」

とぼけてみせる滝川に、

「私がここに来たのは、ゾルギア閣下の指示だけではありません。陛下の命も受けてここに居るのです。貴方には、協力する理由と義理があると思いますが」

それとも、とゼスト。スッと瞳を細くして、

「――何か、こちらに協力できない理由でもあるのですか？」

成る程そう来たか。ならば、と滝川は方針を変更。

「いやいやまさか。そういう事ならナンボでも協力させていただきますとも」

ニッとゼストに笑い掛ける。ここで幾らゴネたところで、どうせゼストは独自に動くだろう。それで下手に真実に近付かれるよりは、いっそ自分が案内役を買って出て不都合な真実から遠ざけた方が良い。ヴァルガの動向も気にはなるが、

……ま、せいぜい頑張ってくれよバサっち。

何せ――こっちもこれから、もっと面倒な奴の相手をしなければならないのだ。

4

刃更が家に着いたのは、夜の十時を回った頃だった。

澪が入浴中だった事もあり、取り敢えず刃更は万理亜と二人だけで自分の部屋へ。

そして、新たに浮上した不安要素を含め、これからどう対応すべきかの相談を行なう。

まず訊ねたのは、主従契約魔法のメリットとデメリットについてだ。すると、

「確かに――刃更さんの仰る通り、主従契約魔法には利点とリスクの両方があります」

テーブルを挟んで向かい合いながら、クッションの上に座った万理亜が神妙な表情で、

「ただし現魔王派の狙いは澪さまの命ではなく、ウィルベルトさまの力ですから。連中としても澪さまに死なれては困る以上、私達が注意しなくてはいけないのは――」

「――誘拐か」

たとえ殺す事はできないとしても、拉致して魔法や魔導具などを使用し、無理矢理にでも能力を覚醒させようとしてくる事は考えられる。「そうです」と万理亜は頷いて、

「ですが主従契約で魂が結ばれた主と配下は、その気になれば互いの居場所を感知できるようになりますので。より護衛がしやすくなるだけでなく、もし何かで攫われてしまった場合でも助けに行けます。刃更さんと澪さまに主従契約を結んでいただいたのは、そうした誘拐などへの予防策です」

確かに敵としても澪を死なせる訳にはいかない以上、攫われた澪が後ろめたさを感じて呪いでどうにかなるリスクよりも、いかに誘拐されないようにするか。もし誘拐されても、いかに助け出すかを考えるべきだろう。

――現に。先日、学校の屋上で正体を隠した滝川と戦闘した際に刃更が重傷を負った後、

澪はそれ以上周囲を巻き込まないように一人で決着を付けに行ってしまった。

そうして窮地に陥っていた澪の下へ、どうにか刃更が間に合う事ができたのは、主従契約魔法のお陰で澪の居場所を感知する事ができたからだ。無論、あの時の滝川は刃更が来る事を想定し、こちらが間に合うようにわざと時間を掛けていたのだろう。――だが、これからはそうはいかない。滝川の話では、新たな澪の監視役が派遣されてくるのだ。

「話は解った……でも万理亜、だったら何でそうと言ってくれなかったんだ？」

呪いの件を黙っていた事といい、いささか秘密主義がすぎるだろう。すると、

「すみません……澪さまの性格を考えると、言わない方が良いかなと思いまして」

と万理亜。

「澪さまは素直じゃないところがありますが、基本的には優しく、何よりも真面目な方です。互いの居場所が解るようになるという即効性のメリットならともかく、刃更さんと信頼関係を深めれば、それだけ二人とも強くなれると言ってしまうと、無理に何とかしようとして、かえって上手くいかないと思ったんです」

「……それはあるかもな」

幼い頃から、勇者の一族として修行を積んでいた刃更とは違う。半年前に養父母を殺されるまで、澪は普通の女の子として生きていた。そんな澪に、目的のために気持ちを割

り切れというのは無茶だし無理だ。ならば下手に真実を伝えるよりも、自然と信頼関係が深まるのを待つ方が良いと考えたのだろう。だが、

「それならせめて、俺にだけは話してくれても良かっただろ……まあ、まだ一緒にいる時間は長くないから、いきなり何もかも信じろってのは難しいかもしれないけどさ」

「まさか。私は刃更さんの事はちゃんと信頼していますよ？」

ただ、と万理亜。

「もし私と刃更さんだけが知っていて、後になって自分だけが知らなかったと解ったら、私や刃更さんに対する澪さまの信頼が失われてしまう可能性がありますから」

かつて澪や万理亜と同居する事になった際。迅は二人の正体や狙いを何もかも知っていながら、黙って騙されたフリをしていた。だからこそ——刃更達がその真実を知った後、一度は壊れかけた関係を立て直す事ができたのだ。万理亜が主従契約の諸々について黙っていたのは刃更と、何よりも澪の気持ちを想っての事だったのだろう。

「なので、できればお二人には隠し通しておきたかったのですが……まさか刃更さんが、主従契約についてお調べになってくるとは思いませんでした」

誤算です、と万理亜は言って、

「それにしても刃更さん、一体どちらでこの話を？　信頼関係が深まれば力が強まる事はともかく、一部の高位魔族がしている、**主従契約の際にサキュバスの特性を利用した遊び**については、それこそ魔族でも一部の者しか知らない情報の筈ですが」

「まあ、ちょっとな……これでも一応、元勇者の一族だし。《里》を追放されたとはいえ、ツテの一つや二つはあるんだ」

滝川の事を話す訳にはいかないため、刃更は真実を隠した言い回しで告げて、

「しかしそうすると、現状は主従契約は結んでおいたままの方が良いんだろうな……なら、それを前提にした対策を考えておかないと」

「——お任せ下さい刃更さん。僭越ながら私、この状況で最も有効な対策を考えました」

我が意を得たとばかりに万理亜。

「さあ、どうぞこちらへ」

そう言って部屋の奥へ——パソコンの前へと刃更を誘った。椅子に座ると、自然とデスクの上のＰＣモニターと向かい合う体勢になり、そこへ、

「では、ちょっと失礼して」「お、おい何を……！」

困惑する刃更の膝の上に、万理亜がちょこんと腰掛けてきた。既に入浴を済ませていたのだろう。万理亜は、上はパジャマに下はショーツのみという無防備な格好だ。帰宅後、話が長くなる事を想定して、Ｔシャツにハーフパンツという組み合わせに着替えた己の判

断を刃更は後悔した。万理亜が身に着けているショーツの滑らかな生地と、スベスベの太股――その両方が、万理亜が女の子である事を強烈に主張してくる。ボディソープで洗われた身体が、万理亜の肉体と体温でしか生まれない甘い匂いを放ってきて、

「良いものでしょう？　お風呂上がりの女の子の匂いは」

内心ドギマギしていたこちらを見透かしたように、膝の上の万理亜が振り返った。こちらの股間の辺りに尻を押しつけ、もぞもぞとさせる万理亜に、

「べ、別に……いいから降りろよ！」

「駄目です。これからする事は、今後の刃更さんと澪さまにとって必要な事なのです」

そう言って、万理亜は刃更のパソコンの電源を入れる。

「おい勝手に――」

万理亜は慣れた手付きでマウスを操作してハードドライブのフォルダを開けてゆき、ふと刃更が見た事のないアイコンのプログラムを立ち上げた。起動したソフトは、まず英字デザインのメーカーロゴを表示。そして、次に映し出されたものを見るなり、刃更は思わず眼を丸くした。見えたのは一瞬だけだったが、

「万理亜……気のせいか？　今、『このゲームはフィクションです』って出たような」

「いやですね刃更さん。ゲームソフトなんて、どれも基本的にフィクションです」

うん。そりゃそうだ。その事は別に否定はしない。

「でも、その次に『ゲームと同じ事をすると法的に罰せられます』って――」

嫌な予感と共に言った刃更の眼の前で、とうとうそれが表示された。

可愛らしい少女だった。だが、如何せんこの少女には突っ込みを入れたい所が沢山ある。

まずは、なぜ鎖の付いた革製の首輪をしているのか。

そして、なぜ服を着ておらず扇情的な下着姿なのか。

さらに、なぜ背後から男に抱き竦められているのか。

何より、なぜそんな状況なのに、少女は恍惚とした濡れた瞳で、こちらを見ているのか。

全ての謎はすぐ解けた。表示されたタイトルが教えてくれたからだ。

『俺とリアル義妹の青春番外地』――エロゲーだった。

「人のパソコンに、無断で何てもんインストールしてやがるっ！」

アホかっ！　というか、確かにこのゲームって引っ越し祝いと称して無断で俺のベッドに仕込んだ例のソフトだろ。あの日の朝の始まりは、こちとら人生の中でも最悪の部類にランクインしてんだぞ。内心毒づく刃更に、

「刃更さんがこのソフトを憎む気持ちは解ります。ですが、どうか耐え忍んでいただければと。これも澪さまのためなんです」

「いや、俺は別にこのソフトには何の恨みもないが」
あるのは、人のベッドに地雷を仕込んだお前という名の犯人にだよ。
「つーか、何でこのソフトが澪のためになるんだよ……」
「言ったでしょう。これからの事を考えると、刃更さんと澪さまの信頼関係を深める事は急務です。自然な形が理想ですが敵は待ってくれませんし、刃更さんも主従契約魔法について色々と知ってしまいました。ならば、この状況で最善を模索するしかありません」
即ち、
「刃更さんに、澪さまに後で事情を知られても問題ないような状態まで信頼関係を高めて貰います――つまり、澪さまにとっての絶対的なご主人様になっていただく訳です。澪さまが絶対に逆らえない、逆らおうとも思えない、心の底から忠誠を誓う存在に。澪さまのような気の強いタイプは、優しさだけでは縮められる心の距離に限界があります。このソフトは、そんな澪さまを刃更さんが躾けるための参考書です」
「……すまん。良い機会だから、前から思ってた事を言わせてくれ――お前、馬鹿だろっ？」
「おやおや。こちらは限られた戦力しかなくて、それでも現魔王派と戦っていかなくてはいけないというのに。正攻法のお綺麗なやり方でどうにかしようとする方が、馬鹿げているような気がしますが。まさか刃更さん、私たちに手段を選べるような余裕があるとでも思ってますかー？」

「いや……でも、澪の事も考えてやらないと。大事なのは、アイツの気持ちだろ」
「確かに澪さまのお気持ちは大事です。ですが、澪さまの気持ちと命――どちらかを選ぶとしたら、答えは決まっていると思います」
「それは……けど条例とか、倫理ってモンが」
「なら国や法律に――警察や裁判所に『魔王に狙われているので助けて欲しい』と言えば、澪さまを守って貰えるんですか？　忘れないで下さい。今こうして澪さまの傍にいて、澪さまを守る事ができるのは、刃更さんと私だけです。私達しかいないんです」
「……だな。悪い」
と刃更は低いトーンで言って、
「でも、だからってこういうゲームを参考にするのはどうかと思うんだが……信頼関係を深めるにしたって、選択肢が澪の調教オンリーって事はないだろ」
「ない事はないでしょうが、発動する呪いは催淫ですから。それを活かせる方が良いと思いますよ？　それに、何も絶対にこのゲームの通りにしなくちゃいけない訳ではありません。あくまでこれは、刃更さんと澪さまの関係を深めるためのヒント探しなのです」
そう言って、万理亜はゲームのマニュアルを渡してきた。その中に書かれているあらす

じを、刃更は何ともなしに口に出して読む。

「『悪魔に淫乱化の呪いを掛けられてしまった義理の妹。彼女はその可愛らしさから周囲の男達に狙われています。彼女を守るため、どうか主人公である貴方の手で、貴方だけを想う女の子へと変えて下さい。二人の絆が深まれば、きっとあらゆる困難を乗り越えられる筈。これぞ究極の家族愛。レッツ・義妹調教♪』……世も末だなおい！」

「さあ刃更さん、イヤホンをどうぞ。同じ台詞でも、音声に込められた感情によって意味が全く違ったりしますから。私もご協力したいので、片方イヤホンを貰いますね」

「え？　俺、お前を膝に載せて、仲良くイヤホンを分け合いながらこれプレイすんの？」

本気か？　字面的にも絵面としても、結構な最悪具合だと思うぞ、それ。

「我慢して下さい。澪さまのためです」

「……解ったよ。もう好きにしてくれ」

そして、万理亜を膝に載せてのレッスンが始まった。ゲームはプロローグ部分だけで実に三十分、主人公とヒロインの生い立ちや現在の境遇、互いへの想いなどが、設定を羅列した説明ではなく、二人のドラマによってきちんと描写されており。プロローグの最後――義妹が呪いに掛かり、たとえ正しくはなくても自分達にはこれしか方法がないからと、禁断の道を主人公とヒロインが進む事を決意し、主題歌付きのアニメパートが流れた。

しかし本番はここから。いよいよ最初の夜を迎え、二人きりでぎこちない会話をした後、早速画面に選択肢が表示される。

1／普段通りに接して緊張をほぐす
2／とても優しく紳士的に振る舞う
3／義妹の決意を知っているからこそ中途半端はしない。彼女の想いに応えるため、愛をもって強引かつ乱暴にする。後悔はしない。それこそが家族として、義兄としての責任だと――そう信じているから

「……何だこの3番。選択肢っつーより、ただのネタとしか思えないんだが」

馬鹿じゃねえの考えたスタッフ。

「では、まずはこれだと思う選択肢を選んで下さい。刃更さんのお手並み拝見です。あ、でも念のためセーブしておいて下さいね。後でロードが必要になるかもしれませんので」

膝の上の万理亜が、魔族のくせにすっかりエロゲー慣れした様子で言ってくる。

……しかし、お手並み拝見って言われてもな。

普通に考えて、答えはもう決まっている。刃更は1番を選択。その途端、